

ろくでもない生活 / 共和党爬虫類派  
Republican Party Reptile<sup>\*1</sup>

P・J・オローク      訳：山形浩生<sup>\*2</sup>

2001年12月23日

<sup>\*1</sup> 邦訳：JICC 出版局刊

<sup>\*2</sup> ©1993 山形浩生



元祖途中下車型共和党员、ウォーレン・G・ハーディングに捧げる

「わたしはこの役職に不向きだし、そもそもこの任につくべきじゃなかった」



# 謝辞

「人間の短い歴史」「現代版神話」「過ぎ去った十五分間に関する、長く深遠なる考察」「ろくでもない一日」「ラリって尺八されつつ猛スピードでとばしつつドリンクをこぼさない方法」「オハイオ州サンダスキーの王」と序論の一部は、初出ナショナル・ランブーン誌。「チューン・イン、ターン・オン、月曜日には遅刻」「暴力と銃と金」「コカイン海賊を探して」「明るいベイルートの人質とハイジャッカー」は初出ローリング・ストーン誌。「ハリウッドのエチケット」「ディナーでの会話」「ニュー・ハンプシャーへお引っ越し」は、初出ハウス・アンド・ガーデン誌。「西欧文明健在なり！ フェラーリの偉大」「ピックアップ・トラックの高速特性」「自転車の脅威に関する冷静かつ論理的な分析」は初出カー・アンド・ドライバー誌。「知性にかかわる実験」「安全ナチ」は初出インクワイアリー誌。「阿呆船」は初出ハーパーズ誌。「最低のプロテスタント帽」は初出ウォール・ストリート・ジャーナル紙の署名記事欄。著者はこれらの紙誌に対し、それぞれの記事の転載をご快諾いただいたことについて深く感謝するものである。また、過去から現在にいたる編集者の方々にも、その助力と助言に対して感謝する。特に、ナショナル・ランブーン誌編集部スーザン・デヴィンス、ローリング・ストーン編集部キャロリン・ホワイトとボブ・ウォーレス、ハウス・アンド・ガーデン編集部シェリー・ワンガー、カー・アンド・ドライバー編集部デヴィッド・E・デイヴィス・ジュニアとドン・コウルター、ハーパーズ編集部のマイケル・キンズリーとボブ・アサヒナの各氏には大変お世話になった。



少年が田舎道でヒッチハイクしていた。車がとまって、運転手が尋ねる。「きみは共和党支持、それとも民主党支持？」

「民主党」と少年が答えると、車は走り去ってしまった。

もう一台、車がとまって、運転手が尋ねる。「きみは共和党支持、それとも民主党支持？」

「民主党」と少年が答えると、車は走り去ってしまった。

これが二、三度続いて、少年はどうやら自分の答えがいけないらしい、と考えた。次にとまった車はコンバーチブルで、運転手はブロンドのすごい美人。「あなた共和党支持、それとも民主党支持？」と彼女。

「共和党」と少年が答えると、女は少年を乗せてやった。

でも、しばらく車が走るうちに、オープン・トップからの風が、ブロンド女のスカートをどんどんまくりあげていって、どんどん脚がむきだしになってくる。少年は頭と股間に血がのぼってくる。とうとう、自分がおさえきれなくなって、こう叫んだ。

「止めてくれ！ 共和党支持になってたった十分だったのに、早速人をハメたくなっちゃったぞ！」

一九三〇年代にはやったジョーク





# 序論 共和党爬虫類派のすすめ

本書に収めた二十一のエッセイは、すべて保守的な共和党の立場で書かれている。保守的な共和党の立場なんて、特に珍しくもない。ただ、このエッセイは同時におかしい一少なくとも作者としてはそのつもりだ。「おかしな共和主義」なんて、世間に言わせれば矛盾でしかない。一般に、保守主義者はユーモアのセンスを持ち合わせていないと考えられている。ウィリアム・F・バックレー Jr や、R・エメット・ティレル Jr、パット・ロバートソンなど、有名な反証がいるというのに（ただし、ロバートソンの場合は、本気でアレをやっている可能性はある）。それなのに、アメリカ人はユーモリスト、イコール・リベラリストと思い込んでいる。アート・バックウォルドやゲイリー・トルデュ、過激派ならネー・ブルース。「ラリって尺八されつつ猛スピードでとばしつつドリンクをこぼさない方法」という私のエッセイを読んだ人は、決まって「なんでまた、よりによってあなたが共和主義者なんです？」と言うのだ。

なんでと言われても困るのだが、そもそも生まれからして私は共和主義一家の出なのだ。祖父のジェイク・オロークは 名前からもわかるように カソリックで民主党の家の出だ。だが第一次世界大戦の頃、最初の妻に先立たれ、やがて再婚した。ところが二人目の妻は実は気狂いで、当時一歳のジョーくん（私の叔父）を、おしめが凍りつくまでポーチに置き去りにするなど、いろいろと奇行に及んだ。祖父は司教のもとへゆき、結婚の失効を申し出た。司教は拒否。すると祖父は、我が家の伝説によれば、その日のうちにルーテル教会に入信し、共和黨員となり、フリーメーソンの会員になったという。

もう片方の私の家系は、もうちょっと堅物揃いだった。母方の祖母ロイは、イリノイ州南部の出である。その父は郡保安官で共和党議会の議長をつとめ、マッキンレー大統領の友だちだった。祖母は、民主黨員というのは干ばつや小麦の病気と同じく、アメリカにはびこるどうしようもない不当な厄災だと思い込んでいた。彼女は「貧乏人にもそれなりの

誇りがある」という言葉を聞かされて育ったのだ。子供たちの前では「民主党员」という言葉を口にさえ出さなかった。かわりに「畜生ども」と呼んでいた。

十九歳のとき、私は大学生のご他聞に漏れずマルクス主義に傾倒し、誰彼かまわずその理論を説いてまわっていた。ある時、クリスマス休暇で帰郷すると、祖母につかまって隅っこにつれていかれた。

「パットや、どうもお前は心配だよ。お前、まさか民主党员になる気じゃないだろうね？」

「おばあさん！」と私は答えた。「民主党员も共和党员も、どっちもファシストの豚野郎だ！ ジョンソン大統領はベトコンを虐殺して、国内の都市に暴動の種を撒き散らし、労働者を抑圧し、大衆を搾取してるじゃないか！ ぼくは民主党员なんかじゃない！ 毛沢東主義者だ！」

「民主党员でなきゃ、なんだって結構」祖母は言ったものだ。

だが、いつまでも毛沢東主義者ではいられない。太りすぎて、ベルボトムのジーンズが履けなくなってしまったし、それに共産主義を貫くなら、自分のゴルフ・セットをザイールの家庭にくれてやらなければならないと気付いたからだ。それに、左翼特有の、あの恐ろしく暗い生真面目さには耐えられなかったし。

性差別用語に神経をとがらせたり、政府が夜中、ゴミバケツに放射性廃棄物を捨てようと自分の台所に忍び込むなんて思いつく連中に、ユーモアのセンスがあるもんか。実際、ないじゃないか。急進派やリベラリストといった連中は、あらゆるジョークには「意味」があって、「主張」があるべきだと言う。でも、笑いは思いがけず生まれるけれど、主張するのはちがう。保守派の人間は、コレコレを茶化すべきではない、と言うことはある。例えば、「びっこを笑いものにははいけません」と。これは正論。ところが、リベラリストはこう言う。「びっこを笑いものにはできません」とこれはウソだ。ヘレン・ケラーが井戸に落っこって、助けを求めて指を三本折ったというジョークを聞いたことがある人なら、みんなそう言うだろう。

保守主義者もユーモリストも、性善説を信じていない。だが、左翼は、信じている。彼らは、人間の悪行は劣悪な社会環境や教育の不足、家族関係の破綻が原因だと思っている。誇りも持てないような貧乏人がホントに実在すると信じている。こういう考え方を続けると、ありとあらゆる陰険さが生まれる。キューバ人をごらんよ。

だから、私は保守主義者だ。ほかに何になれと？ といっても、必ずしも保守主義に満

足しきってるわけじゃない。はっきり言って、保守主義者にだって、ばかな石頭やキリスト再来を信じてるようなタコはいくらもいる。この手の連中は、いにしへの保守的ローマ人がそうしたように、ライオンに食わせてやるべきなのだ。でも、それ以外でも、いかにもそうですという感じの共和主義者だって、ある種の事柄に対しては了見の狭さを見せることはあるじゃないか。たとえば麻薬の密輸とか、スコッチにクエイルドをぶちこむとか、家の屋根にオーディオ・スピーカーをすえつけて、夜中の三時にファンクの帝王パラメントをフル・ボリュームで流す、といったことに対して。

だからこの際、新しい呼び名が欲しいところだ。こう思っている人は、ほかにもたくさんいると思う。われわれは、爬虫類的共和主義者なのだ。見かけは共和主義者だし、考えは保守的だが猛スピードで車をとばし、寝室のクロゼットの棚には、セーター類の陰にバイブレータやベビー・オイル、ビデオ・カメラなどを隠し持っている。それがわれわれなのだ。われわれの主張は明白だろう。われわれが反対するのは 政府の金使い、ケネディ・キッズ、シートベルト法案、原子力に対する臆病な態度、子供をエール大学以外に送りこむこと、自分の別荘の近くにトレーラー用のキャンプ場ができること、ゲイリー・ハート、預金秘密法を持たない小さな第三世界の諸国、エアロピクス、国連、抜け穴のない税制度、宝石を身につけた男ども。賛成するのは 銃、麻薬、スピードのどる車、自由恋愛（ただし、女房に見つからない場合のみ）、安定したドル、清潔な環境（貧しい人々は、この項目をはずすべきである）、しゃれた軍服姿の強力な軍隊、ナスターシャ・キンスキー、スター・ウォーズ（その他、ロスケどもをビビらせるものならなんでも）、そして中東に対する毅然とした姿勢（建物を破壊する、穀物を焼き払う、塩で地面を耕す、奴隷として売り飛ばすなど）。

このような考えを持つ人間は、アメリカにはざらにいるだろう。特に四、五杯ひっかけたあとには。そのみんなが団結し、行動すれば、われわれがこの国にもたらすのは……えーと、最悪の二日酔いってとこだらうね。

P・J・オローク  
ニューハンプシャー州ジェフリー  
1986年



# 目次

謝辞	iii
序論 共和党爬虫類派のすすめ	vii
<b>第 I 部 知的な事柄</b>	<b>1</b>
第 1 章 人類の短い歴史	3
第 2 章 知性にかかわる実験	5
2.1 生データ . . . . .	5
2.2 分析 . . . . .	12
2.3 結論 . . . . .	14
第 3 章 現代版神話	17
第 4 章 チューン・イン、ターン・オン、月曜は遅刻	19
第 5 章 過去十五分をじっくり思慮深く振り返る	25
<b>第 II 部 世界政治</b>	<b>29</b>
第 6 章 安全ナチ	31
第 7 章 阿呆船	37

---

第 8 章	暴力と銃と金	65
第 9 章	ろくでもない一日	87
第 III 部	人間と輸送機関	93
第 10 章	西洋文明健在なり！：フェラーリの偉大	95
第 11 章	ピックアップ・トラックの高速パフォーマンス	107
第 12 章	自転車の脅威に関する冷静かつ論理的分析　そしてわが国の道路を走る、この恐ろしい危険を規制し、許可制にし、できれば完全に抹殺するために求められる行動に関する検討	115
第 13 章	ラリって尺八されつつ猛スピードでとばしつつドリンクをこぼさない方法	121
第 IV 部	マナーと習慣	131
第 14 章	ハリウッド・エチケット	133
第 15 章	ディナー・テーブルでの会話	139
第 16 章	学生のためのアルファベット　マナー、学習に関する忠告と道德その他に対する訓戒を含んだ簡単な詩	147
第 17 章	最低のプロテスタント帽	153
第 V 部	地球の終わりなど	157
第 18 章	コカイン賊を探して	159
第 19 章	明るいベイルートの人質とハイジャッカー	175
第 20 章	ニューハンブシャーへお引っ越し	187

目次	xiii
----	------

---

第 21 章 オハイオ州サンダスキーの王	195
----------------------	-----

訳者あとがき	205
--------	-----





## 第 I 部

# 知的な事柄



## 第1章

# 人類の短い歴史

人類の起源はアフリカにある。ずっとアフリカに居残ったわけではないが。それに先立って、恐竜がすでに絶滅していた。旧石器時代人、新石器時代人、その他奇妙な名前の人類が栄えていた。彼らは火の使い方を知っていた。が、非常に原始的だったから、何でもかんでも火を使えばいいと思っていた。食物に、着物に、そして肉体を飾るのにまで。洞穴には壁画が描かれ、単純ながら魅力的なしつらえがなされた。人類の祖となる若いカップルにとっては、まさに理想的な居住空間だった。

メソポタミアの肥沃な三角地帯だの、文明の揺りかごだの、いろいろあって、それをシュメール人が組み合わせて文字を発明した。といっても、長編や短編小説は書かなかつたけど。粘土板に文書を書いただけ。エジプト人は、手当たり次第のものを使って、巨大なものをたくさん作った。ユダヤ人問題が突如降ってわいてきて、今に至るまで解決を見ていない。同時に（フェニキア人を勘定に入れると、もうちょっと後ってことになるが）古代ギリシャ人が出てきた。その後、それほど古代じゃないギリシャ人、そしてもっと古代じゃないギリシャ人という具合に続く。ギリシャの各時代は、柱の上の飾り物のバカバカしさで見分けられる。飾り物がバカバカしくないほど、時代は古い。

ギリシャ人はアマチュア演劇や、韻を踏まない長ったらしい詩を発明した。彼等の黄金時代が終わってくれて、全人類はホッとしたものだ。しかしながら、ギリシャ哲学は時代を越えて生き残り、非常に現代的なコンセプトをもたらしてくれた。たとえば原子や、だれもセックスできないプラトニック・ラブなど。もっとも有名なギリシャ人アレクサンダー大王は、実はギリシャ人なんかじゃない。現代の用語で言うなら、彼はユーゴスラビ

ア人に相当する。彼は、当時なら全世界と呼んで通用したものを征服したが、後にそれを全部返すはめになる。その頃、支那には、支那人がいた。ローマが栄え、没落した。どこだか知らないけれど、野蛮な騎馬民族がやってくるころから、野蛮な騎馬民族がやってきた。アレクサンドリアの図書館を焼き払い、大昔の偉大なる文学作品の多くを消滅させ、古典をいやいや学ばせられる者たちに光明を与えた。野蛮人たちは、暇だったので封建主義を發明したが、この制度は複雑すぎて、リベラルな社会評論家が南米問題について語る時の用語集にしか生き残っていない。キリスト教とペストと、撥土板のついた鋤が広まった。フランスにはルイという名の国王がたくさん出てきたので、番号をつけなくてはならなかった。コロンブスがドミニカ共和国を発見した。世界はいまこの足元にある平らなものではなく、どこか向こうに広がる丸いものなのが証明された。

果てしない宗教論争が起きて、IQ五十以上の人間は壊滅した。プラハでは窓外放出事件が起きた。ポーランドが分割された　ロシア人はその一部をいまだに持っている。ナポレオンがヨーロッパを脅威に陥れた。それから、大した脅威じゃなくなった。イギリスに産業革命が訪れるが、やがて見放される。戦争がいくたびか繰り返される。たいがいドイツとだったけれど、最近は仲良しになった。アメリカは独立革命を、南北戦争を、恐慌を、ニューディール政策を、そして六〇年代後期には若い世代ともめごとを経験した。かくして時は現在　二月一日、日曜日、午前十時四五分、いや四六分。ちょっと失礼、デート相手のためにタイムズ紙を買って、朝食の支度をしなきゃならないので。

## 第2章

# 知性にかかわる実験

最近、ある知性にかかわる実験を行なった。ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス（第三一巻第七号、一九八四年四月二六日）のある記事を読み、ある日のゴールデンタイムのテレビ（一九八四年四月二三日、月曜日、午後七時半―十時）を見たのである。この二つを比べれば、古来の疑問を解く多少の手掛かりが得られるかと考えたからだ。その疑問とは賢いのと馬鹿なのと、どっちがマシか、という問題である。

この実験はきわめて公正であると思われた。ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックスは正真正銘、知性に溢れた読み物だし、テレビは世に名高い軽薄番組の宝庫だからである。私は公平な人間だ。私はいくつかの事柄に関して博学である。私は普段テレビを見ないし、ニューヨーク・レビューも読まない。その他の事柄に関しては私は無知なほうだ。

### 2.1 生データ

私は午後三時にニューヨーク・レビューを読みはじめた。トップ記事はエール大学で文学の名誉教授ハロルド・ブルームによるものである。ポール・ツヴァイク著「ウォルト・ホイットマン：詩人の構造」の書評だが、肝心の書物にはほとんど触れていない。ブルーム氏は五千語を費やし、ウォルト・ホイットマンが極めて、極めて偉大な詩人で、しょっちゅうマスターベーションしていたと述べているのだ。

「……ホイットマンを読むことの真の困難は、彼の精神の持つ、時にいらだたしいほどの独自性を持った相貌にはじまる（あるいは、はじまるべきである）」といったフレーズがしょっちゅう出てくるし、こんなホイットマンの詩の引用が含まれている

おお、偉大なる星が消え果てたー おお、漆黒の闇が星をおおい隠す！ お  
お、この身の力を奪いとる邪悪な手よー おお、我が救いなき魂よ！

ブルーム氏いわく、「ホイトマンを読みこなすことができるのは、選ばれた人間だけである」。そうか、それで私には、ホイトマンがブリキのクッキー・シートみたいな耳を持った、野郎自大なお喋り野郎としか思えなかったんだろう。ブルーム氏いわく、「ホイトマンのような風変わりな個性の持ち主が、なぜ後のアメリカの純文学界の主流をしめられたのだろうか？」知るかよ。

この他、ニューヨーク・レビューには十一の記事と一篇の詩が掲載されていた。そのなかのいくつかを簡単に紹介してみよう。

ニール・アスカソンがカジミエール・ブランディスの「ワルシャワ日記一九七八ー九八一」とホルスト・ピエネックの「第一ポルカ」の書評を載せている。ブランディス氏は共産主義者だったけれど、現在は立ち直っている。ポーランド共産党に二十年間所属した後、彼は、共産主義は（少なくともロシア人が嚙んでいるときは）あんまりいいもんじゃない、と判断した。それなのに、「連帯」の運動はまったく意外だったと言う。彼は現在ニューヨークに住み、困惑についての本を書いている。

「第一ポルカ」は、北部シレジアでの生活についての小説だ。北部シレジアの人々は、自分たちがポーランド人なのかドイツ人なのかを決めかね、困っていた。そこへ第二次世界大戦がやってきた。

ガブリエル・アナンは、ジョアンナ・リチャードソンの「コレット」とロバート・フェルプス編「コレット選集」に関する書評を寄せている。コレットは、言葉の使う作家いかたは美しいけど、言いたいことが何もない人だったそう。アナン女史は言いたいことが山ほどあった（この記事は全長二メートルにもおよぶ）。「コレット選集」は、ヤラシイ作品は全部入っているのに「ジジ」が入っていない。

ミラン・クンデラは「中央ヨーロッパの悲劇」と題するエッセイを書いている。かつては中央ヨーロッパに住んでいたクンデラ氏は、あの地域の小国は最高だと思っている。少なくとも、ロシア人がらみの共産主義が広まる前は最高だった、と。誰かが中央ヨーロッパからロシア人を（そして／あるいは共産主義を）追い出さない限り、あの国々の文化は消滅してしまうだろう。文化を定義づけるのはむづかしいし、他のいたるところでも消えつつある、とクンデラ氏は述べている。

ジェラルド・ウィールズは「信仰篤き人々：ミドルタウンの宗教の変遷と持続性（共同研究）」に関する書評を寄せている。一九七六年から一九八一年にかけて、ある社会科学研究者グループがインディアナ州マンシーに関する研究を行なった。マンシーは、ロバート・リンド、ヘレン・リンドの二人が一九二九年に画期的な社会学の研究を行なった「ミドルタウン」である。現在の社会学者は有り余る人材と予算に恵まれ、コンピュータの助けを借り、研究に費やす時間もたっぷりとあるにもかかわらず、このリンド夫妻に匹敵するほどのいい仕事はしていないらしい。ウィールズ氏は、「信仰篤き人々」は額面通りに受け取らないほうがいい、と述べている。

なかには紹介にも値しない記事があった。

ステファン・ハイムの「さすらいのユダヤ人」に関する書評がD・J・アンライトから寄せられている。なかなか面白そうな小説だが、アンライト氏のうんざりするようなヨイショを読み終えた頃には、退屈して本を買う気すらなくなってしまった。マイケル・ウッドはアルフレッド・ヒッチコックに関する二冊の本を評し、世の中には分析という狂気に身をさらさなければ人生の喜びを味わえない人間がいることを実証してみせた。また、リンカーン・センターで行なわれたマーサ・グラハム・ダンス・カンパニーの公演についてのハワード・モスの批評は、踊りが好きな人間は黙って踊ってりゃいいんだということを示す、いい見本になっている。

理解できない記事がひとつあった。ジュリアン・ラシュトン著「ベルリオズの音楽的言語」に関する、チャールズ・ローゼンの書評である。「このようにしてシェーンベルグがいかにしてノントーナル・システムで協和音、不協和音の効果をリズムカルに再構築したのである」という註がついていると、私にはさっぱり理解できない。だが、ローゼン氏の言わんとしているのはどうせ、ベルリオズの音楽は「ひどい駄作だ」か「素晴らしい傑作だ」のどっちかにちがいない。

この他に、わかりすぎるほどよくわかる記事があった。「レーガンのスター・ウォーズ」というタイトルの記事で、「憂慮する科学者連合」の九人のエキスパートがこんな議論を展開している。宇宙空間に配備したミサイル防衛システムは非常にコストが高くつくし、ロシア人を死ぬほど怒らせるし、どのみちわれわれが爆撃されるのを防ぎきれはしない。これらのエキスパートたちは山ほどの事実や数字を持ちだし、自分たちの見解の正しさを証明しようと思慮のつまった言葉を長々と連ねていた。だが、常識と防衛兵器の歴史に基

づいて帰納的に考えれば、同じ結論がわずか二百語で済んだはずだ。

パトリシア・ストーランスの「不条理」と題する詩が掲載されていた。韻を踏んでいない詩だ。不条理は不快である、と言いたいらしい詩だった。

これだけの知性の塊の中に、いくつか面白い事柄も含まれていた。アーヴィン・アーレンブレイスが、W.S.ルイス編集によるエール大学刊「ホーレス・ウォルポール書簡集」全四八巻を書評している。オックスフォードの第四代伯爵ウォルポールは啓蒙運動に傾倒していて、周囲の世界をことごとくこきおろす滑稽かつ陽気な手紙を数多く残している。アーレンブレイス氏はそれを「アイロニックな反動のスタイル」と呼び、たくさん引用をしている。しかしながらアーレンブレイスは、重要な問題をいくつか提起していない。他人の手紙を四十八巻分も編集して生計をたてるやつってのはどういう種類の人間なわけ？ 二千七百ドルもはたいてそんな書簡集を買う人間がいるの？ そんなものどこに置くの？ アーレンブレイス氏は、ホントにこれを全部読んだの？ どうしてそんなに暇なの？

ドン・クラークの著したドゴールの伝記に関するロバートO・パクストンの書評も、一読の価値がある。パクストン氏は、ドゴールは世界の政治情勢に対する深い洞察と現実的なビジョンを持っており、六〇年代の彼の姿勢は反米主義や自己中心主義から生じたものではなかった、と述べている。それどころかドゴールは、CARE（アメリカ援助物資発送協会）のパッケージと国連の票を一大救世運動にしたがるアメリカのやり口と、フランスとの間に一線を画そうと細心の注意を払っていた、とパクストンは述べている。

ニューヨーク・レビューを読破するのには三時間ほどかかった。しばらく、額に冷たいタオルをあてひと休みしてから、私はテレビを見はじめた。

テレビの「ゴールデン・アワー」のはじまりは七時半だ。私はABCの「エンターテイメント・トゥナイト」、CBSの「運命の糸車」(ゲーム番組)、そしてNBCの「クイズ百人に聞きました」のどれかを選択することになった。「エンターテイメント・トゥナイト」は、番組の内容がタイトルに負けている感じがした。「運命の糸車」は、ちょっとバカバカしすぎる。というわけで、私は「クイズ百人に聞きました」を選んだ。これはなかなか面白いショー番組だった。二組の典型的なアメリカの家族が、日曜礼拝か二度目の結婚式か銀行ローンを組みにゆくときのような服装であらわれ、張り合うのだ。問題が出されるが、自分たちで答えるのではなく、他の典型的アメリカ家庭百世帯が出した答を予想しな



くてはならない。「汝自身を知れ」とは古代ギリシャ人の言葉だ。それよりも実際的なアメリカ人は、「汝の隣人を知れ」というわけである。

最初の問題は「最も時間を節約してくれた発明品はなにか」というものだった。正解は「洗濯機」である。なるほどね。清潔な衣服は文明の象徴だものね。だが、洗濯機の次にあげられたのは「電子レンジ」だった。ウゲゲッ。おいしい料理というのも、これまた文明の象徴だというのに。「自動車」と「飛行機」は三位と四位に甘んじている。自分の住んでるところを離れたがらない頑固な「おらが町」主義が、こんなところに顔を出したのだろう。五位には「自動皿洗い機」、そして「電話」は六位だった。電話へのこのそっけない態度は、アメリカ庶民の知恵の表われであろう。だって、ホーレス・ウォールポールがそうざらにいる世代じゃないからね。

てなことを何時間も（いや、数分ってとこかね）かけて考えてもよかったのだが、あいにく次の問題が出てきた。「トレーニング中のスポーツマンがしてはいけないことは？」最も多かった答えは「喫煙」で、これは大いにうなづける。だが、すこし下がって5番目には「セックス」という答えがあった。セックスはスポーツマンに何の害もない。ひょっとして、新興ピューリタニズムがフィットネス時代にでしゃばる口実を求めているあらわれかな？ 残念なことに、ここで時間を節約するための文明の利器と言えるかどうか疑わしい例の代物、電話に邪魔されてしまった（ビデオを買えばいいのだが、テレビの唯一の美点は、そのはかなさだと思ってるものでね）。というわけで私は「クイズ百人にききました」をかぶりつきで見ることではできなかったが、それでも、アメリカ人の三五パーセントがナイトガウンの最も一般的な色としてピンク色をイメージしている、ということはしっかりと確認していた。電話がようやく切れた時、出場者たちは言葉あそびを（「都市での輸送に使われる物：……バス……脚……」といった具合に）しており、ピーッというブザーが鳴るまで答えを出し続けていた。くだらない。だが、クイズに勝ったアメリカ人の出場者たちが狂喜する様子は、げんなりする光景だった。謙虚な辞退とか、三流の教師への控え目な感謝は、どこへ行ってしまったのだろうか？ 今どき、赤面する人なんかどいないんだろうね？

八時、私が選択できる番組はCBSの「スケアクロウとミセス・キング」(スティーブ・キングの母親の物語かと思ってゾッとした)とABCの「驚異の世界」(もちろん驚異のカケラもあるわきゃない)そしてNBCの「テレビNG&イタズラ特集」。こいつは悪趣

味すぎてつい見てしまいたくなるが、ホントに悪趣味だった。ホストは、ポピュラー音楽の今世紀最悪の時代に「アメリカン・バンドスタンド」の司会をやっていたディック・クラークと、「ザ・トゥナイト・ショー」で今一つ存在意義の不明な役を演じていたエド・マクマホン。二人でうれしそうに話をしていた。時にはジョークもとばしていたんだろう。

「NG」とはテレビ番組で役者たちの演じたミスを集めたものだった。面白いNGもあった。ディードル・ホールという女優が「インフィニテシマリー」というセリフの第三音節のアクセントと文字通り悪戦苦闘していた。どうやら、有名人だって一般人と同じように間違いをおかすのだ、というのがこの番組のミソのようであった。「イタズラ特集」のほうは有名人にイタズラをしかけて楽しもうという企画である（少なくとも番組の当事者は、イタズラの対象となった人物がみな有名人だと固く信じていたようだ）。私は面食らってしまった。イタズラの神髄は仕返しである。この番組に登場するいわゆる有名人たちに、なぜ仕返しをするんだろう。社会階級の分ける基準として、富にかわって有名さが採用されるようになったってことか？ 無名であるということは、抑圧されているということなのか？ よって、無名の人間は有名人に対して反旗をひるがえす権利があるというわけか？

でも、なかなか見応えのあるイタズラもあった。聞いたこともない女優が、バーベキュー用の肉を買いに「肉屋」へ連れてゆかれる。肉屋はやおら生きたままの牛を連れてきて、どの部分を切ってほしいかと尋ね、牛を裏の部屋へ連れ戻す。銃声が轟き、続いて肉の裁断機の音が響きわたる。女優は恐怖にかられ、観衆は笑い転げる、という仕掛けである。かつての農民の時代からはずいぶん遠くにきてしまったようだ。

あとは実にくだらけなものばかりで、古いテレビ・コマーシャルを「面白い」と称して流し続けた。この他、特に馬鹿馬鹿しかったのは、深夜の学生向きバラエティ・ショウ番組の司会者デビッド・レターマンが、さまざまな発明品を求めて各地を旅し、人々を嘲笑する、という趣向である。あるメキシコ人は、棺におさめられた人間が息をしているかどうかを調べる器械を作りあげた。レターマン氏も観衆も、これには大笑いだった。だが、医療が発達しておらず、死体防腐処置もない国では、そんな冗談ごとじゃないんじゃないの？ また、ある黒人の女は寒い家で暖かくするためのヒーター入りクッションを発明した。レターマンはこれも笑い飛ばした。ケッ、あんたの家は暖房が完備なさってて結構ですわね。以前、ダック・ブラインドで同じようなものを使ったことがあるが、これほどあり

がたい物はないとしみじみ思ったものだ。観衆は、外国人が登場すると必ず笑った。発明者の多くは東洋人で、観衆はこれを非常に面白がっていた。自分が失業者の列に並んだときも、それくらい面白がれるといいね。

「テレビNG & イタズラ特集」は一時間続いた。あの程度の内容で、よくまあそんなに引き伸ばせるもんだ。ついでに、感極まったイタズラの犠牲者が「オーマイゴッド」と叫ぶたびに、「ゴッド」のところはブザーで消されていたこともつけ加えておこう。

九時、NBCとABCは映画を放送していたので、CBSの「ケイトとアリー」とかいう番組を見ることになった。理解できた範囲で言うと、これはケイトとアリーというふたりの離婚歴のある女性が一緒に住み、いっぽうが家事を受け持ち、もう片方が稼ぎ手の役割をつとめるというコメディだ。二人は何人もの子供を抱えていた。かすかに同姓愛のにおいがするが、それぞれ男とのデート場面も盛り込まれている。私の見た回では、稼ぎ手のほう（ケイトとアリーのどっちか忘れた）が失業し、家事を受け持つほうが自家製ケーキを作って商売をはじめ、というストーリー展開になっていた。この手のコメディの伝統ののっとり、最後は元のサヤにおさまって一件落着となる。このドラマのメッセージはどうやら、家事も仕事もそれなりの報酬がある、ということらしい。掃除が嫌いな人もいれば、職を持つのが嫌いな人もいる。人は良識の範囲内でそれぞれ自分の一番やりたいことをすればよい　　しごくもっともなテーゼだ。友好的な中流アメリカ人的なユートピア主義ってやつ。

九時半になってもまだ映画をやっていたので、CBSの「ボブ・ニューハート・ショー」を見ることにした。これもやはり、社会における女性の地位を扱った番組である。ニューハート氏扮する人物が、バ・モント州のとある小さな町に引っ越してくる。この町の人々はひどく遅れている。持ち寄りパーティをすると、男たちは食堂で、女たちは台所でキッチンで食事をするのだ。これに憤慨したニューハート氏の妻は、立ち上がって食堂で食事をしましよと女たちを煽りたてる。そこでみんなそうするのだが、結局男たちとはずっと離れた別のテーブルで食べることになるのである。

私は長いことニューイングランド北部に住んでいたけれど、このような光景にはお目にかかったことがない。でも、この手のコメディ作家が住んでるロサンゼルスでは、こんな持ち寄りパーティをホントにやってるんだらうよ。

公平さを期すためには、あと三十分間テレビを見る必要があった。でも、いままで収集

されたいろんな証拠を慎重かつ客観的に検討した結果、私は次のように結論づけた。もうたくさんだ、と。

## 2.2 分析

以下の二つのリストは、ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックスのある号と、ある晩のテレビ番組から得られた情報をまとめたものである。

---

1-1  
 ニューヨーク・レビューからの情報    テレビ番組からの情報

---

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. ウォルト・ホイットマンは偉大な詩人である</p> <p>2. ホイットマンはマスターベーションを頻繁に行なった</p> <p>3. ホイットマンはつかみどころのない人物である</p> <p>4. ロシア人がらみの共産主義はよくない</p> <p>5. 北部シレジア人は自分たちがポーランド人であるかドイツ人であるか迷った揚げ句、ほとんどが死に絶えてしまった</p> <p>6. 戦争はよくない</p> <p>7. コレットのフランス語は素晴らしい</p> <p>8. コレットは自意識過剰のお喋りである</p> <p>9. ファラー、ストラウス、ジロー社のコレット選集には「ジジ」がはいっていない</p> | <p>1. 洗濯機はジェット飛行機や電話よりも時間を節約してくれる</p> <p>2. スポーツマンに喫煙は禁物である</p> <p>3. スポーツマンにはセックスも禁物である</p> <p>4. ナイトガウンの色として一般的なのはピンクである</p> <p>5. アメリカ人は嬉しいことがあっても頬を紅潮させない</p> <p>6. ディック・クラークとエド・マクマホンはエンターテイナーである</p> <p>7. 俳優も人間である</p> <p>8. 他人をだますのは面白い</p> <p>9. 肉は死んだ動物から得られる</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

10. 中央ヨーロッパの文化は滅びつつある 10. 昔のテレビ・コマーシャルはバカバカしい
11. ロシア人はよくない 11. 我々は昔より洗練されている
12. あらゆる文化が滅びつつある 12. 外人は滑稽だ
13. 社会学は昔ほどよくない 13. 東洋人は特に滑稽だ
14. ステファン・ハイムは天才の小説を書いたが、頭がおかしいわけではない デビッド・レターマンも滑稽だ
15. アルフレッド・ヒッチコックはつかみどころのない人物である 無闇やたらにテレビで「ゴッド」と叫んではいけない
16. マーサ・グラハム・ダンス・カンパニーは以前と変わってしまった 16. 男と女の伝統的な社会的役割は等しく報酬に値する
17. マーサ・グラハム・ダンス・カンパニーの衣装は気取りすぎている 17. 男性とデートをしている限り少々のレズビアンはお愛嬌である
18. ベルリオーズの音楽は駄作か傑作のどちらかである 18. 人は良識の範囲内でなら一番好きなことをやるべきである
19. 宇宙配備のミサイル防衛システムはコストが高つく 19. 男と女は平等であるべきだ

20. 宇宙配備のミサイル防衛システムはソビエトをカンカンに怒らせる 20. 小さな町の住人は遅れている
21. 宇宙配備のミサイル防衛システムは効果がない 21. 決して変わらない物もある
22. 核戦争はすごくよくない
23. 不条理であることは心の平穏をかき乱すものだ
24. ホーレス・ウォルポールは手紙をたくさん書いた
25. シャルル・ドゴールは結局、正々堂々としていた

ニューヨーク・レビューからの情報で私の興味をひいたものの割合: 28%

ニューヨーク・レビューからの情報で眉唾ものとおぼしき物の割合: 12%

ネットワーク・テレビからの情報で、筋のとあったものの割合: 52.4%

ネットワーク・テレビからの情報で鳥肌がたつほどおぞましいものの割合: 52.4%

両方から得られた情報のうち、友人や知り合いに伝える価値があると思われるものの割合: 10.9%

具体的には:

- ウォルト・ホイットマンはマスターベーションを頻繁に行っていた。
- マーサ・グラハム・ダンス・カンパニーの衣装は気取りすぎている。
- シャルル・ドゴールはすごいやつだ。
- ナイトガウンの色として最も一般的なのはピンクである。
- テレビで「ゴッド」と叫ぶとブザーで消されてしまう。

## 2.3 結論

賢明であることは愚かであることより悪いことか、あるいはその逆か、というのは重要な問題である。賢明とはすなわち新表現主義の絵画のようなものだが、これは実にひどい代物だ。いっぽう愚かとはミュージック・ビデオで、これも相当にひどい。無知は愚かだが、教育は大学生を生み出す。論理は賢明だが、マルキシズムは論理的である。賢明な人間はめったに酒場で喧嘩をしない。だが愚かな人間はめったに水爆を作ったりしない。でも、賢明な人間は水爆を落とすような真似はしない。いや、それともするかな？ これ

は我々にとって検討を要する問題である。 ニューヨーク・レビューとネットワーク・テレビの比較検討実験からは、明確な結論は得られなかった。しかし、いくつかの作業仮説が打ち立てられた。

1. この実験では、愚かさよりも知性のほうがいくぶん分が良かった。理由は、だって、つまりそのほうが知的だからである。
2. ニューヨーク・レビューから何か価値のあるものを得たいなら、こちらは最大限に愚かさを発揮してやる必要が。
3. テレビを有効に利用するためには、自分の知的能力をフルに発揮する必要がある。
4. もし両方を一晩でやるつもりなら、後でしこたま飲まなきゃやってられねえや。





## 第 3 章

# 現代版神話

翻訳割愛。



## 第4章

# チューン・イン、ターン・オン、月曜は遅刻

どの世代も、それなりに必要なドラッグを見つけるものだ。企業の歯車と化した一九五〇年代人はドライ・マティーニではしゃぎまわる。マットレスに寝っころがってウダウダ言ってるばかなヒッピーは、せいぜい神秘的で賢そうなものにしようと幻覚剤を用いる。無気力な七〇年代の連中はコカインによって絶頂感を味わう。そして、冷淡で自分勝手な一九八五年のガキどもは、エクスタシーで愛し愛されることができると思ってる。笑っちゃうぜ。ドラッグなんて、ひとりよがりの浮かれ騒ぎだ。得られるのは、結局自分が持ち込んだものだけなのだ。私はと言うと、ここ十五年、新しい麻薬をやったことはない。成熟した大人　バランスがとれ、分別があり、世界と自分自身に対する目ができている人間　には、麻薬は無用である。ただ、ほんのたまにマティーニを一杯、あるいは三杯から五杯ほどひっかけてたり、ディスコへくりだすときにはコカインを一筋、それとシャンパンにマリファナー服し、頭痛薬とブラディ・マリー、精神安定剤と、それに……えーい、構うもんか、誰かエクスタシーを持ってねえかぁっ！

ふたを開けると、ほとんどみんなが持っていた。「驚くべき洞察が得られるんだ」と、雑誌編集者が言う。「まわりの人間と、みんな融け合うのよ」と、ある宝飾デザイナー。「んまあ、ひっひっひっひ」と、オフ・ブロードウェイ女優は言った。「警戒心ってものが消えうせるんだ」と言う者も。私はエクスタシーをマンハッタンのビジネスマンから手に入れた。彼と私、そして二人の若い女友だちとテキサスのジャーナリストとが、一緒にそれ

をのんだ。

その晩は他にも六人ほどの連中が訪れた。そしてこれがドラッグのいいところなんだが、そのうちの誰がハイだったかは定かではない。ただひとりを除いては。友人のLがつれてきた、生真面目で陰険そうな恋人ってのがいて、こいつはWASPっぽい連中がいい歳してヤクでラリってんのを、モロに不快感を示していた。まるでチェダー・チーズ並みに厚い肩パッド入りで、移りの悪いテレビ画面みたいな柄の、イタリア製スポーツ・コートを着てやがった。こいつとは断じて融けあったりしなかったぞ。エポキシ系万能接着剤並みの美意識がなけりゃ、そんなことできるもんか。そいつは終始、薬物取締局の電話番号を思い出そうとしてるみたいな様子で、早々に退散した。

とにかく、エクスタシーはでっかいのっぺりした錠剤だった。これが法律で禁じられる前のブツだって話だったが、この引退した水瓶座の時代の男の目には、これが家庭用の丸薬製造器で作られたものとしか見えなかった。一回の服用量は……知るか。たしか昔、街角で売ってる薬については博士号が取れると自負していた頃は、何ミリグラムとか何マイクログラムとかいう論議を延々としたっけなあ。でも、麻薬の服用量は二種類しかない。多すぎるか、少なすぎるかである。我々がこのとき服用したのは、そこそこの量。つまり、夜ふかししてひとりでデビッド・レターマン・ショーを見るよりはましで、警察に踏み込まれなきゃならないほどはよくないくらいの量だった。

だが、はじめ三〇分から四五分ぐらいは、じっと座っているだけ。するとやがて、脳があきらめたようにため息をつく感じ。「うん」とあなたは脳に言う。「またあんたのシナプスをいじくってるぜ。怒りか色欲とでも思ってくれよ。そういうのだって、大脳皮質に化学変化をもたらすし、それに……」

「ちえっ、黙れ」と脳。

やがて人体最高裁判所が慎重な審議を開始する。「我々はこれを好ましい物として受け入れようか、それとも心臓を停止させようか？ ウンコをしよう、寝ちまおう、嘔吐しよう、踊り出そう。いやいや。ほんの冗談。そんなことは起きないよ。ただ、気持ちが大きくなるだけ。多幸症ってのとも違うし、啓示を得るのともちがうし、とにかく気持ちが大きくなるの」

「あっそう」脳が言う。

「ああ」と、マンハッタンのビジネスマン氏。

「ひゃあ」と、テキサス州のジャーナリスト。

「ううーん」と、若い女。

「ちくしょう！ なかなかいいじゃないか」と、これは私。

みんなを部屋に入れるよう、ドアの鍵とはかなりマジに格闘を演じなくてはならなかった。いろいろややこしいツマミやチェーンや、その他いろいろ装置がついていたが、私ぐらいの頭の良い人間が、このごきげんな我が家にこんな素敵な人たちを迎えようとしているんだから、かなうわけがない。

と言うと、麻薬による誇張になる。人のことじゃない。あれはホントにお素敵な人たちだった。でも、私がニューヨークに持っているのは、セカンドハウスと言うよりも、スキャンダル・ハウスに近い代物だ。ニューヨークでしかお目にかかれない、だだっ広いがらんとしたロフトで、たとえば言うなら、イノシシが荒らした海王星。ここでLSDをやったら、最悪の結果になる。気がついたら、フロリダのウィンター・パークで、ボケた両親に、悲恋ワークショップへ連れてってとせがんでるだろう。でもエクスタシーの場合だと、同じごみためがパーティ本拠地になる。ひたすら楽しい場所。タバコを床でもみ消してもいいし、グラスはどこに置いてもよくて、ヘブルホワイトの西洋筆筒に輪染みがつかないか心配することもない。ヘブルホワイトの西洋筆筒を持ってないのが、こんなに露骨に嬉しいなんて、えらく奇妙な感覚だ。だいたい西洋筆筒ってどういう筆筒なのかも知らないのに。

「エクスタシーの味わい」については、これまであまり述べられていないのではないかな。しかしなにしろ、例のスポーツコートを着たくだらない男ですら、いいヤツに見えてくるのだ。あいつも根はいい奴なんだろう。ただ、アルマーニのジャケットにシャネルの7番を付けられなかったから、落ち着かないだけなのだ。我々の選んだLPは、初期のライ・クーダやジョーン・バエズのベスト盤にまで及んでいた　ヒップなやつのための酔いどれ上り坂メロディ。音楽は愛の糧だ。なら、BGMは何の糧なのか？ たぶん、愛のドラッグの糧。典型的な独身者の私は、ポローニャ・ソーセージのスライスとグラハム・クラッカー、ヤラペーニョ・チーズなど貧相な御馳走をテーブルに並べておいた。だれもこれにはまったく手をつけなかった。そこまで理性を失ってはいなかったわけだ。(エクスタシーは、もともとあるドイツの製薬会社が食欲抑制剤として特許を申請したものだ。確かに抑制される)それでも、私の努力にはおかど違いの賞賛が数多く寄せられた。賞賛が

そこら中で野放図に乱発されていた。

明るい乱痴気騒ぎの波に襲われる。時々、気分が悪くなる場合もある。例の若い女が、そうだった。体重四十キロなのに、男たちと同じ量をのんだのだ。我々は彼女より十五センチも背が高く、カルバン・クラインの下着の広告モデルの依頼がかかるような体型ではない。薬の効果があらわれてから約一時間後、彼女は冷汗をびしょりとかきはじめた。動悸が激しくなってきた。吐き気に襲われた。これが十分間つづいた。他の連中はみな汗をかき、適当にお喋りを楽しみ、ビールをがぶ飲みし、三秒ごとに尿意をもよおしていた。

我々はまるでティーンエイジャーのように語りあった。大声で、だらだらと、意味もないことをしゃべり、ひざを抱え、微笑し、すこし体を揺さぶり、すごく満ち足りた最高の気分。「だいじょうぶかい」と私は若い女に声をかけた。「ええ、もう、だいじょうぶ。すごくいい気分。みんなといると、とっても楽しい。だけど」と彼女は女性特有の「我こそ人類の保護者」的な論理の目を私にむけた。「あたしはいつだっていい気分だし、この人たちといるのはいつでも楽しいわし。だから、本当に薬が効いてるのか、よくわかんない」そして、これだけ。これだけしか起きない。気分がすごくよくなるだけ。

人間が他のものを茶化したがるのはなぜなのか？ 貴く、重要で非合法的なものを？ ニューヨーク誌（一九八五年五月二十日号）の超教育的な記事によると、エクスタシーは3・4メチレン・ジオキシ・メタンフェタミン、すなわち一部の幻覚剤の有効分子の鏡像異性体であるという。化学的にはメスカリンと、それに何と、鼻炎薬スダフェッドと似ているんだと。効果もその中間くらいってところだろうか。私には、すごく洗練されて、とても抑制された覚醒剤のように感じられた。興奮状態になるけど、苛つかない（あるいは、学期末のレポートを書き上げるほどのエネルギーは出ない）。不快な気分が過ぎ去ると、あとは困る点は、無闇にタバコを吸いたくなり、皮膚がアカじみた感じがすることで、これは他の多くのドラッグと同じである。「自分を保つ」のは、難しくない。もしデルタ・フォースがドアを派手に叩いても、P L Oのテロリストの部屋はここじゃなくて、上の5 Bだよ、と冷静に教えてやれるだろう。ただしついでに、指揮官にむかって「あなたが今のあなたでいてくれて嬉しいよ」などと口走り、「制服がとってもキュートだ」と言い出すかもしれないが。

本気でやれば、完全にキレることもできると思う。ニューヨーク誌に掲載されたある記事で、U C L Aの薬学者ロナルド・シーガル博士がつぎのように述べている。「仲間の精

神療法士がエクスタシーをのんで、そのまま失踪し、その一週間後にふらりと姿をあらわして、交通整理係になってしまった。私に言わせれば、その男はやっと有意義な仕事を見つけたのだ。

が、いっぽうエクスタシーには「即席の精神分析」という効用があるという指摘もある。ライフ誌に掲載された「エクスタシーの問題点」という記事（一九八五年八月号）のなかで、ある匿名の心理学者がつぎのように述べている－「五時間のエクスタシー・パーティで、通常のカ月分のセラピーに相当する結果が得られます。したがって私のようなセラピストは一気に飯の食い上げになってしまう可能性があるのです」恐らく、この男のような連中を失業させるのはいいことだろう。でも、それがドラッグと何の関係がある？

内省については、どうだろう？ エクスタシーは内省を与えてくれる、とみんな言う。それも「本物の内省で、それがずっと続くんだけ」と。でも、その内省が具体的にどんなLSDものだったのか、だれも教えてくれない。熱力学の第二法則とか、あるいはピタゴラスの定理に匹敵するほど質の高い高度な洞察なの？ それとも「ついにわかったぞ、心の奥の深いところでは、ぼくはやっぱりぼくなんだ」とかいう類いの内省なの？ だれも教えてくれない。私はと言えば、別に統一場理論も何も思いつかなかったぞ。

麻薬を心底から楽しむためには、現状から抜け出したいと思わなければならない。だが、なかには抜け出すのが困難な現状もある。大人がドラッグをやる際の問題はここにある。ティーンエイジャーの環境から逃避するのは簡単だ。でも、大人たちを、たとえば借金から解放してくれるドラッグってのはないんだよね。

人間の精神を動物の芸として考えると（ほかの比喩にくらべてさほどひどいわけじゃない。精神活性化ドラッグが脳にどう影響を及ぼすかなんて、なーんもわかっちゃいないのだ）エクスタシーはモロに檻に入りこみ、不安グマの頭を鉄パイプでどやしつける。トラダのライオンだの、でかいネコどもを台の上に追いあげ、お祭りの景品のぬいぐるみみたいにする。そして、パーティ・ハットをかぶった愛らしいフォックス・テリヤが出てきて、後ろ足で立って歩き、ポニーの背中に乗り、輪くぐりをする。これが約四時間。

そしてだんだん切れてくる。同時に、パーティに集まった客たちも消えていった。

その日の眠りは落ち着かないもので、一時間ごとにトイレに駆け込む。翌日になっても、ドラッグはまだ体内に残っていた。シャワーがすごく気持ちいい。気分上々。でもちょっと上の空で、自分が隣の部屋にいて自分の声がよく聞こえない感じ。

エクスタシーには催淫効果はない。少なくとも男には。だが四十を目前に控えていたら、効く催淫剤なんてそうそうあるもんじゃない。私は例の若い女性に、まったくの科学的好奇心（ある種の）から電話した。「セックスしたくなった？」

「嫌とは言わなかったと思う」と彼女。

二日目には薬の効果は消えたが、私はぐったりとしてふさぎこんでいた。こんな子供だましの効果しかないくせに、切れたときの落ちこみかなりキツイ。本番が短いわりに、助走がえらく長い。「波長を合わせ、ハイになり、月曜の朝は遅刻」というわけ。

バカヤロー、おれはドラッグがドラッグだった時代の人間なんだぜ。あの頃は、一服するだけで髪の毛が伸び、夕食のテーブルの身内をいきなりガイキチにしちまうようなヤクがあった。カソリックの女学生が四つん這いの悪徳の塊になっちまって、自我を吹き消し、運命の輪をブン回し、目から卵を生ませるようなヤクだってあった。神を見た、だって？ ふん、そんなものは浴槽へひっぱりこんで薬草石鹸で口をごしごしと洗ってやるがいい。LSD一発分の吸い取り紙を四分の一にちぎって使ってもこのくらいにはなるのだ。内省に関しては、イエージとシロシビン・キノコをメスカリンとアンカー・スチーム・ビールに混ぜてみな。ゴータマ・ブッダその人が家に来て、バスルームの鏡に口紅で八岐の道を書きつける。三十六時間の永遠の命を与えるドラッグだってある。それに九つのケツを持ったペイヨーテの悪魔が、オレの頭の皮をオレンジみたいに剥いて、空っぽの頭蓋骨の中にブリタニカ百科事典を吐き散らしてくれたこともあったっけなあ。「ハイ」って言えば、昔はそのくらいすごかったんだ。

それに比べりゃこのエクスタシーなんて、カワイイもんじゃないの。「聖ジョセフの赤ん坊LSDだ」と、テキサス州のジャーナリスト。せいぜい、スコッチのオンザロックのダブルよりはちょっとアレかな、ぐらいの精神的なヒネリだけ。それに、解放感だの信頼だの愛情の深まりだのも、くだらない話だよ。だから、読者諸君に試してみるよう勧めるのどうもね。きみは、私にとって家族も同然だもの。本の著者と読者の間は、忠誠と相互依存という強い絆で結ばれている。こういう人間の基本的な絆を損なう真似ができるものか。いままでどうして言い出せなかったけど、私はきみたちを愛してるよ。あなた方みんなを。個人的に人と交流するに必要な感情なんだもの。車で国中を走り回り、あなた方一人一人を思いっきり抱き締めるぞ 例のマンハッタンのビジネスマンに電話して、あのくだらないクソエクスタシーを持ってるか確かめたらすぐにも。



## 第5章

# 過去十五分をじっくり思慮深く振り返る

これはアメリカにとって重要な十五分だった。それは十五分にわたる省察、内省、自己認識であった。この私自身でさえ、自分がいかに二日酔いで、トイレにいかなきゃならないことに気がついた。ある人はこれを「だけ」の十五分と呼んだ。さっさとタイプライターに向かって食い扶持をかせげと指摘されたとき「あと十五分だけ」と私は和犬だ。でも、この一時間の四分の一をひたすら自己関与の期間であったと見るのは単純化がすぎるであろう。全国すべてを代表するわけにはいかないが、しかし私は電気カミソリと関与を持ち、ちなみにそれは誰かのおかげでべとべとになっていたけれど、やったのは私じゃないよ、そしてそれで脚を剃っていた。そしてアスピリンの瓶の、子供よけ用のふたとかなりの時間関与していた。私には子供はいないのだけれど。ある意味でこれはこの歴史の九百秒の間にアメリカが負わされていた種類の気遣いを表象していると言えるだろう。多くの子供なしのアメリカ人たちは、もし政府がこの手の圧して握ってひねって振って引っ張ったりしなきゃならない装置を、他人の子供の福祉のためにアスピリンの瓶のてっぺんにくっつけなきゃならないと政府が願うのであれば、それはそれでいいよと許したわけだ。かれらは気にしない。でも私は気にするし、そしてこうした装置が子供よけのみならず二日酔いの大人よけにもなっていて、だからアスピリンを出そうと思ったら流しの縁でびんごと叩き割らなきゃいけないということについて大いに気にしている。気にしすぎているが故に、こいつを発明しやがったドロ食い野郎の頭にも同じことをしてやりたいくら

いだ。そしてこれらの時間すべてを通じて、私自身を含め多くのアメリカ人たちは、他者と深く関わりあっていた。たとえば一時間も前に目をさまし、ベッドにコーヒーケーキのくずをばらまいている脳天気なガールフレンドとか、アパートの管理組合から派遣されたわけのわからん男に、水を止めまるとか何とかスペイン語でまくしたてられたり。そしてさらに、これはアメリカ女の十五分間でもあった。その時、アメリカの女は宣言した。「あたし、ペッサリーを入れてないの」わかったよ。「だめよ。ヘアが乱れるじゃない」こいつは二度も聞こえた。

とはいえ、決して何の問題も苦労もない十五分間ではなかった。ある地域では、それは停滞の四分の一時間だった。黒人たちは、今朝八時四五分から経済的發展をほとんどとげていない。多くは職を持たず、そうでない者たちは急がなければ遅刻の危機に瀕していた。また、わが国の軍事力と国際社会における威光は一分ごとに弱体化していると数多くの著名人が力説していることから見て、間違いなく我々は十五分間ぶんの軍事力と国際社会における威光を失ったのだ。さらに、文化の發展はどうだろう？ 文学や芸術の發展は？ 過去十五分間で、我々は一体どの程度のものを残しただろうか？ 私の見たところ、皆無である。ただ、ポリスのけたたましいニュー・アルバムは例外で、こいつはある若い女性がおよそ三十秒前にかけ始めたのだが、私は今すぐこの音楽を止めないとおまえの尾骨で叩き割ってやる、と脅したもので、なにしろ私の頭はパレスチナのテロリストの襲撃にあったような気分になってしまったからである。

また、それは一風変わった空模様の十五分間でもあった。それとも、19Eの住人がまたベランダから物を投げ捨ててているのかもしれない。正しい視野を保ち、状況を見極めるには早すぎよう。もう一杯コーヒーを飲んだ、九時半頃まで待ってみるべきかも。でも、その時間には掃除のおばさんが現われ、出ていってくれと言うだろう。だって、私は丸めた書き損じのタイプ用紙をそこら中に散らかっているんだから。映画に行こうか。真っ昼間からひとりで映画を見るほどみじめなことがあるだろうか？ 理由はよくわからないが。朝っぱらから酒を飲むよりもはるかにみじめだ。すくなくとも、朝っぱらから酒を飲むのは、不道德のスリルがあるし、だから今すぐちょっと一杯ひっかけよう。私の発明した新しいドリンク。チキン・ショットと名付けよう。ブルショットに似ているが、ウォッカにキャンベルのチキン・スープを合わせて作るのだ。これは冗談。本当はブラディマリーを飲むのだ。時刻はもうすぐ九時で、ヤードムの上に陽が昇っている。本当は、太陽

はクィーンズ上空のどこかにあるのだ、ここからだとラ・ガーディア空港の上あたりに見える。もっと言えば、太陽は時間ぎめ駐車場の真上にのぼっていて、そういえば今思い出したが、私はあの駐車場に一日一六ドル五〇セントの料金で二週間も車を入れっぱなしにしてあった。ちくしょう。まあ、それはともかく、言いたいことはわかるだろう。ある時代の終末には何か甘く、物悲しいものがある。振り返って、あの時ああすればよかった、ああ言えばよかったのに言わなかった、と考えるのだ。たとえば「一体ぜんたい朝食はどうなってるんだ？」とか「そのギニー・ジーンズを履くと、おまえ太腿はアラスカのパイプラインみたいだぜ」など。しかし、過去を悔いて何になるだろう？ ここはひとつ前向きに、これから十五分間で何がおこるか考えてみよう。郵便が来るとか？ そいつは堪忍してほしいなあ。「エレイン」でのツケがついに五千ドルの大台を越えたはずだし。やれやれ、またしてもあのスペイン人の修理屋がやってきた。なんだと、来週の水曜日まで水が出ないってのは、どういうことだ？ くそ。だが、大事なのは大きな未来図を描くことだ。今から三十分後には、すべてが半時間も昔のことに思えるだろう。



第 II 部  
世界政治



## 第6章

# 安全ナチ

レーガン大統領はアメリカン・ウェイに対するおびただしい脅威に敢然と立ち向かい、少なからずそれらを粉碎した。議会では、利権がらみの補助金やハト派連中が黙らせられた。リビアも目にもものを見た。航空管制官は家族ともども夕食抜きでベッドに追いやられた。「私たちのまわりにはいつも貧しい者がいる」という例の退屈な言葉に関してさえ、何らかの方策が取られた。強制バス輸送だの生活補助だのを打ち切れば、貧者はわたしたちのまわりなんぞをうろつかず、自分たちだけで群れてくれるようになるだろう。

だがただ一つ、西欧文明に対する威嚇、自由主義諸国に対する急襲、我々が価値あるものと認めているあらゆるものに対する脅威が残されており、大統領はそれに立ち向かわなくてはならない。その脅威とは例の、子供のイタズラ防止用の安全キャップである。さて子供のイタズラ防止用の安全キャップは、仕事もなければ人生における大した責任も持たず、一日じゅう漂白剤や洗剤の開栓技法の練習に費やせる子供にとっては素晴らしい（余暇の追及はもっぱら子供たちによってなされてきた。三才の幼児が、セイコー以前のスイスの時計職人級の器用さで、殺虫剤のキャップに取り組んでいる姿を見れば断言できる）。だが、このような仕掛けつきのアスピリンの瓶は、二日酔いの大人にはまさにゴルディアスの結び目である。かくして、わが国は弱体化してしまう。

人生は苦痛と悲哀に満ち満ちており、この事実、知覚力を備えたアメリカ人は胸を打たれずにはいられまい。ゆえに、IQ 110以上の全アメリカ国民は、午後六時以降はしらふではいられない。だがわれわれは、アメリカの頭痛の種を取り除く最も効果的な方法をアメンホテップ四世の墓並みに封印させることを許してしまった。「ズルー族の夜明

け」のセントラにあわせて頭蓋骨がガンガンしては、わが国のエリートたちといえどもソビエトの覇権主義に立ち向かい、インフレをあおらずに金利を引き下げ、施行可能な海洋法を起草することはできまい。アレン・ギンズバーグは、自分の世代の最良の理性が狂気によって破壊されるのを目の当たりにした、と語っている。私は私の世代の最良の理性が丸頭ハンマーで用いてアナシンの瓶と格闘するのを目撃した。

これには、簡単な解決法がある。家じゅうのありとあらゆる家庭用品をベビーベッドかベビーサークルにしまって手の届かないようにしたうえ、子供を台所の流しの下に放り込むことである。だが子供防止用安全キャップは、もっと大きな問題の一部にすぎない。先週、私はひどく気分が落ち込んでいたが、その理由がどうもはっきりとしなかった。私の財政状態はいつもと同じ程度に破綻していた。ガールフレンドとの関係は、いつもと同じ程度にもつれていた。身におぼえのある大罪で起訴されたわけでもない。それでも、私は落ち込んでいた。数日たって、やっとわかった。原因は私の車だ。私はシートベルトが嫌いだ。シートベルトをしていると、まるで十九世紀の船の船長になった気がする。車が大破したいなら、それは車の勝手だ。私はそんなものにつきあう気はない。ところが、私がこの装置をつけるのを嫌がると、この車は電子仕掛けの音声合成で、すごい剣幕で説教しやがる。そしてこれに輪をかけてひどいのが、キーをイグニッションに差し込んだままドアを開けた時の金切り声。これ以外にも、私が何か将来の幸福をそこなう可能性のあることをやらかすと、こいつは無礼な音だの点滅ランプだのを発するようにできている。もっと新型の車になると、まるでNFL（ナショナル・フットボール・リーグ）のプレイオフ中の主婦みたいな声の録音テープが、運転者のうっかりミスを指摘してくれる。これこそ将来のトレンドなのだそう。暗澹たる将来が目に見える。これまでは、いさかいの絶えない家庭で狂乱し夫たちの鬱積した憎悪は、妻や子供の殺害に向けられ、警察に何時間も包囲網を組ませていたのに、今後はその憎悪すべては車に向けられてしまうだろう。マリブ・クラシックが、酔っ払いのガン愛好者に対してトランクの蓋が開いています、としつこく告げたとしよう。車はたちまち蜂の巣だ！ 冗談じゃない。家族の予備なんてのは、各種の慈善団体からいくらでも無料でもらってこられるけれど、車ってのは一万ドルもするのだ。

さて自動車といえば、メソメソとブーたれるという新発見の才能よりもっと困ったことが起きている。車は退屈で差し出がましくなっているのだ ボディー体型バンパーやフ



レームのTバーとともに角がなくなり、ボンネットを開ければテレビ・ゲームの裏側さながら。昔を知らない若い読者に説明しておく、自動車というのはその昔、実に単純な機械だった。すごくスピードのでる芝刈り機のようなもので、芝を刈れない分まじだった。エンジンをかけ、好きなスピードで走らせ、憲法で保証されたさまざまな自由が試すせるおもにセックスや、事故だったが。だが、今はもうそのようなことは不可能だ 現在では、ゲートウェイ・アーチから落っことして壊れたり、「パリの夕べ」よりも有毒なガスを発したら、連邦政府はそいつを所有させてくれない。そして、所有が認められたって、ろくにとばせやしない。制限時速五五マイルなんて、まともなドライバーが車庫入れする速度であって、シカゴへ疾走する速度なんかじゃない。

事実上プリנקのトラックに封印された薬、電子的説教を行う車、臆病に近いほど慎重な制限速度 　こういう頭痛の種には共通点がある。つい最近、薪割り用のなたを買った。その頭には派手なシールが貼ってあり、これを使用する際には必ず目に覆いをするように、と書いてあった。そして、柄には気味の悪いプラスチック製のゴーグルがついていた。つけごこちは最悪で、しかも世界がいわゆる「魚眼」で見えてしまう（もともと、魚がホントにこんな眼を持っていたら、わざわざ高いフライ・ロッドなんか使わないでも、野球のバットで捕まえられるはずだが）。ショットガンの弾を買うと、思いつく限りの発砲活動を慎むよう忠告してくれる警告書や案内書が三枚もついてくる。そもそも銃なんか持つな、と言わないのが不思議なくらい。また、かつては刺激的な火事や警察の捕り物、政界のスキャンダルや国際紛争に関する記事が満載されていた新聞は、今や有毒化学物質の投棄の無秩序ぶりや欠陥トースターの回収、地球上のあらゆる良いものすべてが持つ発ガン性の記事で埋め尽くされている。

アメリカに何かが起こりつつある。危険ではない、安全すぎる何か。それは長年にわたる友人たちにも現れている。私は「ベビーブーム」世代であり、この世代は正気や慎重さとは無縁の世代だ。それなのに我が同輩たちは、いきなり禁酒禁煙、禁コーヒーに禁砂糖、禁塩にはしりはじめた。肉を控え、入るレストランといえば、椅子のうえに立って、ピーター・ラビットくんの母親みたいに「フロプシー、モプシー、コットンテイル、晩ごはんのしたくができましたよ」と叫びたくなるようなところばかり。これらがLSD、ウェザー・アンダーグラウンド（注・米国の過激派団体）、アルタモント・ロック・フェスティバルの世代の人間のやることか！ それもたかが安全の名のもとに！ わが国はこれ

まで、さまざまな対立をくぐり抜けてきた 南軍と北軍、黒人と白人、労働者と経営者の対立など だが、はたして喫煙派と嫌煙派の対立を無事にくぐり抜けることができるかは疑問だ。

かつて愛国心のためなら何でも許されたように、今は安全のためならすべてが許されてしまう。我々は海辺に増殖型原子炉を一基持つくらいなら、レバントのレゲエのおっさんども全員のチンポコをしゃぶるほうがいいと思っている。面白い自動車を開発するよりは、アメリカ国内の礼儀知らずのアーティストたちに日本語を学ばせたほうが賢明だと思っている。ニカラグアごときのためにケント州立大を失うくらいなら、共産主義国のバナナを食べるほうを選ぶだろう（ただしもちろん、バナナに発ガン性があることが判明しない限りのことだが）。これは裏切りだ。アメリカは本来、危険の上に創設された国なのだ。かのメイフラワー号では、救助訓練が何回おこなわれただろうか？ リンカーン家の小屋に、煙探知機はあったか？ インディアンの出陣化粧に赤色2号が使われていないか調べたやつがいたか？ 世界中からこの国へと人々を引き寄せたのは、他にもない、スリルに満ちた、素晴らしい、大いなるアメリカの危険であった。吹雪や竜巻の渦巻く果てしない空、落ちこちるのに最適なそびえ立つ紫の山々、さまざまな動物がうなり、武装した原住民がうようよしている肥沃な大地。アメリカは危険な国だ。この国には、安全の居場所はないのだ。

実際、安全の居場所なんかどこにもない。人生の醍醐味は、まさに危険性にあるのだ。たとえば、競馬は非常に危険だ。でも、安全な馬をつくろうとすれば、できあがるのは牛だ（競争させると、なかなかアレだぜ）。そして、人生の醍醐味もない部分もまた危険だ。生きていて同時に安全でいるのは、不可能だ。生きていない物体でいれば安全だが、我々の祖先である炭素分子は別の道を選んだわけで、周辺に火種を造り上げた以上、我々は多少の危険は覚悟しなければならない。苦痛ではあるが、苦痛は存在の重要な部分である。いくら危険だと警告されたって、痛みがなければライオンの口に手を突っ込むのは止められない。もちろんライオンは現在数が不足しているが、フードプロセッサの回転刃や、燃焼中のヒーターだって同じこと。痛みによって、体は我々の愚かさを教えてくれる。極めて安全な環境で育てられた子供は、自分の愚かさを知らずに成長する。そしてやがて結婚し、やっと妻に指摘される。死も避けることはできない。死は、苦痛よりも重要である。死は、進化が起きるように発明された。ダーウィン流の自然淘汰は、不死の生物にはあて

はまらない。死がなかったら、我々はみなアメーバのまま、周囲にある物をケツで食いつないでいただろう。また、死の不足は老人の増加を生む。ただでさえ社会福祉のシステムは肥大しすぎているのに。

というわけで、喫煙、飲酒、無謀運転、銃の使用、コルベアの所持、サッカリンの服用、ラベルなしの薬瓶を開けっ放しで家じゅうにころがしておくこと、殴り合いの喧嘩、ガソリンでバーベキューの火をおこすこと、頭にクリーニング屋のポリ袋をかぶること、破傷風の予防注射を受けずに裸足で外を走りまわること、愛国心や道徳心、人道性を持つすべての人々の義務なのである。

とはいえ、このような状態をいつまで続けられるかは心許ない。すでに安全軍がわが国に上陸している。こいつは絶対に陰謀だ 「ハイル・健康！」と叫び、我々の自由、解放、乱痴気パーティを束縛しようと企む安全ナチの陰謀にちがいない。安全ナチは銃の規制、激しい運動、健康食品などを推奨する。その結果、人々は非武装、無気力、栄養不良に陥り、ある種の絶対権力に服従せざるを得なくなる。安全ナチどもの最終目標が何なのかはわからないが、防災処置済み産着の普及にご執心のところを見ると、この全体主義勢力はいずれ私の子供たちを火箸がわりに使おうとしていると見ていい。しかしながらそれ以外は、全体主義の唯一のおたのしみの急降下爆撃機や戦車など、巨大兵器はいっさいない安全な絶対権力となるだろう。

レーガン大統領は、この安全ナチに対して敢然と立ち向かう決意を若干ながら表明した。ジェームズ・ワットは、近年まれに見るほど危険な内務長官だ。そして、カーター政権時代に実施された安全のための過剰規制は、わずかながら廃止された。たとえば、大型のセダンはみな、ダッシュボードの下に小型クッションを装備すべし、など。それでも、レーガン大統領は、わが国が直面している深刻な危険不足の徴候をはっきりとは認識していないようだ。つい最近狙撃されせいかもしれない。大統領にとっては、結構なことだ。彼の人生は数多くの危険を伴う。だがその他の人間、冒険や危険を請い、求めている我々一般市民はどうなる？ レーガン大統領が国の予算案を削減するときには、我々国民のことを心にとめておいてほしい。MXミサイル・システムはかなり危険そうだが、それが高すぎるんなら、アムトラック（注・全米鉄道旅客輸送公社。全米第一位の鉄道会社）への補助金をすこし増やしてやってほしい。そうすればみんなして、恐ろしい列車事故で死ねるかもしれない。



## 第7章

# 阿呆船

これが一体何のための旅なのか、結局は最後までわかんなかったね。私はアレクサンドル・プーシキン号なる客船の手摺によりかかり、逆巻くヴォルガ川の広大な岸辺をじっと見つめていた。あちこちに小麦畑が点在しているが、七月の末だというのにまだあまり育っておらず、土壌流出を一番起こしやすい、まっすぐ斜面ぞいに耕やされた溝がくっきりと見えてしまう。そして、手入れの行き届かない狭い牧草地にはちらほらと痩せた牛。だがほとんどの土地は、農地でも牧草地でもない、未開墾の空き地だ。そして、周囲にいる人間も、同じくらい空っぽな感じだった。

私はヴォルガ川平和クルーズとか称する十六日間のソビエト旅行に参加していた。そのうち九日間は、ロストフからドン川を北上し、ドン・ヴォルガ運河を經由してヴォルガ川をのぼり、カザンまでゆく、という船旅である。百六十人の参加者はすべてアメリカ人。そのうちの多くは、六十年代の生きた化石じみた感じの反核運動の活動家や、平和団体の創始者などであった。その他は、元左翼。反戦運動家たちは平和について、もっぱら核戦争後のホロコーストという観点から喋っていた。左翼連中は平和について、もっぱら米ソ関係という観点から喋っていた。この「平和クルーズ」では、参加者全員が平和について語り合うことになっている。さらに、ソビエト政府がロシア人「平和専門家」を五人派遣し、彼らも平和について語るようになっていた。

要するに何なんだ、と私はツアーの仲間に尋ねた。

「核戦争後のホロコーストこそ、人類が現在直面している最も重要な事です」と反戦運動家は答えた。

「核戦争後のホロコーストと米ソ関係ね」と、左翼連中。

じゃあソビエトの平和活動家たちは？ 彼らと話し合いたいと思っている人はいるの？

「ソビエト連邦には反体制平和組織など必要ありません」と、左翼連中。「ソビエト連邦はすでに世界一の平和組織を持っています。アメリカでは、対外政策が戦争賛成だから反体制平和組織が重要なのです。ところがソビエト連邦は平和主義の考えに立っています。何故なら、第二次世界大戦で二百万人のソビエト人が戦死しているからです」

「いやあ、もしホントに会えれば考えるけど……」と反戦運動家。

ソビエトの「専門家」が、これまでソビエトの専門家が口にしたことがないようなことを言うなんて、本気で思ってるの？

「米ソ関係は極めて重要です」と左翼連中。

このソ連の専門家たちに、あなた方の政府はアフガニスタンから兵力を撤退させるべきだと説得するの？

「はあ？」とみんな。

それとも、左翼連中が平和運動家たちに、もっと政治的な視点で物を見るよう説得するわけ？

「左翼って、誰のこと？」と、左翼連中。

## 一九八二年七月十六日、金曜日

私は『ネーション』誌の一九八二年二月二十七日号に掲載された、ヴォルガ川平和クルーズの半ページ広告に興味をひかれた。その広告は、こう謳っていた―「ソビエト連邦の首都と中心地で、何が起きているか、あなた自身の眼で確かめてみましょう。この夏、『ネーション』が企画するエキサイティングでお得なソビエト探訪の旅に、ぜひ参加しませんか」

私は実は古き時代の左翼と、やつらのカッカした論争の代弁者である『ネーション』誌の隠れファンだ。念のため、私はれっきとした共和党员だし、社会主義は、銭の種になりそうなとき以外は他人のことに口を出さないというアメリカの主義に反するものと心得ている。とはいえ、世界産業労働組合の組合員、スペイン内乱の退役軍人、ハリウッド・テンなどは胸をうつが。

だが正直なところ、私はこれまで元左翼の人間に会ったことがなかった。想像では、リリアン・ヘルマンみたいな辛辣な好人物か、あるいはアルジャー・ヒスみたいに頭が切れて神秘的で、すべてを否定しているか、それとも　一番いいのは　『カサブランカ』に登場するリックみたいに、頑固でシニカルだが弾圧に対しては闘いを辞さない人物だろうと思っていた。まさか、ケネディ空港で会った三十人の老人病の団体みたいに、自分の手荷物を置き忘れたりトイレへ行くのに迷子になったり、航空会社の職員をしつこく呼び止め、三時間半後にはどこのゲートへいったらいいんだねと二百回も聞き直したりするような連中だとは夢にも思わなかった。

確かに左翼ではあった。たまに落ち着くと、ソビエト連邦がいかに素晴らしいところかを語ってくれた　住宅は広々としていて家賃は安く、しかも医療費はすべて国が負担してくれるのだ、と。七十才の婆さんに捕まって、午後いっぱいかけて、アメリカの対外政策がいかに信用できないものかについて長々と拝聴し、しかも孫たちの写真を見せられる羽目に陥るまで、あなたは退屈の真になんたるかを知らない。こいつらは、ソビエト連邦では何もかもすべてが完璧だと信じて疑わなくせに、トイレット・ペーパーだけはしっかり持参していた。

## 七月十七日、土曜日

ツアーの広告はエキサイティングな旅と謳っていたが、確かにソビエト連邦に入国するのはエキサイティングだろう。ソビエト人は、国境越えをエキサイティングにしてくれることで有名だ。だが、我々は四時間も並ばせられた。「この遅れが何を意味しているか、おわかりでしょう」モスクワへむかう飛行機のなかでひっきりなしに文句を言っていた婦人が言った。「多くの反動主義勢力がソビエト連邦を破壊しようとしているのだわ」。もしも反動主義勢力が人員不足と荷物の扱いの悪さに弱いなら、モスクワ空港では一網打尽となるだろう。

狭いガラス張りの出入国管理ブースに陣取った係員にパスポートを渡す時だけは、少しスリルがあった。十七才そこそこといった感じの青年が、首のあたりのだぶついた制服と、自分の頭の二倍はあろうかという大きな帽子を被っていた。彼は恐ろしい顔つきで怒鳴った、「セー　ハ？　ナー　ハ？　ウマレタ　パシヨハ？　タンショウビ　ハ？　ツ



アーのメンバーのなかに一人、キエフ生まれの者がいた。彼女は自分の「ウマレタ パシヨ」はソ連だ、と言った。

「タンシヨウビ ハ？」

「一九一五年、」と彼女が答えた。

「シヨッコク シタ トシハ？」パスポート係は叫んだ。

「一九二〇年」

「シヨッコク リユウハ？」

彼女は明らかにきまり悪がっていた。「わかりません。両親に連れられていただけですから」

やがて我々は空気の悪い、ギアがむきだしのバスに乗り込むと、大きくて不格好なアパートが立ち並ぶ町並みを進み、大きくて不格好なアパートが立ち並ぶ町並みにはいり、大きくて不格好なアパートが立ち並ぶ町並みを進んでいった。我々の行く手には、くすんだモスクワの黄昏と人気の少ない通りが広がっていた。ネオンサインも広告板も暴動もなく、行き交う車もあまりなく、すべてが埃っぽく、心なしか歪んで見え、一時間半の間、延々と同じ風景が続いていた。

オレンジ色に髪を染め、スープ用の深皿ぐらいの大きさのイヤリングをした左翼の婦人が言った、「ソビエト連邦は陰気だ、なんて言う人がいるけれど、どこを掘ったらそんなせりふが出てくるのか理解できないわ」

我々の乗ったバスは、堂々たるガラス張りの近代的なホテルの前に停車した。グランド・ハイアットの露骨なパクリだ。私はバーに直行した。どこのグランド・ハイアットともあまり変りないバーだ。かなり出来上がった感じの、むくんだ赤ら顔の大男がいた。英語が話せるようだ。少なくとも、パーテンドーに英語で怒鳴っていた。「シュナップス」と彼が言った。出てきたのは、ウォッカだった。

「こちらには、どのくらい？」と私は彼に話しかけた。

「ははははははは」と、彼。「フランクフルトからですよ！」

「スコッチを」私はパーテンドーに言った。「どちらにいらしたんですか？」私は酔っ払いに尋ねた。パーテンドーはウォッカを寄越した。

「糞ったらしいアフガニスタン！」と、酔っ払い。アフガニスタンだって？ こいつは面白そうだ。



「アフガニスタンですって？」私が聞き返すと、男はスツールから転げ落ちた。

## 七月十八日 日曜日

左翼連中が集まった私のツアー・グループは、モスクワのホテルで別のツアー・グループ三、四組と合流した。ほとんどが反戦運動家たちのグループだった。私は自分の参加しているツアー・グループが、なぜ平和クルーズにまぎれこんでいるのか、そしてこの私がなぜあのグループに混ぜられたのかは、よくわからない。『ネーション』誌読者ではないのは確かだった。「『ネーション』誌には反ソ的プロパガンダが多すぎる」と、腹の突き出た男が、柄の間抜けに曲がったパイプをくゆらしながら言った。

実際、『ネーション』誌からこのクルーズに参加していたのはたったひとり、書評ページ担当の編集アシスタントだけだった。後でわかったことだが、『ネーション』誌がこの旅行の広告を掲載した主な理由は、参加者の頭数に応じて同誌に手数料が支払われることになっていたからだったのだ。この広告には他にもいくつものスポンサーの名前が列挙されていた。たとえば和解・親睦団体、米ソ友好協会、恒久的平和促進の会、女性による平和・友好国際同盟、世界友好連盟、などなど。ツアー・グループの参加者のうち数名は、これらの団体の関係者だったが、ほとんどは自前の小さな平和団体の代表者らしい。そして、今すぐ口のなかに靴下でも突っ込んでやらない限り、こいつらはべらべらと自分たちのことをとめどなく喋り続けそうな勢いだった。

さて、何はともあれまず最初に訪れたのはレーニンの墓だった。すごく暗くて寒いところで、我々はガラスの棺の三方をぐるりと回らされた。まるで小学校の遠足で爬虫類館の夜行性捕食動物を見物する時のようだった 私語は厳禁！ という感じ。

「詩人みたいな顔だわ」と、美人ガイドのマリヤが言った。確かに。見るからに意地悪そうで気違いじみた、偏屈な顔付きでエズラ・パウンドそっくり。

左翼連中は、鼻をすすり上げさえしなかった。これには、いささか腹がたった。私でさえ、リンカーン記念碑の前では涙ぐんだというのに。また、私はクレムリンの壁に沿って歩きながら、ジョン・リードが何者かを説明しなければならなかった。「ああそうそう」とオレンジ色に髪を染めた婦人が言った。「『レッズ』のウォーレン・ビーティね」彼女の今日のイヤリングは、テーブルランプのような形をしていた。「素晴らしいわ」と、彼女は

まるで自分がたった今編み上げたといわんばかりの手つきで赤の広場を指さした。「全然混んでないじゃありませんか！」赤の広場は兵士たちによって封鎖されていた。

ホテルへ戻り、また酒を飲んだ。

その日の旅程はグレイライン・ツアーのソビエト版といった感じで、我々は面白くもない場所を三十か所以上も回らされた。初心者にとっては、ソ連の建物はみな、共和国軍大記念館が、さもなければ落書きのない低所得者用公営住宅みたいに見える。数少ない例外はロシア帝国時代からのものだが、どれも芝の手入れが行き届いていない。五メートルごとに記念碑に行き当たる。これは何々の記念碑、あれは誰そのの記念碑、そしてこれは石膏と白亜職人のための第二回全国会議委員会設立記念碑、これは戦争の犠牲者たちの母親の母親をたたえる碑、これはフレキシブル・ベルト駆動発明者記念碑、といった具合。「前方に見えますのは、後ろにある碑を記念する碑でございます」と、マリヤが説明。

記念碑がとぎれたわずかの間に、マリヤが言った。「ソビエト連邦について何かご質問はありますか？」

「一体どこへ言ったらー」と言いかけた私を、左翼連中が圧倒した。

「ソ連の人々の一般的賃金に対する家賃の比率はどのくらいですか？」と、ひとりが尋ねた。

「ソ連の労働者の定年は何才ですか？」と、別のひとり。

「定年後の労働者の年金は、最高年俸の比率で言うとどのくらいですか？」

「ソ連では高等教育の費用は無料なのですか？」

「失業率は？」

マリヤはこれらの質問に答え、さらにいくつかの記念碑について説明し、こう尋ねた、「ソ連について他にご質問は？」

最初に質問をしたのとまったく同じ人間が、最初とまったく同じ質問を繰り返した。一瞬、幻聴かと思ったほどだ。

「ソ連の労働賃金に対する家賃の比率はどのくらいですか？」

そしてこの質問で、スイッチが一斉に入った。

「ソ連の労働者の定年は何才ですか？」

「定年後の労働者の年金は、最高年俸の比率で言うとどのくらいですか？」

「ソ連では高等教育の費用は無料なのですか？」

「失業率は？」

マリヤはこれらの質問に対して同じ答えを繰り返した。三度目になると、さすがの彼女も逆上した。そして何も無い場所をあたかも観光名所であるかのように説明しはじめた。「御覧ください、ビルでございます！ またビルでございます！ そしてあちらには、いくつも寄り集まったビルの群れが御覧いただけます！ あ、こちらに（ほっと安堵の溜め息について）記念碑の群れが見えてまいりました」

ソ連滞在中、ことあるごとにまったく同じ質問が繰り返され、まったく同じ答えが返された。断じて言うが、私はその答えをひとつとして記憶していない。ただひとつだけ、失業率に関するものを除いては。「ソ連には失業はありません。ソ連は、すべての人に職業を保証しています」。それって、すごくおっかなくない？

その後、バス・ツアーを抜け出してひとりであらうついていると、ずんぐりとしたロシア人たちが寄ってきて私に質問をする。「あんた、外国人？」といった類いの質問ではなく、ロシア語で、切迫した深刻な様子の質問だった。たぶん私が髪をきちんと整え、ネクタイをしめていた（どちらもソ連では珍しい）からだろう、そいつらは私が櫛とネクタイを売る店に出入りする特権を共産党職員で、世の事情に通じていると考えたに違いない。あれ以来、私はそいつらがこんな質問をしていたんじゃないかと思えてしかたない。「ソ連の労働賃金に対する家賃の比率は？」

## 七月十九日 月曜日

ロストフへ向かう飛行機を待つ間、私はバスでひっきりなしに質問をしていた連中のひとりと隣同志になった。彼女は滑走路に待機している何台ものアエロフロートの航空機を見詰め、繊細でお門違いの、恩着せがましい、そして進歩的な情熱に溢れる意見を述べた。「飛行機よ！」と彼女は叫んだ。「ソ連には何てたくさんの飛行機があるんでしょう！」

彼女の見てくれは、最後までわからなかった。身長わずか百五十センチで、ヘンナ染めの髪が、その下の顎の絶え間ない動きにつれて揺れるのが見えただけだった。彼女は自分の考えをそのまま口に出してしまうという、一部の高齢者が持つ素晴らしい能力を身につけていた。

「さてと」と彼女は言う。「こうやって飛行機に乗って、シートベルトを締めて、膝の間

に手を入れるでしょ、それから、足をこうしてちょっと上げて手荷物の上に乗せて、肩にコートをかけて、あら、あたしたらコートの上にすわっちゃってるじゃない、でもこうやってもぞもぞ動いて、これをこうして肩のほうに引っ張りあげて……」これが何時間も、ロストフに着くまでずっとこの調子である。

反戦運動家、とくに年配の反戦運動家たちは左翼連中よりも面白い格好だった。プラスチック製のサンダルにランニング用のショートパンツ、ケネス・パッチンから失敬した文句をシルクスクリーンで染め抜いたミントグリーンのTシャツという姿の六十代の男性が周囲の目にどんな風に映るものか、誰かが言ってやるべきであった。

反戦運動家たちはまた、左翼連中よりも奇怪な行動を取る。クエーカー教会の牧師夫婦がいた。といっても彼等は我々が一般に想像するようなクエーカー教徒ではなかった。彼等は「ハリウッドに行ったことがある」のであった。ロサンゼルス空港でクエーカー教徒が寄ってきて、ウィリアム・ペンのための寄付を求めてきたと想像してみてほしい。いや、二人が実際にそうしたと言うのではない。が、今にもやりそうな感じだった。それはともかく、この夫婦はおのおの違った名字を名乗っていた。ロストフで船に乗ったとき、参加メンバーのひとりが夫のほうに借りた本を返しにやってきた。

「ごめんなさい」とキャビンの戸口で妻が言った。「彼、今いませんのよ」

「でも、この本をお返しねがえませんか」と借り主が言った。「ご主人のご本ですから」

「わたくしは彼とは別人ですので」と妻が答えた。

キャビンで私と同室になった相手は左翼ではなかった。「私はソ連びいきじゃありませんよ」と彼は、荷物からアヒル狩り柄のネクタイを取り出そうとしている私の手元をじろじろと眺めながら言った。「私は引退した平和運動の活動家でしてね。いや、平和運動から引退したわけじゃありませんよ。おわかりでしょう」彼は自分の荷物に樟脳湿布剤をこぼし、食事のせいで胃腸障害をおこし、風邪をひくといけなからといってエアコンを入れようとしなかった。お陰でカザンに着くまでずっと、私たちのキャビンにはまるでビックス製薬会社の工場の便所みたいな臭いがたちこめていた。バスを三台乗り継いだ後、彼は私にこう言った。「この国はまるで大きなクラブみたいですね。あなた、この国には失業がないのをご存じですか？ ソビエト憲法はすべての国民に職業を保証しているんですぞ！」

## 七月二十日 火曜日

幸いなことに、話し相手は彼だけではなかった。実際には、我々は他の人々に話しかけることはほとんどできなかった。みんなソビエト人で英語が話せなかったのだ。言うところのサイレント・マジョリティってやつ。ロストフへむかう飛行機のなかで、私はイホールという男と隣の席になった。彼はほんの少ししか英語が話せなかったが、ジェスチャーの達人だった。そのジェスチャーで、自分はエンジニアだと告げた。私は、自分はアメリカ人だとジェスチャーで告げた。彼はそれがとても嬉しかったようだ。うちにいらっしやいな。私はパンフレットの写真を見せて彼に客船のことを説明した。私はジェスチャーで、船から離れるわけにいかない、と告げた。彼は私に工学業界誌をくれ（ロシア語で、イラストなし）、私は彼にニューヨークの絵葉書を数枚あげた。私たちはロストフ空港で長々と握手を交わして別れた。

船は火曜日の深夜までロストフのドックに停泊していた。ロストフにも夥しい数の記念碑があり、波止場には観光バスが何台も並んでいた。バスのなかで、誰かが尋ねる声が聞こえてきた。「ソ連の労働賃金に対する家賃の割合はどのくらいですか？」

私は危うくそのバスのなかへ追い立てられそうになったが、ちょうどその時、誰かが私の腕をつかんだ。イホールだった。「こっちへ」と彼は身振りで示した。私は堤防を下っていった。私たちは甲板排水孔までロシア人で埋まった船に乗り込み、ドン川の二時間の旅に出発した。イホールはシャンパンのボトルを取り出し、手を振ったり私の持っている新聞記者用のノートにさらさらと絵を描いたりしながらぎこちない説明をはじめた。

彼の父は一九四五年、ドイツで東西の軍隊が衝突した際、前線で戦った兵士だった。アメリカ人は、どうやらオマハ・ビーチとオーデル・ナイセライン（東ドイツ・ポーランド国境）の間であらゆるアルコール飲料を解放し、武装した共産党員たちを仰天させたにちがいない。「ふん、イギリス人が何だ」とイホールは言った。「ふん、フランス人め」だが、アメリカ人はいい奴だ、シュナップスがたっぷりコニャックもたっぷり、ぶどう酒もたっぷりある。それに、連中は酒が強い、アメリカの連中はね。というわけで、イホールの「トーサン」は、もしも（空を指差す）アメリカ人に会ったら（私を指差し、握手する）そのアメリカ人に酒をたくさんふるまうことを彼に誓わせた（自分自身を指差し、胸に手

をあてる)のだった。Da? (乾杯、握手をし、もう一度乾杯、もう一度握手)

イホールの後ろには、フルシチョフとアーノルド・シュワルツェネッガーを足して二で割ったような六十がらみの大男が立っていた。彼は私をじっと睨みつけるようにしながら、耳慣れない私の言葉に聞き入っていた。アンダーシャツにジャケットを羽織り、ジャケットの胸ポケットからメダルのリボンが出ている。「ドイツ人か?」と険しい顔つきで聞いてきた。

「ニエツト、ドイツ人」と私は答えた。「アメリカ人」

とたんに、男の顔がぱっと輝いた。文字通り、輝いたのだ。「同志よ!」と彼は叫んだ。それが、彼の喋った唯一の英語だった。彼は、恐らく数枚の賞状や名誉ある除隊証明書などが入っているらしい財布を取り出した。「アメリカンスキー、同志!」と彼は言って私の肩をぴしゃぴしゃと叩いた。私とイホールに、八オンスはたっぴりあるうと思われるブランディのグラスがふるまわれた。

私は、自分の知っている唯一のロシア語で乾杯した。「タワリーシチ!」彼は幼い孫を連れてきて、私と握手をさせた。

「これであのチビも、アメリカ人に会ったと友達に自慢できるってわけだ」イホールが身振りで説明した。私は大男ともう一度乾杯した。彼は長い乾杯を返してくれたが、イホールの通訳によれば、どうやら我々はアメリカとソ連が中国との戦争に際して再び同盟を結ぶことを願って乾杯したようだった。

私はさらにコニャックを飲んだ。イホールはビールを飲んだ。大男はさらにコニャックをがぶ飲みした。

船がドックに着くと、イホールと私はビヤホールへ繰り出した。地下の店で、半リットルのジョッキがずらりと並び、一メートル離れたところから、ゴムホースでビールをそこにぶちまけていた。みんな一度に六つずつジョッキをつかむと、長い木のテーブルの前に立って次々と飲み干す。もうこうなると、言葉の問題はなくなっていた。私たちは女について語り合い(「ああ、美しい。ああ、頭痛の種」)、国際政治について論じ合い(「ふん、イラクめ。ふん、イランめ」)、そして社会主義と自由市場システムの相対的メリットについて意見を交わしあい(「社会主義、信頼ある、ニエツト面白い。資本主義、ニエツト信頼、すごい面白い」)、そしてたぶん、文学に関しても語り合ったのだと思う(「『静かなるドン』だと。ふん、長ったらしい題名だ」)。それから河岸を変え、ロシア人観光客用ホテ



ルの最上階にあるバーでさらに飲みつづけた。私は、親友に恥をかかせるような真似をしたくなかったのだ。それに、イホールの父親の気持ちも考えないと。

イホールと私は抱擁を交わし、私は千鳥足で臭いキャビンへとぶったおれに向かった。考えたことをすべて口に出す女が、タラップの一番上に立っていた。「あなたがウォッカの瓶越しにソビエト連邦を見るような人じゃないといいんですけどね」だとさ。

## 内なる敵

むろん、この船にはロシア人も大勢乗っていた。例の五人の専門家たちも乗っていた。もしも私の引用をつぎはぎや、詩的な誇張表現が誤解を招いたりして、これらソビエト人のうちの誰かがCIAに「転向」させられたと思われるかもしれないので、仮名を使うことにする。法律学校にも入れず、人目をはばかって暮らしているエール野郎なんか迷惑を受ける筋合いはなかるう。

専門家のうち、ふたりは本物のジャーナリストだった。ナタリアは四十近い年齢の、感じの良いブロンド女性である。口数の少なかった。ニコライは三十代なかばの逞しい男性で、服装も物腰も非のうち所のない西欧風。海外特派員としてスイスとオーストリアで七年間を過ごした経験があり、特派員の例にもれずブッシュ・ジャケットを着て、新聞記者の例にもれずはったりの強い大酒飲みである。私の見たところ、今回のツアー参加は大した仕事ではなさそうだった。ニコライは平和懇談会でメモをまったく取らなかったし、ナタリアもお義理程度にメモを取る程度だった。

もうひとりの専門家、オルロンスキーはロシア人とタタール人の血が混じったような、意地の悪そうな顔立ちの男で、切れ長の鋭い目をしていて。彼は国立アメリカ・カナダ研究所に所属する、退屈した経済学者で、サンフランシスコで開かれる学会出席のために、英語を練習するため参加しているのだった。アメリカ・カナダ研究所というのはどうやら、ピレッジ・ボイス誌を六年間予約購読し、アメリカの地方の生活がどんなものかを知ろうとする機関らしい。だがオルロンスキーはなかなか油断できない男のようだった。彼は消費者中心のアメリカの素晴らしい商品流通システムについて語りたがる。レーガン政府の経済機構はどうかしてるんじゃないか？ アメリカの自動車産業は一体どうしちゃったんだ？ だが、アメリカ人連中の好む話題は平和問題や米ソ関係だった。

残るふたりのソビエト人専門家はソ連科学アカデミー、世界経済および国際関係研究部門のブルショビッチ博士と、モスクワ大学哲学科、社会学科のギュホフ博士であった。ブルショビッチ博士は痩せた、飄々としたタイプの、誰にも通じないイエズス会修道士のようなウィットの持ち主だった。公式の平和懇談会が行われている間、博士はどこかへ雲がくれしてしまった。ギュホフ氏はヘレフォード種の牛みたいな顔付きをした理論派の道化師で、左翼連中に絶大な人気があった。「あの人は教授じゃないんですよ」と、後で船員のひとりが教えてくれた。「まあ、いわゆる教官ってやつですな。軍学校で教えてる人です」

これらの専門家に加えて、役人や船乗り、ウェイトレス、スチュワード、ツアーの添乗員などが総勢三十人、あるいはそれ以上いた。船の乗務員のなかでも地位の高い者は英語が話せるようだが、滅多なことでは喋ろうとしなかった。アメリカ人連中が苦情をもらすと、ぽかんとした表情でやりすごすのだった。しかもアメリカ人連中は実によく苦情をもらし、なかでも一番ひどいのが左翼連中だった。連中はソ連のことを褒めたたえたその舌の根も乾かないうちに、「騒々しいわね。なんてぞんざいな態度でしょう。すきま風が寒いわ。椅子のクッションが固すぎるわね。何なの、このいやな臭いは？ ひどい食事ね。脂っこすぎるわ。別のものを注文できるかしら？ 別のものを注文したはずよ。別のものを注文できるって、誰かが言ってたじゃないの。別のものを好きに注文してなにが悪いの？ それに、ねえお嬢さん、クリーニング係が主人の靴下を片方なくしてしまいましたのよ。とっても高い靴下でしたのに、片方なくされてしまったの」

これらの苦情をいちいち通訳する、あるいはそのふりをするのは、六人のガイドたちの仕事だった。彼等の顔付きは、船が港を離れて二日もたたないうちに、目にみえてゲンナリしていった。

## 七月二十一日 水曜日、早朝

イホールとの船旅のあとで、私はよるめきながら船のバーへ入っていった。私が眠っているあいだに船は出航しており、船の揺れにつれて、私の食道の動きは増幅された。物がよく見えなかった。ニコライが、ソニヤという名の暗い、真面目くさったタイプのガイドと並んでスツールに腰掛けていた。私は両手でカウンターをつかみロシアのソフトドリンクのなかで最も吐きやすいのはどれだろうと考えていた。「ウォッカがいいですよ」とニ



コライが言い、女のバーテンに手で示した。私はひどくまずい酒を飲み干した。「ところで」とニコライが言った。「なんでレーガンが大統領に？」

「私が、彼に投票したからですよ」と私は答えた。「なんでブレジネフを書記長に？」

するとニコライが笑い出した。「僕はそんな大それた責任はもっちゃいませんよ」

「ソビエト連邦のどんなところが気に入りました？」とソニヤ。

「どこも」と私。

彼女は顔を曇らせた。「どこも？ 何か気にいらぬことでも？」

「アメリカ人が多すぎるところがね」

ソニヤは断固とした中立の立場を取りつつけていた。

「僕はアメリカ人はあまり知りませんが、みんなあんな調子なんですか」とニコライ。

彼は船を取り巻く手振りをしてウィンクをし、私のためにもう一杯ウォッカを注文した。

「みんなというわけじゃないけどね」と私は答えた。

「あの人たちはちょっと年がいきすぎてるのかもしれない」とソニヤが、明らかなウソを述べるときの雰囲気を読みながら言う。「でも」彼女はぱっと顔を輝かせて、「あの人は平和愛好者だわ」

「その通り」と私はうなづいた。「連中は進歩的だ。非常に進歩的だよ。なにしろ、あまりにも進歩的だから、私と話してみんなソ連に亡命する気になったはずだよ」

「いやいやいやいや、それだけは堪忍」とニコライ。

## 七月二十一日 水曜日、朝遅く

我々はボルガドンスクより少し北のみずばらしい島に停泊した。アメリカの平和専門家のひとり、アメリカ友好サービス議会から派遣された平和主義者が、船員にバレーボールの試合を申し入れた。「やりましょう。どうせやるなら、本気でやりましょう」と彼はアメリカの連中をけしかけた。「ただし、あくまでもお遊びだということを忘れないように」。ソ連側はかれらをコテンパンに負かした。

その晩、私はソ連の連中に案内され、暗い扇状船尾へ行ってみた。そこにはビールやチーズ、パン、大きな魚の塩漬けなどがたっぷりとしまいこまれていた。

ソニヤは私の共和主義にひどくこだわっていた。「あなたは平和賛成派じゃないの？」

と彼女は尋ねた。

「ベトナム戦争中、ワタシ、平和のためいっぱい戦った。(しばらくロシア人連中とお喋りをしていると、向こうの話し方が伝染る) 平和のための暴動に参加し、平和のために警察と戦い、平和のために催涙弾も浴びた。もう、平和には飽きた。平和は危険すぎる」

ここでオルロンスキーが笑いだし、首を振った。「ベトナムねえ あれはひどかった」「アジアでの陸地戦」と、私。「最悪。しかも、その二の舞を踏もうとしてる国がある」みんなが一斉に笑った。

「それに、中東でも」とソニヤが笑いながら私を指さして言った「誰かさんのお仲間の国だって、二の舞を踏もうとしているわ」

「戦争よくない」とニコライが言う。「アメリカとソビエト、レバノンをめぐるって戦うことになったりしてーははは！」これは気の効いたジョークだったらしい。ソ連の連中はみな、危うく椅子から転げ落ちそうなほどだった。

「中東で同盟国を選ぶのに、なんでよりによって石油なしの国を選ぶ？」とオルロンスキー。

「ヨーロッパ全体から、なんでわざわざポーランドを選ぶ？」と私。

「交換しようか？」とニコライ。

「それならいっしょに南アフリカもつけるよ」と私。

「あんたは進歩派だ、とレーガン大統領に言ってやろう」とオルロンスキー。

「ピー・シェイ(P.J.)は今日のプラウダのニュースに顔をしかめていたわ。この人が急進派だとは思えないけど」とソニヤ。

「いや、彼は進歩派さ」とニコライが言う。「覚えてるだろうソニヤ、彼はこの船に乗ってるアメリカ人連中をほとんど全員、亡命させようとしたんだぜ」

マリヤが首を締められたような声を喉の奥から絞りだした。ソニヤがひどく真面目な顔付きになった。「進歩派ねえ」と彼女は溜め息をついた。「せめて彼等には、何もかもが完璧に見えるようにしてあげないとね」

## 七月二十二日 木曜日

最初の会議は、一面にクズの浮いたツィムリヤンスキー貯水池を渡っている間に行なわれた。会議のコーディネーターは、背が低くて太った、恐ろしく元気な六十代のアメリカ人女性だった。訴えられないように、仮にピジョン夫人と呼ぶことにしようか。それに旅行記に多少の嘘はつきものだ。ピジョン夫人は教育界の権威者で、実際、教師の風格を備えていた。夜中に学校へ忍び込み、男女の営みを描いた落書きを講堂中にスプレーしてまわりたい気持ちを生徒に起こさせる、といった類いの風格だ。

ピジョン夫人はソ連の専門家たちにふたりのアメリカ人、ロドン神父（仮名）とバレーボール・コーチのニック・オベンチャラ（仮名）を紹介した。ニックは政治家、といってもヤングスタウンの市議会選挙に開発反対、エコロジー賛成のスローガンを掲げて出馬する、といったタイプの政治家。やたらニコニコしている奴だ。ロドン神父はイカボッド・クレインみたいな痩せた長身の若者である。宗派はついにわからなかった。推定では禅メソジスト。髭を伸ばしている途中か、あるいは髭の剃りかたを知らないらしい。

会議の始まりを宣言するピジョン夫人の調子は、私をして二十五年間の時をさかのぼらせ、小学校四年生の呪わしい教室への監禁時代へと連れ戻すに足る勿体ぶったものだった。暑い太陽、澄んだ空、心地好いそよ風が吹く、美しい午後だった。会議はクルーザーの上で行なわれたが、百二十人あまりの参加者はみなシェード・デッキの下に固まってしまったため、三方を船の上部構造に囲まれたそのあたりには、むっとするような空気がたちこめていた。

反戦運動家たちはメモを熱心にとっていた。私には、ボスが目を光らせていない間にコピーされ、順番が派手に狂ったままホチキスどめされた、これらの人々が代表する熱意のない組織が続々と発行するニューズレターの洪水が目につかぶようだった。「忘れがたいソ連への平和航海」「平和の心を胸に、ソビエト社会主義連邦共和国への楽しく、忘れ難い旅」「『戦争と平和』ならぬ『平和と平和』を」（これはまだましな方だろう）「ソビエト連邦における平和と、同国への興味深い旅」。こうしてアメリカは、退屈のあまり核武装解除に向かうのかもしれない。

ニック・オベンチャラのスピーチがはじまった。内容は可もなく不可もなし。各国が核

兵器の装備に血道をあげている主な原因は、アメリカの玄関先で殴りあいの喧嘩が行なわれているせいだと主張した。彼の主張は、少なくとも事実関係に関する限りは間違いではない。だが、私はなぜか無性に腹が立ってきた。他国の人間の前で自分の祖国を、私の祖国をこきおろすとは、一体どういう見だ。彼の言ったことが一般的真実であるかどうかそんなことは私の知ったことじゃない。彼の主張がすべて、一言半句に至るまで抗いようのない真実であろうと、そんなことはどうでもいいのだ。私はここ数年来なかったほど逆上していた。もう我慢できない。私は船倉へ潜りこみたくなった。あんな恥知らずな男の顔など、これ以上見ていられるものか。が、そのときふと、私の頭にこんな考えが浮かんだ。もしもここがミシシッピ川で彼がロシア人だったとしても、私は彼を同じように恥知らずな男だと思ったに違いない。あの、ジャケットの胸ポケットからメダルの紐を覗かせていた大男、我が同志 あいつなら、きっとデルタ・クイーンの上でこんな真似をしたりしないだろう。

私は一杯酒をひっかけてから再び会議に戻った。プリンストン非武装連合の代表としてロドン神父がスピーチを行っていた。彼もまた、ニックと同じことを言っていた。

「さあみなさん、ニック・オベンチャラさんとロドン神父さんに、皆さんからとおっても興味深いご質問をなさる時間でございますわよ」ピジョン夫人が言った。

「オベンチャラさん」太った男が言った、「これはあくまで仮定の話ですが、核兵器獲得競争がもたらアメリカ合衆国の責任だというあなたのおっしゃり方は、例えば反共産主義者から見た場合 あくまでも仮定として、ですよ あなたがソビエトに金で雇われた、連中の手先だと解釈されはしないでしょうか？」男はこう言ったあと、あわてて付け加えた。「どうか皆さん、私の質問を額面どおりに受け取らないでくださいよ！」彼等は、男の質問を額面どおりに受け取った。太った男は、直解主義の中にどっぷりと浸ってしまったのである。ドン川の川岸にむかって、ごうごうたる非難の悲鳴が押し寄せた。

「なんてひどいことを！」左翼の婦人が金切り声をあげた。怒りのあまり失禁していたのではなからうか 私の友人たちは、ソビエトの手先として活動しているけれど、誰もお金を払ってくれたことはないわ、と。

私はあのでぶ男のために一言弁護してやろうと思い、口を開きかけたが、遅かった。彼はすでに、平身低頭してニックに謝っていたのである。

「ソビエト連邦では、労働者の賃金に対する家賃の比率はどのくらいですか？」と、あ

る左翼が尋ねた。ロドン神父はこの質問に答えられず、このため残りの質問に対する答えはピジョン夫人が一手に引き受けることになった。

## 七月二十三日 金曜日、早朝

私は自分のなかに突然沸き起こった愛国病について、ニコライに訴えた。「君も同じ気持ちに駆られないかい？」だが、ニコライには理解できないようだった。

私はとうとうあきらめた。私たちは酒を重ねた。二十分ほどしてニコライが言った、「ニックのスピーチはあまり面白くなかった」彼は無表情を装っていた。「僕だってプラウダぐらい読めるからね」

## 七月二十三日 金曜日

ボルゴグラードに上陸し、モマイエフ丘へ連れてゆかれた。まだスターリンにちなんだ名がつけられていた頃、何百万という人々がこの場所を守ろうとして命を落としたそうである。左翼連中のひとりが、今日もまたスーツにネクタイですか、と私を冷やかした。私に言わせれば、集団の墓を訪れるのだから当然のことだった。

左翼連中は手に手に花輪を携えていたが、スポーツシャツ姿で花輪を墓に供える彼等の格好には、思わず目を覆いたくなるものがあった。また、丘の頂上には高さ五五メートルに及ぶ「マザー・ロシア」の像があるが、これはコンクリートで補強された直径一メートルの乳首という物を見たことがないという人にとっては一見の価値がある。

この日の午後、四日目にしてはじめて、私はこの船に真のアメリカ人が乗っていることを発見した。このツアー参加者の痛々しい憂慮と絶望的な使命感のゴツタ煮に、普通の旅行者がまぎれこんでいたのだ。値段に引かれたのか、それとも偶然によるものか、彼等とはもかくこのツアーを選んでしまい、まるでレミングの集団自殺にでも申し込んだような気分を味わっていたのだ。

モマイエフ丘から戻ると、ごく普通のかっこうをした、目のつりあがっていない男が、昔からCIAの経営している東南アジアの航空路線エアー・アメリカのTシャツを着て、サンデッキにのびのびと寝そべっているのが私の目にとまった。「あなたはなんだってこんなツアーなんかに？」と、Tシャツのロゴをじっと見つめている私にむかって彼は尋ね

た。「マゾヒズムかな」と私は答え、男のTシャツに視線を戻した。

男は大きく息を吸い込んで、胸を張った。「このロゴを見れば、あの連中もビビるでしょうよ」

彼はニューメキシコ州から参加した十二人のひとりだった。友人同志、仲間だけの旅行をしている。これまでは、ソ連を大いに楽しんできた。ロシア人のように飲み、アメリカ人のように酒場を出られるなら、ソ連は素晴らしい国だそうだが、よもやこれほどの平和が待ち構えていようとはツコ知らずにこの船に乗り込み、仕方ないのもっぱらプロムナード・デッキのラウンジに固まり、わざときつい西部訛りで喋って左翼連中を追い払い、ひっきりなしに煙草を吸って反戦運動家たちを追い払ってきたのだった。どうやら喫煙は平和運動家たちにとって、レーガンに投票するよりも危険らしい。

ニュー・メキシコ州から来た連中は、女のパーテンにとても気に入られていた。グラス、氷、酒瓶、陶器など、何でも自由にラウンジへの持ち出しを許されていた。彼女は彼らからは決してチップを受け取らなかったが、その代わりサンタフェの建築家のビリーが、ロストフの市場で抱えきれないほどの花束を買ってきてやった。彼女は、鎖骨まで真っ赤になった。

ニュー・メキシコ州の連中は、仲間の旅行者たちに呆れていた。政治面ではなく、船員に対する態度の悪さに呆れていたのだが。「それと、お互い同志でもよ」と不動産デベロッパーのスー・アン。「夫婦があんなにわめきあってるなんて、初めて見た」

政治に関しては、元ベトナムで国務省のA I D（国際開発局）局員として勤めていたトムが次のように言っている、「何のかんのと言っても、原爆が発明されてから超ド級の戦争なんて一度も起きちゃいないよ」

「私はアラモに住んでるんだけど」とスー・アン。「あの連中、これで絶対ビビると思うな」。確かに、反戦運動家たちには不安がる者がいた。が、エア・アメリカのTシャツでは残念ながら誰もビビらなかった。それが何だか誰も知らなかったのだ。

## 実地に見た米ソ関係

夕食の時、現地の米ソ友好クラブから七、八人のソビエト人がピジョン夫人に伴われて乗船してきた。そいつらは貪るように肉を食べていた。リーダーはカタい感じの青年で、



将来は穀物生産（あれば、だけど）に関するウソ委員会一等書記官まちがいなし、といったタイプ。普通の二倍はありそうなギターを持ち、周囲に絶えず気を配っていた。だが、あとはごく普通だった。私はアレクセイという、十二オぐらいに見える建設現場監督と、ボリスというエンジニア（ソ連ではほとんどみんなエンジニアなのだ。アメリカの衛生エンジニアと同程度の代物ではあるけれど）の間に座った。

アレクセイはロックの話をしたがった。彼の英語は、『ローリングストーン』誌の平均的な評論家に比べてさほど劣るものではなかった。「アバ　ぜんぜん中身なし。ハード・ロック、イエーイ！　レッド・ツェッペリン！　イエーイ！　それとキッス！　いっとう好きは　ハード、ハード・ロック！　タイム・マシン知ってるか？」アメリカ人がソ連のロック界のトップ・グループの名前を知っていると、彼は狂喜した。「ビートルズみたい、すごいグループ。けど、やっぱり一番、アメリカのハード・ロック、イエーイ！　ロック・スターみんな、酒を飲み過ぎて死んじゃうの残念、それに」　と、ここでリーダーの青年のほうをちらりと見て　「それに、その他の原因でね」

ボリスは車の話をしたがった。彼の意見によると、ソ連にはもっと、もっと速い車がたくさん必要なのだそうだ。「速い車が欲しいよ」と彼は言った。

アメリカ人たちは、もっぱら平和と米ソ関係の話をしたがった。

ディナーの後、私たちはデッキの音楽室へ行った。十人ばかりのアメリカ人　ほとんどが左翼連中　と、マリヤが通訳としてついてきた。左翼連中のなかにひとり、女性がいた。目を見張るほどの醜さにもかかわらず、これまで一度もその存在に気付いたことのない女性だった。たまたま生まれつきブスだったというのではなく、長い年月にわたる性格の悪さや陰険さ、悪意などが滲み出た感じの醜さ。このため、彼女の顔は苛立たしげで意地の悪そうな、鼻ぺちゃのコウモリみたいな感じだった。

リーダーの青年が言った、「ここにこられたことは、とても嬉しいです。僕たちの英語、あまり上手でないです。しかし、今あなた方とご一緒するのは、とても勉強のいいチャンスです」やがてソ連の青年たちは自己紹介をし、現在の職業についてできる限りの説明をした。

例の醜い女はアレクセイに狙いを定め、実に辛辣な口調でこう言った、「ソビエト連邦には女性の木工さんがどのくらいいるの？」

アレクセイは懸命に答を探した。「現在、木工の訓練を受けているのはほとんど男性、

つまりオトコです。けど、オンナの子も、もしも……」彼はそれ以上答えることができなかった。

「オンナの子、ですって?!」腐れブスが吠えたてた。「オンナの子、ですって?! アメリカじゃ、女性をオンナの子だなんて呼ばないわ! 侮辱よ!」ソビエト人の青年はぼかんと彼女を見詰めた。すると醜女はマリヤのほうを向いた。「あなた、この人たちに説明してやってちょうだい。女性をオンナの子なんて呼ぶのは大変失礼なことだって」

マリヤはなにやらとりなすような調子のロシア語をつぶやいた。リーダーの青年はしどろもどろになりながら謝ろうとしたが、醜女がそれをさえぎった。「ひとつ、お聞ききたいんだけど」と彼女はアレクセイの履いているデニムのズボンをじろりと眺めた。「なぜヨーロッパでは、共産圏の若者までが、揃いも揃ってあのおぞましいアメリカのポピュラー音楽に夢中になり、いやらしいブルージーンズを履きたがるんです?」

マリヤは、苦々しげな彼女の口調をそっくりそのまま真似て彼等に伝えたいらしい。その場にいたソ連の青年たちの表情がちまち凍りつき、判で押したようなソビエト人の顔になった—真面目そうだが表情のない、半ばポーカー・フェイス、半ば「金持ちにはなれなくても」でフィル・シルバースが義勇兵をつのったときに、連隊が見せた顔付きだ。

しらふのソビエト人に衝動的な行動を促すのは難しいことだが、私はマリヤの袖口を引っ張って、バーから少しビールを持ってこよう、と合図をした。私たちが戻ってくると、室内には依然として白けた雰囲気か漂っていた。リーダーの青年はビールに口をつけようとしなかったが、他のソビエト人連中は、ビールのジョッキに顔を埋められてほっとしているようだった。醜女はひとり気取った格好で腰掛け、しつこく彼等の返事を待っていた。他のアメリカ人たちは見るからに居心地が悪そうだった。ついに、女の亭主がたまりかねたように口を開いた。相も変わらずジョギング用のショートパンツにケネス・パッチンのTシャツ姿の男だ。「ソビエト連邦では、家賃の比率は……」

なんとかしなければ。私は立ち上がった。「ソ連の若者諸君のせっかくの友愛と国際親善の心を、我々だけで独占するのは不公平じゃないかな、」と私は言った。「ラウンジには他にもアメリカ人のグループがいて、米ソ関係についてゲストたちと語りたがっているよ。それに—」

「ああ、そうね!」マリヤが叫び、廊下を指差しながらロシア語でなにやら早口にまくしたてた。ニュー・メキシコ州から来た連中はぞろぞろとやってきた我々を見てちょっと



驚いたふうだったが、歓迎の様子を失ったりはしなかった。

「僕たちはここにこられたこと、とても嬉しいです」リーダーの青年が言った。「僕たちの英語、あまり上手でー」

「あー、カタいの抜きでいこう」とトム。「そいつで一曲弾いてくれよ」それは実に素晴らしい曲だった。曲が終わると、スー・アンは彼に一杯おごったほどである。

## 七月二十四日 土曜日

シェード・デッキの下で二回目の平和会議が行なわれた。今度はソビエトの連中がスピーチをする番だった。私は単に気分が乗らなかったのも、少し遅れていった。ビジョン夫人が開会の言葉を述べていた。「わが国のマスコミよりもはるかに有益な答えが、ソビエトの専門家の方々から得られることと思います」私が着いたとき、彼女はこう言っていた。私はふたたび抜け出しビールを一杯ひっかけた。いや、実は三杯。

会議に戻ると、おどけ者のギュホフがスピーチを終え、ソルジェニーツィンは単なる二流作家なのか、あるいはスパイでもあったのか、という質問に答えているところだった。彼は、尻の部分にサラダ・プレートぐらいの大きさのプラスチックのパッチが縫いつけられ、そこにTEXAS JEANとプリントされた、どうしようもないリーバイスの偽物を履いていた。「ソルジェニーツィンはソビエト連邦を暗くしか描きませんでした」と彼は答えた。左翼連中が盛大な拍手を送った。ギュホフは続ける。「批判は民主主義の問題点に結び付きがちです」

ふたたび、ビール・タイム。

反戦運動家たちの数人は、やっと何か変だと感じ始めたらしい。私がバーから戻ると、そのひとりがギュホフにこう言っていた、「このツアーに参加しているアメリカ人の多くはアメリカの対外政策が犯した過ちを認めています。ソビエトの人々は何故、ソビエトが犯した過ちを認めようとしらないのですか？」

「我々は、自国の対外政策を批判などいたしません」とギュホフは答えた。「なぜなら、我々はそれに百パーセント賛同し、それが正しいと認めているからです」質問者は、思わず息を飲んだ。だが左翼連中はみなこぞって手をたたき、かなりの反戦運動家たちもこれにならった。

これが、私と平和会議の関わりのすべてである。申し訳ないが、このレポーターは以後、すべてのの平和ナントカへの参加をとりやめたのだった。

## 船上の憂鬱

左翼連中と反戦運動家たちはほとんど一日じゅう語り合っていた。議論ではない。分析でもない。意見を交換しあっているのでもない。ただ、互いに同意するだけ。突然の意気投合熱にうかされ、気狂いじみた様子で打ち解けた談笑を交わし、調子をあわせたお喋りに興じる。レーガンについて、武装凍結について、イスラエルの悪について、戦争の危険性について、平和の必要性について、彼等は同意しあっていた。

私はついに、こいつらは気狂いだという結論に達した。

私は、キャビンで同室の男が妻に手紙を書くのを見ていた。それは、政治的オルグ文書だった。「我々アメリカ人は、レーガン政権を拒絶しなければならない……」三十年間連れ添った妻に対する手紙が、これである。

気違いじみている。それに、まぬけだ。

中西部からやって来た、ミリセント・フェンウィックみたいな顔付きの女が私に言った、「ねえ、もしもレーガンの支持者が今後もはびこるようなら、いずれ婦人参政権も取り上げられてしまうでしょうね」

ドン・ボルガ運河の水門を抜けようとしているとき、大脳皮質と口とが直結した女が、手摺にもたれている私にぴたりと寄り添い、ぺちゃくちゃまくしたてた。「素晴らしいじゃありません？」彼女は巨大なコンクリートの壁を見詰めて言った。「ソ連にはホントに素晴らしいエンジニアたちがいるんですわねえ」私は、その壁が実に印象的な作品であることを認めた。「素晴らしいわ、ほんとに、ほんとに、本当に素晴らしいわ」彼女は言って、横のほうを覗き込んだ。「それに、こんなにたくさんの水を、どこから持ってくるんでしょうねえ？」

ガイドは今にも爆発しそうだったし、ソビエト人の専門家たちは怒りっぽくなり、船の乗務員は明らかにうんざりしていて、割り当てられたグロッグのグラスに没頭する時間が毎日のように早くなっていった。

赤ら顔の、目に斑点のある、どことなくいかげわしい風情の船医は、アメリカ人の半数

が訴えている下痢症状に関する実験に熱中していた。マリヤは、船医が患者巡りをする時に通訳として付き添うという手の込んだ茶番を演じてみせた。ソビエト人たちは、どういうイタズラが行われたのか説明しようとはしなかったが、私は、下痢症状に悩む反戦運動家のひとりが船医を訪れ、下剤と二〇〇度の中性穀物酒を処方されたのを知っている。その後三六時間というもの、その人物を見かけることはなかった。

## 七月二十五日 日曜日

日曜日、私は酔いつぶれていた。

この夏、『ネーション』が企画するエキサイティングでお得なソビエト探訪の旅に参加したとき、ソビエト連邦の首都では何が起きていたか？

アメリカ人たちがソビエトで何をしているつもりなのかはわかる気もないが、ソビエト側がアメリカ人に何をさせているつもりなのかも、よくわからなかった。

ヴォルガ川平和クルーズが認められていることは明らかである。ソビエト連邦では、認められていない事柄は起こらないのだ。もっとも、認めはしたが、無関心でもあったようだ。ある町に停泊したとき、リポーターがやってきてニック・オベンチャラにインタビューをしていた。ニックが激しい口調でのアメリカ非難を終え、ソビエト連邦もアメリカ同様兵器獲得競争に乗り出していると指摘しはじめると、リポーターはびたりとメモを取るのをやめてしまった。我々にマスコミの目が向けられたのは、後にも先にもこの時だけである。

監視はされていたんだろう。会議の間じゅう、ソーニャは熱心にメモを取っていたが、彼女はもっぱらソビエトの同胞たちの発言に注意を払っているようだった。反戦運動家のなかには、キャビンが何者かに搜索されているようだと言い出す者もいた。ある女性は、バッグの中身がいやにきちんと整頓され、ファスナーが締められているのに気がついたという。また、「ピョートル大帝」の本がなくなっている、と訴える女性もいた。

「探すまでもありませんよ」憤慨している女性にむかってガイドが言った。「きっとスチュワーデスがベッド・メイクをしたときに、折り畳み式の寝台のむこうへ落としてしまったんでしょう。ベッドの陰を探すのは大変ですから、夕食の間にスチュワーデスに探しておいてもらいましょう」。こいつは怪しい感じがした。だが、夕食が済んでも本が奇

跡的に持ち主の手に戻ることはなく、ページの一部が破り取られていたりもしなかった。だから、この件はただのなくし物だったのだろう。

私や、アメリカびいきを公言してはばからないニュー・メキシコ州の連中はなんの被害も受けなかった。ある日私はニコライとソーニャに誘われ、素晴らしい、けれどまったく無意味な、ヴォルガ川をさかのぼる快速艇に乗った。ははあ、連中はついに私のキャビンを捜索するつもりだな、と私にはぴんときた。そこで私はイアン・フレミングの使い古しのトリックを真似て、ロッカーのドアに唾で髪の毛を貼りつけておいたのだが、戻ってきても、髪の毛は貼りついたままだった。

左翼連中は、仮になにかおかしいことが起きたとしても、決してそれを口に出そうとはしなかった。ただひとりだけ、子供の頃ソビエト連邦を出国し、空港での手続きで恥ずかしい思いをした例の女性が、モスクワにいる親戚を訪ねた。ツアーの帰りの税関で、彼女は徹底的に荷物を検査され、質問攻めにあい、お陰で飛行機の出発が遅れてしまった。ツアー・コンダクターは、彼女が両替した時のレシートを紛失してしまったからだ、と言いついていた。

役人の態度はともかくとして、一般のソビエト人の我々に対する態度は実にはっきりとしていた。ほろ酔い加減のソビエト人たちは我々を見ると決まってこう言うのだ、「俺は反ユダヤ民族じゃないけど、でも……」と。しかも、少なくとも名字から察するところ、我々のツアー・メンバーの多くはユダヤ人なのだ。

酔っ払って気が大きくなってきた船員が言った、「いいかい、ブレジネフの女房はユダヤ人なんだぜ。最高会議幹部会のメンバーのなかには、ユダヤ人を女房にしている連中がわんさといるんだ。おれたちがイスラエル人に対して強行な態度を取れないのは、そういうわけなんだよ」

だが、反戦運動家と左翼連中はこれにまったく気がついていないか、あるいは単なる反シオニズムとして見逃していた。彼等の唯一の関心の的はC I Aだった。連中は、この船にC I Aの蝶報部員が潜んでいると信じこんでいた。私は、例の太った男が蝶報部員に違いないと推理した。ほら、こっちを挑発しようとしたじゃないか。だが、連中は彼を人畜無害と判断した。何故なら、彼はニックに謝罪をしたから。左翼連中は、私に蝶報部員の疑いをかけている、と誰かが教えてくれた。私がコートとネクタイを着用しているからだそうだ。私はニコライに、一体誰が蝶報部員だと思うね、と聞いてみた。「全員だよ」と

彼は笑って答えた。

## 七月二十六日 月曜日

どうやらソビエト人たちは、このヴォルガ川平和クルーズの参加メンバーは皆、アメリカの政治に大した影響を及ぼすことのないゴミみたいな連中であると公的にも私的にも判断したらしい。

船がトグリアッティに停泊すると、左翼連中はソビエト連邦随一の近代的工場のひとつ、ラーダの自動車工場を見学したいと言い出した。連中は正真正銘の「労働者」と会見する、という計画に酔い知れていた。だが、そんな計画は予定外である。ガイドはしぶしぶといった態度で現地の旅行代理店に問い合わせたが、なにしろこちらの人数が多すぎるため手続きに手間取るし、これから旅程を組むにはかなり時間がかかり、それに、と結局は断った。左翼連中はひどく腹を立て、今度ばかりはソ連政府の肩を持つとはしなかったほどだ。

ところが、そうこうしている間にニコライがラーダの工場の上層部と何らかの方法で連絡を取り、この私を『カー・アンド・ドライバー』誌の編集者だ、と吹聴してしまった。私は本当はただのフリーの編集者にすぎないし、仮に編集長だったとしても、ソビエトからの自動車の輸入を阻んでいるFTC（連邦取引委員会）やDOT（運輸省）、それにレーガン政権上層部の決定事項に影響を与えるような力があるはずもない。だが、とにかく私は現場の代表となってしまった。かくしてその日の午後、船上で唯一、正真正銘の共和党员である私は、迎いのリムジンに乗せられてたったひとり、ラーダの工場へむかったのだ。

## その後の旅の全日程

二七日の火曜日で、少なくとも感覚を持った生物としての私の旅は終わる。予定では船上であと二日間、ソビエトで六日間を過ごすことになっていたが、私はもううんざりだった。

ソビエトは、ただただ疲れるだけの国である。この国には直角とか直線というものがまったくない。コンクリートは骨材が多すぎてぼろぼろに崩れているし、何もかもがその

コンクリート製なのだ。建築中なのに早速正面が崩れている建物をいくつか見かけた。そして、ちゃんと建っている建築物は、どれもソビエト人以外が建てたものなのだ。モスクワ空港は西ドイツ人が建てたものだし、グランド・ハイアットまがいはフランス人の作、またラーダの工場はイタリア人だし、この船だって、オーストリア製だ。

市街地の大気汚染のひどさは、身震いがするほどだ。機械は何ひとつまともに作動しない。ヴォルガ川上を航行する船は、港から港へ砂や電柱を運ぶ船ばかり。

ニュー・メキシコ州の連中が賭けをした。操縦席に人が乗っているクレーン車を最初に発見した者に、シャンパンのボトルを一本進呈しよう、というのだ。結局、この賞品を射止めた者はいなかった。建築現場の四分の三は、人気がなくがらんとしている。私はオルロンスキーに、労働者たちはどこにいるんだ、と尋ねた。すると彼は茶目つけたっぷりの表情で私を振り向いた。「たぶん、昼飯でも食いにいってるんだろう」朝の十時半でのことだ。

多少なりとも残っている古くて魅力的な建築物は、近代性に欠けるデザインゆえ、朽ち果て、放置されたまま取り壊しの時をひっそりと待っていた。ソビエトには人々の体臭とおぞましいバルカン煙草の臭い、タンク車で毎日散布される殺菌剤や、ヴァンダル族の墓を掘り返しでもしたか、またはネズミがはいりこんだ地下室みたいなカビ臭い悪臭がたちこめている。

最後には、何もかもが嫌でたまらなくなってくる。この国の重苦しい雰囲気、何から何まで最低のすべてが。

我々はレーニンの生誕地であるウリヤノフスクに入港した。うっかりしているとすぐ迷子になってしまいそうな町である。レーニン街からレーニン通りにはいる。まっすぐ行ってレーニン広場に突き当たったところでレーニン大通りの左手をレーニン公園のほうへ向かい、レーニン小道へ出る、といった具合だ。おっと、レーニンの妹の愛犬を記念した碑を見落とさないようご注意！

それに、この町では迷子になってもどうってことはない。なにしろ、何も無いんだから。昼前から、私たちはバーでしたたかに酔いつぶれた。ニュー・メキシコ州の連中と私は、チーズバーガーが無性に食べたくなり、ペダル・スチール・ギターの音色が恋しくてたまらなくなり、バドワイザーを半ダースとキャデラックのクーペ・ド・ビルで州間高速を時速二百キロでとばすためなら殺人をも厭わない、という気分になっていた。だが、こ

こでは何もすることがないのだ、ただひたすら飲む以外には。だから私たちは酒を飲み、ジョークを飛ばした。古いジョーク、質の悪いジョーク、いかがわしいジョークを。

私たちはいま、急進派のディナーを邪魔していた。左翼連中と反戦運動家たちは激怒していた。だが、我々に近づく勇気を持ち合わせていたのはピジョン夫人だけだった。あなたたち、何がそんなにおかしいんですの？

「セックスよ」とスー・アンが言った。

「あら、セックスのどこがおかしいの？」とピジョン夫人。

「ねえハニー、思い出せないの……」そして、ピジョン夫人は退散した。我々は歌いはじめた。曲は「銀の糸と金の針」と「ダニー・ボーイ」。そして、

母さんは船乗りにコンドームを売り  
 父さんはピンでそれに穴を開け  
 姉さんはできた赤ん坊の墮胎医  
 いやあ、もうかってたまりません

急進派はソビエト人たちに我々の歌を止められなかった。それどころか、ソビエト人たちは扇状船尾から戻ってきて、負けじと足を踏み鳴らし、グラスを打ち鳴らしてロシアの歌を大声で歌いはじめた。やがて反戦運動家たちがぼつりぼつりと集まってきて、彼等も一緒に歌いはじめた。彼等は「美しき国アメリカ」「アメリカ万歳」、そして「アメリカ国家」に至るあらゆる歌を、見事な不協和音で歌った。我々は踊り、船のバンドはジルバを演奏しようとした。ソビエト人たちは乾杯し、我々も次のように叫んで乾杯した。

アメリカの鷺に乾杯、  
 高く、高く飛べ。大声で叫べ。  
 鷺と遊びたきゃ、飛べるようにおなり！

するとソビエト人たちも、

母なるロシアに乾杯  
 剣を持ち、この地へ来たる者は  
 剣によって死ぬ！



そして誰かが叫んだ。「畜生の群れから、畜生の群れへ乾杯」そして私たちは手あたりしだい、ドクターの中性穀物酒であろうと何であろうと片っ端から飲み干し、歌い、踊り、また酒を飲み、やがて平和と米ソ関係の勝利のうちにテーブルの上で正体をなくしてしまった。

その後は何事もなく無事に過ぎた。ただ、ホワイト・クレムリンがひどい二日酔いのせいで灰色と緑の縞模様に見え、カザンで激しい頭痛に襲われたことを除いては。そして楽隊は上陸した私たちのために、今の私の心境に最もふさわしい曲「戦える共和国の賛美歌」を演奏してくれた。やがて我々は悪天候のなかをモスクワへ飛び、例のグランド・ハイヤット・ホテルへ戻った。

ラウンジではソビエトのディスコ・バンドが、ドナ・サマー風のビートに乗せたバラライカの曲をエレキギターで演奏していた。ニュー・メキシコの連中はレニングラードへ向かい、ひとり取り残された私はバーに腰をおろし、一日半の旅路の果てにある我が家へむかう飛行機を待っていた。隣に、イギリス人旅行客が座った。「こちらには長くご滞在で？」と彼は聞いた。「ソビエトじゅうを御覧になりましたか？」

「おれはクソいまいましい月の裏側まで観てきちまったぞ！」と私は答えた。「スコッチくれ」とバーテンダーに告げた。バーテンはウォッカをよこしやがった。



## 第8章

# 暴力と銃と金

一九八六年、フィリピン大統領選挙の前日にマニラのバーテンダーから聞いた話。マルコス大統領とベール将軍が地獄に送られた。ベール将軍は煮えたぎったタールの海に首までつけられた。マルコス大統領は、膝まで。するとベール将軍はこう言った、「わたしは二十年このかた、あんたの右腕としているんな恐ろしいことに手を染めてきたが、あんたの悪事に比べたら、物の数じゃない。なのに、なんであんたは膝までしかつかからないんだ？」 マルコス大統領はこう答えた、「わしはイメルダの肩に立ってるんだよ」

また、タクシーの運転手からはこんな話を聞いた。イメルダと子供たち、イレーヌ、イメー、ボンボン(これは冗談でなく正真正銘、二七才のマルコスの息子フェルディナンド・ジュニアの名前である)の三人が専用ジェットでフィリピン上空を飛んでいた。イレーヌが言った、「ママ、フィリピンの民衆は本当に私たちを憎んでるのね。なんとかできないのかしら？」

「いいことを考えついた」とボンボン。「飛行機から、1万個の包みをばらまくんだ。五十ペソの現金を入れて。その金で連中は米や魚を買えるから、僕たちを愛するようになるよ」

「もっといい考えがあるわ」とイメー。「包みは五千個だけにするの。その代わりに、百ペソずつ入れておくのよ。人々は鳥肉や豚肉も買えて、私たちをもっと愛するようになるわ」

「それよりも」とイメルダが言う。「包みはひとつだけにするの。人々は永遠に私たちを愛するようになるわ」

「包みの中には何を入れるの、ママ？」と子供たちが言った。

「あなたたちのお父様よ」

マニラ最大のスラム街、トンドで、私はトレイの前にマルコス大統領の写真をぶらさげているタバコ売りの少年をみかけた。タガログ語のこの地方の方言を話せる私の連れが、少年に尋ねた。「どうしてマルコスの写真をぶら下げているんだい？」

少年は親指の爪を大統領の顔にさっと走らせ、こう言った、「こいつの顔をひっかくいて消すと気分いいからね」

赤線地区ピラル街のバーで、仲間のジャーナリスト連中と私は商売女たちに囲まれていた。選挙の前夜はフィリピン人たちは飲酒を禁じられており、店は開店休業状態だった。小さな白いビキニをつけ、なめらかなピーナツ・バター色の肌をした女たちは、小猫みたいにすり寄ってくる。ひとりが彼女たちに五ドルのオレンジ・ジュースを振る舞った。それを必要経費で落とそうと思った私は、一応取材の形式を整えるため「君たちは誰に投票するつもり？」と尋ねた。女たちは、親指を横に、人差し指を上にあげてLの字を作って見せた。コラソン・アキノ支援の連合団体、UNIDO/PDP-LABANのサインだ。

ミス・ハワイみたいな下脹れの顔と、百メートル先からでも姦淫の罪を引き起こしそうなプロポーションの、ジョリーというお気に入りの娘が、私の鼻面を茶目つけたつぷりに小突いた。「ラバン！」と彼女は言った。タガログ語で「闘争」の意味である。「あたしはコーリーに入れる」

他の女たちが一斉にくすくすと笑った。「この子ったら、まだ選挙権もないくせに」なかのひとりが言った。

「あたしたちみんな、コーリーに入れる」と、もうひとり。「ママサンたちだってそうよ」ママサンたちとは、この手のショバでマダムとバニーのママさんの総称だ。女の子たちを雇い、客が酒を飲むように見張り、客が娘を連れ出すと、「バー料金」なるものを取る。

ママサンの一人に聞いてみると、彼女も同意する。「ここにいるみんな、コーリー派ね。マルコス派は地主だけよ」

そして、それすら怪しいものだ。私はピラル街でこの種のショバを営んでいる地主、オーストラリア人のちんぴらを訪ねた。四十そこそこで髪はブロンド、がっしりとした体つきにずるがしこそうな青い瞳、そして、派手な訛り。酒場のケンカでそいつが椅子を振り回していたら私が取るはずの間に匹敵するほど。彼は窓のない二階の部屋にオフィスを

構えていた。デスクの上には、数えきれないほどのペソの札束が、輪ゴムで束ねて無造作に転がっている。

「観光客相手の商売はあがったりだね」とオーストラリア野郎は言った。「それに、あんなたちレポーター連中が選挙、選挙と騒ぎ立てるから、ひどくなる一方だ。けどピン公どもも、そろそろ何とかしてやんなきゃあ。我慢にも限度ってもんがあるしな。そうでもない、こいつら新人民軍なんかとツルんで山に立てこもって、血なまぐさいことになっちゃう」

チンピラ、売春婦、タクシー・ドライバー、町にたむろするアラブ人、バーテン。こいつらは、根っからの保守派である。連中の支持を失ったら、政権の基盤はガタガタだ。即刻、ルイ・ヴィトンの独裁者専用バッグに荷物を詰め、アメリカ空軍がどこか素晴らしいところへ護送してくれるよう祈るがいい。

フィリピンで「選挙戦」が行なわれた、と思うのは大まちがいだ。あれは、国のゲロ吐きだ。正気か良心の呵責を持ちあわせた人間 VS 墮落した人間、怯えた人間、白痴並みの忠誠人間の戦いである。

大犯罪ボスの例に洩れず、マルコスには忠誠心を操る術を心得ている。彼はふたつの伝統的政党を吸収し、それらをイデオロギーの全くない自らの新社会政党、K B Lに組み入れてしまった。一九七二年、政権を手放さないために戒厳令を敷き、憲法を改正して、政令ですべてを支配できるようにして、いつまでも再選され続けられるようにした。政敵は、殺し屋を差し向けたり、投獄し、残りは亡命を余儀なくさせた。やがて砂糖の製造やコブラの加工処理から穀物の輸入に至るあらゆる事業の独占化を許し、莫大な国費を墮落し、腐敗た法人に注ぎ込んで、フィリピン経済を破綻させた。

ニューズウィーク誌によると、アメリカとフィリピンの経済専門家はマルコス一味が国外に運びだした金の総額を二百億ドルと見積もっている。ミケーレ・デュバリエの毛皮コレクションなんかメじゃない。二百億ドルといえは、フィリピンの国民総生産の半分以上。この群島を第二の香港にできるだけの金額だ。ちなみに、一九四六年の独立以来、アメリカがフィリピンに与えた援助は四十億ドルにも満たない。

第三世界で仕事をしている記者たちは、よく「そう単純にはいかないんだ」という。「イスラエルとPLOの問題は、そう単純にはいかないんだ」あるいは、「コントラとサンディニスタは、そう単純にはいかないんだ」と。だが、ことフィリピンに関しては、問題は実

に単純だ。この上なく単純だ。フェルディナンド・マルコスが生きた汚物、老いぼれ、腐りきった、トラックのバンパーに耳を打ち付けられ、マニラの市街を引きずり回されて当然の、卑怯で嘘つきの汚泥の塊である。

## 暴力と銃と金

フィリピンの選挙は伝統的に「暴力と銃と金」の産物と言われているが、今回はそんな生易しいものではない。国民の誰もがこの選挙がいんちきであることを知っている。だが、ああ、何という恥知らずだろう。選挙で不正が行なわれたことは、今シーズンのサタデーナイト・ライブの茶番を見るよりも明らかなのだ。

マルコスは、フィリピンのテレビを完全に手中におさめていた。マニラの4チャンネルでは、ロニー・ナサニアルとかいう、始終愛想笑いを浮かべている気味の悪い男（ルックスといい物腰といい、まさに地獄から蘇ったドン・ホーといった感じ）がアンカーマンをつとめている。現地では、TVロニー・シップシップ・チュータと呼ばれている男だ。チュータはタガログ語で「犬っころ」とか「愛玩犬」のことで、シップシップとは「尻にキスする」よりもっと下品な行為をさす。TVロニーのニュース番組では、次のように報じていた、「皆さんこんばんわ。誰にも親しまれる4チャンネルのニュースに今宵もおつきあいください。今夜も私たちは、公明正大かつ平和のうちにこなされるフィリピンの大統領選について公平な報道を続けます。信頼のおける各方面のコメンテーターの皆さんによれば、国民の親愛を一身に集めるフェルディナンド・E・マルコス現大統領が圧倒的な優位に立っているようです」

これは決して私のでっちあげではない。4チャンネルのニュースに少しでも耳を傾けていたら、あなたはきっと自分の耳を殴りつけ、頭に響きつづけるデタラメのうなりを追い出したくなること請け合いだ。

4チャンネルは、政府の選挙管理委員会であるCOMELCの録画を流した。役人たちが空っぽの投票箱を（「さあ、帽子のなかには何もありませんよ！」とばかりに）カメラにむかって高々と示してみせ、それぞれの箱にかけられる鍵や封印を示し、それが軍に厳重に守られて各地の投票場へ運ぶ方法を実演している。どうやらこの選挙は、高校の手品クラブが仕切っているらしい。

選挙当日、フィリピン全国に散らばった七百人から千人の外国人報道陣が見守るなか、選挙登録者リストが破られ、投票箱が盗まれ、反マルコス派の立ち会い人は投票場への立入りを禁止され、掛け持ち投票者を山のように乗せた軍のトラックが、投票場から投票場へと移動していった。マルコスは、サーカスの動物たちに投票させること以外、あらゆる手を使ったのだ。

投票場が閉まる三十分ほど前、私はドライバーに頼んで彼が投票する選挙区へ連れていってもらった。それは、ベイ・パームスと呼ばれる気持ちの良い中流クラスの地域だった。投票場はきちんと整備が行き届いており、投票者はきれいに並び、投票箱はつい立てで仕切られていた。静かなる闘志を燃やすアキノ支持者たちは法律に定められた通り、投票場から一定の距離をおいた場所に集結していた。

そして、その真ん中に完全武装の軍隊が陣取り、トラック上から大佐がメガホンで甲高い叫び声をあげていた。NAMFREEL、「自由選挙のための国民運動」のボランティアたちは、泣き出しそうだった。

「一体どうしたんです？」と私は尋ねた。

「時間通りに投票場を閉めようと、軍隊が陣取っているのよ」と貫禄のある女性が答えた。「三時前に投票の列に並べば、投票できることになっているのに」

「どういうこと？」

「ベイ・パームスは反マルコス地区なのよ」と彼女は説明した。「それにほんの二キロ先の、隣のガダルーブ地区では、あたしたちのボランティアが助けを求めているわ。そこでは暴力行為が行なわれ、投票箱が盗まれているの。軍にガダルーブでの暴挙をなんとか止めてほしい頼んだのに、彼等はここで、投票場を時間通りに閉めるのを確認してるだけなのよ」

私のドライバーが戻ってきた。「投票できないんですよ」と彼は言った。「連中が時間きっかりに投票場を閉めるから」

私はホテルに戻り、酒を飲んだ。しばらくすると、オーストラリアのテレビ局員がどつとバーになだれこんできた。目を一様にパイ皿のように大きく見開いている。「ガダルーブでは」と一人が叫んだ。「暴行に脅しに、投票箱の盗難！」

「おまけに、連中は我々に発砲し」と、別の一人が叫んだ。「銃をつきつけてカメラを撃った揚げ句、テープを奪いやがった！」

間抜けなオーストラリア人らしく、連中は警察に通報した。間もなく、見るからにいかげん感の犯罪捜査課の係員がやってきて、オーストラリア人の勘定で酒を飲み、一万ペソも出せばビデオテープはあんたがたの手に戻るだろう、とほのめかした。但し、テープが返されるのは選挙が終わってからだ、との条件つきだった。

私は、鞆のなかにドラッグが残っていればいいが、と思いつつ部屋にもどった。TVロニーが、メトロ・マニラ警察本署からレポートしていた。「ええ」と署長が言っている。「メトロ・マニラ地区では、選挙に関するトラブルの報告は一件も受けておりません」

## サルベージ・ヒット

「暴力に彩られた選挙」というと、聞こえはなかなかいい。ティーンエイジャーがスプレー・ペイントを片手にポスターに落書きする、といったイメージが浮かぶ。写真家のトニー・スーと私はこのような破壊活動あるいはその傷跡を求めて、マニラから約一三〇キロ北に位置するターラック州、モンカダの町へ取材に向かった。

フィリピンでは、政治的殺人は「救済」と呼ばれる。犠牲者は「共産主義から救済された」というわけ。これは、アメリカ合衆国、いやマニラですら新聞のトップを飾るような大殺人事件ではなかった。反体制派の新聞がせいぜい一節を費やして報じる程度で、それも、被害者の名前が間違っていた。犠牲者の名はアルセニオ・ケイングレット、バンケロ・スールと呼ばれる田舎のバランガイの小作人だった。

アルセニオはそのバランガイでUNIDOという反体制党の地区キャプテンをつとめていた。私たちは舗装道路をはずれ、かなり行ったところでやっと彼の家を捜し当てた。竹とココヤシに囲まれた水田が何キロも続くその風景は、ベトナムに徴兵された友人たちが戦地から持ち帰ったスナップ写真によく似ていた。バンケロ・スールの公会堂兼医療センターとなっている小屋に辿り着くと、そこにはCHDF（市民家庭防衛軍）の隊員がふたりいた。この組織は反ゲリラの自主防衛軍と称していたが、もっぱらKBLの地方弾圧軍として利用されているようだ。このふたりの隊員は、誰かにM16ライフルをもらった呑んだくれみたいな顔付きだった。無愛想だったが、トニーのカメラ器材に怯えたらしい。ちょうどその頃、外国人ジャーナリストに博識と権威が認められつつあった。それに、青い目をした連中はバンケロ・スールをめったに訪れない。彼等はアルセニオの家までの道



順を教えてくれた。

裏庭に陰気な顔付きの人々が何十人も集まっていた。十メートル先で、三人の制服警官が、首の太い私服を取り囲んでいる「私の名前は記事に出さないでください」と、犯罪調査課のラモス事務官が言った。彼は太い金の指輪と金のローレックスを身につけ、捜査の進行については固く口を閉ざしていた。「リヤマス市長が調査中です」と彼は、裏庭に集まった人々と話をし、ひっきりなしに煙草を喫っている六十がらみの痩せた男を指差した。私が振り返ったすきに、ラモス事務官と警官たちはさっと姿を消してしまった。

ロドルフォ・D・リヤマスは正確に言うと前市長、しかもモンカダではなく、ここから少し行ったところにあるパニキという隣町の前市長だった。この地区のUNIDOのまとめ役をつとめているので、ここに出てきたわけだ。

昨日の明け方、アルセニオ・ケイングレットがお気に入りの闘鶏用の鶏を抱えて自宅前に座っていた。そこへ、私服姿の男がきた。村人たちの証言によると、「大きな帽子を被り、だぶだぶの上着を着ていた」そうだ。男は45口径のオートマチック銃でアルセニオにむかって五回発砲した。アルセニオは「バキット？」－「なぜだ？」と言うとその場に倒れた。即死だった。四三才で、十八才から一才まで、九人の子供がいた。

「数日前、アルセニオは私を探していた」とリヤマス。「だが、私は選挙の仕事でマニラに行っていて留守だった。彼の危険を事前に察知していたら、安全な場所に匿えたのに」リヤマスは、自分の家族にも金を渡して町を離れるように指示したという。「私は裏道から帰るようにしてます」

ケイングレットの家は竹に釘を打ったり縛ったりして建てたもので、高床式だった。急な竹の階段を恐る恐る上がってゆくと、部屋がふたつ。我々の体重で床がしなる。棺はとりあえず、この部屋に安置されていた。決してうまくはないが丹念な彫刻と聖骨箱のような金箔をほどこされ、蓋の上半分がガラス張りの棺だった。小柄な老婦人が棺を抱きしめ、号泣しながらガラスに額を押しあてていた。アルセニオの母親だ。遺体はメキシコ系のいかつい顔立ちをしていた。黒い髪はオールバックで、死顔には、アメリカの葬儀屋にはとてもできないようなしかめっツラになっている。

「KBLは彼を抱き込もうとしていたんです」とリヤマス。「寝返るように、と。だが、彼は従わなかった」

日光が壁や床を通して小さな家のなかに差し込む。祭壇の横のテーブル上に、甲い客の

ための簡素な食事が用意されていた。アルセニオの未亡人が、夫の遺体から摘出された四五口径の弾丸を掌にのせて見せてくれた。その顔には、われわれの文化にはたぶん存在しない、憎悪の微笑とでも言うべき表情が浮かんでいた。

コーリー・アキノはバランガイですら敗北を喫した。得票数はアキノ九九票、マルコス二〇六票。私はアルセニオの家族、高卒で通訳をしている長女に尋ねてみた。この選挙の結果は、村の人々の政治的意見を反映したものだろうか、と。みんなはふん、と一斉に鼻を鳴らした。弔問客は一樣に驚きの表情を浮かべていた。なかには、笑い出したものもある。それから、みんな沈黙。

「話したくないです」と娘が答えた。「恐がってます」

家の外へ出ると、リヤマスが舗装道路へ出るまで一緒にいてくれないか、と遠回しにほのめかした。彼は外出するときには四人のボディガードをつけていた。

## 修道院で四百年、売春宿での十年

一五二一年から一八九八年までフィリピンはスペイン統治下にあり、一八九八年から一九四六年までアメリカの統治下にあった。専門家は、この歴史を要約して「修道院で四百年、売春宿で五十年」と呼ぶ。今日のマニラは、これらの時代を生き抜いた「老水夫」を彷彿とさせる。街路は崩れ、薄汚れていて、至る所に電線や電話線が鬱陶しく張り巡らされている。第三世界で必ず見られる光景のひとつに、煤煙で灰色に煤けたコンクリートのビルがあるが、ここも例外ではない。街灯は、思い出したように時折りぼつりぼつりと灯されているだけ。通りの清掃についても同じで、実に気紛れだ。通りには大きな穴がボコボコあいている。火事などは日常茶飯事らしい。だが消防車はなかなか来てくれない。町中には無数のビルの焼け跡。町を歩けば、かつては魅力的だったはずのマニラの建物をよく見かける。二階から上が通りに突き出した、格子窓のトタン屋根の家々。今ではそういう家は荒れ放題だ。日本軍の占領以来、一度も塗りかえていないようだ。マニラの第一印象は敗戦国の町、いまだに敵意に満ちた勢力に占拠され、搾取されている町、といった感じだ。これはあながち見当違いではない。過去十年、メトロ・マニラ地区の知事はイメルダ・マルコスだったのだから。彼女の仕事ぶりは、マニラの荒廃した猥雑さのなかから、あちこちで場違いにそびえる、ひどいモダニズム建築に見ることができる。たとえば、マ



ニラ湾の景観をそこなう埋め立て地に建つ複合文化センター。そのなかにマニラ映画センターというビルがあるが、これはイメルダが一九八二年の国際映画祭に間に合うよう完成を急がせたものである。噂では、打設を急ぎすぎたコンクリートの屋根が崩れ、四十人以上の労働者が生コンに生き埋めにされそうだった。生き埋め労働者たちの救助は行われなかった。そうしないと、竣工が間に合わなかったから。ビルは、遺体の上に建てられた。たぶん、イメルダは後で悪魔払いをして、ビルの邪悪な幽霊を追い払ったのだろう。

選挙期間中、ジャーナリストたちの取材はまず金まみれのマルコス派がたむろするマニラ郊外のフォーブス・パークで行なわれ、そしてひとつ走りダウンタウンのスラム街へと向かうのが普通だった。さしずめ「マニラ、その光と影」といったところだ。トニー・スーがフォーブス・パークでのポロの試合を撮影していると、選手のひとりが回の合間にやってきてこう言った。「次はトンドへ行くんだらうが？」

私は、一人でかなり怖い場所を訪れた。暴力団の連中や、両腕、両足、背中、その他私には見えないが体のあちこちに派手な入れ墨をした十代の少年などが大勢いる場所。暴力団の名前は、シグシグ・スプートニクとか、バハラ・ナ・ギャングとか。(シグシグとは「いけいけ」、バハラ・ナは「知ったことか」という意味)連中の胸には切り傷がある。人を殺すたび、儀式として胸に切り傷をつけるのだ。おのおのの縄張りは通行止めで、棍棒を持った少年ひとり以上が番をしている。

実のところ、そこはかなりきれいなところだった。鮮やかな色彩の美しい宗教壁画が描かれている。養魚池が掘られ、住民のために菜園が作られていた。

だが、これはマニラ市刑務所なのだ。そこは、面会に訪れた友人や家族で一日じゅう賑わい、のびのびとしている。鉄格子はなく、細長い小屋があって、囚人たちは低い木製の台で眠る。自分専用の小さな小屋を建ててもいい。

低所得者用のまともな家が、刑務所の中にしかないような国を、どう説明したらいいものやら。

陽気で腹の突き出た刑務所長は、アディダスのスウェット・パンツを履きながら、オフィスで私を迎えてくれた。彼は私が出会った唯一の熱心なマルコス支持者だった。「こんな民主的な議論が行なわれるなんて、実に開放的で自由な社会でしょうが」と、彼は選挙について述べた。私は、彼の刑務所をほめてやった。彼はスプライトをおごってくれた。

本物のスラムは話が別だ。トンドのスラムのひどい地区は、他のどこにも劣らずひどい

ところだ。旧くて汚らしい家々に貧民がひしめき、下水とゴミの臭いがたちこめている。だが、もっとひどい場所がある。浮浪者たちがボール紙の下、トラックのなか、新聞紙の陰など、さまざまな場所で暮らす、不法占拠地区。もしもペットのハムスターの籠がこんな状態になっているのをパパに見つかったら、ヘアブラシでぶん殴られて地下室へ閉じこめられるだろう。

今の世界は驚くほど貧しいところだし、恐らくはずっと以前から貧しかったのだろう。これに関しては、私にも責任の一端はある。だが、フィリピン人は英語が喋れ、識字率八九パーセント。土地と資源に恵まれ、教育を受けた中流階級もある。アメリカ市場へのアクセスは最高で、しかも世界で唯一経済成長を遂げている地域である環太平洋地域のド真ん中にある。この国はかつて、アジアで最も高い生活水準を誇る国のひとつだった。こんな貧困をどうやって正当化できるもんか。

そしてこの程度で気分が悪くなるんなら、スモーキー・マウンテンへ行ってみるといい。

そこはマニラ最大のゴミ捨て場、高さ十五メートルのくすぶる広大なゴミの山だ。その中に人が住んでいる。年寄り、妊婦、赤ん坊など。汚物と排泄物の上に、差し掛け屋根や雨露をしのぐためのガラクタなどの汚らしいあばら家が建ち並び、一つの村が形成されている。このぞっとする家々は密集していて、通行もままならない。道幅が三〇センチもないところさえあって、私は足首まで汚物につっこんでしまった。

人々はこの汚物の山から拾ったくず肉を食べ、この山を流れる水を飲み、洗濯する。傷の膿んだ子供たち、目を潰瘍にやられた老人、片端たちがゴミに埋もれている。ハゲワシよりもひどい生活で、古いプラスチックの破片をかき集めて売っている。ゴミの山でとれる価値のあるものなんて、それぐらいしかないのだ。ましなゴミさえ、この人たちの手には入らない。

スモーキー・マウンテンでは、吐き気や嫌悪は感じない。ただ、冷たい戦慄を覚えるだけである。目を上げると、ゴミの山から有機物のカケラが大きなつむじ風で舞い上がっていた。栄養失調のドロシーをゴミの世界のオズの魔法使いのところへ連れ去れるのは、このつむじ風だろう。

私はホテルへ戻り、バス・ウィージェンの運動靴を履いた。イメルダは、ゴム底の靴を履いた者は決して大統領官邸に入れなかったそうだ。評判だと、彼女はコーヒー缶に閉じ込められたネズミ並に狂っているそうだ。宮殿の庭園の彫像を見ればそれも納得できる。

彫像の彼女は、まるでメキシコの水盤工場に乱入したみたいな顔付きだ。

マラカニアン宮殿のまわりでは、どうもこの人間は、クスリの量は足りないけどラリってるんじゃないか、という気がしてくる。門では、履物とポケット・テープレコーダーについては厳しいチェックが行なわれた。私はトニー・スーの写真が貼ってある借りもののプレス用IDカードを首からぶらさげていた。トニーと私はまるっきり似ていない。が、ガードマンはまるで気に留めなかった。

レセプション・ホールの内装は、ラスベガスのインテリア・デザイナーが銃で脅されて、その下品な趣味をさらに下品にした感じ。だって、天井なんかに寄せ木細工を使ってるんだもん。ブラシ天の赤いカーテン、ブラシ天の赤い絨毯、そして金の葉っぱがついた偽の竹の椅子にブラシ天の赤いカバー。シャンデリアはパレードの台車並みの大きさと、すべて手彫りの木製、しかもその細工がえらくお粗末。さらに、エアコンが止まった。

その日は選挙の翌日で、マルコス大統領が記者会見を開くのだ。大統領に直接会っても、何の感動もなかった。むくんだ顔がどす黒い。どことなくニクソンめいているけれど、もう少し神経が太い感じ。どことなく毛沢東にも似ているけれど、もう少し生気がある。マルコスは、自分がどれほどの差をつけて勝つかの予想を発表した。KBLが圧倒的多数を占める議会が得票数を操作した結果、その予想は的中した。彼はしゃあしゃあと嘘をつき、マスコミのでっちあげを非難し、相手側の脅迫やインチキを非難した。記者団のひとりが、彼の側の脅迫やインチキについて尋ねた。マルコス曰く、「それならば反対派の連中は、何故それを当局に訴えなかったのか？（当局とはすなわち、彼自身だ）

アキノ支持派のマニラ・タイムズのリポーターが質問をした。「選挙の結果に関して意見が分かれた場合はどうなるのですか？」

「あんたは、どうなると思うね？」とマルコスは問い返した。一瞬、彼は脅しをかけているのではなく、自分でも本当にわからないのではないか、という気がした。

私はいつの間にか偽の竹製の椅子で居眠りをしてしまい、はっと気がつくと会見は終わりに近づいていた。マルコスがこう言っていた。「修道女が投票箱に触れるところを見たら、それはまぎれもない違法行為であります」

悪夢みたいな国だ。そして、ホラー映画の監督なら誰でも知っていることだが、真の悪夢には優しさや親しさが不可欠なのだ。食糧品室でヘビをむさぼり食うのは、ママと相場が決まっているのである。

フィリピンでは、その優しさや親しさの役割を果たしているのはフィリピン人だ。陽気で、気さくで、礼儀正しさを決して崩さない、素晴らしい人々である。警官やマルコス派の暴漢たちですら、誰かにテロを加えていない時はこの上なく親切だ。刑務所では、暴力団の連中がにっこりと笑いかけてくれる。スモーキー・マウンテンへ行けば、死んだような微笑がむけられる。タクシーのドライバーに料金をたずねれば、こう返事がかえってくる。「イカウ・アング・バハーラ」。「おまかせします」ということ。最低の赤線地帯だって、まるでロータリークラブの昼食みたいな雰囲気だ。

アメリカ大使館の前で、反帝国主義のデモが行なわれた。抗議者のひとりがABCテレビの「ナイトライン」のプロデューサー、ベツィ・ウェストのところへきて、こう言った。「五分待ってください。これからアメリカの国旗を焼き払いますので」

## ホワイト・モンキーズ

単なる笑い話だが、アメリカ議会から監視団が来ていた。

議長をつとめるインディアナ州の上院議員、リチャード・ルガーは、しょっぱなで大ボカをやってそれにドブプリ漬かる羽目になった。レポーターたちは彼を、そのぎくしゃくとした物腰と紋切り型の口調からステップフォード上院議員と呼んでいた。選挙当日の朝、数時間にわたるひどい投票風景を見た後、ルガーはマニラのチャンネル4に、万事順調に運んでいるようだ、と語り、「問題は些細で、純粹に技術上のものに限られている」と言った。チャンネル4はその日一日、このテープを何度も繰り返し流しつづけた。翌日の早朝、ルガーは激怒してトム・プロカウにこう語った。「非常にあやしげな選挙だ」と。だが、この発言は現地のマスコミには取り上げられなかった。

ペンシルバニア州代表のジョン・ムーサは、個人的にはまだまじだった。私は、マニラ郊外にある労働者階級の町、パサイのシティ・ホールで行なわれた開票の間、この男が不平を言っているのを耳にした。彼は何とか政治家らしい御託を言おうとして「民主政治に対するフィリピン国民の情熱的献身」とかなんとかしきりに繰り返すものだから、レポーター連中はそれを略して「民政フィ情献」と言うようになっていた。だが、彼は怒りに我を忘れた。「何が起こってるか、見りゃわかるだろう！」と、彼は顔を真っ赤にして言った。「国民の意志だって、見りゃわかるだろうに！」そして彼は、マスコミの連中は自分の

後についてまわるのをやめて、できる限りあちこちの投票場に出向くべきだ、と言った。「頼みの綱は、あんたたちだけなんだ！」(生まれてこの方、政治家からこんな風に言われたのは初めてだった。政治家に限らず、誰からも。)

ポトマックの九官鳥どもは、一人残らずまったくの期待外れだった。マサチューセッツ州の上院議員、ジョン・ケリーはベトナム退役軍人反戦会の創設会員だが、この場面ではまったく無力だった。

選挙の二日後の日曜の夜、COMELCのコンピューター・オペレーター三十人が、開票結果が操作されているのに抗議して職場を放棄した。アキノ支持者とNAMFRELのボランティアたちが、若い女性オペレーターたちを教会へ連れてゆき、周辺に数百人のバリケードを築いて守りの態勢を固めた。

この情報を密かに入手したビレッジ・ボイスの記者ジョー・コナソンと私が早速教会に駆けつけると、コーリー・アキノの側近ベア・ゾーベルが困惑しきっていた。「女性たちは怯えています。恐ろしくて家へ帰れない、と。私たちにも、どうしたらいいかわかりません」。ジョーと私は、マニラのホテルへ行って、アメリカ議会の監視チームの連中を連れてくるように言った。彼女はケリーを連れて戻ってきたが、彼は何もしなかった。

ケリーは後で、COMELCの被雇用者たちと話をしなかったのは、そうする機会を与えられなかったからだ、と言った。何を言ってやがる。彼はマスコミの連中や群衆をシャットアウトし、コンピューター・オペレーターたちがすわっているところへと案内してもらっていたのだ。もし彼女たちと話がしたければ、単に声を出せば済んだことだ。何故彼がそうしなかったのかは知らない。でも、血が通ったアメリカ政府代表がどうすべきだったかは私にさえわかる。彼はこう叫ぶべきだった。「身の危険を感じているなら、アメリカ大使館へ連れていってあげよう、邪魔するやつはクソくらえ！」と。ところがケリーは、男性モデルみたいに深刻そうな顔でポーズを取り、ウロウロするだけ。

議会の監視チーム帰国に際し、ルガーはまるで中身のない声明を読み上げたが、それは例の「民政フィ情献」式のお題目を並べたただけのわけのわからない代物で、ホンコンのテレビ局の特派員がたまりかねて「わたしたちは英語が母語でないもので、何がおっしゃりたいのか説明していただけますか」と頼んだほどだった。アメリカでは偉そうな口を大口を叩いてみせるくせに、肝心なときにはデルファイ神殿のお告げみたいな意味不明の発言しかしない。

今やあいつらは、危うい外交政策上の危機を巧みに処理したと称して、たがいに超党派的なヨイショごっこをしている。だが、マルコスがホントにいいヤツなのかという問題について、レーガン大統領が三週間の間にくるくると態度を変えたのを、フィリピン人はしっかりと見届けている。政府は、フェルディナンドとイメルダがグアムでまさに下着の荷ほどきを始めて、やっと「ゴロツキどもの追い出し」にかかった。もしも我々が天使たちを支持して、その姿勢を崩さなかったなら、我々はフィリピンで真実の愛を得ることができたのは言うまでもない。だが私は、フィリピン人の友人たちに、事態がもっと悪くなり得たことを急いで指摘してやった。我々はグエン・バン・チューにしたのと同様、マルコスにもB52重爆撃機を貸してやっていたかもしれないのだ。

## さあ開票を

選挙の翌朝一番、トニー・スーと私はマニラを中心業務地区マカティのシティ・ホールへ開票を見に行った。マルコスが選挙前、選挙中、そして選挙後を問わず徹底したインチキをする必要があったことは、閉場の前から明らかだった。コーリー・アキノは怒りの詰まったぬるい半ダースの缶ビールを振り、缶の蓋をはじき飛ばしたわけだ。

牛乳ケースぐらいのアルミ製投票箱が、マカティの投票場からシティ・ホール裏の倉庫に運びこまれた。数千人におよぶアキノ支持者たちが、ふたつの建物を取り囲んでいた。NAMFREELのボランティアたちが互いに腕を組み、倉庫から広場、シティ・ホールの地下、さらに三階のぼって、さらに廊下を抜け、集会室までの間に通路を作りあげた。投票箱はすべて、この二列にはさまれて運ばれ、さらに六人がV字編隊を組んで、みんな少なくとも片手は投票箱に触れた状態でつき従っていた。

編隊の一つがわざわざ投票箱の輸送を止めてくれて、二階にいた私たちのインタビューに答えてくれた。と、そのとき、下のロビーから叫び声や怒鳴り声がきこえてきた。

シティ・ホールで任務にあたっていた警官が、数珠つなぎになったNAMFREELの人々と口論をはじめ、もみ合いになり、ティーン少女が頭を殴られた。

群衆は騒然とした。トニーと私が階下へ降りると、ちょうどこの騒ぎに巻き込まれて、ロビーの内側の扉に押しつぶされてしまった。警官たちはその向こうに退却して扉を封鎖したのだ。群衆は、もう一度体当たりをしようといったん後退した。その時、警官たち



が突撃して出てきた。私の鼻を、うなりをあげたこん棒がかすめる。トニーは肩を殴られた。

すごい！ まるで六十年代に学部長室を占拠したときみたいだ。私は、噴水に飛び乗って「戦争はんたああああい！」と叫びたい衝動をおさえるのがやっとだった。ひどく場違いな感情だ。これは戦争じゃないし、戦争だったとしても、群衆は一人残らず喜んで戦っただろうから。

警官は再度突進してきた。敢えて事実を述べると、今度はかなり手加減していた。スクラムを組んで群衆を押し返すだけで、こん棒はごくたまにしか使わなかった。振り返るとトニーが四、五人の警官に押し戻されていたが、彼の後ろでは大勢の群衆が「外国の記者さん！ こいつを記事にしてくれよ！」と怒鳴りながら、彼を前に押し出していた。

結局NAMFREELのリーダーと巡査部長、マカティの副市長がメガホンを持って現場に駆けつけ、騒ぎを鎮めた。警察は、群衆が公務執行妨害をしないと約束すれば、こっちらも彼等をぶん殴るのをやめると約束した。もっともこの日は土曜日で、職務中の公僕といったら警察官しかいなかったが。

平和は五分間ほど続いた。トニーと私はロビーにいたが、そこには警官とアキノ支持者がいて、素直に怒鳴り合いをやめて、インタビューに応じてくれた。と、建物の裏手で悲鳴と怒号があがった。

シティ・ホールの駐車場に一台のメルセデスが入ろうとしていた。

群衆は騒然とした。はじめ、駐車場の入口を塞いだ。運転手は出てゆこうとした。すると今度は駐車場の出口を塞いだ。ついに警察が割り込んで、車に乗っていたふたりの人物をシティ・ホールの中へ導いた。

「いまのは誰だ？」私は群衆にむかって大声で尋ねた。

「わからん」

これは間抜けな話だ。

「いやいや」群衆は叫んだ。「奴等はたぶん、何かを運んできたんだ！」「封筒みたいだったぞ！」「投票用紙と同じぐらいの大きさの封筒だ！」

「連中は偽の投票用紙を持ってきたんだ！」群衆は意気揚々と結論づけ、車を揺さぶりはじめた。

私はそちらへ歩み寄り、車の色つきガラスに鼻をぺったりと押しつけた。シートの下に

二丁のM16ライフルが置いてある。誰であるにせよ「貧しき者たちの姉妹」から遣わされた心優しき使いでないことだけは確かだ。警官がさっきの連中を建物から連れ出し、メルセデスに乗り込ませた。ふたりの顔はよく見えなかった。運転手はあわてて車を発進させた。群衆が車のフェンダーやボンネットを殴りつける。警官が群衆を殴りつける。誰かが頭を割られ、血を流した。騒ぎは一瞬、膠着状態となったが、結局は馬力のあるほうが勝った。人々はなんとか車の下敷きになるのだけはまぬがれた。車は群集の中を突進する。人々は右左に投げ出された。彼等は立ち上がると、走り去るメルセデスの後を追い、薄汚れたマニラの舗石をはがしたり小石を拾ったりしては投げつけた。

その晩、私はホビット・ハウスというマニラ市内にある洒落たカフェへ、「フィリピンのボブ・ディラン」と謳われるフレディ・アギラーを観に行った。だが、フィリピンのボブ・ディランとは、ちょっとひどすぎる。彼はハンサムだしギターもうまいし、音程もしっかりしているし、ちゃんとわけのわかる曲を書いているのだから。

ホビット・ハウスの客はロング・ヘアーの者が多かったが、フレディもそのひとりで、ステージの上では、観客のなかにマルコス支持者が何人いるだろう、などとジョークを飛ばしたりする男だった。客たちは大喜びで沸きかえり、次から次へとプロテスト・ソングをせがんだ。そして一緒に歌いはじめる。店の内装は、メニューに至るまですべて一九六三年ごろのグリニッジ・ビレッジかオールド・タウン、あるいはノース・ビーチそっくりだった。ただ唯一の悪夢めいた例外は、フィリピンではいつもそうなのだが、ウェイターやウェイトレスたちがみな、小人なのだ。彼等は私のジャケットの縁を引っ張って席へ案内し、客たちの足の間をすりぬけてオーダーされた品を運び、テーブルの上にちょこんと突き出た小さな頭でチップを受け取って歩くのだ。どんなに酔っ払っても、これだけはギョッとさせられる。

翌日、私はバクララン教会で行なわれた抗議ミサに参加した。教会の中ははいりきれないほどの人で溢れかえり、人々はまるでサンゴのように、一つの物体におしかためられていた。アメリカ人なら、卒倒する者や殴り合いの喧嘩を始める者、心臓が止まってしまう者が続出するところだ。だが、アキノ支持者たちは顔を輝かせ、Lサインを振りあげていた。彼等は銃弾に倒れたコーリーの夫ベニーニョ・アキノをしのんでみな黄色い服を身に着けていた（例の「幸福の黄色いリボン」という歌のノリだね）。やがてコーリーが現われると、群集の中を電流のようなものが走り抜けるのがわかった。「行動する市民」版の



ウェーブみたいな感じ。

「コー・リー！ コー・リー！ コー・リー！」と人々は叫んだが、それはビートルズマニアの叫びとは違っていった。彼等は、彼女を支援するために集まったのだ。彼女を守るために。そして世界をあるべき姿にするために、彼等はここにこうして集まったのである。

ジャイム・シン枢機卿の説教がはじまった。この枢機卿の妙な名前のために「罪(シン)が平穩を求めろ」みたいな変な見出しが、現地の新聞をしばしば飾ることになる。枢機卿は企業の経営者たちに対し、従業員が来る全市民的サボタージュで休んでも、どうか理解してやってほしいと請願した。

続いてコーリーが説教壇に立ち、演説をはじめると、一部の人々(というか外国人ジャーナリストたち)は見やすい場所を確保しようとして、押し合い、蹴り合い、肘の突つきあいなど、見苦しい真似をはじめた。私は高さ五フィートの説教壇に押し付けられ、顎がコーリーの黄色いパンプスの爪先にまさに乗った状態になってしまった。すると目が上へ向かい、彼女のドレスにまでたどりつく。彼女は実にまともな、どちらかというとな女教師くさい、うわついたところのまったく女性であった。彼女のカリスマ性は、カリスマ的な資質がまるでないことから生まれているようだ。つまり、ごく普通の市民が成り行きに流されて大物になった感じなのだ。例えていうなら、ハリー・トルーマンがトーマス・E・デューイに暗殺され、ベスがハリーを引き継いだようなものである。それにしても、いい脚だった。

人々は今回のキャンペーン・ソングである「ビヤン・コ」(「我が祖国」)を合唱しはじめた。一九三〇年代、アメリカ占領下で作られた歌だ。それは全世界の虐げられた人々に共通の、実に澄んだ美しい歌声だった。タガログ語の歌詞は、こんな内容だ。

わが祖国は捕えられ、惨めな暮らしを強いられている

鳥は大空を飛ぶ自由を与えられているのに

籠に閉じ込められ、鳴いている

自由のない

美しい国のように

愛しい祖国フィリピンよ

涙と苦悩の宿るところ

わたしは願う、自由なおまえの姿を見たいと

仲間が心をひとつに合わせれば  
いつかその日はきつとくる

他の記者団とともに祭壇の横に立ち、きっぱりとした闘志を胸に秘めた人々の美しい顔を見つめ、この希望への欲求を感じとりながら、私は泣き出した。いい歳した阿呆みたいに、突っ立って涙を流していた。忘れもしない二十年前も、おれはこんな群衆なかに立っていた。集会、デモ、モラルを信じる喜び、催涙弾にまみれた恋。偏見や貧困、不正に対するすばらしい闘争、新しい夜明けを、私は忘れない。そして、それらすべてが消え去り、クソにまみれてしまったことも。

## 謎の東洋人

だが、ひょっとしたら私はティッシュの無駄遣いをしたのかもしれない。いや、そうでもないかもしれない。私にはどちらとも言いかねる。ただひとつ確かなのは、マルコスが豚野郎で、とっくの昔に砂糖漬けにされ、燻製室に吊されてしかるべき男だということである。だが、フィリピンに関するその他の事柄は、そう単純ではないのだ。

新人民解放軍と称するゲリラは何処にいるのか？ かれらはアキノの将来に影を落とす存在だ。冬祭りにでも行っているのだろうか。誰も知らないらしい。私はN P Aと密接な深いつながりのある左翼の保護団体バヤンの、マニラ地区委員長オズワルド・カーボネルに話を聞いた。バヤンとN P Aは選挙のボイコット運動を進めていたが、ボイコットに応じた者はひとりもいなかった。現在オズワルドは、規模はさほど大きくはない過激派学生によるデモの指揮をとっている。「我々はN P Aを歓迎しますよ」彼は私にむかってひと息で言った。「コーリー支持者たちも我々についています」次のひと息で、彼はこう付け加えた。

そして、共産主義者たちが何もしていない一方、マルコスはいろいろやりすぎている。

あの小ズルい年寄りどもは、自分の正当性を証明するための選挙にアメリカ議会監視団と国際監視団と、報道陣二連隊分も呼び寄せておいて、なんだってわざわざ悪役プロレスラー並みの露骨な反則技ばかりやっていたのか？ おかげで彼は、人々の前でしゃがみこみ、パンツをくるぶしまでずり下げて、世論という窓に尻をぴったりと押しつける羽目になってしまったのだ。

そしてマルコス、金をどっさり抱え込んでものすごい武器を持った、おびたしい数のペテレン師や協力者たちを残していった。権力の座を追われた大統領がアメリカの輸送機に詰め込むことができなかったのは、自分の子飼いの連中たちだった。このおべっか使いどもは、ポロ用の小馬を売ってスモーカー・マウンテンの人々のにキャンピングカーを買ってやるのだろうか？ この悪党たちは「バヤン・コ」のわいせつな替え歌を歌いながら、再訓練収容所に洋々と向かうだろうか？

さらに、経済問題がある。私の知る限り、第三世界の経済を安定させる方法を知っている者はどこにもいない。最近、比較的豊かになりつつある発展途上国としては台湾、韓国、シンガポールの三か国があげられるが、これらの国々にしても、みな煮ても焼いても食えない独裁者・・・そう、マルコスのような独裁者の下で発展していったのである。

今こそサント・ニーニョの出番だ。それはフィリピンの貧民に人気がある、勃起した赤ん坊のキリストをかたどった真鍮製のお守りである。それを首から下げ、肉体の危機にさらされそうになった時に口にくわえるのだ。

選挙の八日後、二月十五日の土曜日までには、熱狂的な抗議運動はすっかり下火になっていた。コーリー・アキノは二日間、民衆の前から姿を消していた。その晩、フィリピン国民集会在マルコスの勝利を宣言した。私は暴動を期待して宮殿へ駆けつけたが、そこには暴徒たちの影も形もなく、ボンボンと「悪党予備軍」を満載した一台のBMWが、勝利の祝賀パーティが済んだ宮殿の外へフラフラと出て行くところだった。後部座席では、英国宮廷フィリピン駐在大使の息子が浮かれ騒いで、今にも窓から落ちそうだった。

翌日、アキノ派の大集会が催された。コーリーの支持者たちはマニラのあるライザル公園までデモを行う予定だった。私は町じゅうで最も反マルコス勢力の強い郊外の中流階級地域、ケソン・シティのデモ現場へむかった。指定時間にやってきた反体制派はわずか数百人で、とまどったようにあちこちに固まっていた。最終的には、千人あまりの人々が集まった。殺害された二人のアキノ支持者の棺が運ばれ、デモ開始の合図がなされた（殉教者の遺体がおさめられた棺を担ぎ歩くというのは、フィリピンではかなりセンセーショナルな出来事だーそれは、血に染まったシャツと、ついでのその中身まで振りかざすというわけだ）。

単調なスローガンを繰り返しながら、一行はマニラのダウンタウンへと向かった。一キロも行かないうちに、群衆の数は五倍に膨れあがっていた。また一キロ行くうちに、群衆

はさらに五倍に膨れあがった。人々が組織的にデモに加わるのは一度しか目撃しなかった。サント・トマス大学にさしかかったところ。それ以外は、大勢の人がどこからともなく沸いて出た、といった感じだった。そして、六キロに及ぶデモのあいだ、勢いついた群衆が旗を打ち振り窓から身を乗り出したり、マニラの電話帳を引きちぎって作った紙吹雪を撒き散らしたりしていた。

ライザル・パークに到着した時（デモは小走りで進んだから、そんなに時間はかかっていない）今にも壊れそうな仮設の演壇の周りには、五十万人が集結していた。

群衆はバクララン教会での集会にも増してすし詰めの状態となっていた。私はABCのトニーとベッツィ・ウェストと一緒にいた。我々がリポーターだと知ると、人々は押し合いへしあいしながらも、いくぶん場所を開けてくれた。「外国の記者だぞ！」と彼等は叫んだ。「場所を開ける！ 外国の記者だぞ！」我々は群集によって、演壇から二列目の中央席を与えられた。

「コーリー！ コーリー！」轟く雷鳴のような人々の叫び声は、あばら骨の中で肺や肝臓を激しく揺さぶった。みんなやがて歌いはじめた。五十万人による「バヤン・コ」の大合唱を聞いていると・・・曲なんかどうでもいい。例えばテレビドラマ「ジェットソナー」の主題曲だって、五十万人が歌えば十分感動的なのだ

コーリー・アキノがマイクの前に歩み寄った。群衆は狂気、情熱熱狂、恍惚、野生的興奮、ともかく人間をそういった類いの感情にかりたてる興奮状態に取りつかれていた。

だが、果たしてアキノは、人々の感情を煽りたてるような大袈裟なスピーチを行なっただろうか？ フェルディナンド・マルコスのを討ち取れと叫び、「国民よ、立ち上がれ。戦いの火を放て」などと民衆をけしかけだろうか？

そんなことはしなかった。落ち着いた、かん高い声と図書館長のような物腰で、彼女は今後のおとなしい反対運動の予定を説明した。全国民の祈りの日、人々は仕事を休んで教会に集結すべし、と彼女は語った。七つの銀行と、サン・ミゲル・ビール醸造所を含むいくつかの「馴れ合い企業」に対するボイコット運動を展開するよう聴衆たちに呼び掛けた。電気料金や水道料金の滞納を呼び掛けた。また、教会所有のAMラジオ局からの彼女の呼び掛けを合図に、「騒音攻撃」（フィリピンの伝統的な反対運動）を毎晩仕掛けるように求めた。「そして、自分なりの非暴力的な抗議行動をいろいろ試してみてください」と彼女は語った。「その成果をわたしたちにも教えてください」

---

たったそれだけ。払いは渋れ。ビールを飲むな。そしてラジオを聞くときにはゴミ箱を一斉に叩け。ベッツイとトニーと私は、首を傾げながら歩みさった。群衆はおとなしく解散した。

それから十日後、彼等は国を手に入れたのだ。



## 第9章

# ろくでもない一日

目覚まし時計が三十分遅れてなり、おれは枕の下の不利委スミス・アンド・ウェッソン 9mm オートマチックを抜いて、そのいまましい機械にひとしきり銃弾を浴びせた。まだ目も開いてないってのに、なんとかスヌーズボタンを押す。チイツ、まったく朝起きるのは大ッ嫌いだ。でもこんど遅刻したら殺されちまう。先週も、重役が二人殺られた。貨物用エレベータに引きずりこまれ、頭を撃ち抜かれて。だがそれでも、アパートの隣の婆さんさえいなかったら、おれはベッドへ逆戻りしていただろう。婆さんはついに自分の猫にケリをつけようとしたのだ。婆さんが六発ブチこんでも、ネコは死ななかった。血も涙もない虐殺だ。おれは彼女がいそうなあたりの壁に二発撃ちこみ、撃ち返してくるのをすかさず伏せてかわし、キッチンへ<sup>ほふく</sup>匍匐前進した。皿洗い機を盾にコーヒーを淹れ、非常階段へ抜けて、催涙ガス弾を相手の部屋の窓に投げこんだ。これで立ってシャワーを浴び、髭を剃れるというものだ。

ところが、洗濯したシャツが一枚も見つからない。ようやく見つけたが、馬鹿な支那人のクリーニング屋がボール紙の裏側にプレスしたプラスチック爆弾の解除に二十分もかかってしまった。とうとう流しでそいつを爆破する羽目になった。買ったばかりだったのに。爆破で、台所も<sup>さんたん</sup>惨憺たるありさま。どのみち、アパートはひどいザマだった。うまい具合に、掃除のおばさんを雇ってある。もっとうまい具合に、掃除のおばさんのガキを縛りあげ、ホールのクロゼットにブービートラップをしかけてブチこんである。そうでもしないと絶対に窓拭きまでやっちゃくれないのだ。

こうしてすっかり身支度を整え、出勤しようとしたが、おれの彼女はまだベッドの中

で、口を半開きにし、いびきをかいて眠っていた。あれだけのサイレント消防車と、隣の大騒ぎとがあっても、身動きもしない。そんな女がなぜだか無性に腹立たしくて、おれは彼女を抱き上げ、窓から放り投げてやった。どうせ三階だから、死にはしないだろう。来週あたり電話して、悪かったの一言も言ってやればいい。

郵便はまだ届いていない。ドアマンの話では、海兵隊員の会社が配達業務を行おうとしたのだが、ミュレイ。ヒルのどこかで釘付けにされているらしいのだ。ドアマンは相変わらず無愛想で、こっちが先に背負い投げをくらわせ、みぞおちに蹴りを入れていなければ、おれの喉を切り裂いていただろう。

車で出勤するつもりだったが、オフィス近くの駐車場はまだ占拠中なのを思い出した。駐車場の係員を装ったスパイが十人ほど、郊外の学童三十人を人質に立てこもっているのだ。子供たちは町へサーカスを見にきたところだった。なぜサーカスなんか見たかったのだろう。プエルトリコ人の肉狩り屋が、すでに象をみんな殺してしまっているのに。とにかく月極めで場所をとってあるのに、駐車場には入れない。それにおととい、スパイどもは子供たち数人をキャデラックに詰めこんで火をつけ、駐車場の屋根から突き落とせばかりだった。巻き添えで、通行人が十人ばかり死んだらしい。

通りに出ると同時に、お気に入りの護身用武器をブリーフケースから取りだして構えた。ワルサー MPK 9mm サブマシンガンに、特注で全自動/半自動切り替え装置をつけてある。ウージーほど強力ではないが、自動銃、少なくとも 9mm 口径の中では世界一小型の銃だった。おれは 9mm 弾に心底惚れこんでいる。まあ趣味のようなものだ。

時刻はまさに朝のラッシュたけなわ。物陰からあたりをうかがうが、タクシーのかけらも見えない。しょうがない、地下鉄を使おう。地下鉄はだいきらいだ。所かまわずスプレーで落書きしてまわるガキどもだらけ。おまわりは、あんな連中を縛りあげ、鼻を削いでやるがいい。もちろん警察は、まさにその通りのことをやっではいるけれど、おれが払ってる税金に比べたら、捕まえてる人数が少なすぎる。おまけに、外は相変わらずぞっとする朝だ。寒いし雨が降っているし、隣のブロックでは爆弾が降っている。アパートから地下鉄の駅までの間、発砲してきた狙撃手は二十人くらいいたはずだ。あんな連中がどうして一人前の狙撃手の看板をしょってるんだか。かすりもしないのに。もっとも、一人は新聞の売店の横にいた乞食女に命中させ、クリーニングしたてのレインコートを脳みそまみれにしやがった。クリーニングしたてと言っても、そう簡単な話じゃない。そい



つをクリーニング屋から取り返すのに、おれはレゴ・パークの管理人の家を深夜に襲い、  
暗視スコープスターライトを使ってその家の番犬四匹を残らずしとめたのだ。というわけで、おれは  
体中脳みそまみれになって、しかも新聞を買うのに、めくらの売り子をブチのめしてやら  
なければならなかった。

改札の駅員二人を撃ち殺し、回転式の改札を飛び越え、どっかの女を線路に突き飛ばし  
て、電車を停車させた。意外なことに、体重五十キロの女でも、猛スピードの電車なら脱  
線させられる。だから電車も極力停車しようとする。車内では、ディーン・エイジャーの  
一団が乗客たちを威嚇し、女たちから金のネックレスをもぎ取り、ナイフを突きつけて財  
布を奪っていた。おれもしばらく連中に混じり、ちょっとカツアゲさせてもらった。と  
いっても、まあタクシー料金程度だったが。それから車掌を含む全員を脅して最後部の車  
両に写らせると、車両をつなぐピンを抜き、連中をトンネルの中に置き去りにした。こう  
でもしないと座れないこともあるのだ。もっとも、おかげで危うく痛い目に遭うところ  
だった。ガキどもの一人がワイヤー誘導式対戦車ミサイルを持っているとは、さすがにお  
れも予想できなかった。うまい具合にそれは信号機に当たってはねかえり、ランチャーを  
持ったガキに命中してくれた。さもなければ、おれは怪我をまぬがれなかっただろう。い  
やホント。

もう完全に遅刻だ。地下鉄は予定より遅れており、装甲車両と出くわしたときには運転  
手を手伝ってやらなくてはならなかった。きっとIND線のほうからきたんだろう。とに  
かく、そいつは三十四番街駅を砲撃中だった。運よく、おれは一週間前に、その駅のゴミ  
入れの下に無線発火式クレイモア地雷を仕掛けていた。爆破装置はブリーフケースの中  
だ。素晴らしい。発信器は、デジタル式の旅行用時計にもなるという代物だ。この地雷で  
プラットフォームの全員が死亡、さらにトンネルの天井部分がINDの連中の頭に命中した。

さて、会社の受付を爆破して突破し、秘書を強姦してデスクや椅子を積みあげてバリ  
ケードを築きあげる頃には、「ボス」は怒り狂っていた。経理の男を二十人くらい連れて  
向かいのビルの屋上にでかけ、そいつら全員にM16と催涙弾用グレネード・ランチャー  
を持たせていた。ボスは拡声器でおれを叱咤し、手を挙げて出てこい、さもなければ昇給  
はないと思え、と怒鳴った。おれはガスマスクをつけ、ファイルキャビネットの後ろに隠  
してあったブローニングの自動小銃を取り出して少し論戦を張った。だが長くは続かなか  
った。電話も何本かかかってきたし、山ほどの手紙を口述筆記させなければならなかつ

たのだ。催涙ガスのおかげで咳こみ、あえぎながら、事あるごとにセクハラで訴えると脅す秘書に口述筆記をさせるのは、実に骨が折れる。

それにピーターソンとの契約もなんとかしなきゃならない。ピーターソンはデザイナーズ・ジーンズを扱っているメーカーで、信じられないほど融通の効かない連中ばかり。向こうの CEO（最高経営責任者）はこの一週間というものを電話をよこし続けて、速やかになんらかの進展が見られない場合には多リータウンのおれのオフィスに核攻撃をしかけるとぬかす。ほとんど失われつつあるクライアントというわけだ。そして、このピーターソンとの契約がぼしゃったら、おれの立場も非常にまずくなるのは間違いない。

昼食を食べに出る時間がなかったので、デリカテッセンのオーナーとその家族を殺してサンドイッチを持ってこさせた。おれは熊のように猛烈に働き、午後三時までには何もかもきっちりと片づけたと思ったら、そら言わんこっちゃない、郊外にあるわれわれの支社の駐車場に十五メガトンの爆弾だ。たぶん、新聞で読んだだろう。マンハッタンじゅうの窓の半分が破壊され、そこらじゅうに散った死の灰の除去に、たぶん数週間はかかるだろう。だが、こんなのはまだ序の口だった。タリータウン上空にキノコ雲が立ちのぼり、同時にピーターソンとの契約もおじゃんになると、ボスがついにおれのオフィスの壁をバンガロー魚雷で突破し、おまえのかわりに若手のドノバンを昇進させ、グループの副社長に起用することにしたと宣言した。ってことは、ダリエンのドノバンの家へ行って、奴の子供たちを毒殺しなきゃならないわけだ。クソッ、もうたくさん。おれはメール・ルームに火炎瓶を放りこみ、早めに仕事を切りあげることにした。

同僚二人と秘書たちを誘ってクラークの店で軽く飲み、またしても女たちを無理やり犯し、バーテンダーのひとりの腹を撃ち、何分で死ぬか賭けをした。ちょっと飲み過ぎたようで、妙に疲れていた。だから、奥の部屋でハンバーガーでも食べることにした。肉は牛から直に切るつもりだったが、あいにく牛がじっとしやがらない。仕方なく、催眠銃で牛を撃った。それから同僚といっしょに導火線を見つけてそれを牛の尻に巻きつけ、爆発させてタルタル・ステーキをこしらえた。だが、導火線のせいで肉はひどい味になっていた。だからおれは、夕飯なんかクソくらえ、と言って、さらにグラスを重ね、たまには家で安らかな夜を過ごすことに決めた。

外はまだ雨でタクシーを捕まえるのに空中作戦が必要だった。ついに一機の A-1E 空中偵察機がパークアベニューでチェッカーを発見、機銃掃射を加えると、タクシーは慌てて

おれのところにすっ飛んできた。家につくまでドライバーにMPKを突きつけ、チップがわりにガソリン・タンクに一発お見舞いしてやった。アパートのドアマンはまたしてもおれを殺そうとし、ロビーにいる女の犬がとびついてくるのをやめさせるため、炸裂型手榴弾を投げねばならなかった。エレベーターのドアに散乱した彼女の内臓をビルのポーターが処分する間、おれは雨に濡れながら外をうろつく羽目になって、そのとき、目に入ったものときたら！ なんとおれの車に、いまましい駐車違反のチケットが貼ってある！ 畜生、なめやがって！ だって今日はユダヤ人の祝日で、通りの片側のみ駐車可の規制が適用されない日だったはずなのに。まだユダヤ人も抹殺されきってはいないはずだったのに。警官に文句の一つも言ってやろうとしたが、向こうが先に発砲してきた。そしてようやく家に入れば、カーソンの阿呆がまた休みをとっていて、トゥナイト・ショーの司会はあの能無しレターマンだ。やれやれ、ろくでもない一日だ。



## 第III部

# 人間と輸送機関



## 第 10 章

# 西洋文明健在なり！：フェラーリの偉大

アトランタからダラスまで十二時間と三十分かった。でも、それはのんびりと景色を觀賞し、地方色を満喫しつつ流していたからだ。それに、バーミンガムまでの間ずっと、キャンピングカーの渋滞に巻き込まれたせいもある。大学対抗試合が行なわれるのだ。南カロライナ大学対アラバマ・クリムゾン・タイド戦、もつれあいの大乱闘。いやいや、コロンビアやチャールストン、ビューフォートくんだりから鼻肩チームを応援するため、善良な家族を連れて夜明け前からキャンピングカー駆ってやってきた善良な人々をからかおうつもりはないよ。自由世界のあの素晴らしい片隅に住む一般大衆諸君についてどうこう言うつもりは全くない。だって、私は西欧文化をこよなく愛しているからだ。そして、なぜ西欧文化をこよなく愛しているかということ、私はその文明の一員として、今まで運転したなかで最も素晴らしい車を操り、地球上で最も素晴らしい国のど真ん中で生きていたからだ。それに、時速百五十キロでキャンピングカーの群れをごぼう抜きにするのは、マルセイユでの上陸許可時間の遊びよりずっと面白いし、キャンピングカーの連中は、滅多にビールの空き缶を投げつけたりはしなかった。シュン、シュン、ピュッピュッ。イランの過激派を後ろに引きずっていても、これ以上ゴキゲンな気分にはなれないだろう。

それに、あのへんの連中はとにかく車が好きだ。いや、愛している。男も女も。見るからに危険そうな車が見るからに危険な走り方をしているのを見ると、それだけであからさまに微笑を浮かべてくれる。だが、何ととっても最高だったのは、十才の男の子たちの表

情だ。後部座席でRVのリア・ウィンドウに顔を押しつけていると、百キロ車線を後からぐんぐん近付いてくるのが私たちの真っ赤なロケット！ その顔つきは本当に胸をうつ。目を輝かせ、口をあぐりと開け、まるでサンタクロースに本物の機関車を贈られたみたいな顔だ。スニーカーを履いてパタパタと前の座席に移り、父親のバンロンのシャツの襟をぐいぐい引っ張り、ぴょんぴょん飛びはね、フロントガラスの向こうを指差しながら叫ぶ声が聞こえてくるようだ。「ねえ、見た?! ねえパパったら、見た?! ねえ?! ねえ?! ねえ?!」

タラデガの出口でボルシェ930ターボに出くわした。そいつは時速百五十キロで走っていたが、こっちが追い越すと、しばらく先を行かせてから百八十キロで抜き返し、するとこっちが抜き返す。奴はこれまで競った連中に負けず劣らず熱くなり、二百キロでケツにつけてきた。そして、その時！ こっちはあっさりぶっちぎってやったのだ。五秒後、ボルシェはミラーの中のバスタブ型の豆粒になっていた。奴としても、頑張れば我々に追いつけなかったわけではないと思う。もっとも、あんなエンジンをケツに載せたナチの国の車では、最高スピードの二・二五倍は出す羽目になっただろう。でも、こっちは違う。こうして電動タイプライターに向かっている今よりも、パーミンガムを疾駆したあの時のほうがずっと振動が少ないほどだった。気持ちのいい朝、気持ちのいい車に乗り、気持ちのいい旅に出たあの日、我々はマンハッタンの塔からトパンガ・キャニオンの崖まで猛スピードで飛ばし、この素晴らしい国を横断したのだった。お陰で三十の都市にある検眼医の予約票は、疾走する我々の車を見て、視界を赤い線が横切るのでも見てもらいたいという人々で埋めつくされてしまった。

誤解しないでほしい。別にレースをしていたわけじゃない。あくまでも純粋に、ドライブを楽しんでいただけだ。トスカローサではゆっくりとランチを楽しみ、入ったガソリンスタンド（七十二リッターのタンクでリッター四キロ程度の燃費だと、要するに途中の全部のスタンドってことだ）の従業員と長いおしゃべりをかわし、ルイジアナでは豪雨に見舞われ、二車線道路だったのでやむなくスピードを百五十キロ程度に落とさなければならなかった。シュリーブポートでこってりとしたステーキ・ディナーにカクテルとコーヒー、デザートとレミー・マルタンを味わった。そう、断じて言うが私たちは週の真ん中の水曜日、ダラスまにのんびりと乗り付けた。その週、我々は、女の子と遊ぶ以外のあらゆる行為に勝る楽しみを味わっていた。それに、女の子と遊ぶよりもこっちのほうが長続



きする。だいいち、車の上では眠ったりはしないものだし。

とはいえ、この旅は決して順調にスタートしたわけではない。ことの起こりは・・・まあ、ことの起こりはやくわからない。とにかく、ニュージャージー州モントヴェールに本拠地を持つフェラーリ北米支社が、映画の撮影用の308GT5を一月二日までにロサンゼルスへ納品しなければならなかったのだ。フェラーリはカー&ドライバー誌に連絡を取り、誰か大陸を横断して車を運んでくれる人間がいないだろうかと尋ねた。カー&ドライバー誌は親切にもこの私に話を持ち込み、無論私はふたつ返事で引き受けた。だが、気掛かりなことがいくつかあった。カーマニアの例に洩れず、私はフェラーリに魅せられていた。それも、Ferrariの正しい読み方も知らないうちから。てっきり、フェラーリだろうと思っていた。だが、その頃から私はテストロッサのような車を思い描いていた。近頃では、フェラーリも私の想像力を越えてきた。私はこの、成層圏並みの値札がついた、パスタのよじれたみたい贅沢の塊を、どう考えていいものやらわからなかった。エンジンが運転席のすぐ後ろと横にまであって、シートではなくフロアに座らされ、フェンダーも自分の足も道路も見えない。少なくとも、自動車ショーで試乗した時には、そんな感じだった。ひどく変てこな形をしているので、運転しづらいだらうと思った。それに私は、原則として二万ドル以上もする車のついたもの(それに「アチソン、トベカ、サンタフェ」とか側面に書いた列車以外のもの)には反対しているのだ。だいたい、イタリアには飢え死にしそうな人々がたくさんいるというのに。というか、腹をすかしている人々が。というか、腹をすかしてなくても、どうせクロゼットを置く場所もないような家に住んで、子供たちはざこ寝してるんだらう。

それに、他にも問題があった。私はナショナル・ランプーン誌の編集者という昼の仕事を持っているのだが、馬鹿げたジョークや宗教的非難、女性の地位をおとしめる記事を書く仕事がひどく遅れていた。締切りが押し寄せ、アート担当者はカンカンで、印刷所では皆、牙をむいている。真っ赤な必要経費に乗って馬鹿げたことができる新規プロジェクトもなかった。したがって私はこの計画に対して、いつになく乗り気でなかった。特にボス、すなわちナショナル・ランプーンの親会社の社長に、よりによってこの不都合な週に、他の雑誌のためにクロスカントリーのどんちゃん騒ぎに出掛けたいと申し出なければならないのだ。さて、このボスというのはジュリアン・ウェーバー、五十代そこそこ、ハーバード法律学校出身の冷徹、無口、厳めしい顔付きの男で、いつもぴしっとしたスーツに

身を固め、お固い感じの人物だった。彼のデスクの前に立ち、後ずさりしながら事情を説明し嘘をでっちあげている間、ボスは顔をしかめて考え込んでいた。私は「最近あまり出社してないのは確かですが、しかし……そのう……その分家で一生懸命やっていますし」などと言っていたが、内心は、自分のデスクを整理する時、どこで段ボールを調達しようかと考えていた。

ところがボスは言った。「おれも行っていいか？」

気がついた時には、私は駐車場でフェラーリに乗り込んでいた。この四万五千ドルの小さな車のフロアにべったりと座り込み、さてどうやってこいつを操縦したものかと私は途方に暮れていた。そして私の隣、バケット・シートに心なしか身を固くしておさまっているのは、いまましいボスだった。さすがにこの時はジーンズを履いていたが、それにはなんとアイロンがあててあり、膝の真ん中にきっちり折り目がつけられていた。ブルックス・ブラザーズでブルージーンズを売っているかどうか知らないが、もしも売っているなら、そこで買ったのに違いない。まる一週間も他人、それも麻薬や若い女の子の話もできないような相手と一緒に車に閉じ込められ、果たしてどんなことになるやら想像もつかなかった。それに、一体この車をどうやって操作するのもまったく想像がつかない。フェラーリ社の社員は一人残らずクリスマス休暇をとっていて、キーだけがぼんと受けに残してあった。心配そうな顔をしてくれる人や、まして車の発進方法を教えてくれる人は一人もいなかった。おまけに、フェラーリのマニュアルは中国語しか知らない人間がイタリア語から英語に翻訳したような代物ときた。「さて」とウェーバー氏が言った。「こっちはいつでもいいぞ」

私は、フェラーリの広報ディレクター、ビル・ベイカーの言葉を思い出した。「……しないように気を付けてください。さもないとプラグがかぶってしまいますから」だが、その「……」の部分が、さっぱり思い出せない。ようやく車をスタートさせ、車は実にためらいがちに、実に恐る恐るガーデン・ステイト・パークウェイへ滑り出したが、そこでたちまちプラグがかぶってしまった。我々は路肩に停車した。再び発進して路面に滑り出すと、エンストを起こしてしまった。そしてまたしても発進させると、今度はミスファイアとチョーキングを起こし、私はエンジンを止めないため、三速で五千回転以上にして走らなければならなかった。

「なんだ、この手の車の扱いを知らないのか」とボス。そして私はトレントンまでずっと

三速で走り続けたが、そこでようやくプラグのかぶりが直った。薄汚れた車の群れが、前後左右から容赦なく迫ってくる。フェンダーも見えず、汗だくでハンドルを握りながら、私はピータービルトに押しつぶされてサイドタンクになってしまうのではとヒヤヒヤしていた。ウィルミントンのターンパイクで高速を降り、デルマーヴァ半島を目指した。車の調子は良くなってきたが、なんとボスが運転したいと言い出した。ボスが回転を落としたら、またエンストしてしまうのが不安だったし、彼に運転のコツを説明することもできなかった。なにしろ自分でもさっぱりわからないのだから。それに、この弁護士タイプの男がハンドルを握り、この手の外車がいかに「標準から外れた操作方法になっているか」なんてことを喋りまくっている横に座り、時速九十キロで走るなんてまっぴらだった。つまりボスは生粋のニューヨーカーで、ニューヨーカーというのは、車はすべて黄色で屋根にライトがついているものと思っている人種なのだ。だから私はドーバーを過ぎるまでなんとかしてボスをなだめ続けた。が、彼はどうしてもあきらめなかったし、何と言っても彼は私のボスなのだから、私にはどうすることもできなかった。

私がようやくボスと運転を代わったのは、ちょうどデラウェア湾添いの国道1号線にはいった時だった。国道1号線は完成したばかりのスムーズな四車線道路で、海辺へのドライブを楽しもうとするウィルミントンのピクニック連中用の道だ。だが十二月ともなると道路は空っぽだった。ボスは運転席に腰を据え、ミレニアム・ファルコン号みたいな運転席にサッと目を走らせた。そして高価なローファーでアクセルを思い切り踏み込み、エンジンをレッドゾーンに入れたま見る見るシフトアップして時速百六十キロに達し、じゃがいも畑や無人のハンバーガースタンドをすっ飛ばし、五速に入れるまでたシフトレバーを離そうともしなかった。ようやくシフト・レバーから手を放すと、今度はその手でブロンディのカセットテープをカーステレオに放り込み、すると二百五十キロデシベルの音量で「Die Young, Stay Pretty (青春のときめき)」が流れてきた。灌木や木の枝の破片がびゅんびゅん飛んでくるし、目玉は脊髄のほうへぐっと押し込まれるようだし、さらに四サイクル三リッターV8エンジンが、マリア・カラスの声域をさらに上回る声で、イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイツと絶叫し、たぶん途中の少し裕福な農家では、ガラス食器がこなごなに砕けたはずだ。

というわけで、正真正銘のスピード狂になったのは階級的法人組織における私の上司、ジュリアンだった。彼はハンドルを握っている時間の半分はウルフガング・フォン・ト

リップスになりきっていて、いっぽう私は、ハンドルを握っている時間の半分は警官がいないかビクビクしていた。彼はまた、結構いいヤツだった。弁護士にしては（もっとも、結婚生活と経歴に傷をつけないため、麻薬や若い女の子に対する彼の考え方は記録から外す）。ともかく、この旅の様相が一変したのは、デラウェア国道一号線に出た瞬間だった。

たぶん我々がこの車ですべきことは、この車が本来の機能を果たせるかどうかを試すことなのだろう。その機能とは高速ツーリングだが、答えはイエス。かつて映画「エル・シド」なんかのタイトル・フレームに使われた、みかげ石に刻んでもいいほどのイエス。フェラーリは街乗りには不向きな車だ。低速だと、どうしても不安定で、融通がきかない。縦列駐車させようと思ったら、ヨットを地下の流しに停泊させるより骨だ。でも、空っぽの道路で思いきり走らせてやると、まるで一度死んで、スピード狂の天国に生まれ変わった気分にしてくれる。確かに308は、制限速度九十キロ、一度に走る距離が数百キロ程度でなく何千マイルにも及ぶようなアメリカでのドライブ用には設計されていない。フェラーリには九十キロなんかで走れるギアはもともとないし、トランクはアイス・バケットにもならない。だが、こういう苦情への回答は一言。それがどうした？ほんの一時間この車を運転しただけで、砂丘にはさまれた海岸を百キロ走り抜け、ガマの密生した湿地帯を行き、防波堤に砕ける冬の荒波を眺め、エドワード・ホッパーの絵のように淡く、低い午後の陽射しを浴びた人気のないリゾート・タウンを疾走する。これを一時間続けただけで、この車のためなら人殺しをも厭わなくなる。この車のハンドルを握るためなら、人の寝首を搔いてまわるだろう。

我々はアッサティーク島の下に位置するバージニア州の突端と接し、チェサピーク・ベイブリッジ・トンネルに続くメリーランド州東側の海岸に到着した。三十キロに及ぶこの海岸道路は、我々が運転しているこの車に負けず劣らず見事な技術を駆使した土木工学上の建造物であり、かつ、月明りに映える胸をしめつけられるような景色の美しさにも決してひけを取らないものだった。我々は水面すれすれに建設された高架式道路を走り、水中爆雷のような勢いで海水に突っ込み、ニューヨーカー誌の短編小説さながら、一瞬のうちに高架橋のうえに飛び出した。ノーフォークでは、ノースカロライナ州の州境に沿って曲りくねった狭い道を進み、グリーンズボロに到着するまでの間ずっと、気味の悪いにやにや笑いを浮かべ続けていた。

グリーンズボロにはフェラーリのディーラーがあるため、その晩はそこで一泊すること

にした。ちょうど車の調子が悪くなってきたところだった。エンジンのパワーが落ち、特にボスが運転している間はひどいものだった—ただしこれは、経験による勘の問題にすぎなかったが。308の運転席の下には、シートに体重がかからなくなると五秒後にエンジンが切れるスイッチがついている。これは、万が一車が転倒して運転者がさかさまになり、ガソリンが足を伝い落ちてきたような場合に備えての装置である。このスイッチのお陰で、車が火だるまにならずにすむ、というわけだ。ジュリアンは私のボスだが、物理的に巨大なボスではなかったため、このスイッチを作動させないだけの垂直抗力を生み出せなかった。確かにこの何とかスイッチは見事な安全装置ではあるけれど、我々はグリーンズボロのディーラーに頼んで外してもらった。それから、車のチューンナップをしてもらい、請求書をフェラーリ北米支社にまわすよう頼んでおいた。

ボスと私は一路アトランタへ向け、たっぷりとしたディナーとスコッチつきの夜の高速ドライブの記録に挑戦を開始した。車は前よりもずっと早く、ずっとスムーズに走るようになり、今や無敵だった。旅はまだたっぷり五千キロも残っており、そのほとんどを百五十キロ以上で走破することになる。グリーンズボロからロサンゼルスまでの間に我々が遭遇する唯一のメカのトラブルといえば、テキサス州の東部あたりで自動アンテナのベゼルが振動ではずれてしまうことで、このためアンテナを伸ばしたとき、アンテナは右のリア・フェンダーから2メートルもすっ飛んで、LBJヒルトンの駐車場に入る時までそれを引きずっていく羽目になる。

アトランタを目指すあたりで、私とボスはようやくフェラーリの扱いに慣れ、固くて小さなクラッチやシビアなシフト、恐ろしいほど鋭い左脳と道が直結したようなステアリングにも、素早く反応できるようになってきた。至る所レバーやトグルだらけで、キャンディやカセットテープを置く場所もない、ネズミの巣のようなコクピットで、体を折り曲げながら運転するのも次第に慣れてきた。地図や懐中電灯、サングラスなどが、ドアにつけられた皮ポケットに溢れている。レーダー探知機は右のサンバイザーに止めてあり、そのコントローラは助手席の顔の正面に来てしまうし、シガー・プラグに繋がった電源コードが身動きするたびに絡みつく。だが我々は、リリース・チューブさえあれば、アポロ任務の間ずっと乗り続けていられる自信があった。

夜中、ブルース・スプリングスティーンの公道レースの歌のテープをバックに、うなりをあげて我々は飛ばした。もう、この車が変テコだともエキゾチックだとも、美しいとす



ら思わない。我々の全き高揚感にとって、この車は完成されたデザインによる完璧な機能性、そしてそこから得られた完璧なスピードの権化でしかない。しかも我々の駆るこの車は、たとえスピードで負けてもステアリングで決して負けない車だし、この車がスピードで負けるものなんかありゃしない。

アトランタに着き、ホテルのバーで最悪のバンドを聞かされた。でも、気にもならない。この気分は何があっても曇らない。ラルフ・ネイダーその人ですら、このテーブルに喜んでご招待申し上げてもいいくらい。それくらい私たちは日常の瑣末な事柄に対する優越感に浸り切っていた。この車のいいところを一つ挙げるなら、こいつは乗る人を幸せにしてくれる。

さらに、私にはもう一つ恩恵をもたらしてくれた。アメリカへの信念を再認識させてくれたのだ。四万五千ドルのイタリア製スポーツカーで、アメリカへの信念を再認識するというのも妙な話だが、最初に述べたように、どっちも西欧文明の一部なんだし、ここは人間のあらゆる良きトレンドの中核、アメリカだ。それに結局のところ、何世紀もかけて我々は何のために文明化してきたのか。なぜあんなに戦争をして、いくつもの国を征服し、アフリカ人をさらってきて、西半球のインディアンたちを皆殺しにしたのだろう。そう、このためだ！ まさにこの知識と技術の結晶のため。この物理的要素の克服のため。自然に対する人間の支配を示すこの車のため。人が自らの運命を支配するためだ。そして公道でフェラーリを二百キロでとばす以上に、自分の運命を支配している実感が得られる体験はない。木を作ることができるのは神だけだが、その横をあれほど早いスピードで走ることができるのは人間だけなのだ。それに、世界で最も不完全で愚かで地位が低く、我々のNATO同盟国で最弱小の国イタリアの連中がこんな車を作れるなら、我々アメリカ人はどれだけ凄い物を作れることか。原子を破壊できる。ポリオを治せる。お望みなら月旅行もできる。出来ないことは何もない。我々がフェラーリを作らなかったのは、たぶんほんの偶然で、決してアメリカが劣っているせいではない。我々はただ、自分たちの英知と能力をそうした方向に向けなっただけなのだ。知っての通り、我々には他にすべきことが山ほどあるのだから。フェラーリこそ作らなかったが、我々の作った核弾頭ミサイルがどれほどのものか考えてみよ。それに、時速二百キロのフェラーリでこんな凄い気分が味わえるのなら、マッハ二・五のF-15戦闘機は一体どれほど凄いか、想像してみよ。フェラーリ308とF-15戦闘機。これこそ自由人の乗り物だ。ボルシェビキの口

ボット人間どもが、己の運命とその支配について何を知ってるもんか。野蛮な共産党の遊牧民族なんか、なにを恐れることがあろう。

そんな考えが頭の中を渦巻いていたのは、実は最寄りの人口密集地や主要軍事基地から八百キロも離れたテキサス州西部でのことだから、ボスと私は確かに野蛮な共産党の遊牧民族の脅威など恐れる必要はまったくなかったわけだ。だが、ハイウェイ・パトロールとなると話は別だ。この転生過程で、よくもまあ飯代もなくなるくらい罰金を取られたり、あるいは牢屋にぶちこまれたりしなかったもんだとお思いだろう。すべてレーダー探知機のお陰だ。数日でこの装置の見方を覚え、お陰でレーダー・ガンがどの角度に向けられているか、走行中のパトカーについた移動式か、あるいは固定式か、といったことまで読み取れるようになった。実は、最大のリスクは警官に捕まることではなく、警官を捕まえてしまうこと、すなわち百七十から百八十キロで飛ばしているうちに、何も知らないハイウェイパトカーのテールを追いあげてしまうことだった。自分たちが追い越そうとしているのが何かを見極めるため、ずいぶん目をこらしていなければならず、また州境を越えるたびに、一時間ほどかけて、その州のパトカーの特徴を確認しなければならなかった。だが、そういうわけで一週間の間に切られた違反キップは一枚だけ。最後の晩、新年最初のウィークエンド直後のことで、ラスベガスからロサンゼルスまでびっしりと埋まった、まるでラッシュアワー並みに混雑した道路でのことだった。そこはカリフォルニア州で、この州ではハイウェイパトロールはレーダー装置さえ持っていない。私たちはただ、休暇を終えた人々を満載した車を一台追い越し、別の車の後ろにはりついただけだったのだが、そこで停まれと指示された。ヒュエンガ巡査（チケットのサインは、そうとしか読めない）は実に礼儀正しい、ぜひとも州知事になっていただきたい人物だった。「残念だねえ、こんな凄い車に乗っているのに九十キロしか出せないなんて」と彼。私たちは笑いを懸命に押し殺していたが、彼もたぶんそうだったに違いない。こうして、私たちはたった一枚の違反キップを手に入れたのだった。十五キロオーバーのために。

アトランタからダラスまでは州間高速を使ったが、フォート・ワースを過ぎたあとは空っぽの二車線道路、国道一八〇号線を走り、テキサス州西部の目のさめるような風景を突っ切り、それから黄昏のなか、ニューメキシコ州の南東端にあるメーサを通り抜けた。そこで私たちは、酔っ払ったボーキサイト坑夫やら何やらを大勢乗せた無蓋トラックを相手に、唯一の本格バトルを経験することになる。連中は時速百五十キロで飛ばしながら健

闘し、カールスバッドまで急カーブを競り合い続けた。そこでトラックとわかれ、グワダルーブ・ピークをぐるりと巡るつづら折りの道やヘアピン・カーブを下りてテキサスへ戻った。ドライバーが手袋をはめる理由が初めてわかったのは、この時だった。それまで私は、ドライブ用の手袋なんてプロゴルファーみたいで嫌だと思っていたのだが、この旅に出る時に誰かが饒別として手袋をくれて、おかげでそれが、本当は恐ろしさで掌に大量に汗をかくから必要なんだとわかった。もっともフェラーリは、時速百八十キロで直線を走るときも、百四十が百五十キロで峠を攻めるときも、同じくらい安定している。私たち二人が何をしようとも、タイヤの一つとして予定のコースをはずれる気配すら見せたことはなかった。実際、峠道で何が刺激的だったかと言えば、フェラーリのせいで山を転げ落ちる可能性は皆無である一方で、私かボスのどちらかがしくじってガードレールを越える可能性はいくらでもあったことだった。だがそうはならず、その晩はエル・パソにはいった。

南西部の町が夜になるといきなり飛び出してくる様子は、何度見ても驚かされる。ただっぴろく、まるで明るいお伽の国。とりわけメルヘンチックなこの町で私たちは道を間違えてしまい、シウダード・フアレスを十分間も彷徨う羽目に陥った。メキシコ人の税関係員はフェラーリを見ると仰天し、「セニョール、いいからどうぞ遠慮せずに堂々とお通りなさい」といったパントマイムを示して見せた。彼の受けた衝撃は一晩じゅう去らなかつたに違いない。逆に、こっちもメキシコの税関を見て仰天していた。この時になって初めて、自分たちがメキシコにいるのに気がついたからだ。フェラーリを没収されるかもしれないと怯えて、私はあわててアメリカへ引き返した。アメリカの税関係員はメキシコの係員に負けず劣らず礼儀正しかった。連中はたぶん、あいつらが何の密輸をやっていたにせよ、すでに仕事を終えて、稼ぎで面白おかしく暮らしているんだろうから、いまさら捕まえても手遅れだと判断したに違いない。蛇足ながら、フアレスは西洋文明のかけらも示さないことによって、逆にその価値をはっきり物語ってくれる。

翌日、私たちはラスベガスへ向かった。楽しいな。この先には、せいぜい百から百十キロしか出していないのに、警官の姿にびくびくしている奴等がいるんだぜ。そいつの女房が、スピードを落として、とか言ってるところへ、夫の身長半分にも満たない物体がどこからともなく現われ、窓枠に乗せていた彼の左肘の骨の継ぎ目の真下を通り過ぎて、耳をつんざくようなドップラー効果つきの轟音をたてて去っていく。なんだなん



だ??!!! あれは一体何だったんだ? だが私たちの目には、はるか後ろで、縮みあがった男がハンドルをよじってバンパーをひくひくさせるのが見えるはず。こっちは、そいつが体勢を立て直す頃には隣の郡に入っている。

ボスはこのドライブ中の最高スピードを打ち立てた。百九十キロ。ニューメキシコ州デミングに入る I-10 号道路でのことだった。そしてローズバーグで国道七〇号線へ進路を変え、山を越え、フェニックス市東部のインディアンの特別居留地に入り、さらに延々と続く砂漠を越えてミード湖へ向かった。その間、嫌な人間には一人も会わなかった。その日に限らず、フェラーリ北米支社の困惑顔の受付け嬢から、カリフォルニア州のハイウェイパトロール警官、ヒュエンガ巡査に至るまでただの一人も。明るく正直で気さくな、社交性に富んだアメリカ人たちは、この車の速さを興味津々の目で見詰める。実に心あたたまる。これまでに会った人々のなかでも、とびきり素敵な人たちばかりだった。私は自分が共和党にも NRA (アメリカライフル協会) にも属していなければ良かったのに、と思った。そうすれば、すべてを肯定すべく今から入り直せたのに。こうして砂漠を走り続けているうちに、私は熱狂的な愛国心に駆られ、その感情はフーバー・ダムの手摺でついに頂点に達した(たとえそれが社会主義的な色彩の強い事業で、車椅子に座ったほうのルーズベルト大統領によって建設されたものであり、熊を殺したほうのルーズベルトの事業でないにしても)。うっとりするような弧を描いたこのコンクリートの上にフェラーリを止め、ドアを思い切り開けると、ドナ・サマーの「バッド・ガールズ」が、人工美のナイアガラの轟音や力強い発電機のばちばち、ぶんぶんという音を圧して夜に響き渡り、私は感極まり、恍惚としたエクスタシーに酔いしれていた。大きくて頑丈なエルドラドに乗った黒人が隣に停車し、外へ出て握手を求めてきた。「今朝、ニューメキシコで俺を追い越していったのを覚えてるよ」と彼。「見事な車だねえ。ずっと走りどおしだろ。俺なんか一日じゅう、百三十キロでターンパイクをぶっとばしてさ、ガソリンを入れるとき以外は一度も止まらずに走りずめだもんな。それでやっと追いつけたくらいなもの」。ターンパイクなんか使ってないよ、と私たちは言ってやった。山を越えて、昼食も食べて、午後の半分はフェニックスで渋滞につかまっていたのだ、と。「ホントかよ」と彼は叫んだ。「そいつはすげえや!」この神の創りたもうた緑の地球上の、どこの国にこんな人間がいるだろうか。さあ答える。このアメリカ以外の国の名を挙げやがったら、共産党のスパイってことで締め殺してやる。

その日は大晦日で、私たちはその晩MGMグランドで祝杯をあげた。残念ながらフェラーリは、ブラックジャックのテーブルに素晴らしいツキをもたらしてはくれなかった。だが私たちは翌日、シーザーズ・パレスで素晴らしい光栄に浴することになる。ボーイが駐車場に車を入れてくれるより早く、駐車場の係員がまだ五番目か六番目に並んでいた私たちのところへ飛んできたのだ。「お客様は、受け取りなど提示なさらなくて結構でございます」と係員は、ヘアピンのリターンをしてみせ、建物の真正面にそれを停めた。

さらにその晩、私たちはロサンゼルスへ通じるバーストウの坂道を上り、帰りの切符を買い、私はそこでボスを降ろした。ボスはそこからまた、堅実なビジネスの世界へ戻る予定だった。できれば、の話だが。私は翌日も精一杯フェラーリと別れを惜しみ、ピバリーヒルズあたりを走ったり、ミュルホランド・ドライブをうろうろしていたが、午後の五時まではコンプトンにあるフェラーリの西海岸本社へ車を届けなければならない。この車を返してしまうのはなんとしても惜しい気がしていたが、デラウェア州で初めて時速百五十キロの大台を越えてから感じ続けていた素晴らしい手応えは何ら曇らず、私はハーバー高速を走った。これこそ消えることのない永遠の栄光。キーを受付けのデスクに投げつけた時も、私はまだ快感の余韻にひたっていた。そして、後遺症を少しでも和らげようと、カー&ドライバー誌のツケで頼んでおいたリムジンに乗り込んだときも、私はまだ快感の余韻にひたっていた。そして、今でもひたっている。

だが、最後に悲しいニュースを。私と道中をともにしたこの素晴らしい車が出演を予定されている映画のタイトルは、「ハワイの黄色い雪を食べるな」というのだ。西欧文明も、思ったほど完成されきってはいないのかもしれない。

## 第 11 章

# ピックアップ・トラックの高速パフォーマンス

私はピックアップ・トラックの熟練ドライバーだ。こないだの土曜の夜、(警察で何もかも正直に話したように)ほとんど一滴の酒も飲まずに、ピックアップ・トラックを時速五十キロ(ホント! ほんとですって!)で走らせていたが、その時、鹿が道に飛び出してきて、慌ててかわした拍子に高速道路からはずれて森に突っ込み、六時間がかりでレッカー車に引きずり出してもらったのだ。

ピックアップ・トラックの熟練ドライバーとは、車を大破させた経験を持つ人だ。経験の浅いピックアップ・トラックのドライバーとは、これから車を大破させるはずの人だ。ごく経験の浅いピックアップ・トラックのドライバーとは、ピックアップをそもそも持っていない人だが、いずれ誰かのトラックを借りてエダツノレイヨウの密猟をしている連中に野生のアンテロープと間違われる羽目になるだろう。ピックアップ・トラックの最も特徴的な高速走行特性は、いまいる場所から厄介ごとの中へと一直線突っ込んでいく、そのスピードの素晴らしい速さにある。これはビールと関係がある。ピックアップ・トラックに乗ると、とたんにビールが飲みたくなるのだ。理由はよくわからないけれど、個人的には、ジミー・カーターが大統領になったせいだと言いたい。

つまり、アメリカ人はみな、常に南部人になりたがっている。だからイギリスからのカツラ姿の植民者どもは、こぞってデイビー・クロケットと共にケンタッキーに引っ越したわけだ。それも、まだデイビー・クロケットはテレビショーにさえなっていなかったの

に。また、上流階級の若きセオドア・ルーズベルトも「荒馬乗り」になろうとした。かのヘンリー・ジェームズでさえ、プア・ホワイトの従兄弟ジェシー・ジェームズと同じ姓を名乗っている。そして、まだヘンリー・ジェームズを読む人がいて、しかもヘンリー・ジェームズが生きていたら、彼はこう言っただろう。南部人の最大の特徴はピックアップを運転していることだ、と。だからミネアポリスやシンシナティあたりでは、誰もがピックアップを運転しているのだ。

それがジミー・カーターと何の関係があるのかって？ ジミー・カーターは我々の永遠の憧れ、南部人だった。ところが、彼は、同じ南部人でもしらふの南部人だった。我々はこれまでしらふの南部人なんかにお目にかかったことはなかったし、この先二度とお目にかかりたくない、ということを示すため、レーガンに圧勝させたのである。あれは実に恐ろしい代物だった。だからジミー・カーター以来、我々南部人は細心の注意を払って飲んだくれのレッドネックになるように努めている。そうしないと、大きな反っ歯の恐ろしい化け物が、国務省に巣食う人権擁護主義のヤフーどもになってしまうからだ。

というわけで、ピックアップは世界で唯一の、ビール誘導車となった。さあ、この誘導システムを一本試してみよう。さらに、もう一本。六本入りケースまるまる試そう。さあ車を出そう、ホッジ池にあひるがやって来たかどうか見に行こうぜ。わぁーお！ どっしーん！ リヤ・ハッチをロックするのを忘れてた。

## ピックアップーその設計と運転技術

ピックアップとは要するに、エンジン付きの裏手のベランダである。ピックアップもベランダも、ビールを飲むのに持ってこいの場所だ。どっちも立ち小便しやすいからである。地滑りシーズンのカリフォルニアの一部のベランダをのぞけば、ピックアップのほうが下り坂では速い。しかし、ベランダのほうが燃費はいい。

ベランダとピックアップの重要な違いは、サスペンションにも見られる。ベランダは、コンクリート・ブロックの基礎で、地面にしっかり据え付けられている。だがピックアップにはそんな洗練されたものは使用されていない。最近のピックアップのフロントは、完全独立サスになっている。ホイールは、それぞれ別々にフレームにボルトで直付けされている。リア・サスペンションは駆動用の車軸で、ロープで他の車のバンパーに結び付けら

れ、森から救出してもらっていることが多い。

このサスペンションの設計は、重量配分がフロントに百パーセント、リアに0パーセントとなっているピックアップにとって実に理想的なものである。この重量配分は、エンジンの配置による。エンジンは、ベランダに置く場合とまったく同じ位置にある。つまり、片方の端からぶら下がる格好になっていて、下にもぐりこみ、前日パティオの家具をひいた時にできた、オイル・パンの大きな窪みを見られるようになっている。

理論的には、重さがフロントに偏ると、激しいアンダーステアになる。だが、ピックアップの関係者は、浮かれ騒ぎで理論どころではなく、前方の重心はかえってオーバーステアとなる。このため、荷物を乗せていないピックアップがカーブにさしかかった場合、後輪にはまったくやることがない。たとえて言うなら、無職なのただ。従って、そいつは全重心の集まった前方へやってきて、仕事をくれとせがむ。その結果は、ホテルのてっぺんの回転式レストランと同じで、ただひとつ違う点は、それがホテルではなくつつるに磨り減ったスノー・タイヤの上にあることで、トラックはハイウェイのど真ん中で転覆してしまう。

こうしたハンドリング・トラブルを解消するため、ピックアップの荷台には敷きわらや園芸用の土、重さ五十キロ分のドッグフード、雪上車二台、カンパ材の丸太、息子のカブスカウト仲間や、ベランダに出ていたビール用中古冷蔵庫などがぎっしりと載せられている。そしてその結果、重量配分はフロント側0パーセント、リア側百パーセントに調整され、これにより、アンダーステアやオーバーステアとはまた異なるハンドリング・トラブルが生じることになる。すなわち、前輪が地面から完全に浮いてしまうため、ステアリングがゼロになるという問題である。

ピックアップのエンジンには、このサスペンションの設計と同じ考え方が採用されている。このエンジンは、基本的には一八〇年にジム・ワットが炭鉱から水を汲み出すときに利用していたのと同じ装置で、ただ、最近のEPA排ガス規制裁定に対応して、排気ガスを押さえるため、シリンダーごとにピンソールを浸したハンカチが詰め込まれている。ピックアップのエンジンには三つのタイプがある。シリンダーが足りない六気筒エンジン、シリンダーが多すぎる八気筒エンジン、そして四気筒エンジンだが、これはジョン・デンバーこそ正統派南部人で、自分たちはクジラと話ができると思い込んでいる人々が乗る「ミニ・ピックアップ」に採用されている。四気筒エンジンに関しては、言わぬが花。

だが、これらのエンジンには共通の欠陥がある。すなわち、イグニッションを切っても作動し続ける、いわゆる「ディーゼリング」という現象だ。本物のディーゼル・エンジンもピックアップに採用されているが、それらはそもそも始動しないことでこうした問題点を解消している。

だが、エンジンはどうでもいい。ピックアップの馬力はギヤボックスで発生しているのだ。少なくとも、ギヤボックスが実に騒々しい音をたてるので、そう思えてしまう。今は騒々しくなくても、じきにそうなる。酔っ払って、クラッチを踏まずに変速するようになればすぐに。

ピックアップには通常五つのギヤが備えられている。そのうちのひとつは、シフト・レバーに描いてあるのに見つからない謎のギヤである。それからローギヤ。これは森で立ち往生するのに最適のギヤである。森で立ち往生していない時には、森で立ち往生してしまった友人のピックアップを救出しようとしてバンパーをもいでしまうのに役立つ。一速は三速の最高速度と同じスピードが出せる。サードのほうで最高速はやや上回るが、シフトダウンしないとバンプも越えられないし、サードでもリッター三キロ。サードが果たして何のために存在するのか、未だ不明である。ピックアップの通常運転は、すべてセカンドで行なわれる。またピックアップにはリバース・ギヤが装備されているが、これは一速のみよりもさらに完璧に森で立ち往生するのに最適である。

ピックアップは実に頻繁に森で立ち往生するので、最近では四輪駆動が好まれるようになってきた。四輪駆動は、トラックを4WDに押し込みそこなうレバーか、あるいは4WDから出しそこなうレバーで操作される。四輪駆動は、ふたつだけでなく四つのタイヤの車軸が森にはまり込んでしまっても大丈夫なように出来ているのだ。

ピックアップの設計の最も画期的な特徴は、ブレーキがないことだろう。いや実際にはハンド・ブレーキがある。これを使うと、運転者のいないピックアップが坂を転げ落ちて混雑した交差点へまっしぐらに突っ込んでゆく、といった事態を意図的に引き起こせる。また、ブレーキ・ペダルもあるが、これを踏んでも、森に突っ込む前にもっとビールを飲みたい、という抗いようのない欲求を運転者に生じさせるだけである。しかし、ピックアップを停止させる方法はいくらでもある。そのほとんどは例の森と深い関係があるものばかりだが、時には後ろのバンパーにぶら下がっているスペア・タイヤがずり落ち、引力を発生させる場合もある。また、ピックアップは実に頻繁にガス欠をおこして止まる。そ



れもバーの真ん前で。これはあなたが奥さんにいいわけしていた通り。

このことから、ピックアップと飲酒がいかに切っても切れないものであるかがわかるだろう。だって、ピックアップというのはまるで酔っ払いが設計したみたいだ。その完成度を見ると、酔っ払いが組み立てたのも明らかだ。したがって、筋から言って、ピックアップは、我々のような酔いつぶれかけた人間によって運転されるべきなのだ。結果として、現在最も一般的になっているピックアップの運転の仕方は— ご名答！ — 飲酒運転である。例えば時速百キロできついカーブを曲がって、その時気がつくわけだ。もし呑みだくれていなかったら、そもそもそんなカーブを切ろうなどと思えしなかつたらう、と。さて、あなたはレッカー車を呼んでくれ、私は酒を調達してくるから。

## ドライビング・テクニク

ピックアップの高速走行技術を身につけるのはなかなか大変だ。まず第一段階は、正しいドライビング・ポジションをとることだ。片手でしっかりとルーフのドリップ・レールを握ること。こうするとシートベルトやラップ・ベルト、エアー・バッグが不要になり、バンパーに「ピストル反対」ステッカーを貼った車に向かって中指を立ててみせることができる。そして次に、どのギヤに入れているか（前に指摘したようにセカンド・ギヤのことである）を常に確認できるよう、もう片方の手をシフトレバーのノブに置いておく。さて次に三番目の手を……

恐らく、この辺で幾分厄介な局面が生じてくるだろう。ともかく、ビールの缶が倒れないように、しっかりと膝の間に固定しておくことが肝心である。

次の段階は、セブン・イレブンへ乗り付けて、もっとビールを仕入れてくること。車道へバックして戻る時、ズボンにぶちまけてしまったビールを拭き取るには、ダウンベストを使うといい。

第三段階は、コーナリング・テクニクである。ピックアップに乗り、高速でカーブを曲がるには三つの方法がある。第一は伝統的なレースカー・ドライバーの「スロー・イン、ファスト・アウト」を使用することである。フル・スピードでカーブに突っ込み、直線部分で思い切りシフトダウンしながら、無駄なポンピング・ブレーキをする。そして一気に、カーブの度合いに応じて目一杯ハンドルを切る。カーブの内側の、一番奥の部分の





最初のトラックが大破した際、新しい

トラックに買い代える費用 9 3 6 0 . 0 0

トラックを運転しない妻のための

ウサギの毛皮代 8 7 5 0 . 0 0

総額 2 7 4 7 2 . 8 9 ドル

これは実に大きな出費である。しかし一方で、ピックアップはほとんどメンテナンス・フリーである。実際、ピックアップの修理はすべて長い鎖一本で済む。鎖の一方の端をピックアップに結びつけ、もう片方の端を地面に放り出し、本物の車を買に行けばいい。

また、ピックアップが本当に役に立つかどうか知りたいだろう。残念ながら答えはイエスだ—こいつはまったく、役に立ちすぎる。

効用の比較

ピックアップ対普通車

[用途]	[ピックアップ]	[本物の車]
未開拓地の走行	うん、明日やるよ	本物の車なら、そんなことはあっさり断れる
ごみ捨て場へ ごみを運ぶ	本当だってば、 明日やるよ。 今、ファルコンズと ダラスの試合なんだ	こっちの善意にすぎる しかないな
家具の運搬	寝具の五点セットと 高価な東洋の絨毯を 載せるスペースあり	家具はいやという ほど持っているか ら、これ以上いら ないよ

だが、すべてが語り尽くされ、やり尽くされた今になって考えてみると、「イージーライダー」のラストでピーター・フォンダとデニス・ホッパーを射殺したのが、フィアット・ブラーバに乗った男たちだったら、これはえらく間抜けに見えたはずだ。ピーター・フォンダやデニス・ホッパーのような奴等を射ち殺せないんなら、一体何のための人生だ？ だいいち、ひっきりなしに森で立ち往生しなければ、あなたは自然の深く驚異的な美しさに感激することもないだろう。そして、ビールをたっぷり持っていけば、倍は感激

できるぜ。

## 第 12 章

# 自転車の脅威に関する冷静かつ論理的分析　そしてわが国の道路を走る、この恐ろしい危険を規制し、許可制にし、できれば完全に抹殺するために求められる行動に関する検討

わが国は自転車の異常発生に悩まされている。どこもかしこも、公道には眩暈がするような安定性の悪い、ゴムと針金と安っぽいスチール・パイプでできた妙ちきりんな乗り物が氾濫している。このちゃちな機械に乗っている連中は、一時停止や赤信号などまるで無視している。連中は駐車している車の陰から平気で飛び出し、駐停車禁止線を突っ走り、横断歩道をびゅんびゅん横切り、私のように法を遵守している善良な市民の爪先を押しつぶす。

町中では、街灯、街路樹、標識などはチェーンやロックをふんだんに使った自転車のために醜悪きわまりないものになっている。「精神薄弱者用の車椅子」に愛着がありすぎて、どこへ行くにもそいつを引きずっていかなければ気が済まないサイクリング狂は、エレベーターにまでそいつを持ち込んでくる。

田舎へ行けば行ったで、カーブを曲がったり峠を越えようとするたびに、集団自殺の編隊のように道幅一杯に広がっている、息を切らした自転車の群れにお目にかかることに

なる。

荒地ですら、我が物顔で走る自転車の群れから逃れることはできない。今やオフロード用の自転車や、「BMX」とかいう恐ろしい競技まで出現しているのだ。

自転車の不格好な形態と原始的な機構は見るに耐えない。汗と埃まみれの自転車ライダーは鼻に耐えない。そして、自転車の存在そのものが、理性と知恵にとって堪え難い。

## 自転車反対派の主な言い分

### 1. 自転車はガキっばい

自転車には自転車にふさわしい居場所というものがある。それは、夕刊を配達する少年の尻の下である。子供は小さいので、自動車のダッシュボード越しに外を見ることもできないし、交差点で停まったときにオートバイを倒さないでおくのは難しい。この点で、自転車は子供にはふさわしい乗り物だ。しかし、いい歳した大人が、スーツにネクタイ姿でせっせとペダルをこいで職場に向かうってのは、どういうことなんだろう。そんな年になってもまだ食うために新聞配達をしていると考えるべきか？ そうでなければ、まだおもちゃで遊んでいるような医者や弁護士、エリート・サラリーマンが本当にこの世に必要なのだろうか。聖パウロのコリント人への第一書簡の一三章十一節に次のような言葉がある。「われ、人となりては童子のことを棄てたり」と。彼は、「人となりては童子のことを棄て、フランス及び日本よりもっと精巧で高価な童子のことを手に入れたるなり」とは決して言っていないのだ。

心に浮かぶこうしたイメージを発展させてみると、自転車の愛好者たちがいずれ、子供用の赤いワゴンに片膝を突っ込んで職場に向かうようになってもお不思議ではない。

### 2. 自転車は品位に欠ける

ある程度の幼稚さなら目をつぶることもできる。だが、人前で公然と頭を膝の間に突っ込み、尻を振りながら走るのには、誰にとっても許容できる行動ではないはずだ。

大人が自転車にまたがると、どうしても間抜けにみえてしまう。特に女性のなかには、間違っても自転車に乗ってはいけないタイプというのがある。それは、肥満型の体型の女性である。自分の足で立っているぶんには、なかなか魅力的だ。古典的な美しさに恵まれ、大昔からの官能、母性、豊穡のシンボルだ。だが自転車にまたがると、彼女は物笑い

の種だ。

人間の品位の喪失が、重大かつ普遍的な問題となっているこの世の中で、自らの尊厳を自発的に捨て去り、最高でも愛馬ロシナンテにまたがるドンキホーテ、通常はメーシーズ百貨店の感謝祭パレードの参加者まがいの格好で、その辺をうろつきまわっている連中について、何をかいわんや。そんな連中が信用できるだろうか？ 自尊心さえ持ち合わせていない連中が、他人を尊重できるだろうか？

### 3、自転車は危険である

自転車は重心が高すぎ、ブレーキが効かず、ライダーを保護する装置が何もない。さらに、とても堅く鋭利な部品で出来ているため、衝突事故を起こした場合、人と自動車の塗装に大きなダメージを与える。自転車は危険きわまりない乗り物なのだ。

無論、危険それ自体が悪いといっているのではない。モーターボート、レーシングカー、優れたショットガン、ウィスキー、そして愛。これらはすべて危険な物である。だが自転車は危険であるうえ、すこしも面白くない。自転車ではキジも撃てないし、ロープをつけて水上スキーをすることも、時速二百五十キロで疾走することもできないし、ソーダで割って飲むことすらできない。それに、自転車の上で愛を交わすなど、考えただけど危険だ。この十速の流し用水切りで出来ることといえば、疲れて体の節々を痛めて、転がり落ちるぐらいのものだ

面白くもなく、ただ危険なだけという点で、自転車は心臓の切開手術、ベトナム戦争、サウス・ブロンクス、そして離婚と同じカテゴリーに属する。分別のある人なら、これらの事柄を極力避けようとするものだ。

### 4、自転車は非アメリカ的である

我々アメリカ人はスピードとパワーを崇拜する国民である。そしてそれには、十分な理由があるのだ。パワーがなければ我が国は今もってイギリスの植民地で、みんな失業しているはずだ。それに、スピードがなければロサンゼルスへ行って映画事業に携わり、富と名声を手に入れるのに何か月もかかってしまうだろう。

自転車のようにのろくて無気力な乗り物は、我が国にはふさわしくない。チェコスロバキアにでも行け。

### 5、私は自転車に乗る連中が嫌いだ

少なくとも私はそう思う。実際に自転車に乗るような人が知り合いにいるわけじゃな

い。だが、自転車に乗っている連中というのは、まるで有機栽培キチガイで、政府の就寝時間規制を提唱し、アメリカの対外政策がユニセフに牛耳られることを願っているように見える。そんな連中は監禁してしまうべきだ。

私の誤解なら、申し訳ない。自転車に乗っている連中は、ひょっとしたらニューヨーク株式取引所の職員とかメソジスト教会の司教、引退した海兵隊の演習教官など、きわめて堅い職業についている人ばかりなのかもしれない。しかし、白昼堂々阿呆のような顔をして自転車を乗り回しているという事実は、いずれにしてもこいつらがガイキチで、監禁されるべきだということを明白に示している。

#### 6、自転車は不公平である

自転車は普通車やトラックと同じ道路を使用している。でも、ガソリン税を払わず、ナンバープレートも持たず、保険にはいる必要もなく、またDOT、CAFE、NHTSAなどの規制対象外である。それに、ドライバーのための試験や、六五才以上対象の視力テストもなく、車検も不要、警察に脅されて酒気おびテストも強制されない。おまけに、ネズミ取りに捕まることもない。

自転車ライダーが、人々の日常生活に対する政府の干渉を支持しているという事実（上記第5項目を参照されたい）を考えれば、自転車に対するこの特権は、不公平なばかりでなく公然と暴動。

法の下での平等は民主主義の根本理念である。自転車は八〇リッター入り燃料タンクを装備すべきだ。自転車には一二ボルトのバッテリーとしっかりとしたテールライト、方向指示機をつけるべきだ。シートベルト、エア・バッグ、防弾ガラスの窓をつけるべきだ。そして自転車に乗る人には全員、年に一度の厳しい障害チェックを受けさせ、ナンバー・プレートを首からぶらさげさせて、もう一枚をズボンの後ろに貼りつけることを義務づけるべきだ。

#### 7、自転車の運転はいい運動になる

そして、尻尾で木々の間をぶら下がってまわるのも、それに劣らずいい運動である。人類は四百年以上もの年月を費やし、肉体を少しでも使わないようにするための発明を重ねてきたのだ。今になって、足で漕ぐフラフープにまたがった、反動的な一部のグループが、我々に足の屈伸運動をさせ、歯ぎしりをせ、まるで更新世のサバンナ地帯を剣歯トラに追いかけられているみたいに肺を焼き付かせようとしている。我々がキャデラック・

クーペ・ド・ビルの創造にどれほど大きな希望を、夢を、努力を、知恵を、強い意思を注いできたか考えてみるがいい。自転車の運転者たちは、そのすべてを歴史のゴミの山に捨てさせようとしているのだ。

## 自転車の脅威にどう対処すべきか

有り難いことに、なにもしなくていい。ストレスのたまったトラックの運転手や憤りにかられたタクシー・ドライバーたちは、自転車を一般道路から追い払うのに大いに貢献してくれている。怯えた老婦人たちは、歩道で自転車の群れとすれ違うとき、スポークに傘の先を突っ込んでやる。そして我々は皆、不運にも道端に停めてある自転車を見たら手当たり次第に転倒させることができる。

自転車は静かで軽いため、普通の自動車に慣れた人間の目や耳にはとまりにくい。人々は自転車の真ん前に車を出したり、自転車の通りしなに車のドアを開けたり、自転車がうようよしている交差点に車で突っ込んだりしてしまう。ちゃちな自転車や、防具を何もつけていないライダーは、こうした事態に対してまったく無防備である。それは、自然淘汰の単純な問題だ。自転車は、向こう十年以内に絶滅する。さぞかし清々するだろう。





## 第 13 章

# ラリって尺八されつつ猛スピードで とばしつつドリンクをこぼさない 方法

スリルを味わいたいとき、ある人はポーカーやダイスを好み、またある人はスカイダイビングやサイ狩り、氷壁登山を好み、犯罪や結婚生活に走る人もいる。でも、私なら酔っ払って馬鹿みたいに車をぶっ飛ばすのがいい。胃袋にシバス・リーガルをボトル半分、鼻にはコカインを一グラム、助手席でかわいいティーンエイジャーの女の子がチューブ・トップを脱ぎ捨てている横で、郊外道路町を時速百五十キロでとばす。これに勝る快感があるもんなら言ってみろ。これに匹敵するスリルを味わうなら、メキシコ空軍が丸ごとLPG貯蔵施設に胴体着陸する場面でも見るしかない。それ以上に面白いことを体験したら、間違いなく感覚が過負荷になって、そのまま死んでしまうはず。いやホント。

だが、ちょっと待った。こういう行動の組み合わせが、なぜそんなに面白いのかを分析してみよう。ただし、かわいいティーンエイジャーが助手席でチューブ・トップを脱ぎ捨ててる部分は置いておこう。とりあえず、そこんところはさておき、体験によって引き起こされた中枢神経系の興奮と電柱への激突という感覚上の最終的な成果物に対し、肯定的な感情的価値を置くことを正当化するような、心理的な要因というものを考えてみよう。そんなことをして、ホントに楽しいのかね？ おまえがこんな真似をしてると知ったら、お母さんはどう思うね？ たぶん泣いちゃうよ。絶対に。そして、これでそれがホントに楽しいことがわかるうってもんだ。母親を泣かせることは、すべて楽しい。ジークムント・フ

ロイトが論じ尽くしたことだ。みんな知ってる。

無論、こんな真似して若い人生を無駄にするのは恥ずべきことだ。呑んでくれて車をとばし、両足をハンドルにひっかけ、フロア・マットの上ではガールフレンドがうずくまってズボンのジッパーを歯でくわえ下ろし、空の酒瓶でアクセルを叩いてるなんて。でも、何かリスクを負わなけりゃ、スリルなんか味わえない。それに、こんな真似して若い人生を無駄にするのは恥ずべきことかもしれないけど、こんな真似して老いた人生を無駄にするよりずっとクールだ。例えば、五八才の頑固親父がヤクをくらって、ラッシュアワーの渋滞道路でデス・レース2000を始めたって、クソ面白くもない。そいつが何を賭けてたわけ？ どうせ、何のガンで死ぬのか宣告されるのを待ってただけの人生だろうに。でも、もしキミみたいに若さと才能に溢れ、人生のありとあらゆる可能性に恵まれた男と、未来のシェリル・ティーズ級の瑞々しさと美貌を兼ね備えた女　この二人がハンサムな頭を寄せあい、がけのゲームのサイコロに命を張るなら　それこそスリル！ 年寄りが命懸けのことをしないのはそのせいだ。決して臆病なわけじゃない。みみっちい賭けで自分の尊厳を汚したくないだけなのだ。

さて、いろんな人がこう言う。「P・J」、車をとばすのが好きなんだって？ アメリカ・スポーツカー・クラブみたいなきちんとした組織に入って、レースに参加したらどう？ そうすれば、人気急上昇中の迫力あるスポーツを、ちゃんとしたルールに従ってやれるし、思いっきり車をぶっとばせるじゃん」と。いやだね。だいたいあの連中ってのは、アルベルト・アスカリの葬式にどんなネクタイを締めてったか、なんてことを話題にしたがるような、ヘドのでそうなやつらばっかだ。それに、酒を飲んでると運転させてくれない。あんな車に乗って、派手な激突をして、横転して、火だるまになって焼け死ねってわけ？ 素面で？ 私を気遣いだと思っているに違いない。こわーい。私はベロベロに酔っ払わないと、車をとばすことを考えることもできない。いつももらしそうなほどびくびくしていて、スカっとするスリルなんか味わえるもんか。怖いのは面白くないじゃないか。恐がってるときにスカっとするスリルを味わったって、全然面白くない。「イリアッド」の主人公たちを見るがいい。実にスカっとするスリルを味わっていたけど、怯えていたか？ いや。酔っ払っていただろう。機会のあるごとに。私だって同じ。誰かがカクテルを持ってくるまで、車で凄まじい事故を起こしたりするもんか。

それに、車の運転に酒は欠かせない。酔うと体が柔軟になるので、事故にあった場合、

体が衝撃に逆らわないので、打撃が軽くてすむからだ。例えば、泥酔してアディロンダックを車で走った男の話を聞いたことがある。その男はバスと接触して、別の車の正面に押し出され、はねとばされて橋の上から五十メートル下の谷底に転落した。まあ、どのみち死んだけど、もし泥酔して体が柔軟じゃなかったら、死体はもっとボロボロだったはずだ。そうなったら、遺体の確認に死体置場へ駆けつけた奥さんのショックも、もっとひどかつらさると思うよ。

でも、酒よりもっと大切なのは、ちゃんとした車に乗ることだ。すごく扱いやすい車を選ぶこと。これは極めて重要で、論議もいろいろ分かれている。扱いやすい車とはどんな車か。フロント・エンジンの車が良いと言う人もいるし、リア・エンジンのほうが良いと言う人もいる。私は、借りた車が良いと言う。借り物ほど扱いやすい車はない。借り物なら、何の心配もなくとばせるし、急カーブも曲がれるし、猛スピードで前進中にギヤをバックに入れても平気だ。車庫入れや幅寄せも、まわりを見ないでやれるし、トランクをアイス・ボックスとして利用することも可能だ。それに、借りた車は走る場所を選ばない。ぬかるみ、雪道、水中、森林など、借りた車は、どこへでも乗っていける。まあ、乗って帰れないこともあるけど……でも、きみの知ったこっちゃないよね。

だが、本当に扱いやすい車には、他人の車であるという以外にもっと重要な条件がある。大きいこと。小さな車では女の子が服を脱ぐのに窮屈な思いをするから、これは車の扱いで極めて重要な要素のひとつなのだ。それと、どんな麻薬が常備してある？ ほとんどの人は覚醒剤か、ウイスキーをたっぷり混ぜたコカインをやって車に乗るのが好きだ。コカインは赤信号を無視して突っ走ったり、右側を走るトラックを追い越す際に求められ、必要とされる自信を与えてくれる。だが、ヘロインなどのダウンナーやクエイルド、コデイン入り咳どめシロップも無視してはいけない。高速スピンを演じたり、バックで木につっこんだり、あるいは人類や地球なんかクソくらえ、みたいな一般的感情を得たい時、キツイ鎮静剤に優るものはなかなかない。

でも総じて、最も重要なのは車の大きさだ。すごく大きな車で何か面倒が起きた場合（例えばドライブインであやをつけてきた、非常識な若者の群れにうっかりつっこんでしまふとか）その出来事ははるか遠く、広大なフェンダーの向こうあたりで起きているからだ。アフリカの内戦と同じで、あまり気にならない。反対に、おもちゃみたいに小さな車で何か面倒が起きたら、それはモ口に鼻先で起こる。完全に巻き込まれて、あれこれ悩

みつくすはめになる。ちっぽけな車を運転するのは、詩を書くような繊細な少女になるのと同じだ。生きるってつらい、耐えられないわ、というわけ。いずれベッドルームに閉じこもって、死ぬまで日の目を浴びないソネットを書くようになるだろう。もっとも、そんなちっぽけな車を乗り回してたら、「死ぬまで」といっても結構すぐだろうけど。

ラリったイカれた女の子を乗せて、酔っ払って運転するための基本的な手口について考えてみよう。まず、イカれた女の子をナンパするときの注目ポイント：ピアスした耳にイヤリング五、六個、変な靴、白い口紅、極端など痩身、刈り上げ、クロームと革の服。すぐ泣いたり、すぐ妊娠しそうな子や、仕事を持ってる子は避けるように。こういう子たちは、車の中でいろいろ変わったことをやりたがるけど、絶対に後部シートでしかやろうとしない。後部シートからハンドルを扱うのはすごく難しい。それに、すぐ結婚を迫る。でも、それ以外の女の子は……何をしでかすか、予想もつかない。昔、体重四十キロぐらいで、パンティが（はいていればだけど）丸見えになるほど短いスカートの女の子とつきあってたことがある。当時、私はポンコツの古いメルセデスに乗っていて、私たちはひどいみぞれまじりの嵐のクリスマス・イブに、町から八十キロも離れたへんぴな所を走っていた。道は目茶苦茶、カーブや大きな溝だらけ、私はベロベロ、車はひっきりなしにスリップして横滑りする。そして、私が大きな凍結路面ですべって、反対車線から外れようと狂ったようにハンドルを回しているとき、彼女はこう言った。「あたし今日、下の毛を剃ったの。触りたい？」

これはまったくのホント。三十分後、ガasketがとんで、私たちはむやみと永いこと薄汚れたモーターで過ごす羽目になったんだけど、彼女ははるばる二キロもぬかるみを歩いて酒屋にでかけ、ありとあらゆるワインを仕入れてきて、後でそのボトルネックでいろいろやって遊んだ。だから、それなりに楽しかったけど、ただ、この時メルセデスを駐車させたガレージが焼け落ちたので、私は保険金でオートバイを買ったのだった。

ところで、オートバイの好きな女の子は何でもやる。何でもというのは、考えつくことなら何でも、という意味である。このふたつの間には微妙な違いがある。まず第一に、オートバイに乗って酒を飲むのは難しい。なにしろ、グラスを置く場所がない。ましてコカインは問題外。そして私だけかもしれないが、マリファナは神経過敏になる。マリファナを吸うと、いきなりバイクを止めて、一服して頭上の大空の広大な美しさや、太陽と雲の織りなすゆったりとした豊かさ、木々を渡るそよ風を堪能しはじめてしまう。つまんな

そうでしょ。さらに、オートバイを運転しながら若い女の子と「いたずら」(あくまでも聖書的な意味で)のは、彼女がパンティを脱いでハンドルを握り、こっちが後背位かなんかで攻めない限り至難の技だし、これだって簡単に言うけどすごい芸当だ。それに、オートバイにまたがったノーパン娘はハイウェイ・パトロールを引きつけるので、結局バイクを降りるまで何もできないことが多いし、その頃には、二人とも入院してるかもしれない。オールズモービルに乗った婆さんが、われわれの前に飛び出してきたときがそうだった。入院していても、相手の娘は思いつく限りのことをやりたがってたけど、ただそこには医者が出て、体じゅうに消毒液を吹き付け、ワイヤー・ブラシでこっちの顔の砂利を落としていたので、ちょっと集中できなかった。というわけで、悪いことは言わないからオートバイはやめとけ。乗るなら絶対に大型車だ。

ふつう、クレイジーな女の子を乗せずに高速運転をする時はハンドルを使用する人が多いので、パワー・ステアリングを装備していることが望ましい。パワー・ステアリングがないとハンドルを切るのは一仕事だし、仕事をしたいなら就職するだろう。ハンドルってのは、人差し指一本で動かさなければならない。そうして、ハンドルを好きなだけ切ったら、指を放せばいい。ハンドルは自然に勝手な位置で止まってくれる。たったこれだけ。私道に入るときや急カーブを曲がる時は、余分にハンドルを切ように。そしてもうひとつ、重要なアドバイス。瓶を投げ捨てる前には必ず窓を開け、駐車している時以外には、決してフロントガラス越しに空き瓶を投げ捨てないこと。

さあ、きみはここ六日間飲み続けており、クリーブランドまでバックで走り続けるという賭けに挑戦し、しかもトランクの上にはおフェラしてもらってる相棒がいるとする。さあ、正直になろう。そんなことをしたら、いずれ事故に会うよね。ここまでは本当。だからといって、ただ漫然と事故がやってくるのを待ってちゃだめだ。今すぐ出かけて、自分から事故に飛び込んでいかなきゃ。そうすれば、きみは事態を自らの手で掌握していることになる。

恥ずかしいことに、事故というものについて誤った認識を持っている人が多い。まず、事故は思ったほど痛いもんじゃない。だって、ショック状態で痛みを感じないことが多いし、ショック状態でなければ、それは死んでるってことで、死んだら、痛みなんか少しも感じないからだ。さらに、事故はすごい話のネタになる。私の友人(自動車業界の大物)は、五十年代にMG-TF(オープンカー)を横転させ、逆さで二百メートルスリップし、

その後一年間、顔の整形中はまぶたがなく、頬骨にスチール製のピンを通していた。無論、当時は面白くもなかっただろうが、今、彼にその話をさせるとすごいよ。わくわくするような話だ。特にディナーの席なんかだと。それに事故って、ガラスが割れたとか血が噴き出たとかいうだけじゃないんだよ。それどころか、見事な接触事故はほとんど宗教的な体験だ。薄い金属のボディは壊れたり割れたりしない。二台の車が接触すると、それらの車は液体を噴出しながら歪み、形を変え、その様子はまるで二匹の巨大な金属製のサメが原始の海の永遠の夜のなかで交尾しているかのように見える。ただし、十分に麻薬をやっていれば、の話。それと、すごくきれいなライトが頭のなかでいっぱい点滅しているのが見えることもある。

事故を確実に起こす方法のひとつは、基本的な「密造酒業者」ターンあるいは「酒の密売業者」ターンである。時速百から百二十キロで突っ走り、ギヤをニュートラルにしてハンドルを左いっぱい切る。そしてブレーキを一気に踏み込んで一時的に急ブレーキをかけ、左手でハンドブレーキを思いっきり引っ張る。こうすると車は右回りで完璧に一八〇度スピンし、ドブに落ちるか、もしくは猛スピードでやってきたトラクター・トレーラーに衝突する。(酒の密売業者式ターンは乾いた路面でもできるが、一番成功率の高いのは、砂利道もしくは幼い子供の上でやる場合である。) または、車が逆向きにスピンした瞬間、右いっぱいに逆ハンドルを切り、そのまま三六〇度回転するまでスピンを続け、元と同じ方向へ車を進めることもできる。ただしこの場合、そもそも何もしないでそのまま直進していたほうがずっと簡単だっただろう。ただし、度肝を抜いてやりたいと思う相手—たとえば運転免許の試験官とか—を隣に乗せている場合は別だが。

ジョー・シェンクマンという旧友が、たまたま車を大破させる別の方法を書き送ってくれた。ジョーはバーモント州北部でささやかな休暇を過ごしていた(そして、自動車による計画殺人に関する法律上の規定がはっきりするまでそこに滞在するつもりらしい)。彼は、そこで出会ったひとりの男についてこう書いている。

.....そいつは三十台以上も(意図的に)車を横転させ(これは彼が言ってるだけじゃない。近所の住民の証言もこの話を裏付けている)鼻の骨折(三回ほど)と肩に軽い青あざを作っただけですんでいる。その方法は、密造酒業者ターンをしながらブレーキを踏み続けることだ。すると、スピードに応じて車はゴロゴロ横転する。ふつうは四、五回ぐらい。スピンしている間、体のはじき飛ばされないように片手でシートを



つかみ、もう片方の手でしっかりとルーフをつかんでいなければならない。一回転目で屋根が潰れそうだったら、シートをつかんでいた手を（助手席のほうへ激しく投げ出されるから、そちら側の）ダッシュボードの下へ滑らせ、体ごとその下にもぐりこむ。そうしたら、あとは待つだけだ。体を思いっきり突っ張らせて、雷のような物凄い音がおさまるのを待つ。当然ながら、これを実行するには酒の力が大いに役立つ。もし十分の一秒でも迷いやためらいがあったら、間違いなく死ぬ。

このシェンクマン自身も、なかなかのドライバーだ。残念なことに、彼の強みはニューヨーク市内の街乗りで、ニューヨークというのは特殊な条件がありすぎるので、ここで取り上げるだけの余裕が、時間的にも字数的にもない（ただ、この街のいいところは、新品のキャデラックの婆さんを脅かすのがすごく簡単だということ、悪いところは、プエルトリコ人は言うにおよばず、黒人までが本当にナイフを持ち歩いているってことだ。そして、それ以外のやつに追突すると、みんな弁護士だったり、マフィアの女房だったりするのだ）。しかし、ジョーはもともと南部の出身で、彼が接着剤をハーハー吸うなどのシンナーやトルエン遊びを覚えたのは、その生まれ故郷でだった。これはかなり強い幻覚性があり、これをやると、たとえば自分の車が高架道路のガードレールを飛び越え、貨物列車の平台型貨車のうえに着地し、そのままシュリーブポートまで運ばれ、船員にホモのレバノン人がうようよしているリベリア行きの貨物船にさせられてしまう、といった幻覚に襲われ、気がついてみるとすべてが現実のことだったりする。ジョーはジャズと競馬の好きな商業アーティスト。好きな色はブルー。

コンタクトの下にゴミでも入らない限り、まばたきひとつせずに奈落を見据えている時はどんな音楽を聞くべきか、という問題については意見が分かれる。FMのクラシック専門局をかけたがる奴には要注意。そいつなら、リムスキー・コルサコフをかければドラマチックになるとか言い出しかねない。外国映画みたいに。軟弱、軟弱ウ！ この手のヤツの高速ドライブなんて、せいぜいブランデーのソーダ割りを一杯ひっかけ、時速百三十キロで夏の山荘へ向かうぐらいのもんだ。本当のスリッパ跡のアーティストなら、もっと陽気でアップテンポの曲を好む。たとえば「ディスコ・マウンテンの夜」とか「ブギウギ・ウギ」、あるいは何か、かわいい十代の女の子がケツを揺らしながらリズムを取れるような曲を。そう、彼女を忘れちゃおるまいね？ それなら、いまいましいテープデッキに何がかかっていようと、きみが気にすることはない。熱くうなるエンジン音、腹に響くエキ

ゾースト、ビールの空き缶のがちゃがちゃいう音、蕾のように愛らしい彼女の真っ赤な唇がたてる、ピチャピチャしたおしゃぶり音。きみの耳が必要とする音楽は、これだけ。もっとも、どうしてもというなら、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのファースト・アルバムのB面がお勧めだ。それから、短いドライブ旅行もだめ。高速ドライブのマニアにとっては、持久力がすべて。特に、あの有名なナンパのせりふ「メキシコに行かない？」を使ったことがあれば。特に、ボストンあたりでそれを使ったことがあれば。それに、十代の女の子は実に、実に長い時間一睡もせずに楽しみ続けられるし、それは警官や女の子の両親も同じだ。だから、ひたすら踏み込むこと。なにが悪い？ ホント、永遠に走り続けて何が悪い？ 友人がある時、大勢の連中を乗せてオークサカからシンシナティまでノンストップで走ったことがある。ノンストップといっても、給油の間だけは停車したが、その間も、誰ひとり車の外には出さなかった。みんな窓からシヨンベンさせたんだが、女の子が走っている車の窓からシヨンベンするのを眺めるだけでも、そのドライブの価値は充分あった、とのことだ。

太ったガールフレンドを乗せれば、たっぴりとアンフェタミン（覚醒剤）を服用することになり、完全なノンストップ走行をすることができる。ただひとつ問題なのは、二、三日も運転しつづけると、そのうち道路の上に変なものが見えてくるようになることだ。たとえば九本脚で、身の丈八メートルほどの鱗つき怪物とか。だが、アメリカには九本脚で、身の丈八メートルの鱗つき怪物なんかほとんど生き残っていないんだから、きみはそいつにまっすぐつっこめばいい。どうせたぶん実在しないんだし、仮に実在していたにしても、そいつを轢き殺せばお国の役に立ったことになるのだ。

でも、この終わりに待っているのは？ こんな気狂いじみた生きかたの果てに待つのは何か？ 自動車事故で死んだ連中を思い出そう。アルベール・カミュ、ジェーン・マンズフィールド、ジャクソン・ポロック、トム・ペインまあ、トム・ペインは実際は自動車事故で死んだのではないけれど、もう少し長生きしていたら絶対にそうだったはず。あれはそういうタイプの男だ。ともかく、死というのが誰でも真っ先に思いつく答だろう。若くして突然迎える壮絶な死。そんな単純だったらねえ。まったく、みんなこぞってジェームス・ディーンみたいに、ポルシェのファクトリー・レース用に特注火だるまアルミ合金車に乗って、飛び出すだろうに。潰瘍や痔もなく、拡大するウエストもなし、インボや入れ歯の心配もなし……ドシーン!! ガシャーン!! さあご注目、ペーパーバックの版權、オー



クション、映画化権の販売をお見逃しなく！ でも、そうはいかない。まさか。実際には、きみは隣のかわいい十代の女の子に惚れちゃって、それもコンドーム一トン分ぐらい派手に惚れて、気がつくと結婚して、自分自身の十代のかわいい娘（今頃は、ポンティアック・トランザムの中で触りまくられてるはず）と、六けたの住宅ローンとブロンクスぐらいの大きさの肝臓、古き良き六十年代には見られなかった治安判事なんかに囲まれているのだ。

真実はつらいけど、たぶん自分でもわかってるだろう。もうちょっと勇気があって、もうちょっと意志が強ければ、今頃は死んでられたのに。でも、そうそううまくは行かないよね。



## 第Ⅳ部

# マナーと習慣



## 第14章

# ハリウッド・エチケツト

「ハリウッド」って、もちろん場所じゃない。エンターテインメント産業の同義語でもない。あれは、まっとうな市民がちゃんと生活を営む立派な産業分野だ。真のハリウッドとは、個人の自由を発狂するくらい突き詰めた代物のことである。家族のプレッシャーや集団社会の習慣、社会的責任、公民としての義務、良いセンスなどの束縛を受けず、金や社会的異動能力によって解放され、やりたい放題のことができる、どこにでもいる男や女をさす言葉である。だれにでも、多少はこの気があるものだ。

エンターテインメント産業はハリウッドのためにある。何故かという、エンターテインメント産業は山ほどの現金を生み出すからで、また一般大衆はエンターテイナーに対して実に寛大だからである。ハリウッドはロサンゼルスに存在するが、それは自由と金が一気にコケた場合、ロサンゼルスは暖かいので砂浜で寝られるからだ。他の時代には、他の場所や職業がこうした特性を担っている。十八世紀には、カリブの海賊の巣窟がこういう役割を果たした。メディチ家出身のローマ教皇時代には、枢機卿会だった。

面白いことに、大量の富を持ち、束縛がほとんどなくなっても、人は必ずしも他人に悪さをしてまわったりはしないものらしい。ハリウッドでは、むしろ自己破壊的な悪さがほとんどだ。一方、善行は「優しい慈悲」のような数少ない映画に限られている。こうしてハリウッドは、ホップス流保守派とルソー流リベラルの両方を失望させている。だが、マナーを学ぶ者にとっては素晴らしい。

マナーとは、その社会の基盤となる価値観を、形式的かつ儀礼的に表現したものである。この価値観は普通、忠誠や利他主義、年長者への尊敬、あるいは武勇なんかだ。だが、

ハリウッドのように、基盤となる唯一の価値観が個人の満足にしかない社会で、どんなマナーが生まれるのか？ 答えは、何も生まれない、である。友だちは無視される。敵や、ほんの知り合い程度がキスで迎えられる。人々は朝食前に、公共の場所で融資の交渉を行なう。まったくの赤の他人が、その靴はいくらで買ったの、などと尋ねる。

文明社会からやって来た人々は、価値基準を見出すのに一苦労だろう。みんな、自分のセックス・ライフについては声高に喋るが、所有している車の種類はひた隠しにする。通時には高級ブティックが並ぶのに、みんな粗末な格好をしている。レストランの電話番号は電話帳不掲載になっている。現地人が次に何をするか、まるで見当もつかない。

金持ちで無責任な人間は言うにおよばず、その予備軍までそんな具合だ。役に立たない奇行があらゆる階層に蔓延し、特にサービス業。ウェイターは自分のファーストネームを名乗り、こっちの家庭生活について根掘り葉掘り尋ね、うっかりしているとテーブルにちゃっかり座り込んで、こっちの選んだワインの味見をする。食料品店へ行けば、釣り銭を受け取ろうと手を出した拍子に生命線と恋愛線を調べられ、手首の皺の数で寿命を预言されるというようなことがしばしば起こる。交通違反で車を止められれば、警察官が履歴書とキャビネ版の光沢写真を見せて役をくれと言う。

ハリウッド式マナーでは、かなり強い妄想癖も大目に見なくてはならない。ジョギング用のショートパンツを履き、屈伸運動をしながら変動レート式抵当権の条件について話す銀行員と、仕事の話を進めるのは面食らうものだ。かと思うと、プールの清掃員がカルダンのスーツを着込んで現われる。民間企業の経営者は壮大さの夢想の中から出てこられずにいるようだ。ドライブイン・レストランに、駐車係つきの駐車場があったりする。

だが、時としてハリウッドはノーマルすぎることもある。ベルボーイはうやうやしくおじぎして客を迎え、文句ひとつ言わずに八個の荷物を運ぶ。タクシーの運転手はサンタモニカからシャーマン・オークス経由でベル・エアまで行ってくれと言われても、帽子に手をやって「仰せのとおり」と答える。この事態を理解するにはかなりの時間を要する。ベルボーイもタクシーの運転手も、演技をしているのだ。現実が現実であると想像するという、もっとも珍しい妄想を演じきっている。でも、アンコールは期待しないように。明日になったら、麻薬漬けの無愛想なロック・スターを演じるだろうから。

ハリウッドに行動の基準はない。しかし、地位を評価する尺度はある。金、権力、名声だ。金は、ハリウッドのそもそもの起源であり、原動力であり、唯一の有用な産物なの

に、最も軽視されている。ハリウッドは単作経済なので、金があり余っているのだ。造成したのに、垂直に二度足りないくらい傾いているベネディクト・キャニオンの造成地に何百万ドルという金が支払われる。一九六五年以来一度も外へ出たことのない家族が、オリンピック級のプールをつくる。ペットを精神科医にかからせる。誰もがうなるほどの金を持ち、あるいは持っているようなふりをして金を使いまくる。(そのくせ金の力なんかまるでご存じない。ジョセフ・P・ケネディが上院議員選挙で使ったほどの金で、腕時計を買ったりする)

金が珍しくないのも、重点は権力に移る。ハリウッドでは、権力について果てしなく語られているし、それなりの尊敬も集めている。でも、結局はくだらないものでしかない。「ビーバーにおまかせ」をネットワーク・テレビで再放送させたり、あるいは人気の高い清涼飲料のコマーシャル挿入歌を、ローナ・ラフト主演の三千万ドル映画に仕立てあげてしまうような人間を、古代ギリシャのタレイランならどう思っただろう？ 正真正銘の権力(物事を方向づけ、人を牛耳る力)となると、ハリウッドの人々は自分自身に対してさえもそんな力を行使できないようだ。

金がありふれ、権力が大したことないので、ハリウッドでのステイタスを測る真の基準は名声だ。人々は自分の名声をもとに紹介される。名声なんかなくても。例えば「こちらはヘザー。アンドロポフがあの日になくなかったら、『おはようアメリカ』に出演できたはずだったんだ」といった具合に。名声はとても重視されているので、ほんのわずかな繋がりでも立派なものとして通用する。「トレバーを紹介しよう。彼の義理の姉は、ポー・デレクの叔母と同じ指圧師にかかっているんだ」。有名人との物理的な近さだっただけかまいたしはない。「このウエイン君はソニー・ボノの家から三ブロックのところに住んでいるんだ」というふうに。

無論、自分自身の名声がベストだが、あくまで比較的、という程度。どんな種類の名声でも構わない。あまり名の知られていない最高裁の裁判官であれ、フォード元大統領狙撃未遂の女であれ、テレビドラマ「ラッシー」でティミー役を演じた俳優であれ、どれも大した変わりはないのだ。

もしも何の名声もなく、また有名人との繋がりも皆無なら、自分の特異性をアピールするのも手だ。ハリウッドの連中は自分をいかに非凡に見せるかということに莫大なエネルギーを使う。ノーマルであることが、血色が悪く肥っていることの次に恥ずかしい世界

で、非凡さをアピールするのは生易しいことではない。パーティへゆけば、お揃いのスキャンク縞のタイツ、黄色いレインコート、アンティークのコルセットをブラウスがわりにした自称女優たちが六人現われる。最後の手段として、ハリウッドの連中は変な車を買う。後部座席に小型のグランドピアノがついた、ピンクのキャデラックの一九六二年型リムジンを見せびらかす。「世界にこれ一台しかないんだ」と言いながら。有り難いことに、その通りだ。

自分以上に大事なものがなく、まともな価値基準や、人々の序列もなく、注目を集めること以外に何ら目標や目的もないハリウッドは、混乱しきっている。仕事と遊びがごっちゃにされ、義務が雇用とごっちゃにされているので、五千万ドルの株取り引きも、テニスの試合も、危篤の母親も、一様に気狂いじみた心配と馬鹿げた熱狂で迎えられる。ハリウッドの人々はしばしば金銭的トラブルに巻き込まれる。それは、週に三十時間、ノーチラス・フィットネス・クラブで過ごすのは確かに難しいけれど、そんなことをしても誰も金を出してはくれない、ということをおぼえてしまうせいなのだ。

混乱はありとあらゆる面にはびこっている。ごちゃごちゃに入り乱れた恋愛模様。セックスが愛と勘違いされる。愛が結婚と勘違いされる。男と女は最初のデートでベッドへ直行し、しかもその場で商談をする。夫婦はお互いの理解を深める前にさっさと離婚。子育てはいい加減の極致。子供たちは友人か、時には所有物扱いされる。しばしば、家の中の赤ん坊役のキャストが指名される。誰がその役を努めるのか？ 母親？ 母親の三番目の夫？ それとも赤ん坊だろうか？ ハリウッドでは、空間さえ混乱している。猫も杓子もマラソンにジョギング。そのくせ、隣の家に車で乗りつける。

私生活と社会生活はまるで区別されていない。話題は、犬相手でも、金と権力、名声のことばかり。というか、それだけの時間、耳を傾けていられればだけど。ハリウッドでの会話は、偶然耳にすると面食らってしまう。例えば。

プロデューサーA「家を建てるのに百五十万ドルかったよ」

シナリオライターB「今日、ユニバーサル・スタジオではだれがクビになった？」

A「シェールが髪の毛を緑色に染めたよ」

B「そのローレックス、いくらだった？」

A「たった今、『ラインストーン』の続編の仕事の契約を済ませてきたよ」

B「パーム・スプリングスの家を百三十万ドルで買ったよ」



さすがのハリウッドの人々も、こんな会話ばかりをいつまでも続けていたら気が狂ってしまう。その結果、彼らは面と向かって話すかわりに電話で話すようになる。といっても、電話の相手と話すわけではないが。現在では、留守番電話や電話番サービス、着信サービスや多重回線、また車のトランクの中みたいな変な場所に置かれた親子電話なんか溢れている。しかも、誰に電話をかけても、相手は必ず別の電話に出ている。その代わりに、あなたは室内装飾家、メキシコ人の庭師、秘書、乳母、あるいは最も確率の高いところでは電話の修理屋と、長い親密な会話を交わすことになる。こうしたやり方や、留守番電話に吹き込んだキュートなメッセージこそ、ハリウッドの人々が互いに連絡を取り合う唯一の方法なのだ。そして、彼らは連絡を取り合わずにはいられない。ハリウッドでは皆、たった五分でも、自分の考えを胸にしまったままだと不安にかられてしまうのだ。

ハリウッドの人々は、自分たちの趣味や知性、自分そのものに対する自信がない。まあ、当然だろう。

こんな環境では、趣味は機能できない。趣味というのは周囲の状況に左右されるからだ。趣味とは、適切な事柄のことだが、万物にとって適切であると同時に何にとっても適切でないものなんかあり得ない。ハリウッドの人間は、スタイルの感覚を持ち合わせているにしても、台座に固定されていない大砲と同じで、どちらに向かうかわかりゃしない。ビバリーヒルズをドライブすると、庭がイギリス風芝生のスペイン風邸宅や、綺麗なフランスの城館にガレージがくっついた代物、ココヤシやサボテンの植わった庭を持つ、風格のあるチューダー王朝風の牧師館などが、間の抜けた郊外の区画で軒を並べているのだ。広大な邸宅を買うだけの金はあるのに、自然についてはまったく無知。趣味の良い一戸建ての都市住宅は持てるが、それを置くための都市がない。だから、自然環境とも人間のコミュニティともかけ離れた、万国博みたいなでたらめな建築スタイルの家に住んでいる。

こんな環境では、知性は何の役にも立たない。人々の頭脳は秩序と階級なしでは働かない。こうしてハリウッドの人々は、ほとんど考えない。なまじ考えても、こんなろくでもないことしか考えつかない。

「グラナダ侵攻は誤りだったらしいね。あの事件を扱ったベストセラーってないもんね」

「みんなロバート・レッドフォードのことしか言わないけどさ、ダスティン・ホフマンの活躍がなけりゃ、ウォーターゲートのスクープはあり得なかったんだぜ」

珍しく見つかった場合でも、名声と同じく、知性は数で測られる。誰かに、あるレコー

ドのアルバムが良い作品かどうかを尋ねてみるといい。彼は、それがビルボードのトップ100チャートの何位にはいつているかを教えてくれる。あるいは誰かに、六才の娘さんはお元気ですかと尋ねる。するとその娘のIQを教えてくれる。

ハリウッドでは、ちょっとでも頭を使うことは果てしない時間を要する。映画館の前で長い行列に並んでいるとしよう。前の人の順番がきて、彼がチケット売り場の売り子に「何枚？」と聞かれる。

「あっ、えーと」まず返ってくる返事がこれである。「そうね、まずボクに一枚。それから、連れの彼女の分も。あ、でも、ほんとの彼女じゃないんだけど。お互いに別の相手と付き合ってるし。ただ、今夜はたまたま一緒にいるんだけど、ボクたちの関係が発展するかどうかはわからないけどね。というわけで、彼女の分でしょ。それで、二枚。でもって、ボクたちの友だちもいるんだけど。あ、でも、結局間に合わなかったみたいだから……」

まったく、こんな場所だと人間の魂すらまともに機能できない。

原始的社会が高い価値を持つことは、よく認められている。土着文化の保存によって得られる理解と知識によって、人類は多大な恩恵を受けている。だが、こいつらを根絶やしにしても、倫理的な社会学者なら反対はするまい。

## 第 15 章

# ディナー・テーブルでの会話

ことわざに言うように「愛のある野草の夕食は、憎しみのある牛肉の食事より美味である」。だが、野草と牛肉と愛を束にしても、気のきいた会話にはかなわない。ごちそうの最上の喜びは唇の中へ運ばれるのではなく、唇から生まれるのだ。

会話には、ディナーの席が一番である。人々は非常に接近した状態で集まることになる。邪魔がはいることもない。数少ない楽しい肉体機能を働かせることで、幸福なムードが生まれる。その上、口は会話以外のこともできる。これはとても重要なことだ。アーティチョークの葉っぱの内側を歯でこそげつつ、ことばや返事を練ることができるし、ことばに詰まったら、もっと固いものにかぶりつけばよい。しかも、ワインは舌をいっそうなめらかにし、批判的な耳の働きを抑えてくれる。ディナーの席に勝る会話の場所は、ベッドだけだ。だがこの場合、よほど超近代的な思考水準を持ち合わせていない限り、客は制限される。それに、一台のベッドに五、六人が集まった場合、会話というよりはとりとめのないお喋りになってしまうのがおちだ。

とはいっても、どんな種類のディナーでもいいというわけではない。ティー・パーティやビュッフェ形式のディナーではだめだ。現代におけるフロイト的強迫観念のあらわれかもしれないが、現代人は膝に物を置いたままだと会話を楽しめない。ディナーはあくまでも、きちんとテーブルに着いた状態で行なわれなければならない。そして、客の人数はなるべく少数、最大七人。会話はスポーツの試合や、五十人もの人々が次々と言葉を伝えるリレー競争ではない。また、テーブルの真ん中に大きな花瓶を置いて視覚を遮らないこと。顔の真ん前で菊がちらちらしては、とっさに気の利いた受け答えもできない。そ

れと料理は、客たちが顔を見合わせながら食べられるもの。間違ってもトウモロコシを丸ごと出さない。スパゲッティはもっとダメ。フレンチ・オニオン・スープなどもっての他。軽食主体にすること。ワインやシャンパン、ブランデーなどが上等なほど、会話は盛り上がり、知的になる。酒を飲めない客は避ける。飲まない理由を弁解するにきまつてる。また、強すぎる酒も避けること。ワインは詩神を呼び起こす。だが、蒸留酒の成分は、体内の家畜を呼び覚ます。ジン・マティーニは特に危険だ。客の対話能力は、たちまち犬並みになってしまう。鼻をくんくん鳴らし、噛みつきあい、首すじの毛を逆立てる。マティーニをふるまわずに済ませる最も良い方法は、一番安物の甘口ベルモットしか家に置かないことだ。

言うまでもなく、招待客は厳選するように。話し上手と聞き上手を混ぜるとよい。無口なだけ人間を聞き上手と勘違いしてはいけない。無口なだけなら、家具で充分。聞き上手な人間は、熱心に耳を傾けてくれる。相手から言葉をうまく引き出し、時折り適切な質問をさしはさみ、話をどんどん膨らませ、あるいはつまらなくなってきたら、さっと話をそらす術を心得た人を聞き上手というのだ。喋り上手の人間は、聞き上手であるうえに、自分の考えをとうとうと喋りまくる能力を持ち合わせていることが肝心である—たとえば、面白おかしい逸話を話して聞かせたり、うまい冗談を言ったり、耳新しい出来事を事細かに伝えたり、さまざまな理屈に斬新な解釈を加えたり、といった具合に。しかも喋り上手は、他の客たちのひんしゅくを買うことなくこれをやってのけなければならない。こうした人物は貴重な存在だ。他のみんなに食べる時間を与えてくれるからだ。

会話は集団行動であり、参加者はチームの一員である。たとえ有名なスターがいたとしても。最高のチームワークには練習が必要だ。楽しい会話には、以前にも楽しい会話を交わした経験のある者同志を招待するのが一番である。場慣れしているから会話がスムーズに運ぶ。例えばX氏が、近頃評判の事柄に惜しみない賛辞を贈れば、続いてY嬢が気の利いた言葉を返す、といった具合に。

X氏「『スミザリーズ』は、意図的に共感できない主人公を描いた、芸術的なほどくだらない映画だったよ。観客の想像力を、起こった出来事でなく起こらなかった事柄に向けようとして、人間関係の深まりを示すようなシーンがまるでない」

Y嬢「そうやって誉めるのに三つ以上の否定を必要とするようなものって、儲からないのよね」

アルゴンキン族の丸テーブルで交わされるウィットは、常連客の特殊な才能よりも、このような訓練と深い関わりを持っている。

同じメンバーばかり何度も招待できない、あるいはそんなグループを全然知らないなら、共通点を持った人々を集めるといい。ただし、共通点といっても、それが各人の見栄の核心ではないようにすること。スポーツ・チームの監督二人、テノールのオペラ歌手二人、あるいは最高裁の判事二人を同じテーブルに着かせるなど、愚の骨頂である。

また、今更注意するまでもないが、招待客が互いに殺意を抱いていないか確認することも忘れてはならない。パーティーの主催者は、PLOの指導者とイスラエルの首相、あるいはノーマン・メイラーと彼の元妻たちをいっしょに招待するのを「面白がる」ものだ。カクテル・パーティのような場合なら、それも悪くない。が、ごく少人数のディナー・パーティでは確実に、お通夜のような沈黙か、ソース容器の投げあいになる。

また、人生の中でそれしか興味がない、という人を招待するのは、たとえ同じ興味を持つ連中ばかりを集めるにしても、やめたほうがいい。ひとつの話題を延々と続けていると、考えが意見に、意見がやがて凝り固まった信念になってしまう。フランスの象徴主義の詩の熱狂的な愛好者を六人集めた席は、スープのうちは楽しいだろうけれど、チーズやフルーツの頃には、罵倒大会になっているだろう。

「ムードと感情をほのめかすヴェルレーヌのイメージの羅列は、吐き気がするほど嫌らしい！」

「なにを言うか！」

てな具合。

客たちに共通しているべきなのは、面識や興味、経歴ではなく、態度だ。良い会話は、地上の出来事を超越したレベルで行われる。馬鹿げた感情をおさえこむだけの、超然とした距離感が必要だ。会話の目的（もっともこれほどの技芸と言うべきものが、目的を持つとすればだが）とは、他人が物事をどう見ている、万物の存在をどう意味付け、あるいはその無意味さ加減とどう折り合いをつけているか学ぶことだ。良い会話は、あなたにアルゴスのような百の目を与えてくれるし、ヒドラのように複数の（だが願わくば、もう少し好感の持てる）頭を与えてくれる。

だから、会話では自分自身の話はしないこと。客たちは、余計な説明などなくても、十分にあなたを観察できる。みんなが聞きたいのは、自分たちの知らないこと、あるいは考

えたことのないことなのだ。会話というのは、まちがっても自分のセコい退屈な延長物のためにあるのではない。ペットや生まれたばかりの孫の話などするな。同じ意味で、他人にあまり立ち入ったことを聞かない。そういうのを無礼だと感じる人もいるし、もっとひどい場合は、相手がそれに飛び付いてくるかもしれない。ナルシズムという病気は、テーブルじゅうに撒き散らしても治るもんじゃない。

会話には、畏敬の念や嫉妬の入りこむ余地はない。誰かが憧れや賞賛的になることはあっても、例えばフリッツ・モンドールの権力と美德に対する畏敬の演説は、せっかくの晩をしらけさせてしまう。また、彼に対して突然、嫉妬を爆発させれば、ショックのあまり会話はその場で止まる。

辛辣な言葉や愚痴も、会話を一気に白けさせてしまうし、普遍的な礼儀作法に違反することになる。「紳士たるもの、自分の力で変えることのできない、または変えたくない事柄について文句を言うべからず」。テーブルから飛び上がって、国家安全保証の予算と支出を自分自身の小切手で組み直そうといういのもない限り、ワインをもう一杯飲み干し、莫大な防衛費に関する話題を聞き流していればいいのだ。

しかしながら、不平が禁物とはいっても、罵倒がいけないという意味ではない。罵倒は決して恥ずべきことではなく、昔から偉大なる理性にとって喜びの源とされてきた。政府をこきおろすのは自由だし、政府の手先をどろどろとした腐食土から生まれた私生児どもと呼ぼうが、またワシントンへ行くのは生きたイカ入りの風呂の中につかるようなものだ、と言おうが、まったく問題はない。ただし、不平たらしくならないこと。

超然とした態度もさることながら、平等主義も忘れないように。ディナー・テーブルの民主主義には不文律がある。それは、ある客がいかに有名で権力を持っていようと、また別の客がいかに貧しく、社会的地位の低い者だろうと、同じ食卓に着いている以上はみな平等だ、という決まりである。だから、好戦的になったり、張り合ってみせたりするのは厳禁。伝道や尊大な振る舞い、ジョークなどは好ましくない。人を改宗させようとしたり、博識をひけらかしたりするのは、いずれも競争意識のなせるわざである。またジョークは、話し手を征服する側に、聞き手を服従する側に仕立てあげる修辞法である。もしもあるジョークがその時の会話にぴったりで、どうしても口にしたいのなら、そのジョークをエピソードにすり替えること。

例えば、話題が東ヨーロッパの政治的抑圧についてなら、チェコスロバキア人の反体制



派の人間がこんなふうには皮肉っていたよ、と話してやればいい。十五時間も肉屋の前の行列に並んでいた買い物客が、自分の番がきたときに肉が売り切れだと告げられた。客が大声で文句を言うと、トレンチコート姿の見知らぬ男が群衆からすっと進み出てきてささやいた。「同志よ、落ち着きなさい。以前ならそんなふうには不平を言った者は、さよう・・・」見知らぬ男は指でピストルを突きつける真似をした。

買い物客は家へ帰った。手ぶらの亭主を見るなり、妻が尋ねた。「どうしたの。肉が売り切れだったの？」

「それどころか」と亭主は答えた。「拳銃の弾まで切れてやがった」

このジョークが、一九六八年のロシア侵入以前に、プラハの政治的カバレットで上演された寸劇に出てきた、と言うのだ。そう言うことで、ジョークを直接とばしたという非難をかわせる。さもないと、会話の絆と規律を乱すことになる。

ジョークよりもっと不快なのは、白熱した議論だ。攻撃的だし、芸術様式としての会話の精神にもとる。会話は「結論を出す」ためのものじゃない。マチスの絵だって、結論を出したりしないだろう。

さらに、最悪なのは忠告だ。これは他人の知識や判断をことごとく無視するとともに、自分が常識皆無であることを暴露する。ない袖は振るな。

態度を誤らなければ、話題を誤ることもない。孫の話だって、そいつらをろくでもない存在として描けるだけの超然とした態度が取れるなら、別にかまわない。だが普通、会話の内容は大きく三つに分けられる。思いつき、情報、そしてゴシップである。

思いつきは、退屈な「意見」と似ているけれど、ちょっと違う。思いつきは、余分なものを刈り込んだり、接ぎ木されたり、あるいは花を咲かせたりしてテーブルをまわすことができる生ものだが、意見というのは死んだ馬をぶつのにしか使えない棒切れだ。「メリル・ストリープは、情欲を超越した色気を持つ女を演じることのできる女優だ」というのは、思いつき。「メリル・ストリープは実にいい女だ」これは意見。思いつきにこだわること。そのほうが、まあ、意見がましくないから。

情報は誰もが望みながら、誰もそれを受信する忍耐力を持っていないものである。ビール腹の将来がどうなるか、といった説明にうんざりした経験は、だれしも持っている。だが、情報は正しく伝達されればなかなか興味深いものだ。ニューヨークのある生化学者は、細胞分裂をティーンの恋愛にたとえて説明してくれる。十代の娘が家族と一緒に過ご

すのを嫌がるのと同じように、DNAは分裂する。そしてティーンズの娘と同じように染色体は群れをなし、精子に乗って隣に越してきた、魅力的なDNAと出会う。そうしてふたつのDNAが結合し、一つ半の風呂と駐車場付きの生物学上の農場を、一から繰り返す。あくまでも聞き手のわかりやすい言葉で、一般的な事柄に置き換えて話すことを忘れずに。専門用語は避ける。コンピュータ専門家でスワヒリ語で話しかけられるのを好む者はほとんどいないが、そのくせ自分たちは、バイトとかフロッピーディスクとか、コア・ダンプといった言葉を平気で口にする。

ゴシップはみんな大好きだ。もちろん、それはひどい代物ではある。だが、我々だれしもひどい存在なのだ。ゴシップを止める人はいないのだから、せいぜい正しいやり方であろう。知らない人の噂話をしてはいけない。それは、スージーとかローナ・バレット（日本なら梨本）といったつまらない職人のお株を奪う。それに、知らない人間の噂話をすると、知っている連中はつまらないやつばかりなのか、と思われがちだ。ゴシップを口にする時は、真面目な顔で言うように。知性は驚きを認めないし、人間の本質を知り抜いていれば、つまらないゴシップに失望しないですむ。また、スキャンダルは率直に、誇張をまじえず披露すること。会話にはある程度の誠実さが必要だ。さもないと、文学のような低級な芸術様式に墮落する。

生き生きとした人々、スマートな態度、そして語る価値のある話題、もしくはまったく無価値な話題があれば、いい会話は確実に思えるかもしれない。しかし、やりかた次第ではすべて台無しになることもある。

客のやりとりには一定のリズムが不可欠である。全員が会話に貢献しなければならない。たとえその貢献が、あまりにも突拍子もないことを耳にしたので飲みかけたスープが飲み込めなくなってしまう、というふりをするだけであっても。誰ひとり、会話から取り残されるようなことがあってはならない。ひとりの人が聞いたこともないような話題であとの五人が盛り上がる、という光景ほどむかつくものはない。それはディナーに招待しておきながら、その人にだけ食事を出さないのと同じことだ。二人きりのディナーなら別だが、そうでない限り、二人の人間が自分たちだけで延々とお喋り続けるのもよくない。従って、ハネムーン・カップル（文字通りの新婚夫婦、商売上のカップル、あるいはその他）をディナーの席に招待するのは望ましくない。あからさまな誘惑も禁物。好きなだけちょっかいは出していいけれど、公然とやって、出席者全員を楽しませるか、あるいは



は少なくとも呆れさせるくようにすること。

理想を言えば、まずひとりの客が一言喋る。そしてまわりから広く反応が帰ってくる。最初の客は反駁、もしくは言ったことの撤回をする。そして、発言権を誰か他の人間に譲るのがいい。その場合、話題も多少は変えるように。フランシス・ベーコンは、十七世紀に著したエッセイ「話法について」でこう述べている。「会話の最も名誉ある部分は、話す機会を与えることである。そしてまた、それをまとめて他の話題に移ることである。それでこそ、ダンスのリードをとっていると言えよう」

話し手と話題を変えるのと同じくらい、会話の雰囲気やスタイルも変えたほうがいい。いくつもいくつもエピソードばかり続いてはだめ。エピソードに、自分の所見や気のきいた言葉、仮説や質問などを交えること。変化をつけるためだけではない。会話ではブリッジと違い、人と同じことをするのは悪趣味とされているのだ。例えばA嬢が、靴を二四〇足持っている女優を知っていると言ったら、三百足の靴を持っている伯爵婦人に会ったことがあるなどと言う奴は人間じゃない。しかしそんな余計な発言を取り繕うのも、ホストであるあなたの努めである。あなたはすかさず、こんなことを言わなければならない。「そうそう、その伯爵婦人は本当に三百足の靴を持っているんだよね。でも、彼女の父親はヨーロッパの税法のお陰ですっかり貧乏になっちゃって、仕方なく金持ちの昆虫と結婚する羽目に陥ったんだ。だからそのご婦人は、足が六本もあるんだ」

すべての会話がスムーズに運ぶよう気配りをするのは、あなたの努めだ。状況が完璧なら、グラスに酒を注ぎ続ければ済む。が、たいていは喋り慣れた連中が会話を独占するのを防ぎ、退屈な連中が会話に参加するよう気を配り、そういう連中の参加を、陽気な連中に詫びなくてはならない。自尊心を隠してお世辞を言い、人々の足と口を切り離すための口頭手術を行わなければならない。そして、口論が収拾つかなくなったら、たった今メイドが台所で赤ん坊を産んだふりをしなければならない。

この技はお忘れなく。どのみちあなたは、しばらくすればみんなを黙らせ、お引き取り願わなくてはならないのだから。



## 第 16 章

# 学生のためのアルファベット マ ナー、学習に関する忠告と道徳その 他に対する訓戒を含んだ簡単な詩

Aは代数(algebra)のA、退屈な授業。 単位だけ取れば必要にして十分。  
こんなに退屈、ややこしく、むづかしいけれど、 卒業したら何の役にもたちゃし  
ない。

BはビールのB、エッチな気分になるクスリ。 おまけにへらへら、大声あげて。  
味覚も思考もめっちゃくちゃ。 旨くもなんともないじゃんか。こんな飲む奴、  
気が知れない ビールなんて、貧乏人がアブナイおじさんの飲み物。 ジンカウォッ  
カ、コカイン、ウイスキーだけにしとくこと。

Cは究極の評価。 純粹でひたむきで、男らしいランク。 「A」を取る奴は仲  
間から ヒラメキに欠ける奴と言われ、 「B」を取る奴は八方美人、 そのくせ  
どこかシラケてる。 かといって「D」じゃ知恵遅れ、 「F」じゃ親から罵倒さ  
れ。 「C」がサイコー。ほどほどってやつが いつでもどこでも、哲学者の究極の  
ゴール。

Dはドラッグ(麻薬)のD、つまりマリファナ。 青少年のおトモダチ。 目の  
前がぱあっとひらけ、知覚は昂進。 アイデア続々、心はふわふわ、夢心地。 エコ  
ロジーに走っちゃったり、 その他の目新しいことを始めるんで みんなにそろって  
仔めコケにされる。

Eは努力(Effort)のE、人知れず流す汗と涙。 そんなところを見られたら この胸のでっかい野望がバレてしまう。 そしたら誰もが言うだろう、ヤバいやつ、目立ちたがりの悪党と。 伝統社会は、上昇志向をが嫌い その日ぐらしが好みだから

Fは失敗(Failure)のF、地獄の呪い。 唯一もっと悪いのが、成功ってやつ。 世間は怠け者、負け犬、失業者が大好き。 チャンピオンや勝利者には、みんな冷たい。 成功したけど、やめたふりしよう。 だけど本当に成功したら、勝ち取ったって顔はしない。 世間は拾いものの成功より 当然の成功のほうが嫌いなものだし

Gは立体幾何学(solid Geometry)のG。 キミもボクも、ちんぷんかんぷん。 だから、うまく韻が踏めない。 それならいっそ、もうひとつFでいこうか。 Fはゴキゲン(Fun)のFーピューピュー、ビービー。 今のうちにせいぜい楽しもうぜ。 長つづきしないから

Hはハード・オン(勃起)のH、パンツもっこり。 体育の授業中、学食の列で、Yダンスの最中、いつでもどこでもお構いなし。 ズボンの真ん中がみっともなく膨れても 赤面しないで。 モーゼル銃で頭を撃ち抜くのもダメ。 焦らずあわてず、落ち着いて。 三十年もたてばきっと そいつを自慢に思える日がくるから。

Iはインテグレーション(人種差別廃止運動)のI、 色んな民族が入り乱れ、バスに乗れば社会の不平等も解決さ。 転校生を殴ったり、そいつの縮れっ毛を叩いちゃいけない。 ひっぱたいたり、からかったり、そいつの家に放火するのもヤメ。 体育で奴と競争するときは、ムキにならずに励ましてやろう。 そうして奴の変てこな色の顔に金を賭ければいい。

Jは自慰ことマスターベーションのJ。 学校のある日は毎晩一回、休みの日には一日二回。 大人になって、女を相手にするよりずっと安上がりー まあ、じきにそんなことは自分で学ぶよね。

Kは愛の残骸、クリネックス・ティシューのK。 (前出Jの項参照)

Lはラテン語のL、その昔大流行した言語。 大昔のローマ人さえ喋れなかった言葉。 嘘だと言うなら、BBCの「クローディアスI世」の再放送を見てごらん。

Mは「学校一の人気者」(Most Popular)のM。 おまけに「ベスト・

ドレッサー」で「ベスト・ダンサー」「一番イカしたカップル」ときた。彼女は細身のチアリーダー、彼は学芸会のスター。けれどいつかは太ったおばさんと、オカマのおじさん。フットボールの花形選手の彼は十二年後には中古車のセールスマン。

今は華やかな「同窓会の女王」も、モーリンで離婚し、不遇の一生。彼女の取り巻き連中の半分はヌードダンサーになり、クラス一の絶倫男は睾丸ガンに犯されて死ぬ。いっぽう生徒会長はアシュラム（ヒッピー部落）に住み着き、どうかお願い、この卒業生総代の身におこった事に対して国連モラトリアム措置をほどこしてください。青年期に成功した者には、ろくな未来がないことをお忘れなく。それに、社会的落後者でもいいじゃない？ゾラもアインシュタインもそうだったんだし

NはナイキのN。靴じゃないよ、ミサイルさ。コルドバン革のオックスフォード・シューズを買いたまえ。ただし色は紺じゃないやつを。

Oはくず肉(Offal)のO、学食のメニューの定番。ジフテリアの予防接種のつもりで、食べてごらん。学食のメシってやつは、免疫を植え付けてくれる。いつか結婚相手の仕打ちに耐えるための免疫をねそれから軍隊で、職場で、個人的な争いの場で、これからの人生のひどい食べ物に対する免疫を。

Pはダンスパーティ(Prom night)のP、待ちに待った夜。嘔吐とカーセックスを楽しむには絶好。賢明な奴なら絶対に忘れない夜。ただし唯一忘れたいのは両親がたぶん撮り、額に入れて玄関の隅に飾った写真。そして君が自動車事故を起こしたり、幼児をレイプした時にその写真が全国の新面を飾る。だからタキシードは地味で、フィットしたものを。間違っても、貸衣装だということがバレないように。それから髪はぴったりと撫でつけ、頭骸骨の形を強調しよう。できそこないのヒッピーみたいなヘアは禁物。(田舎のスポーツキャスターみたいな真ん中分けもダメよ)君の言動しだいでは、この写真が世界に発表されるかもしれない。君だって不慮の死をとげたり、大統領を狙撃した時に世界中の奴等から馬鹿と思われたくはないだろう。

QはあらゆるクエスチョンのQ。アタマの具合がおかしくて、熱がある時の徴候。好奇心の病に逃避するな治療はいつも病気そのものよりひどい。知れば悩みが増えるだけ君の心の平安のために、不滅のベンガル・ランサーズの標語を捧げようー「質問したら答えが返ってくるだけ」

Rは応援合戦のR。 三三七拍子に大声援 熱くならずに着いて。 愛校心なんてガキのもの。 大人になって、君がムショ行きになったら 高校のファイト・ソングも違って聞こえるだろう。

Sは学課適性テスト(Scholastic Aptitude Test)のS。 誰よりもいい点を取るように頑張ろう。 そうすれば、ハーバードかイエール合格まぢがいなし。あとはひたすらスイスイと、政府の官僚一直線。 官僚になれば、お金はがっばり儲かるし どこへ行っても顔がきく。 それに、もしも逮捕されたって 最高の刑務所で悠々自適の生活さ。

Tは慈善事業(Tender kind charity)のT 慈善事業が見たければ一生懸命働いて、お金持ちになろう。 チャリティが一番ふさわしいのは 相手がずばぬけて金持なとき。

Uは失業率(Unemployment rates)のU、 あちこちの町や州でいまだに解決されていない問題。 君が大学の入学許可をもらう頃には、どんなに頑張っても 仕事なんかどこにもないかもしれないよ。 だから昼夜せつせと勉強しよう それに社交的な方面も何か。 医者や歯医者の方がなくても テニスの腕前さえ良ければ、 逆玉も夢じゃない。

Vは韻文(Verse)のV、若者なら誰もが書く、 甘ったるくてセンチ、ワンパで陳腐な言葉の羅列。 でも少なくとも今は、非定型詩のな時代。 だから詩は、昔ほど難解じゃなくなった。 昔の詩は、とにかく変てこりん 頭が痛くなるぐらいごちゃごちゃと脚韻が入り乱れて。 でも今じゃ、モダニストの詩人や詩の好きな変人のおかげで しち面倒くさいルールがなくなった。 だから何でも、書きたいように書けるのさ。 たとえばここで、「さ」で終わる言葉を使わなくてもいいのさ 心のなかの思いを吐き出すための長い、曲りくねった出口を作り、 そして行の頭をでこぼこにして、散文じゃないってこ とを見せてやればいい。 ただひとつ、忘れないこと ネタにした娘には捧げるな。

WはウーマンのW。 おっかなくて嘘つきで、 ずるくて我が儘、残酷で、エッチな生き物。 ジブシーも真っ青の悪賢さ、ケルト族みたいに気違いじみてる これ以外の生き物と、決してセックスしてはいけない。

Xは実存主義的無軌道(existential anomie)のX。 フラン

ス語では何の意味もない。ぼくたちの言語でも。　だからジャン・ポール・ベルモント  
を気取ってぶらぶらするな　志高く車三台とマンションを目指せ

Yは君の将来(Your future)のY、　恐ろしい核戦争で世界は滅亡し、  
君の将来めっちゃめっちゃ　世界の滅亡なんてただのヨタ話。　そんな噂は一九四五年か  
らあった。　MIRV、ICBM、SAMがなんだ、　卒業試験が始まるまで、世界  
の滅亡なんてあり得ない。

Zはひょうきん者(Zany)のZ、クラスの永遠の道化師。　馬鹿な冗談ばかり  
言っっては、あっちこっちぶらぶらしてる。　学生部長の悩みの種、先生たちの鼻つまみ。

だけどクラスの連中をめちゃくちゃ笑わせてくれる奴。　今のうちがいい奴と、み  
んなにもてはやされるけど、　大人になったら、すこし落ち着いたほうがいいぜ。





## 第 17 章

# 最低のプロテスタント帽

霧雨の午後、外出の用意をしていた。トレンチ・コートを着て傘を持ち、防水加工をほどこしたキャンバス地のレインハットを頭に載せる。カソリックのガールフレンドが、そんな私を指差して笑いだした。「まあ！ 最低のプロテスタント帽なこと！」私は鏡をのぞきこんだ。なるほど、縁がだらりと垂れ下がったポークパイ型のブルックス・ブラザーズのレインハットはたしかに……そう、回収されたアメ車の不良部品みたいだった。そこで私は考えた。

まったく、プロテスタントの連中はひどい帽子をかぶっている。特にWASPと呼ばれる、裕福な大人のプロテスタントの男は。彼らはマドラス木綿のリボンがついた、植物繊維の夏用の帽子を愛用している。まるで、花屋で枯れた見舞い用の花みたいだ。また彼らのかぶるツイード製の「アイリッシュ帽」とやらは、誇りあるアイルランド人なら農耕馬にだって被せないようなしろものだ。また、銀行の頭取が見たらイギリス人の炭鉱夫が殴り込みにやってきたと思うような、ウール地のヘリンボーンの縁なし帽もお気に入りだ。芸術家気取りの年配WASPは、見ているほうが恥ずかしいベレー帽をかぶる。離婚してスポーツカーを手に入れたばかりの中年のWASPが愛用するのは、つばにスナップがついた、間抜けなツーリング・キャップである。FBIの捜査官はなんとも形容しがたい帽子をかぶっているし、弁護士はアストラカンの毛皮の帽子をかぶりたがる。たぶん、法律事務所のかたわら強制収容所も営んでいると顧客に思わせたいのだろう。

郊外部では、事態はさらに深刻だ。私の住むニューイングランドの町を夏に訪れた避暑客たちは、ソフト帽が成人ダウン症の原因であることを証明したいらしい。パナマ帽はま

た別の影響をもたらす。道徳の墮落と結びついた愚行である。さらに、ギリシャの漁師みたいな帽子をかぶって夏休みをすごす金融業界のエグゼクティブを形容できる上品な言葉は、英語には存在しない。

水に近づくと、WASPの帽子はいよいよ気狂いじみてくる。フライ・フィッシングをする連中は、ものすごい代物を頭のとっぺんにのせ、そこに乾いた毛ばりを何本も突き立てている。まるで、いざという時には頭ごと水に突っ込み、巨大なマスを自分の頭で釣り上げようとでもいうように。ソードビル・キャップをかぶった海釣り人ほどまぬけなものには、なかなかお目にかかれるもんじゃない。が、決して不可能というわけではない。ごくふつうのケンネバンク・クルーザー帽をかぶらせれば済む。これは、子供用セーラー服の帽子のつばを引っ張って、目や耳、時には鼻まで覆うことのできるようにしたものだ。使いこむと、まるで白い木綿のコンドームをすっぽりかぶっているように見える。これに限らず、船乗り用の帽子ってのは、愚かしさのオンパレードだ。かぶっている奴がみんな無学に見える毛糸の縁なし帽にはじまり、ジョージ・ブッシュさえツナ缶のコマーシャルに出てくる飲んだくれマンガのキャラクターみたいに見える、黄色いビニール製の巨大な悪天候用の帽子でとどめをさす。

水が凍って雪やその他の物になったところで、事態はまったく改善されない。ニットのスキー帽以上に人間の尊厳を損なうものがあるのか。あるとしても（たとえば封建的忠誠とか、ボルシェビキ、女性がベールをかぶる習慣など）私は寡聞にしてそれを知らない。サーカスのピエロ、中世の宮廷の道化師、カルパチア山脈のはるか向こうの村の愚者どもーどんな阿呆だって、紫や緑赤やピンク、オレンジ色をして、端っこに直径一メートルのポンポンつき全長二メートルのソックスをかぶるのはためらうはずだ。しかもそんな帽子だって、WASPの連中が冬場、スキー場以外でかぶる帽子よりはました。連中は耳あてをあたまのとっぺんで結んだ、ビニールのつば付きのチェックの帽子でて歩道の雪かきをするのだ。これこそ地上最悪の帽子、アメリカ中西部を世界一の笑いものに仕立てあげる元凶である。

私はプロテスタントの血を半分しか受けていないが、それでもクロゼットの棚を開けると、まずはムース・リバーでカヌーをした時の唾棄すべき帽子から、身震いのするようなコーデュロイの登山帽、前と後ろの両方にひさしのついた、この上なく間抜けなフロリダ・キーズの骨釣り用の帽子、まるで複式簿記中のオリンピック選手になれる、頭の部分

がないテニス用サンバイザーがいくつかと、ヒッピー時代の名残りであるジョン・レノン・キャップ、そして広告入りの野球帽が山ほど。これらの帽子から察するに、私の前頭部はピュロレータ、ファイアーストーン、NRA、キッター、メイン州、一九七八年の記念祭などに貸し出されていたらしい。ましてや、鳥を撃ちに行ったときの国際信号オレンジ立たされ帽については、敢えてここで触れたくもない。

他の民族集団も奇妙なモノを頭にかぶる。黒人、伝統的ユダヤ人、メキシコ人の大司教、イタリア人の製鋼所の工員などなど。だが、一二五番街をかつ歩するステットソン帽の群れは、意図的に派手派手しくしてあるのだし、ユダヤ人のヤムルカは宗教的信念を表わすものだ。WASPは精神的理由とか伝統とはいっさい関係なしに、大真面目で帽子をかぶる。でも、彼らの頭に載った奇妙な帽子は、どれも鉄骨が落ちてきたら何の役にも立たない。それでもWASPたちは、自分たちの帽子を機能的だと言う。経験から言うと、誰かが「機能的」と言ったら、それは下手な言い訳のはじまりだ。WASPたちが間の抜けた帽子をかぶる本当の理由は、間の抜けた帽子を被ると内面に深く根差した必要が満たされるからだ。いわゆるジン・トニック真理というやつ。WASPに六杯も酒を飲ませてみるといい。すると必ずといっていいほど頭に変なものを載せるから。たとえばランプシェード、婦人用の下着、ゴーハムの銀食器、L・L・ビーンの小屋など。もっとしらふで自制心がきいている時には、オーストラリアの奥地探検用の帽子やタマシャンター、あるいはWASPがテレックスを送れる距離まで牛に近付くときに好んで用いるテキサス州の巨大な帽子で間に合わせる。

アイゼンハワー政権の終わりまで、WASPはなかなか趣味の良いものを身に着けていた。彼等はきちんと型取りをした折り目正しいホンブルグ帽や粋な麦藁のかんかん帽、威厳のあるオペラ・ハット、正真正銘の山高帽などを愛用していたものだ。紳士たちは、きちんとした帽子なしで人前に入るくらいなら、コンピの靴で外交上のレセプションに出席するほうがましだと考えていた。だがその時、何かが起きたのだ。

裕福な階層のプロテスタントの成人男子は、社会的にも知名度の高い人種である。わが国の実業界、政界、教育界における指導的立場の大半は、彼らが占めている。恐らく、わが国の優柔不断な外交政策、実業界における倫理感の墮落、職場における無知な人間の増加や世界の権力者としてのアメリカ合衆国の全体的衰退と、馬鹿げた帽子の流行は決して無関係ではないだろう。頭は理性、自律心、分別、自己征服の象徴である。後ろのてっぺ

んに鹿の房飾りのついた緑色のチロリアン・ハットの意味はただ一つ、混乱である。わが国の根っからの上層階級、最大の影響力を持つ人々、最良の資源、かつ良いことを行なう最大の機会に恵まれた人々が、国民としてのあらゆる責任を放棄し、イドの赴くままに行動し、まるで野生動物の群れのように……

ちょっと待て！ 港のところで、マティーニ入り水差しを持ち、中折れソフトを犬にかぶらせようとしているWASPに会ったぞ！ ってことは、ヘンリー・キッシンジャーが再び国務長官の座に舞い戻るのだろうか？

## 第 V 部

# 地球の終わりなど



## 第 18 章

# コカイン賊を探して

私は銀行預金と美しいガールフレンド、高級雑誌から依頼された実業界のエグゼクティブへのインタビューの仕事を持っていた。つまり、退屈でせわしく、いらいらしていたわけ。ジャーナリストと他の人々との違いというのは、普通の人々が暴力や悲劇、恐怖などから逃れようとして暮らすのに対し、我々ジャーナリストはそういうのに敢えて首を突っ込もうとするところだ。サン・サルバドルの街路で流血事件が起き、共産主義者どものヘリがアフガニスタンの丘陵を壊滅させ、アフリカがアジス・アベバからケープまで事実上クソもミソもごちゃごちゃ状態だったのに、この私は馬鹿みたいな高級ホテルで、愛想のいい副社長と昼食の約束だ。私は迫撃砲の流れ弾や発疹チフスの流行、あるいは最低でも飢えた赤ん坊を求めている。いや頼む、ちがうんだ、私は勇気があるわけでも、世界に真実を語りたくて願っているわけでもない。要するに私は怠け者なのだ。迫撃砲の流れ弾が発疹チフスで入院中の飢えた赤ん坊に命中、などという見出しほど楽なものはない。ピューリッツァ賞ものだ。でも、パスタ・サラダを食いながら、総売上げの数字を教えてくれる正直者の監査員についてなんて、従属節すら書けやしない。

そんなみじめな自己憐憫に浸っていた時、新聞の見出しが目にとまった。「カリブ諸島の高官、麻薬密輸で逮捕」。一九八五年三月六日、タークス・アンド・カイコス島というイギリス直轄領の首相兼元首ノーマン・サンダースが、マイアミ・ラマダ・インで麻薬取締官によって逮捕されたらしい。サンダースは、ズボンのポケットに現金二万ドルを詰め込んでいるところをビデオに取られたのだった。彼と、カリブ諸島の十一人構成の内閣の高官二人、経済・開発庁長官スタフォード・ミシック、立法府議員オールデン・「スモー

キー」・スミスは、十七項目にわたる麻薬密輸の陰謀の容疑をかけられている。こうしてわずか一日で、タークス・アンド・カイコス選出議員のうちの二七パーセントが合衆国の監獄で身柄を拘束されることになったのだ。

そうそう、こうでなくっちゃ。かれこれ一週間というもの、全国誌はカリブ諸島での麻薬密輸に関する記事を一本も載せていない。私だったら、信用のおける大金持ちとの雑談の間合間にタークス・アンド・カイコス島へ飛び、山ほど面倒に巻き込まれてくるのに。

また、空港があちこちに点在し、港の数も多い、バハマ諸島のはるか南東に位置するこの島に、麻薬の魔手が伸びたのは初めてじゃない。我々ジャーナリストはこの手の事柄には精通している。何年もの間、イギリスのマスコミは「麻薬密売人の楽園—植民島、巨額の麻薬取引拠点に」(一九八二年九月七日、デイリー・エクスプレス)といった類いの記事を掲載し続けていた。ロンドンのタイムズ誌は七十年代の終りに、「警察当局によると、アメリカ合衆国に流入するマリファナの九〇パーセント(!)はタークス・アンド・カイコス島経由でもたらされている」と発表している。サンデー・テレグラフは、次のような警告を発している。「麻薬の売買によってきわめて多額の金銭が動かされ、タークス島ではまったく新しい権力構造、まったく新しい政治システムが急速に生まれつつある」と。

私は幾つかの新聞でサンダース事件を調べてみた。明らかに、タークス・アンド・カイコス島の人々はD E Aの措置をありがたいとは思っていない。ワシントン・ポスト紙は「麻薬密売者逮捕、高まる島の緊張：英国政府『市街戦は避けるように』と島民を説得」と題して、第一面記事で「懲罰、拘禁などの噂・・・イギリスの軍艦が現場に急行」と報じていた。ニューヨーク・タイムズは、新首相代行ナサニエル・「ポップス」・フランスシス氏が、サンダース氏は『はめられた』のであり、アメリカの白人による人種差別的陰謀だ、と憤りをあらわにしていると報じている。「イギリス領の八つの島に事件の余波」と題するマイアミ・ヘラルドの記事では、経済長官の甥のこんな談話が載っている。「金に興味を抱いたのが恥ずべきことなのではない。捕まったのが恥ずべきことなのだ」。それにしても、ポップスだのスモーキーだのという名前の議員を揃えているなんて、一体どんな国なのだろう。きっと、新しい海賊共和国にちがいない。

カリブ諸島にはこの手の島がたくさんある。最も有名なのはトルトゥガだ。一六〇〇年代に「沿岸組合」と呼ばれるフランス海賊団がここを占領した。そしてスペインのプレート船団(その他、あらゆるもの)を略奪していた。海賊たちの作ったもうひとつの小国は



ニュー・プロビデンス、現在のナッソーのあたりである。一七一六年に建国されたこの国には、「カリコ・ジャック」ラッカムとエドワード・「黒髭」・ティーチという住民がいた。ラッカムは軽い木綿の服を愛用していることで有名で、また黒髭は、口髭のなかに爆竹を仕込み、ラム酒と火薬を飲むことで知られていた。彼らも船を略奪し、人々を殺した。ニュー・プロビデンスの長は、半狂乱の状態で浜に打ち上げられたところを海賊たちに発見されたのだった。彼らはこの男を「知事」と呼び、手の込んだ公式儀礼をつくりあげた。

もちろん、タクス・アンド・カイコス島は現代風にはなっているだろう。大型のヘレシヨフ艇には海賊旗はなく、コロンビア船籍の登録旗だけだろう。不気味な黒葉巻型快速艇も埠頭に浮かんでいて、リヤジェットが網でカムフラージュされているだろう。アルマーニのスーツを着込んだ大物百姓が、ウージー機関銃とM A C 10 を撫で回し、いっばうではグァヒラ半島の将軍が、ロレックスの腕時計をした薄汚いアメリカ人に、もったいぶったジェスチャーを見せる。そしてもちろん、麻薬密売人のガールフレンドたちもそこらじゅうにたむろしている。亜麻色の髪、小麦色の肌、半裸。ひきしまったボディと、厳しい目付き。おまけに、バーのカウンターでは、細かく刻まれて均質化され、ピンクの後光を放つようなアンデスの雪のごとき純白のブツが、腕ほどもある太さの線状に盛られ、鼻で吸われるのを待っているのだ。

さて、何を持ってゆく？ 水着、フリップフロップ、. 3 5 7 マグナム銃・・・ 一方では、主婦、子供そしてもちろん、物書きまで殺したがるラテン系行商人に対する口実として、主治医が書いてくれた日光欠乏症の診断書も持っていこう。旅行用のパンフレットには、銀行秘密法に関する素晴らしいことが書かれていた。宿泊するホテルは、プロビデンス島のサード・タートル・インが最高らしい。私は正体を隠すため、抜目ない疑われにくい変装を思いついた。夏向きの紺のブレザー、チノパンツにデッキシューズ。ちょっと弁護士風、ちょっと銀行家風、ただの南フロリダのヤッピーみたいな感じ。ほら、たまたまこの場に居合わせただけで、ちょっと依頼人と打ち合わせか、あるいは企業の名前を利用して代用品を運びこもうとしているみたいな。要するにビジネスライクではあるが、かといって秘密主義だったり、詮索好きだったり、ビジネスライクすぎたりしない。マイアミから飛行機で現地へ飛んだ。うだるように暑いトタン屋根の空港、ひどく馴々しい税関係官、イバラとヤシに彩られた景観など、すべてに凶々しさを放っている。私はサード・タートルのバーへゆき、ジンを注文した。「ダブルで」。そして煙草に火

をつけた。いかにも場慣れした様子で。

「まったく」とバーのなかで誰かが声をあげた。「またブンヤか。あんたたち、どうしてこう、揃いも揃ってブルーのブレザーを着てるんだ？ クラブでも結成してんの？」

「ええと、うーん・・・その・・・ノーマン・サンダースをはじめとする大勢の議員がマイアミで逮捕された件に関して、ここの人達はひどく残念に思ってるんじゃないかな。私は話題をうまく麻薬に誘導しようとした。

「残念？」また別の誰かが言った。「残念どころじゃねえよ。ノーマンとスモーキーはカリブ諸島で一、二を争うテニス・プレイヤーだったんだぜ。トーナメントが来週ってときに、あれだもんな！」

これはどうも、期待していたのと話がちがうような・・・。

タークス・アンド・カイコス島の領土は、海のまんなかに百三十キロのびている。堆積作用による石灰岩と、化石の貝の破片の堆積などが会場に露出しているのだ。いくつか丘はあるが、島のほとんどは海面とほぼ同じ高さである。マングローブが絡み合うように低地を覆っている。熱帯の楽園のようなこの島は、ちょっと見ると我々のアパートの屋根に似ている。雨量が乏しく、表土もほとんどない。だが砂浜は素晴らしく、風と海水の浸蝕で柔らかな岩が削られ、ロココ調の海岸線を生みだしている。また、神秘的な海の洞窟や意外な落とし穴があり、いかにもアステカ人が処女を生け贄に捧げるのにはうってつけだ。人々はうんざりするほど馴れ馴れしい。すごいデコボコのため、スクーターを借りたのだが、ジープに取換えなければならなかった。この地で道と称しているものを走るときは、決してハンドルから手を放してはならない。数百メートル沖には見事な珊瑚礁があるが、それは大陸棚の端でがくんと千メートル落ち込んだ「壁」の端に乗っかっている。スキューバ・ダイビングには絶好の場所だ（あるいは、セメントのトップサイダーを履いたライバルを葬るにも最高だね）。丈が低く、ぎざぎざで複雑に絡み合った植物が、手を加えられることなく数キロにわたって続いている。北カリブに残る、数少ない手つかずの自然だ。

タークス・アンド・カイコスには、ニューヨーク・タイムズによると三十七の島が、ワシントン・ポストによると四十二、マイアミ・ヘラルドによると八つの島があるという。私が見つかることのできた唯一の地図によると島の数は六十三だったが、この地図はランチョンマットを兼ねた代物だった。この質問をすると、タクシーの運転手、釣り船の船長、

ホテルのメイド、道端に立っている人など、聞きつけた人が我がちにやってくる。「イースト・カイコス、ウエスト・カイコス、ノース・カイコス、サウス・カイコスだろ……」連中が島の名前をあげ始めたら最後、もう止まらない。「……それからミドル・カイコスにプロビデンシャル、パイン・ケイ、グランド・ターク、グァナ・ケイ、ニガー・ケイ。もっとも今ではこの名前は使っていないがね。バック・ケイにフレンチ・ケイ、ブッシュ・ケイ、フィッシュ・ケイズ、ビッグ・アンバーグリス、リトル・アンバーグリス……おっと、ところでこれ、満潮の話？ それとも干潮のとき？」

これだけの島のなかで、人が住んでいるのはわずか六つ。全住民はたった八千五百人。ほとんど同じくらいの人がバハマやイギリス本土、合州国、その他の場所へ出稼ぎに行っている。

タークス・アンド・カイコスでは毎年春になると、黒くて美しい人間の頭ほどもあるエレボス蛾が出る。この蛾は「銭こうもり」と呼ばれている。これが頭にとまると、財産が授かるという。どう見ても、大した財産はもたらしてくれないようだ。島の住民は巻き貝捕りやロブスター漁、ささやかな観光業を営んで暮らしている一生計を立てるための仕事など、あまりたくさんはないのだ。ついでに、仕事以外ですることもあまりない。

私はイギリス人の知事や野党のリーダー、そして（逮捕された連中は潔く辞職していたため）新しく就任した首相と通産・開発・観光庁長官にインタビューした。

前首相のノーマン・サンダースを悪く言ったり、あるいは興味深いネタを提供してくれる人間はひとりもいなかった。サンダースは気品があり、心が広く、仕事のしやすい仲間だったという。また、ハンサムで服装のセンスもいい。故郷のサウス・カイコスでは絶大な人気を集めていた。いたるところに彼のポスターが貼ってあり、まるで「白雪姫と七人の小人」で採用されそとなった小人の名前のような「しっかり、正直、ほのぼの、誠実」といった政治スローガンがくっついている。野党の党首、クレメント・ハウエルからはサンダースの悪口がたっぷり聞けるかと期待していた。が、タークス・アンド・カイコスで政党政治が始まったのは、ごく最近の一九七五年のことで、みんなどうすればいいかもよくわかっていないというのが現状だった。ハウエルはやや人民党寄りのPDM（人民民主運動）のリーダーである。サンダースは、若干ながら企業寄りの組織、PNP（人民国民党）の党首だった。そして現在も。「PDMとPNPは、アメリカの民主党と共和党のようなものなのではないでしょうか？」私は覚悟を決めてハウエルに質問を投げかけた。

彼はじっと考え込んでいた。「民主党と共和党は、どう違うのですか？」

「共和党は与党です」

「それなら、おっしゃる通りです」と彼は答えた。これが、サンデー・テレグラフの警告していた「まったく新しい政治システム」なのだろうか、と私は内心でつぶやいた。

サンダースがPNPを結成したのは、今は亡き「JAGS」マッカートニーという男がPDMを結成したから、ということらしい。PDMが何故結成されたかということ、タークス・アンド・カイコス島がイギリスの植民政策に対し、島の歴史始まって以来の最もしらけた闘争に従事していたからだった。この事件はやがて「ジャンカヌー・クラブ事件」に発展する。一九七五年、イギリスはタークス・アンド・カイコスの警官として、他のカリブ諸島の出身者を採用した。JAGSと仲間の島民たちは、よそ者の警官に反発した。警官たちは、島の慣習を無視して銃を着装する者もあり、威嚇射撃をした。JAGS一派はジャンカヌー・クラブに立て籠もり、お返しに威嚇射撃をした。人質を取り。要求を突きつけた。(実際には、人質に関しては疑わしい点がある。現地の新聞社のオーナーとPDM党员でないふたりの人間がクラブにいたのは事実だが、彼らはただ酒をたっぷりとふるまわれただけで、自分たちが人質にされているとは夢にも思っていなかったのだ)ジャンカヌー・クラブ事件で提示された要求のなかで最も大きなものは、ジャンカヌー・クラブ事件の調査委員会を招集することだった。徹夜交渉の挙げ句、要求は受け入れられた。翌年、JAGS・マッカートニーは現地出身者初の首相に選出された。その後間もなく、独立闘争は終結した。サッチャー政府が、タークス・アンド・カイコス島はどのみち独立させる、と発表したためだ。

私は「部外秘」とスタンプの押されたイギリスの外務・連邦省の書類を手に入れた(もっとも、その後格が下がったらしく、「取り扱い注意」になおされていたが)。この書類にはJAGSとイギリスの国務長官ニコラス・リドレーとの数回にわたる会談の詳細が記されている。リドレーは、タークス・アンド・カイコスの独立資金として島に対して千二百万ポンドの提供を申し出た。JAGSはこれに対し、最低四千万ポンドを要求。所轄大臣カリントン上院議員が顔を出し、タークス・アンド・カイコスが千二百万ポンドという寛大な提示額を蹴ったことに「驚愕の意を表明」し、かつ「大蔵省がこれを承認したとは信じられない」と発言。JAGSは強硬に合意を拒んだ。会談は結局物別れに終わった。「リドレー氏は……タークス・アンド・カイコス島に対し、双方にとって妥当と思われる金額

を提示した。マッカートニー氏はこれを拒否。氏は、イギリスは船長であり、乗組員に対して相応の報酬を支払うべきだと主張。リドレー氏は、賃金削減ということもある、と指摘した。JAGSは「そのような場合、暴動も辞さない覚悟である」と反駁……リドレー氏は、面子の首をすげかえればこんな問題はすぐに片がつく……と言明」

最終的に、島民側は千二百万ポンドを受取り、しかも独立しないで済んだ。いったい何が起こったのか、と私はイギリス当局の人間に尋ねた。「なにしろフォークランド紛争後のことでしたからねえ」という、溜め息まじりの答えが返ってきた。

とにかく、タークス・アンド・カイコス政治機構は、麻薬の金で造られたにせよ、外務省のつむじ曲りの間抜けどもの金で造られたにせよ、単に昔ながらの票稼ぎでつくったにせよ、明らかにアメリカのものとは異なっている。通産・開発・観光省長官のアリエル・ミシックはイギリスの通産・開発・観光について語りたがった。各省の長官が、自分の省の仕事を理解している！ これほど洗練されていない行政システムがあろうか！ ミシック（失脚した元長官、ミスシック・ウィズ・トゥーズの遠い親戚）によると、タークス・アンド・カイコスには二億坪におよぶイギリス直轄のさら地があるという。最も大きなふたつの島は無人島である。ホテルの部屋ひとつあたり、一キロの砂浜がある。タークス・アンド・カイコスはカリブ諸島の商業開発にとって最後の開拓地なのだ。

麻薬の取引騒動やサンダース、その他の連中は？ そう、車に抗議の看板を掲げた人間が二人いた。一台は、ノーマン・サンダースの新居の建築に携わった建築業者のものだった。半年ぶりの犯罪事件だった。「弁護士として、法廷での弁護に生活を依存していたら、今頃は飢え死にしていますよ」とミシック。タークス・アンド・カイコスで起きた大きな窃盗事件といえば、一九三一年に起きた有線・無線会社の職員の給料総額六〇〇ドル強奪事件だけだった。

クリストファー・J・ターナー知事もまた、開発について語りたがった。バランスの取れた開発をやりたい。すなわち大型客船の旅やクルージング、ダイビング、釣りなどを楽しむ観光客を迎えること。失業を解決するため、もうひとつの希望として、漁業、金融業、そしてアグロナイトの採掘をねらっている（アグロナイトとは道路や化学物質を造る過程で有用な海の泥で、この辺で多く採掘される）。ターナーはまた、藻の育成に関してスミソニアン協会の調査がなされることを切望している。どうやら、干し草のかわりに藻を使用し、海底で牛のようにカリブ産のキング・クラブを育てよう、というつもりらしい。少

なくとも、私のメモにはそう書かれている。

麻薬はどうなった？ この島の外交及び治安責任者としての任務を負い、ロンドンから派遣されたはえぬきの公務員であるターナーは、次のように語る。「麻薬はあります」。純然たる地理上の問題なのだ。タークス・アンド・カイコスは、コロンビアから千キロ、マイアミからは九百キロに位置している。「麻薬取引に従事する者にとって、この島は今後も、大きな可能性を持つ島であり続けるでしょう」つまり、タークス・アンド・カイコス島は国際的麻薬犯罪者の温床であるということだろうか？ 「いいえ。ここはあくまでも燃料補給地の一つにすぎません」だが、とターナーは言う。「英国政府の統治領においては、このような事件は二度と起こらないでしょう」彼こそ、「あの遠慮のない双刺し作戦」をDEA（アメリカ麻薬取締局）に依頼し、自らの首相を窮地においやった張本人なのだ。果たして彼は衝撃を受けたのだろうか？ それとも内心ほくそ笑んでいたのだろうか？ 疑心暗鬼にかられているのだろうか？ それともうんざりしていたのだろうか？ 知事は内心を明かそうとはしない。「サンダースの逮捕は、個人的にも島全体にとっても悲劇的な出来事でした。彼は優れた管理能力を持った人物でしたから」混乱は起きなかったのだろうか。ターナーは言う、「私はあるレポーターに、『抗議や島民のデモは起こらなかったし、市街戦もまるでない』と言いました。この言葉は、『英国政府』『市街戦は避ける』と島民を説得』という見出しとなって伝えられました」なるほど、マスコミに対しては控え目な表現を用いよ、というのはこういう理由からだったのだ

知事の待合室では、ものものしい警備服に身を固めた気怠い風情のガードマンが、ダイアナ妃の写真の下で雑誌を読んでいた。トランシーバーからとぎれとぎれに、雨が降ってきてそうです、という声が聞こえてくる。「辛抱してじっとしてろ、テン・フォー」ガードマンが無線機にむかって言った。

このタークス・アンド・カイコス島への旅で最も有意義だったのは「ポップス」・フランシス首相へのインタビューであった、というより、インタビューの待ち時間だった。私は文字通り「埃っぽい植民地風の居留地に腰掛け、現地の役人との会見を待って」いた。トタン屋根の官邸よりも高いしゅろの葉をざわつかせ、そよ風が吹き過ぎる。ブーゲンビリア（あるいは、それらしき花）がベランダの手摺に沿って咲いている。その他、もろもろ。今時、こんな風情を味わえるジャーナリストはそうざらにいない。ついでに「コロニアル・クラブ」へ行ってみたいものだ（あいにく一軒もない）。そして、例の「スティン



ガぁ」を頼むのだ（何だか知らないけど）

ポップスは、素敵な老人で、レポーターに話をするのにいい加減うんざりしていた。「もう話すことは何もないよ」彼は自治国、あるいは半自治国、もしくは何らかの自治形態をもったこの島の元首であるサンダースに対してD E Aの行なった仕打ちに腹を立てていた。「サンダース氏は」と首相は言った。「すぐに拘禁されず、ペントハウスに入れられてマスコミの連中がやってくるのを待ったうえで連行されるという、屈辱的な目に会わされたのだ」マイアミ・ヘラルドのレポーターに問い合わせしてみたところ、これは事実だった。D E Aは新聞やテレビ局に電話をかけ、報道陣が駆けつけるまでサンダースやミック、スミスらをラマダに軟禁し、しかる後に彼等に手錠をかけて護送車で連行したのだった。「相手が白人の高官だったら、連中はこんな扱いは決してせんよ」とフランシスは言った。サンダースはぬれぎぬを着せられたのでしょうか？ 「らしいな。きっとそうだと思うよ」彼は、タークス・アンド・カイコスがレーガンの後援しているカリブ流域イニシアチブに参加しそこねたという事実を指摘した。

「私が麻薬にまつわる犯罪を黙認している、というような書き方は間違ってもしないでくれたまえ」と首相は言った。「私の政権下では、今後いかなる麻薬取り引きも行なわれることはないだろう」

「麻薬密売者逮捕、高まる島の緊張」という見出しの中身はせいぜいこの程度のことだった。私はこれっぽっちも麻薬にはお目にかかれなかった。草が燃えるほどの匂いも感じとれなかった。女たちはみんな、上も下もきちんと水着をつけていた。目つきが鋭く、恐ろしい顔付きのジャマイカ人の大佐に会ったが、彼はハリケーンの災害救助対策に携わっている国連機関の役人だった。警官も、知事のガードマンでさえも、誰一人として銃を携帯していない。グランド・ターク・ホテルの支配人によると、かつてはこの島にも「暴力による脅迫」があったのだそうだ。暴力による脅迫だって？ 「まあ、電話でのことですがね」私は彼を問い詰めた。「噂によると、知事のところにいたずら電話が二回ほどあったそうですよ」。タクシーの運転手は麻薬の密輸についてこう語る。「いいや。あたしには可愛い子供がいますんでね。可愛い孫もいますんでね。毎日一生懸命稼いで、幸せな家庭生活を送れりゃおんの字でさあ」パーテンダーは、島の連中について次のように語る。「まっとうにやってたら、みんなあんたに味方してくれる。けど、半端な真似したら、どんな目にあわされることやら」

私が体験した唯一の恐怖は、現地の航空機だった。ちゃちなツイン・プロペラ式の飛行機だった。エンジンカバーがはずれ、大勢のメカニックたちがエンジンの回りに群がっている。年の頃はせいぜい十六才ぐらいだろうか、トランジスタ・ラジオから流れる音楽に合わせてリズムをとりながら仕事をしている。エンジンから火が噴き出した。一人がどこからかコーヒーの缶に水を汲んできて、燃え上がっているガソリンにかけた。やがてエンジンカバーが元通りに装着され、私たちが搭乗すると飛行機は飛び立った。正直なところ、この時ばかりはいばらの藪もしゆるの茂みも、確かに凶々しさを放っていた。

タークス・アンド・カイコスは、おそらくカリブ海の島々でも例を見ないほど華やかな歴史の何一つない島である。最近の学説によると、コロンブスが初めて新世界への上陸を果たしたのはバハマ諸島のワトリングス島ではなくグランド・タークだったという。だが、タークス・アンド・カイコスの歴史学者H・E・サドラーは次のように指摘している。「週末に休息してから、コロンブスは支那への向かおうとした」。コロンブスの航海日誌には、彼の捕えた現地人が「身振り以示したところによると島の数は夥しく、数え切れないほどだ」という。彼等が名前をあげた島だけでも、その数は百を下らなかった」という記述がある。どうやら一九四二年以来、島の人々は同じことをして暇つぶしをしているらしい。

タークスという名前はフランス語の「海賊」からきているが、実際に海賊が活動した痕跡はあまり残っていない。確かにカリコ・ジャック・ラッカムは、イギリス人がニュー・プロビデンスから一斉に引き上げて以来、ノース・カイコスを拠点にしていた。だが、ジャックはさほどの豪傑でもなかった。部下たちは彼のあまりの臆病ぶりに、二度反乱を起こしている。彼が有名になったのは、もっぱら恋人のアン・ボニーのお陰だ。この女性は下品な言葉を使う雌ギツネで、男のような身なりをし、ピストルを二丁身に着け、格闘となると短剣を振り回す女傑だった。ボニーは惚れっぽい女だった。ラッカムの部下の若いハンサムな水夫に惚れ込み、言い寄ったのだが、この相手が、やはり男のふりをしているメアリー・リードという女性だった。ふたりは親友となった。ラッカムはついにイギリス海軍に追い詰められ、あっさり降伏してしまうが、アンとメアリーは最後まで闘い抜いた揚げ句、妊娠していることが判明して死刑を免れた。カリコ・ジャックが絞首台に上ったとき、アン・ボニーはこう言った。「もっと男らしく戦っていたら、こんな犬のように首をくぐられずにすんだものを」といいた女たちだ。だが、彼女たちはタークス・アンド・



カイコスにはあまり長居していない。

タークス・アンド・カイコスで起きたその他のめぼしい出来事といえば、次のことくらいであるー

一七八三年：ホレーショ・ネルソン提督、タークス・アンド・カイコスのフランスからの奪還に失敗。（不名誉な結果に終わったこの任務について、ネルソンはこう語っている。「あれほど強力な軍隊と強力な条件の揃った相手に、これ以上攻撃をしかけるのは無駄だ」）。後日、フランスは何も言わずにこの島々を返してよこした。

一七八八年：四十人のトーリー党員が千二百人の奴隷を連れ、アメリカ独立戦争から逃れてやってきた。綿花の栽培を試みたが失敗し、投げ出して帰ってしまった。奴隷たちは放り出され、自立の機会が与えられた。

一九六二年ージョン・グレンがグランド・ターク付近に着水。

一九六六年ーエリザベス女王が島を訪問。女王に敬意を表して口バ競争開催。

私は強い酒を浴びるほど飲み、沖釣りをし、もっと強い酒を飲み砂浜をうろつき、ある時は真っ昼間から酒を飲んでいて一念のために言っておくが、これもみんな取材のためである。そして私は麻薬密輸にまつわる話を二、三耳にしたが、それは自分の商売品を味見したらしいサウス・カイコスのビジネスマンが、自分の飛行機のプロペラに頭を割られた、といった類いの話だった。夥しい量の粉末状の自惚れ薬が滑走路に残され、島の間人は一か月というもの、一睡もできなかった。もうひとりの密輸業者は、マイアミからプロビデンシャル島に自家用飛行機を夜間着陸させようとした。島の空港には照明がないので、彼は妻に電話をかけ、ピックアップ・トラックを滑走路の端にとめてハイビームをつけておくよう指示した。彼は妻の真上に着陸してしまった。この事件は厳密にいうと、麻薬とはなんの関係もない。密輸業者は食料の買い出しにマイアミまで出掛けたのだった。だが結局、妻と密輸業者は命を取り止めた。が、飛行機とトラックは惨澹たる有様だった。

一九八〇年、D E Aはバット作戦を開始した。マリファナの海上輸送を妨害し、取り押さえる作戦だ。空軍のC 5 A貨物飛行機が、プロビデンシャル空港に事前の通告もなくふいに着陸し、島民を震え上がらせた。C 5 Aには、大量の高速艇が積まれていた。自動兵器を携帯したD E Aの局員は、たちの悪い蚊がうようよいるところばかりを選んでテントを張った。一週間もしないうちに、快速艇は数え切れない（が名前はちゃんとある）小島や砂洲にぶつかって、ことごとく座礁してしまった。

その後、密造のクエイルドを載せた飛行機が南米から合衆国へむかう途中、燃料切れでサウス・カイコスへ不時着した。だがこの時、飛行士は現金をまったく持ち合わせていなかった。彼はやむなく、ガソリン代のかわりに麻薬の積み荷を島へ置いていった。空港の職員は、この丸薬をみんなに配ってまわった。タークス・アンド・カイコスの島民はそれまでクエイルドなんか見たこともなかった。だから、一度に三、四粒ずつ服用した。すると島のあちこちで狂ったように車をとばす者が増えはじめた。木に衝突する車、玄関ポーチに乗り上げる車、海に飛び込む車が島じゅうで相次いだ。一週間後、飛行士が金を持って戻ってきた。クエイルドはなくなっていた。彼は激怒した。数日後、飛行士はM16を携えた三人を連れて、再び島に戻ってきた。彼らが着陸したとき、空港には税関職員が一人いた。恐怖の叫び声をあげながら、彼は一目散に逃げ去った。男たちと飛行士は復讐を企てていたが、恨みを晴らすべき相手がどこにも見当たらない。空港には一台の古いフォルクスワーゲンが駐車しており、キーが差したままだった。だが、動かない。しばらくうろろうろしていたが、みんなやがて諦めて飛び去っていった。

今回の一件（アメリカ合州国対ノーマン・サンダース、スタフォード・ミシック、オールデン・スミス／別名スモーキーの事件）では、正真正銘のごまかしが土台となっている。サンダースはサウス・カイコス空港における燃料の取り扱い権を持っていた。彼は夜の商売に深く携わっていた。またサンダースの暮らしぶりは、首相としての一万八千八百十六ドルの給料、プラス定期便が一日一本の空港のガソリン・スタンドからの利益だけではとてもできないような豊かなものだった。グランド・タークに立派な邸宅を持っていたが、それはまるでトレーダー・ピック家の壮大な墓にサモア・スタイルの尖った屋根を被せたようなものだった。島の人々の噂では、その邸宅は百二十万ドルは軽くかかっているという、これはかなり高目の見積もりだ。だが、その邸宅は知事の屋敷から二軒おいた浜辺に建てられていた。サンダースは大型車とヨットを所有していた。選挙の際には、かなりの額のキャンペーン費用があちこちでとび交い、サウス・カイコスの選挙区にばらまかれた。ミシックもまた、素晴らしい邸宅とオールズモビルを所有していた。スモーキーについては、よくわからない。一般的に言って、一九五六年以来どこも建物を塗り直していないような場所にしては、予想以上にゴールドの装身具やピアジェの腕時計、マイケル・ジャクソンのファッション・ジャケットなどが普及している。

だが、これはカリブのみすばらしい群島全体に言えることである。生きてゆくために

は、手段を選んでなどいられないのだ。タークス・アンド・カイコスでは、島民は伝統的に、塩田による製塩業で暮らしを営んでいたが、この産業は一七八〇年より次第に衰退の一途を辿りはじめる。一九六四年、製塩業は完全に衰退し、島の至る所に中途半端に乾燥したいやな臭いのする海水が残された。この他には、島民が生計をたてる職業といえば付近の海底に沈んだ数え切れないほどの難破船ぐらいだった。その多くはたぶん、水先案内人がランチョンマットの地図を見ながら進路を指示し、現地の者たちに島の名前を暗唱するのをやめると指示するのに気をとられて難破したのだろう。時には、島民たちが過剰な冒険心に駆り立てられることもあった。一八六四年、アメリカのフリゲート艦がノース・カイコス島付近を走行中、「船長は後甲板にさがり、武装したサルベージ屋の襲撃を阻むよう強いられた」という。一九世紀の間、景気を良く見せるために無理やり明りをつけさせられた、という苦情がたくさん集まっている。先に述べた、ピックアップ・トラックに乗った密輸業者の妻は、この古い伝統にはからずも連なってしまったのだと、私は考えたい。

島の住人、特に白人は、麻薬取り引きに手を染めていたのはサンダースの前任者JAGS・マッカートニーだと言う。サンダースとPNPの台頭によって密輸業者は一掃されたそう。確かに、いくぶんレゲエ・スタイルの髪はJAGSのほうが、サンダースよりもキナ臭い感じはする。彼の一派は、選挙に勝つとみんなハイチ島へ飛び、お揃いのレジャースーツを仕立てている。PDMの誰かが解雇されると、連中はおそろいの恰好で雇用主の家へ押しかけ、睨みつけるのだった。だがそのJAGSも今ではすっかり穏やかになり、PDMの支持者たちは、私の会った限りすこぶる愛すべき連中ばかりだった。おまけに現在のPDMのリーダー、クレメント・ハウエルは、リンカーンや聖母マリアとも並び称されるほど清廉潔白であると評判の人物である。だが、JAGSは名高いアメリカ人の犯罪者と共にアトランティック・シティへ向かって飛行中、謎の飛行機事故によって不慮の死をとげている。いっぽうで、麻薬取り引きを根絶するためイギリス政府に最初に援助を求めたのもJAGSだった。真実は誰にもわからない。パームビーチから南には、真実などというものは存在しないのだ。

仮にサンダースが何かをやっていたとしても、それはみんな向こうからもちかけられたものだ。二五〇年前、バミューダ島の知事ブリュアーがこのように不満を漏らしている。「カイコスの交易はその熱心な支持者たちを見事なまでに凶暴にってしまった」するとあ

る役人がこう答えた。「閣下、それを改めようとしたら、事態は手に余るものになりますぞ。なにしろ、ここから船を出す者で、海賊と取り引きをしていない者はひとりもいないのですから」特に、D E Aがサンダースに提示したような条件を出されれば尚更だ。D E Aが自ら認めていることだが、彼らは秘密捜査員を動員し、麻薬密輸用の飛行機に燃料を補給してくれたら週に二五万ドルを保証しよう、とノーマン・サンダースに持ちかけたのだそうだ。私たちはある晩、サード・タートル・インのバーで興味深い議論を行なった。私たち（つまり休暇で釣りに来ていた堅実なビジネスマン、太ったアメリカ人観光客、厨房の見習い、私、そしてハネムーン中のカップル）は全員一致で、週に二五万ドル貰えるなら喜んで麻薬密輸用の飛行機に燃料を補給するだろう、との結論に達した。二五万ドルもらってもやりたくないことなんて、この世にあるんだろうか。かなり酒がまわったところで、いろいろと恐ろしい告白は出てきた。

後に私はマイアミに戻り、原告の申し立て、起訴状、口供書などに目を通した。宣誓証言のなかで、ゲイリー・スロボダといういかにも悪人ばい名前のD E Aの特務捜査官が・・・まあ、こいつはいろんなことを喋っている。この記録は延々十六ページにおよび、大半はあてにならないヨタ話ばかり。麻薬が実際にあったかどうかは一言も書かれていない。また、サンダースに麻薬の話を持ちかけたのはみんな、D E Aの捜査官や密告者、警察のまわし者ばかりで、ただひとりの例外はアンドレという名のお喋りなフランス系カナダ人だけだった。この男はたまたまうっかりこの自由討論に加わり、サンダースがいかにか妙なペテン師かということをはらばらと喋ってしまったのだった。天文学的な額にのぼるわいろ交渉が行なわれたにもかかわらず、サンダースはたった六万ドルを受け取っただけで、しかもそのうち十萬ドルは密告者の相棒によってつり上げられた燃料代に消えてしまったらしい。スモーキーが受け取った額は二千五百ドルだった。

大陪審で提示された強力な証言も、それほど圧倒的なものではなかった。数々の会話が密かに録音されていたのだ。以下に、その写しを参考までにあげてみよう。

スモーキー：仮に、仮にだよ、空港の連中に二千ぐらいかかるとしよう

匿名の密告者：え

スモーキー：(聞き取り不能)

密告者：なぜわかる？

スモーキー：(聞き取り不能)

密告者：黒い髪のやつらの一人

スモーキー：(聞き取り不能)

密告者：俺はそんなものクソほども知らね

スモーキー：(聞き取り不能)

サンダース：(聞き取り不能)

サンダース：まずは金の勘定といこう。ひとり二千とすると、これはほんとに掴みだけど(聞き取り不能)。管制塔のふたりに四千ドルずつやると、二×四で八千ドル、か。それに(聞き取り不能)

スモーキー：わかった、もういい

サンダースがポケットに二万ドルを詰め込んでいる現場のビデオも見た。確かに、彼は休養のためにラマダに宿泊していたのではない。確かに、誰かが「ほら二万だ」と言っており、サンダースがそれをズボンのポケットに挿し込んでいる。だがそれ以外、何が行なわれていたのかはまるでわからない。テープは、コンセントくらいの高さの壁にはめ込んだピンホール・レンズで撮られたものだった。従って、映っているのはほとんど膝と尻ばかりだ。麻薬捜査官と密告者が麻薬について何か喋っている。でかいアゴのフランス系カナダ人が、やたらに口をはさみたがる。D E Aの捜査官は、明らかに隠されたマイクを気にしていたのだろう、自分たちの言葉をいちいち復唱していた。ノーマン・サンダースの発した言葉で唯一聞き取れたのは、「私たちは手数料の話をしているんだ。発見者に渡す手数料の話を」というだけ。これを書いている現在も、サンダースは獄につながれており、保釈金は百十万ドル。

私が見たところ、麻薬取締局は無抵抗な格好の場所、親愛なるN A T O同盟国の管理下にある場所という、非常にお手軽な標的としてタークス・アンド・カイコスを選んだだけだ。うるさい共産主義者も武装した怒れる農民も、厄介な黒人勢力による政府もこの島にはない。ターナー知事の話によると、タークス・アンド・カイコスが麻薬密輸業者に目をつけられやすい理由はまさに、島民が法に忠実であるからだという。「暴力も窃盗も、ゆすりもこの島にはありません」

それに、ここは実に素敵な島だ。サード・タートルも正真正銘の最高級ホテルである。贅沢な食事に広々とした部屋、テラスの下には砂浜が広がり、感じのいいバーもある。それに、どこまでも果てしなく続く自然がまた素晴らしい。あたりの景観を損なう高層コン

ドミニウムや馬鹿げたショッピング・センター、気取ったレストランもなく、ただひたすら何キロも、鳥やトカゲの住む鬱蒼とした緑の地が続いているばかりだ。そこは恐らく、原住民であるアラワク族がカリブのインディアンたちの侵略を受け、深い藪のなかに追い込まれて以来、人間が一度も足を踏み入れたことのない場所なのだろう。

プロビデンシャルで私は一時間ほどジープに乗り、人跡未踏の浜や崖が十キロも続く、ほとんど車の通れない道を走ってみた。大きな岩場の中に小さな入り江があり、漂白したような純白の砂を波が洗っている場所があった。私は服を脱ぎ、午前中いっぱい、まるで「青い珊瑚礁」のなかのブルック・シールズみたいに水と戯れてすごしたのだった（胸は彼女に負けないが、腹ははるかに出ていたが）。

サード・タートルに戻り、私はノートにこう書き付けた。「麻薬：皆無」、「海賊：嘘八百」。その時、南部のやり手、プア・ホワイトの事業家、MBAを持つ実業家のいななきが聞こえてきた。「未開発の渚が二億坪だぞ・・・すばらしい！ こいつはもう、こうするっきゃありませんよ！ 例のゴールデン・ドアってところをご存じですか。ほら、デブのご婦人がいくところですよ。ああいうのをいっちょ行きましょうや！ それと、美容整形クリニックをドッキングさせたらどうです？ え？ すごい名案でしょうが!?! いやすばらしい!!!」いやはや。私はさっき書いた「嘘八百」という部分を線で消した。



## 第 19 章

# 明るいベイルートの人質とハイジャッカー

ロンドン発レバノン行き、中東航空 804 便の搭乗口で、私はテロリストを探していた。ぴかぴかのスーツに身を固めたダニー・トーマスみたいな男一奴じゃない。三才以下の子供三人を連れた、疲れ切った母親一ちがう。やがて、日焼けした顔に目の高さまで髭を生やした若者の一団がせかせかと乗り込んできた。オフブランドのブルージーンズに、レバノンの国民軍の普段着である化繊のポロシャツ。飛行機が離陸した時、彼らは「アラ・アクバー！」と叫んだ。これは文字通り「神は偉大だ」という意味だが、背筋に寒気が走った。イスラム教の原理主義者のやじになると、それはジェリー・ファルウェルがアメリカ中をうろついて、監督教会派を皆殺しにしている状況下での「キリストは汝を愛したもう！」というのと同じような意味になる。私は緊張のあまりトイレへ向かい、ついでに搭乗者たちの品定めを行なった。調理室付近に数人のグループが固まっている。私は身を乗り出して、免税店のショッピング・バッグに破碎手留弾を忍ばせているのは誰かを見定めようとした。「うわあっ！」連中はびっくりして飛びすさった。「おっと！」私も同じく飛びすさった。「CIAだ!!」向こうの顔に怯えが走った。何たることだ。青い瞳にストライプのネクタイ姿のこの私こそ、機内で最もあやしげな人物だったのだ。

我々は何故、こんな冷や汗をかくような思いをしているのだろう。近頃では、ハイジャックの魔の手を逃れる唯一の手段は、自分で民間航空のチケットを買ってベイルートに来てしまうことなのだ。

ベイルート国際空港は「ウィークリー・リーダー」の最新ニュース・クイズの化身のようなところだ。こちらにはアマルの軍隊、あちらには爆破されたヨルダン王家の旅客機。そして我々の乗った飛行機すぐ隣には、略奪されたTWAのジェット機。シーア派の地区の、くねる小道やはしご段の迷路のどこかに、三十六人のアメリカ人観光客が缶詰めにされているのだ。これらの光景を目にしていると、私は人間の行動の動機がいかに悪意に満ちているかを考えさせられる。特に私自身の行動だ。というものは、レバノンへ舞い戻る口実ができて、内心嬉しくてたまらなかったのだ。私は、最も不可解な人間のいる場所を歩き回ってみたいのだ。

レバノンは肥沃な三日月地帯の突端に位置する。肥沃の三角地帯とは、メソポタミアとナイルの扇状地を結ぶ、幅七十キロそこそこの細長い耕作地である。この乾燥した土地の断片からわれわれのアルファベット、われわれの宗教、そして最初の農業という形をとって、われわれの文明そのものが生まれた。レバノン人が「山」と称している場所を支配する者が、アジア・アフリカの交易ルートを制圧し、地中海東部地域を支配し、ヨーロッパへ通じる扉を開きリモコン装置のレバーかなんかを握っているのだ。社会の混沌を好む者たちは、かつてカナン人、エジプト人、アッシリア人、バビロニア人、ペルシャ人、ギリシャ人、ローマ人、アラブ人、トルコ人、フランス人、イギリス人、またまたアラブ人、そして時にはアメリカ海兵隊によって争われた土地に足を踏み入れると、喜びにうち震えてしまう。五千年にわたるタッグマッチだが、頭のイカれた連中はいまだにリングにしがみついている。ペリシテ人、イスラム教徒、イスラエル人、シリアの広大な砂漠の住人、そしてイカれた間抜けででしゃばりなヨーロッパ人は、今日に至るまでハーフネルソンを掛け合い、ラビットパンチを繰り出し、反則のフライング・ドロップキックをくらわせたりにしているのだ。

ある友人が、レバノンに五万といふ「フィクサー」のひとりを空港まで迎えによこしてくれた。「ミスター・ビスゲー！ ミスター・ビスゲー！」(P・Jというのが、アラブ人の舌ではどうしても発音できないのだ)汗まみれの、気立てのよさそうな小男は、入国審査ゲートに並ぶ五十人ほどの列の一番前に私を押しやり、ポーターを脅しつけて荷物を運ばせ、袖の下を要求しそうなレバノン人の陸軍将校をやんわりとかわし、あっさり税関を通過して、待たせていたハイヤーに私を押し込んだ。レバノン人はトラブルを理解している。というか、トラブルに関して理解可能な唯一のことを理解している。トラブルが起



きるときには、いつでも銭儲けのネタがあるものなのだ。

半年前、アメリカのニュースレポーターはほとんど全員レバノンから呼び戻された。テロも原因の一つだったが、同時に「国内レポーター」の不足も原因だった。他にレバノンに残留したアメリカ人は、わけのわからない誘拐事件の被害者となった七人と役立たずの大使官員たちだけだった。どちらも、ぞくぞくするような記事のネタにはなりそうもなかった。人類の運命が、ここらへんの薄汚いできごとにかかっているかもしれないだと？

それがどうした。アメリカの新聞では、この地域の扱いは「その他の死亡事件」欄の数節に減っている。しかし今や、「人質パート II」の上映が始まり、二流作家、ニクソン・ファン、テープ片手のインタビュー屋、おしゃべりレポーターどもが、世界の果てから流れ込んできている。海兵隊が侵略してきても、レバノン人のブローカーたちは今まで以上に喜ぶだけだろう。その危険性はいまだに去ってはいないのだ。

私はベイルートの南はずれにある海岸通りのホテル、サマーランドにチェックインした。サマーランド・ホテルは三面、四段の複雑なデザインのリゾート・ホテルで、ショッピングセンター、ヘルスクラブ、サウナ、レストラン、美容室などの施設が整っている。センター・コートには三つのプールとらせん状のウォーター・スライダー、滝をしつらえた人口のほら穴、小さな船が停泊できる港、プライベート・ビーチなどがある。デッキチェアがずらりと並んだ一ヘクタールは、日に焼けた人々で埋め尽くされていた。つややかな肌、美しく化粧をしたアラブの娘たちがプールサイドでくつろぐ様子は、まるでウエストチェスターのカントリークラブからテレポートしてきたかのようだ。

人々が心に描くベイルートのイメージからは、いささかかけ離れた光景である。だが、もともとベイルートはどんなイメージともかけ離れた場所なのだ。十年間にわたる数々の内乱、シリアとイスラエルによる侵攻や空爆、多国籍平和維持軍の駐留を経ているのに、この街は、政府の社会プログラムに攻撃されただけの都市より整然としている。無論、すさまじい破壊の跡を残す区域はある。緑地地帯はまるで反核コンサートのライブ・アルバムのジャケットのようだ。一六〇〇年代に植林されたレバノン杉の森は、多くのミサイル攻撃で、電柱の森と化している。コルニシュ添いのホテル・ロウは、戦闘が始まった最初の年に破壊されてしまった。最高級のホテル、セント・ジョージは焼け落ち、廃船のようになっている。それでもバーはまだ営業しており、戦闘がよほど激しくない限り、みんな水上スキーでそこにやってくる。「狙撃兵はいないの？」と、私はある人に尋ねた。彼は

こう答えた。「いや、狙撃兵はみんな自動小銃を使ってるから。狙いはそんな正確じゃないよ」

建物や、かつて建物があった場所の至るところに、木やガラスの破片、がらくたなどが散らばっている。かと思うと、クレーン車や建築屋、れんが職人や左官もいる。建築と破壊が同時に行なわれている街など、恐らく他にないだろう。電気は断続的にしか供給されず、一九七〇年代後半以来ゴミは一度も収集されていないが、商店には世界各国からの輸入品が溢れている。それに、輸入制限や関税がない、もしくは、あるとしてもそれを強制する政府が存在しないため、値段が格安である。銃声や爆撃の音がはっきりなしたが、通りはメルセデスのセダンだけだ。

サマーランド・ホテルも、別のリゾートの爆撃跡と、アマルの主要チェックポイントにはさまれて建っている。そのチェックポイントでは、砂浜に遊びに来た客でも、怪しげな格好だと車から引きずり出され、連行されて射殺されてしまう。ベイルートはいわば、二面性を持つ街として人類の歴史に残る記念碑的存在である。いつまでも生き残るだろうが、それにしてもとんでもない街だ。

それはともかく麻薬が格安。なんと一グラムのコカインが約五十ドル。私は友だち数人と山のようなコカインを吸い、ホテルの部屋にあるミニバーを二部屋ぶん空にしてしまった。深夜になって、そろそろ出歩こうか、ということになった。市街戦もおさまってきた。たぶんナイトクラブに行き着けるだろう。

A B Cニュースが、サマーランド・ホテルに拠点を置いていた。ちょっと顔を出してあいさつ。その日は「すでに十五日が経過」した日だった。人質ニュースでは、こういう言い方をする。みんな、腰を落ち着けていた。こいつは少なくともひと月、いや三か月は持つ、というのが一致した見解だった。私たちはアラブの非妥協的な姿勢について、また東洋では時間というものがいかに無意味であるか、といったことについてべちゃくちゃと知ったかぶりをしていた。その時バルコニーに出て、まるで自分の飼い犬がチェロを弾いている、とでもいうような顔つきで戻ってきたのは、A B Cのローマ支局長クリス・ハーパーだったと思う。

私たちの部屋の真下、オリンピック・プールの二倍はあるプール脇のテラスに、三十二人のアメリカ人の人質がいたのだ。アマルがディナーのためにサマーランドまで連れてきたのだ。

彼らの様子はそれは凄まじいものだった。といっても、別に虐待されていたわけではない。あちこちで出くわすごく普通のアメリカ人観光客と同じ身なりをしていた。ウエストが伸縮自在のカジュアル・スラックス、わけのわからないスローガンや、恥ずかしい地名がプリントされたTシャツ、ワッフル・ソールのサンダルにソックス。国際的に極めて深刻かつドラマチックな状況に追い込まれているというのに、はっきり言って彼らの服装はそれにふさわしいものではなかった。

私の考えでは、このような歴史的状況では、少なくとも皺くちの綿のスーツとか汗じみのついたパナマ帽ぐらいはあってもいい。それに、アルコールなしで世界戦争なんて、考えたくもない。だが、アマルは酒のたぐいには反対だった。代わりに、ウェイターが巨大な宴会用のテーブルをセットする二時間の間、みんな立ったままスナックをもぐもぐやり、フルーツ・ジュースを飲んでいた。

それは、ロータリー・クラブのメンバーが地中海クラブで、銃を突きつけられながら真夜中に朝食をとっている、といった感じだった。人質たちは、戸惑っている様子だった。なかには知り合いのアマルの歩哨に声をかけているレポーターもいたから、なおさらだろう。観光客たちの内心のつぶやきが聞こえるようだ。「ああチクショウ、こいつらみんな、ツルんでやがる」ある意味でこれは真実だが、せいぜい、マス・メディアの役割に関するニューヨーク・タイムズの恐ろしく退屈な署名入り記事のネタにしかならない程度の洞察である。

囚われの身であるディナーのゲストは、かわいそうに、幾分ぎこちなく、堅い表情をしていた。おずおずとした足取り、長時間にわたる恐怖からくる、ぎくしゃくと勿体ぶった物腰。少なくともテラスの者たちには、その気持ちが痛いほどよくわかっこのあたりに来たら、嫌でもあの横隔膜の下の堅く冷たいソフトボールやゆっくりとした過剰呼吸、肛門の引き締まる感じ、そして手足を走る冷や汗の無気味さを味わうことになる。あれだけはおめんだ。

皆が行儀良くしていたのは、たぶんこのためなのだろう。カメラのフラッシュも、無遠慮にマイクを押し付けるレポーターもなかった。人質たちはすすり泣いて慈悲を請い願ったり、われわれ全員に原爆をおとすよう大統領に要請したりはしなかった。アマルの歩哨は、見るからに呑気そうに銃を石のプランターに立て掛け、数人ずつ固まって煙草を吸っている。担当の人質が勝手に庭を散策したり浜まで降りて行っても、黙認していた。

A B Cにはアメリカとの直通回線が三本あり、そのうちの一本をエンジニアがプールサイドに引きこんだため、誰でも自由に家族と連絡が取れるようになった。

それはわくわくする出来事だった、と言いたいところだ。人質のひとりが、飛行機から連行されて以来の模様をつぶさに語っていた。私は狂ったようにナブキンにペンを走らせた。「するとあなた方はみんな、お互いに連絡を取り合っていたんですね？」私は言った。「いいえ」と人質が言った。「今の話はB B Cのワールド・ニュースで聞いたんです」

強い酒が飲みたい、とリドレー・ムーンが言った。ビクター・アンバーギーは赤痢にかかり、驚くほど痩せたため、ズボンがずり落ちるようになってしまった。カート・カールソンは、弟のバンがチープ・トリックでドラマーをやっているんだ、と教えてくれた。ジャック・マッカーシーは、数人の仲間と一緒に「人質ハンドブック」なるものを刊行するためのメモを書きためているという。「トイレット・ペーパーを忘れずに」というのが、ある章のタイトルだ。小さなおでこぐらいの枕を持ってくると、なおいいそうだ。まだ飛行機に乗っている時、頭を膝の間にはさんだ姿勢を六時間も強いられたという。「この事件が起こる前に、俺は煙草をきっぱりとやめたよ」とカート・カールソン。大事件というのは何やらドーナツみたいなもので、肝心の中心はすっぱり抜け落ちている。

こうして招待客たちはホストと共にしぶしぶ自分たちの居場所へと帰っていったが、その後でひとりの青年がアマルに連れられて戻ってきた。家に電話をかけ損なってしまったためだ。私たちジャーナリストと人質が協力すれば、果たしてこの怠慢な連中を打ち負かし、アマルの歩哨を圧倒できただろうか？ サマーランドの城壁から砲火を放ち、第六艦隊に連絡をし、救援隊が到着するまで持ちこたえることができたろうか？ 売れセン狙いの映画の筋書きとしてはいいだろう。本物の銃は、大衆芸術がいかにもいい加減かをはっきり教えてくれる。

その日の午前四時、私は複雑な気持ちでベッドに入った。世の中には、地上の新聞の見出しまで読み取れるアメリカのスパイ衛星があるはずだ。中東全域には無線の傍受局が無数に設けられていて、アマルの連中は一晩中トランシーバで連絡を取り合っている。国家安全保障会議の自称反ジミー・カーター派は、サマーランドでのディナーについてとっくに知っているはずだ。アメリカの対外政策としては、一時間以内にデルタ・フォースを送り込んでくるのではないか。目に見えるようだ。プールの中の衝撃爆弾、ビーチパラソルに絡まったヒューイ型ヘリコプター、睡眠不足のルームサービスのウェイターの群れが

ら、手当たり次第に人質でもない人々を救出する、アドレナリン過多の海兵隊の軍曹たち。私はバルコニーに通じるドアを開けっぱなしにしておいた。万が一、どこか安全でアメリカン・エクスプレスに見つかるような場所に移された場合、割れた百八十×百二十センチのガラス戸の値段をホテルの料金に加算されてはかなわない。

金曜日の夜のディナーが終わる頃、サマーランド・ホテルのスタッフがチョコレートで字を書いた巨大なケーキを運んできた。「楽しい帰国の旅を祈って」。土曜日の朝、合衆国国務省が人質の解放を発表した。シリア政府も同様の発表を行なった。各ネットワークや通信社は、こぞってこの記事を伝えた。みんな、ケーキの字を見てこのニュースを知ったらしい。

実は、人質たちは大して遠くに移動できたわけではなかった。ディナーに現われた三十二人の人質と航空機の乗務員は、シーア派のスラム、ブルジ・バラジナに集められていたのだ。だが超過激なヒズボラ・シーア派は、あと四人の人質を地下室かどこかに押し込め、引き渡しを拒否していた。

ヒズボラが四人の人質を解放しようとしめない理由は……そう、まずレバノンの政治情勢について理解しておく必要がある。それは、一面ではギャング同志の抗争みたいなもので、みんな地中海特有のフランク・シナトラのお友だちのマフィアスタイルで組織され、麻薬の輸送、密輸機関を牛耳っている。別の一面では本当の戦争みたいなもので、シリア、イスラエル、PLOらがにらみあっていて、そのにらみあいを主にレバノン領で行っているわけだ。また別の一面では人種暴動みたいなもので、あらゆる宗教団体が、自分たちは黒人なみの扱いをしか受けてないんだから、ほかのみんなもその程度の扱いに引きずりおろしてやろうと考えているのだ。また、一面では、アメリカの大統領選挙にも似ている。この世のろくでもないものは、たいてい大統領選に似ているのだ。イカしてる。わけわからん。みんな、頭をぶん殴ってやればいいのだ。何もかも、ラッシュアワーのニューヨークみたいに雑然としている。(とはいっても、もしも我が国の経済システムがオシャカになって、シリアとイスラエルとロシアと合衆国とイランと北朝鮮が、旗をつくれるやつには無料で銃とトラック一杯の金を配ってまわったら、ニューヨークはもうチトひどいことになるだろうが)。

わたしにはわからない。私は空港へゆき、TWAジェット飛行機の張り込みをしている

興奮ぎみの不機嫌な写真家たちを眺めていた。私が管制塔のてっぺんに立ち、何か一ピストル、指、それとも丸められたTWAの機内誌がコクピットの窓からこっちに向けられた。大勢のレポーターやテレビのプロデューサーたちが紙袋にむかって何か喋っている。何故かという、トランシーバを持っていると国民軍にスパイの疑いをかけられるし、国民軍はトランシーバが大好きだし、だから銃をつきつけて、お前はスパイだと言えば、無料でトランシーバがしっかり手に入るからだ。

空港では何事も起こらなかった。私はサマーランド・ホテルへ戻り、ABCのオフィスをぶらっと覗いてみた。ホテルの五室からベッドを運びだし、二五〇〇キロの電子機器を運びこんで、そこはニュースルームに早変わりしていた。三人の編集局長と特派員、プロデューサー、編成、技術スタッフ、カメラマン、ドライバー、金融業者らが互いに大声で指示をとばしあっている。一方、電話からは、ABCのお偉方がニューヨークから発する非常に有益なご指示がたれ流されていた。

「もしもしベイルート。こちらでは人質がセネガルへ移送されたというインディアナ州マンシー『アドバイザー・ワズプ』からの情報を得ていますが、これは事実ですか？」

「もしもしベイルート。カール・ジブラーンはまだ存命中でしょうか？ 『おはようアメリカ』からの電話に出てもらうことは可能でしょうか？」

「もしもしベイルート。ラジオ・ニュージーランドからの情報によると、五人の人質がおたふくかぜにかかっているということです」

私は家でいい加減なでっちあげ記事を書くフリーライターとしての静かな生活に慣れてっこになっていたのに。これじゃあ妹が、私のアリの飼育器をたんすから落っことした時とかわらないじゃないか。

私はその五室の一つにすわりこんで、ABCが流しているビデオ・テープを見ていた。そこらのホテルの部屋で有料テレビを見ている感じだけど、この部屋に散らばった飲みかけのコーヒーやワインのボトル、ルームサービスのトレイ、吸い殻で一杯の灰皿は、私がいつもためるものの比ではない。画面には銃撃が映り、外でも銃撃が行われてる。無気味。六十年代にLSDでラリったときみたい。ホラ、これは映画で、私はそれを見てるんだけど、でも自分もその映画の中において、それで……なるほど、メディアはメッセージであるってわけね。

でも、すごくいい報道番組だ、と思った。たっぷりごらんください、といった感じの笑



顔を浮かべたテストレイク大佐が、銃を振りかざしたヒズボラたちをバニーガールみたいに従えて、従順な人質へのインタビュー（家賃を払って来てくれ、と妻に求めた男もいたが、放送されなかったようだ）そして（いくぶん退屈だけど）極めて重要な、ナビ・ベリとの会談（デトロイトの住民のほとんどよりはましな英語を喋っていた）など。

帰国してわかったことだが、「アメリカ、人質を取られる:後編」の間中、マスコミは一体何をやっているんだ、という議論が巻き起こっていたそうだ。だが、テレビには二面性があるということをお忘れなく。私は、頭のほうにいた。ケツのほうから何が出てきたかは預かり知らぬこと。「生中継ニュース」はドニーとマリーをアナウンサーに、そしてコンピュータを使って会話をするゴリラのココを、ゲスト解説者として起用したという話は聞いているけれど。

その晩、ジャアファール・ジャラビという若者がABCのオフィスに現われた。彼はナビ・ベリの友人で、人質が解放されない本当の理由を説明するために派遣されてきたのだった。私は一目で彼に好感を持った。ひとつには、かれが怯えていたからだ。レバノンには勇敢がちょっと有り余っている。それに、彼はローレックスを身に着けていた。私の個人的な見解によると、誠実で自制心が強く、高度な主義主張を持ち、自己犠牲の精神に富んだ人間（言い換えるなら、残ったわれわれを常に殺死地に追いやるたぐいの連中）は安物の腕時計をはめているものだ。

ジャアファールの話によると、ヒズボラがアメリカ人たちの解放を拒んでいるのは、レーガン大統領が「どのような手段を暴漢や殺人者、野蛮人どもに拉致された人々を取り戻すために使って試みてみても全然正しい」と演説したからだという。ヒズボラがこの文章の構文をどう解釈したのかは誰にもわからない。編集局長はすべてを明らかにするため、彼をピーター・ジェニングスとアメリカ国民の前に連れ出した。

ジャアファールが出演をすませると、私は彼に、どうしてここへ寄越されたのかと尋ねた。自分はアメリカの大学に留学していたから、アメリカを理解しているとベリが考えたからだそうだ（「シーア派による非常に高度なアメリカ世論の操作」という説は、これで却下されるだろう。前回、ある大学生たちがアメリカのことをよく理解したら、ケント大学で虐殺されてしまった）。「人質問題が解決したら、」と私は尋ねた。「事態はどの方向に向かうでしょう？ 数々のシーア派の派閥は……そのう……？」

「私は快速艇をあそこに停泊させています」とジャアファールはサマーランドの小さな

入江に目を向けながら言った。「食料や物資も積み込んであります」これは非常にためになる話だ。社会情勢の混乱に目を向けつつも、一方で必ず非常口を確認しておく、というのは実に賢い考えである。

日曜日の朝、私はブルジ・バラジナの学校に向かった。アマルが、今度こそ本当にアメリカ人たちをまとめて解放する、と宣言したのだ。そこへ向かうまでの車の道中は、救出部隊を派遣するなら何が必要だったかを、よく物語っている。レバノン人の運転手は、その場所を地図でみつけられなかった。たぶん、デルタ・フォースもわれわれと同じように止まって道を尋ねるしかなかっただろうが、その場合も、レバノン人はなかなか本題に入ってくれなかったりする。たぶんわが国の襲撃部隊も、まだちっぽけなカップのコーヒーを啜りながら、カーペットやら密輸品のマルポロのカートンなどを売りつけようとする連中から逃げようとしているのだろう。

ブルジは厳密に言うとスラムではなく、軽量ブロックの塀で仕切られた、庭つきのスタック造五階建てアパートが建ち並び、道のかわりに迷路のような横丁が走る、旧地区である。このご近所の多くは内戦で破壊され、どのみち内戦以前から、押し寄せるマイアミ・ビーチ化の波による破壊が進んでいるところだった。聖体拝領式のときのような服を着た少女が、門のところできすくすと笑っていた。少年たちは軍のあとをついて歩き、記者団の持っている用具をじろじろと眺めていた。母親、父親、大勢の魅力的な十代の少女たちがバルコニーに立ち、自分たちの町で起きた騒動に対する野次馬根性を丸だしにして、窓から眺めていた。チャドル姿の女性はひとりもないし、またスカーフをつけた人も、競馬観戦にきたイギリスの王族たちより少ないくらい。で、これが例の、殉教を祈り求め、牙から血を滴らせる狂信的シーア派の集団だってわけ？

レポーター連中は、それよりもはるかに醜かった。学校わきの路地には百人、いやそれ以上のレポーターたちが集まっていた。彼等は人質となった旅行者に勝るとも劣らないみじめな格好をしていたが、人質連中よりもデブで下品で、連中に輪をかけて間抜けなトロピカル風の旅行服を着ている。トートバッグ、カメラ、大きな手提げ袋、雑嚢、名言集といった用具一式を持っているところは、まるで監禁された同胞の復讐に赴いた、スーパー観光客といった感じ。実のところ、ベイルートの駐留のマスコミは、自分たちで軍を組織すべきだ、と何年も前から言われているほどだ。そのくらい頭数は十分いるんだから。



それに、そうなれば多くのニュースもずっとすっきりする。「今夜『ナイトライン』、主なニュースです。テッド・コッペルは、自分を解放しろという要求が受け入れられない場合、自殺攻撃を開始するとの脅迫に出ています」といった具合。

アマルが着ているのは古着ばかりだ。ミラー・ライトのTシャツにリーバイスのデザイナーズ・ジーンズ、他はみなカラシニコフやロケット式グレネード・ランチャー、さや入りナイフ、ピストル、スペアのクリップ、弾薬ベルトなどを身に着け、身動きできないほど。まるで戦争ごっこをしている子供のような格好だ。いや、「のような」じゃなくて、本当に子供なのだ。平均年齢は十八にも満たない。彼等は帝国主義者や、シオニズムに偏ったアメリカの政策と主義に激しく反対しているが、そのくせほんのちょっとでも英語が話せる奴は、グリーン・カードを手にしたらアメリカで目指すキャリアについて喋りまくるのだ。私の若い頃に比べるとはるかに行儀が良い。恐らく家の裏庭で、子供っぽいマッド・マックス式の妄想を実地にこなしてしまっているからだろう。

私は六か月ぶりに会ったCNNのカメラ・ウーマン、ジェーン・エヴァンスにキスをするという、シーア派のエチケットに反する行為を行なってしまった。アマルの子供のひとりだけがにやにやししながら忠告してくれた。「ちょっとちょっと、おじさんたち結婚する？え？」

「あ、ああ、もちろん」と私は答えた。

「で、子供をたくさんつくる？」

当然ながら、彼らは自分たちの兵器を試すのが好きだった。アマルが学校の中に一人も入れないのでジャーナリスト連中が騒ぎ出すと、子供たちは一斉にAK-47で砲撃を開始した。何度も間近で銃声を聞き、その銃が空に向いているのがわかっていても、腹筋がぎゅっと収縮し、えぐみが血管を駆けめぐる。それに、汗だくになり、顔を紅潮させ、間の抜けたゴルフウェアを着込んだ百人ものジャーナリストたちが、時速百キロでひょこひょこ後ずさりするのはなんとも滑稽な光景である。

事態がどのような結末を迎えたのか、あまり詳しく述べることはできない。今後、誰かに「現場にいたから」というだけで何かを尋ねようと思ったら、考え直したほうがいい。私はその現場にいた。ヒズボラのターバン野郎が通りを二度、行ったり来たりしていた。これらの地域でなら馬鹿騒ぎで通る代物にも、それなりにお目にかかった。「お前たちのカメラ、ぶっとばしてやる」と、年長のアマルがテレビ局の局員に言った。彼はピストル

の狙いをつけた。引き金を引いた。カチッ。ピストルは空だった。「ははははは」。炎天下、ビールもなしに立たされたりもした。

夕方五時頃、アマルが数人の局員とレポーターを学校の中に入れた。「それぞれひとりずつを連れてゆく」とスポークスマンが発表した。ロンドンのタイムズから来ていた私の友人、ロバート・フィスクが叫んだ。「英語圏の新聞社の人間全部だ！」馬鹿野郎め。選ばれた幸運な数人の連中はさらに二時間、学校の中で立ち往生し、その間にヒズボラの高僧が、人質たちに手土産として無料でコーランを配っていた。

アマルの隊列の背後にはすでに護送団が配備されていた。私は引渡しの場面を見届けるため、あわてて場所を確保した。だがブルジから出る道は七つほどあって、私が選んだ道はずれだった。護送車は別の道を通り、とり残された私は、がやがやと騒々しいフランス人の写真家たちが、金をばらまいてバルコニーの場所を確保しているのを眺めていた。そのバルコニーから見えるのは、もっと大勢のフランス人の写真家の群れだけだったのだけれど。

私はいささか空しさを感じていた。今、われわれは世界じゅうの注目を浴びている現場のど真ん中にいる。劇的なドラマの真ただ中で、あちこちからの危険にさらされ、しかも巨額の経費をかけて。だがわれわれは果たして、この世界の暗闇に潜む真実を直視し……つまり自分たちが事態を楽しんでいるってことを認めることができるだろうか。できれば人質たちに、残るよう志願してもらえんだろうか。やっぱ、無理か。

## 第20章

# ニューハンプシャーへお引っ越し

しばらく前、ニューヨークからニューハンプシャーの小さな町に引っ越した。田舎暮らしはよく知らなかったが、ニューイングランドの景色に一目惚れしたのだ。のどかな牧歌的環境のなかで文筆業にいそしむのは私の夢だった。それに、もっと健康的な生活をしなければと思っていたところでもあった。さらに、屋根の修繕というものをしたことがなかったもので、地球上で暮らしに最も金のかかる所はニューヨークだと思い込んでいた。最近、都会住まいの他の連中も続々と田舎に引っ越しているから、私としては、自分が学んだことをぜひとも伝えておかねばなるまい。それに、拭きかえた屋根の払いも稼がにやなるまいし。

ニューイングランドの片田舎へ引っ越すなら、まず町選びを考える必要がある。ニューイングランドの町は三種類に分かれる。自分が可愛いのを知っている町、自分が可愛いのを知らない町、そして絶対に可愛い町になってやろうと頑張っている町。

可愛いのを知ってる町は、不動産価格がめっぽう高く、手工芸展が頻繁に開催され、バンパーに「くじらを救おう」というステッカーを貼ったボルボがあちこちで走っているのが特徴である。このタイプの典型的な例としては、パーモントがあげられる。こんな町には住みたくなかろう。「店」の看板は誤字だらけ、手工芸展は業者とタイアップしているし、それに（ボルボの愛用者にはまことにお気の毒だが）パーモントにはくじらなんか一頭もないのだ。

自分が可愛いのを知らない町は、もっと始末におえない。この手の町は、芝生に装飾をほどこしたり、各庭ごとにハウス・トレーラーを備えるよう義務づけたゾーニングがか

かっているところばかりだ。メインストリートに面した華麗な家を購入し、翌朝起きてみると、真向かいの華麗な家を誰かが購入し、取り壊してガソリンスタンドにしていた、といったことにもなりかねない。それに、土地っ子のティーンエイジャーたちは、一六九〇年製の礼拝堂の風見鶏をライフル銃的にする。我々のような優れた審美眼の持ち主にとって、これはつらい。我々なら、その風向計をランプに作り替えるのに。

一番まともなのは、絶対に可愛らしい町になってやろうと頑張っている町だ。わが町ジェフリーもその一つ。我々は寄付をつのって風向計を直し、また、メインストリートにあるガソリン・スタンドの「シェル」という看板のスペルにもうひとつeを加える努力も進行中である。ジェフリーのような町は住民のプライドとローカル精神を持っているが、同時に欠点もある。住民のプライドとはすなわち、委員会を意味する。この委員会がまた、四六時中召集される危険があるのだ。去年、我々の町はマイマイガの大量発生に見舞われた。委員会は秋の観光シーズンに訪れる観光客をがっかりさせないため、三週間かかって黄色い建築用の紙を樅の葉っぱの形に切り、これを木の枝に接着したのだった。

町選びが済んだら、次の問題は家選びである。ニューイングランドの家には一般法則がある。建築がひどいほど、家は本物のコロニアル風だ、という法則である。立派な外観、機能的な間取り、広い部屋の家があったら、ビクトリア朝風のクズだ。だが、ちょっと見でモービルホームと区別がつかなければ、それは一七〇〇年以前に建てられた代物である。無論、これはいささか不公平だ。天井高一メートル半、水浸しの地下室や腐った基礎を持つモービルホームはなかなかないのだから。いずれにせよ、家を調べる時には、各部屋がバスマットぐらいの広さしかなくて、電気系が最低であることを確認すること。どうやら植民地時代の我々の先祖は、とてつもなく電気に弱かったらしいから。

見晴らしについては心配無用。ニューイングランドの正真正銘のコロニアル風家屋は、みんな素晴らしく眺めが良いのだ。不動産屋に聞いてみるといい。「眺めですって？」と、私の不動産屋は言った。「最高ですよ！ この窓から這い上がって、ポーチの屋根に出てごらんささい、オロークさん。それから、あの煙突をよじ登ると そりゃあもう、息を飲むような眺めですって」

実際に家を購入するとなったら、他の町で買うのとまったく同じだ。ただし、登記簿の確認だけは別。ニューイングランドの登記簿は三五〇年前にさかのぼり、以後毎年のように誰かが必ずミスを犯しているのだ。お陰で前代未聞の登記簿が出来上がった。私が見

をしたある土地は、広さ六ヘクタールということだった。建物の前に一ヘクタール、そして残りは幅十センチの土地が延々八十八キロ北へ伸び、はるかウィニペソーキー湖まで続いていた。莫大な登記手数料は覚悟するように。「いいですか」と、私の土地の所有権調査を行なってくれた現地の弁護士は言った。「あの土地はもともとインディアンのものでしたんです。連中を探すのは骨が折れましたよ。アスペン、ヴェイル、サンバレーと、あちこち尋ねまわったんですがね。でも、見つからなかったんで、・・・」

さてようやく所有権の問題が片付き、代金を支払っても、その家はまだ購入者のものとは言えないのだ。私の家は「イエイトマン邸」だ。ジェフリーには過去五十年間、イエイトマンなどという人間はひとりも住んでいない。それどころか、イエイトマンなんて人間が私の家を所有していたことが、一度でもあったかどうかも怪しいものだ。「イエイトマン邸」というのは、新参者をからかうために考えだされた名前にすぎないのだ。でも、いつかこの家が「オローク邸」と呼ばれる、とみんなは請け合ってくれた。

「みんなそう呼ぶようになるさ」と、隣の家の住人。「あんたがあの家で死んだその日からね」

それからもうひとつ、どんな大邸宅でも、どれほど敷地が広くても、どんなにたくさん離れがあろうとも、土地の人間がその家について言うことといえばただ一つ。「知ってると思うけど、あそこは一九七六年に八千ドルで売りに出されていたんだぜ」

こうした田舎式のやり方に慣れるのは大変だが、田舎そのものに慣れるのも時間がかかる。例えば天候ひとつとってみても、ニューイングランドには季節がふたつしかない。冬と、冬支度を整える季節だ。私は深夜、寒いと感じたら、アパートのスチームのパイプを叩く習慣がついていた。だが、そんなことをしても私の家の暖炉にはまったく通用しないことに気が付いた。それに、ここでは都会のようなサービスもあてにできない。私は三か月間ずっと、自宅の私道のはずれにゴミを置いておいたのだが、やがて・・・そう、三か月分のゴミが、私道のはずれに残っているのに気が付いたのだった。

移住してきた元ニューヨーカーにとっては、ほんの小さな用を足すのも容易なことではない。ニューヨーカーは無愛想でせっかちな人種である。だが、ここニューイングランドでは次のような不文律があるのだ。どんな職種であれ、誰かを相手に商談をするときには、必ずその前にちょっとしたお喋りをしなければならない。

肉屋へゆくのは、肉を買うためではない。むしろ、一種の社交的訪問なのだ。たとえ初

対面の肉屋であっても必ず「御機嫌いかがですか?」とか「ぜひ一度、拙宅にもお立ち寄りください」とか、あるいは「もしご結婚なさっているのなら、奥様にどうぞよろしく」といった挨拶を忘れてはいけない。

すると彼はこう言う。「今年はお宅のほうでは、ブヨの被害はどうですか?」と。

あなたは「まきは足りてますか?」と尋ねるだろう。

万事、この調子である。ポットロースト用の肉については、まったくのついでといった感じで、少なくとも三十分ぐらいたって持ち出すのが礼儀にかなったやり方なのだ。

これは怖い話だ。愛想よくしようとしているのは百も承知だ。私だって、誰かと顔を合わせるたびに何時間もお喋りするよう努力はしているのだ。だが、もしも消防署に電話をして「助けてくれ! 火事だ!」と叫んでも、出てきた相手は「ああ、アントリムんこの家も以前、焼けてね。あれはたしか、一九八一年だったっけか。あんたんところでは、今年ブヨの被害はどうかね?」などと言うんじゃないだろうか?

カントリー・ライフの精神を身に着けるには、現地の新聞が非常に役に立つ。新聞を読むと、ニューイングランドの人々はニューヨーカーとはまったく異なる世界、恐らく同じ地球人とは思えないほど異なる世界に済んでいることがよくわかる。

私は自分の住んでいる地域の各紙からいろいろ記事を集めている。モナドック日報の第一面にはでかでかと、こんな見出しが踊っている。「金曜日のスパゲティ夕食セット」。こんなのがニューヨーク・ポストにもっとあったら、どんなにいいだろう。「オートバイ、当て逃げ事故で畑を荒らす」これはピーターボロー毎日新聞の一面の見出しだ。また、日刊キーンには、私が特に気に入った、次のような見出しが載っていた「メイン州議会、帰国」

ジェフリーの町づくり計画委員会に関する記事には、こう書かれている。「先週、計画担当者たちは敷地の細分化について結論に達しなかった。公聴会が終了した時には・・・午後十一時をまわっていた。計画担当者たちは、疲れている時に結論を急ぐのは良くない、との考えであった」。これほど率直な国会など、想像もできない。一度でいいから、ニューヨーク・タイムズのこんな記事を見たいものだ。「昨夜、下院では防衛費予算に関する結論が留保された。議員たちは頭が働かず、賄賂をちらつかされ、しかも酔っ払っている時に結論を急ぐのは良くないとの考えであった」だが、集めた現地の新聞記事のなかで最もインパクトの強かったのは「六月五日日曜日、ミドル・ハンコック・ロードで現金発見されるというごく単純なものだった。たった十一語のなかに、ほとんど不可解



ともいえる正直さがこめられているではないか。

こうなると、隣人について知りたいという気持ちが出てくる。断じて言うが、向こうはとっくにあなたのことを知っている。ニュー・イングランドの人々は、詮索好きではない。他人のプライバシー尊重に誇りを持っている。にもかかわらず、彼らはあなたに関するすべてを突き止めてしまうし、それをうっかりこっちに漏らしたりする。たとえば長距離電話をかけようとする。「交換さん、フロリダの母に電話がつながらないんですが」

すると交換手はこう言う。「まったく、もっとお母様に連絡を差し上げるべきですわ。それに、クリスマス以来ずっと手紙も出していらっやらないじゃありませんか」

あるいは、町の商店で買い物をしていると、店員もしくは見ず知らずの人がこう言う。「でも、これはいつも着てらっやる下着とちがいますよ」と。

隣人のなかで一番先に知っておくべき相手は水道屋である。できることなら彼と結婚したまえ。場所によっては、田舎で最も偉い住民というと、医者とか教会の牧師だ。ところがニューイングランドでは違う。ここで一番偉いのは、何といても水道屋だ。これには立派な理由があるのだ。夜中の三時に水道管が凍って破裂した場合、医者や牧師を呼んだところで何にもならないではないか。

水道屋やその他の人々と知り合いになるのは、その町の価値観さえ理解していればそれほど難しいことではない。この町で最も価値あることは、早起きである。朝の十時まで寝ていたなどと、口が裂けても言ってはいけない。気の効いたジョークだと思われるのがおちだ。白状すると、私は服を着たまま、コーヒーのマグカップを横に置いて寝ることにしている。こうしておけば、もしも誰かが午前五時にドアベルを鳴らし、丸太を積むのを手伝ってくれと言ってきても、カップを手に階段を駆け降り、何時間も前から起きていたようなふりができる。早起きとはつまり早寝ということで、夜更かしするとみんな心配する。ジェフリーに越してきたばかりの頃、午前一時に寝酒を楽しんでいると、ドアにノックが聞こえた。見ると、バスローブを羽織ったご近所が心配そうな顔で立っている。「明りがついていたので」と彼は言った。「なにかあったんですか？」

だが、ニュー・イングランドの価値観で最も重要なのは、次の二つ　正直と節約だ。正直については、例のミドル・ハンコック・ロードで誰かが現金を拾い、生まれながらの小さな田舎ヤンキーしかやらないことをやってのけ、新聞社に届け出た一件ですでに証明済みである。こうした正直さは実に立派なことだが、習慣化するという危険性をともな

う。たまにニューヨークへ出ると、無意識のうちにこんなことを口走ってしまう。「君が正当だと思ふ値段を請求してくれたまえ」ところが、ニューヨークの連中が正当だと考えるものときたら、礼儀にかなったかたちで表現する方法などない。

正直よりも重要なのはケチ、と言ってしまうと身も蓋もないが、節約である。都会では、金はワイマール・ドイツの金と同様である。シティバンクへ行き、現金自動引き出し機で手押し車一杯分の現金を引き出し、言われるままにそこから金を掬いだしていく。そしてVISAカードの係員が住所変更の処理を完了する前に、うまいこと死んでしまえないものか、とまじないをする。だが、ヤンキー連中は金の使い方が慎重である。しかもその問題に関して長々とアドバイスしてくれる。

「メイン州のポートランドの銀行までちょっと車を飛ばしなよ。二セントのティッシュをくれるよ」。あるいは、「A & Pで五ガロン入りのマーガリンの缶を特売してるよ。ひとり六缶までだってさ」など。また、こっちが自分の家にくら支払うべきだったかといった問題に関しては、特に熱心にアドバイスしてくれる。「知ってるかい、あんたんとは一九七六年には八千ドルで売りに出てたんだよ」と。

価値観の変化以外にも、田舎暮らしを送るということは、それまでの行動様式すべてを変えるということだ。都会での生活様式は、新しい土地にふさわしくないものが多い。ジェフリーでは、ジョギングをしていると必ず誰かの車が止まり、乗っていきませんかと声をかけてくる。また、夜の九時に夕食を取るのは、屋根の上での日光浴と同じくらい奇異な行動とみなされる。しかし、何でもかんでも町の行動様式に合わせてはいけない。

たとえば釣りは、カレンダーの写真で見るとどのどかなものではない。あんなものは虫けら連中の考案したスポーツで、あなたはそのエサである。

ハンティングも釣りに劣らず不愉快で、しかも釣り以上に危険な娯楽である。なかでも鹿狩りは、マサチューセッツ州ウースターなどの西ゴート族タイプの連中に好まれている。私は鹿狩りのシーズンはずっと家に閉じこもり、鹿と間違われるような行動を慎むよう心掛ける。

園芸は、まだましだ。ニューイングランドの人々は、みんな良い花壇の作り方について熱心にアドバイスしてくれる。実際、うんざりするほど熱心に。私は一か月間辛抱強くそのアドバイスを聞いていたが、しまいには何がなんだかわけがわからなくなり、覚えたことといったら球根を逆さまに植えてはいけない、ということだけだった。そして、こ



れは完全にウソだ。我が浄化槽いっぱいに咲いたラッパスイセンがその反証である。

野菜の栽培はこれに輪をかけて面倒臭い。ニューイングランドでは七月十日ごろに最後の霜が降り、秋の最初の霜がその二週間後に訪れる。おまけに、アライグマがやってくる。せっかく野菜が育ったと思ったら、アライグマがたちまち食い荒らし、それを奪回するため、国防省の緊急展開部隊に連絡を入れなくてはならなくなるのだ。だから、私は自分が菜園を持っている、と言うだけにしている。芝生を掘り返し、アライグマのスーツを着て、埃っぽい道に足跡をつけ、食べる野菜は町の露店で買う。

家の修繕に関しても、同じテクニックを応用した。はじめ、自分の家をあれこれ手直するのはストレス解消にもなる楽しい趣味だと思っていた。だが金物屋へ行ってみると、これが実に厄介なことがわかった。何を買いたくても、まず必要な物の名前がわからない。それに、「片方の端が重たくて、もう片方がもっと重たくなっている大きな金物」が欲しい、などと言ったら店の人に笑われるのがオチである。

家の改修を思いとどまると同時に、何よりも正真正銘のコロニアル風アンティーク家具で家を飾ろうなどとは思わないこと。ニューイングランドの田舎者の正直さが恐ろしい勢いで崩壊する場所がある。骨董品屋だ。ニューイングランドの骨董品屋は、不正の巣窟である。一歩足を踏み入れたら、自分にむかって繰り返しこう言い聞かせなければならない。「これは、独立戦争前の白塗りの釣り棚なんかじゃ絶対がない。どこかのガレージから出てきた、うす汚れた古い箱なんだ」と。

一般的に、田舎へ引っ越すのは、自分がいかに無知で不器用かを知るには実に良い方法だ。私は、自分が園芸や日曜大工について無知なのは知っていた。でも、柴の山に火をつけるぐらいのことは出来ると思っていた。覚えておくといけないが、田舎では事実上あらゆる物が可燃性なのだ。それで美しい景色も、一巻の終わり。

実のところ、ニューイングランドへ越してきて半年も経たないうちに、この町へやってきたそもそもの理由はことごとく消えてしまった。男や女、五才以上の子供たちが一人残らずチェーンソーを持ち、毎日夜明け前からギョインギョインやるような町では、のどかな田園生活など望むべくもない。それに健康的な生活という点に関して言えば、ニューハンプシャー州はどうやら「そいつを新鮮風にしてあげましょうか？」をモットーにしているらしい。

ある日、やはり都会からの移住組の隣人が、牧草地から切り株を引き抜くのを手伝いな

がら、私は何もかもに嫌気がさしてきた。以前サンディエゴに住んでいた友人のジョージはバックホーを借りてきて、午前中いっぱいかかって切ったり掘ったり、木の根っこを引っ張ったりしていたが、その間私はなぜミュレー・ヒルを出てきたのだろう、と自問し続けていた。ジョージと私は、ことさら頑丈な樫の木に斧を降り下ろして疲れきっていたが、そこへ地元の農夫がトラックに乗って通りかかった。農夫は牧草地を見渡し、切り株が根こそぎにされた跡のいくつもの穴を検分し、ジョージと私がいる穴を見下ろしてこう言った。「ジョージよ、あんたそんなもの植えたって、一銭の金にもならねえぞ」

その時、私は自分が何故こんな田舎へ越してきたのか、その理由がわかった。私が薪ストーブに火をつけようとしているのを見るために、隣人たちがあちこちから集まってくる。私が町のゴミ捨て場に入り込み、フォルクスワーゲンのコンバーチブルをぬかるみに突っ込んだまま立ち往生した話は、後々までも町の語り草となった。また、ジェフリーの住民たちはニュー Yorker が両手に鍋つかみをはめ、箒の柄で納屋からヤマアラシを追いつ追いつている様を見るほうが「スターウォーズ3:ジェダイの復讐」よりもはるかにおもしろい娯楽だと考えるのだ。

田舎に引っ越すのは、数多くの偉大な芸術的努力を支えるのと同じ情熱による。つまり、娯楽のためなのだ。そして、人生において、周囲の人々に笑いと楽しみをもたらす以上に良いことなどあるだろうか。

## 第 21 章

# オハイオ州サンダスキーの王

私の祖父はオハイオ州サンダスキーの王だった。祖父の父、マイク一世は、町から十五キロの小さな農場を治めていた。当時、サンダスキーはひどい無秩序の時代であり、原因は市の相続条例だった。サンダスキーの王権は、女子相続が認められていなかったのだ。一八八七年、祖父の生年に町を治めていたジム王には男子がなく、また兄弟も父方の叔父もいなかった。このため、王の座を巡って従兄弟たちの争いが絶えなかった。そのひとり（といっても、直接血のつながりはないようだが）が私の曾祖父にあたるマイクだった。だがマイクは剣に優れ、また郡の裁判所に友人を持っていた。やがて、彼は町の銀行の大蔵大臣に指名され、木場と貸し馬車屋を征服した。ジム王は年老いてもうろくし、私の曾祖父は年老いた王の屋敷と庭園の管理を引き受けるとともに、王が領地を見回りたいと希望した時にはいつでも馬車の用意を整え、国王親衛隊長に任ぜられた。一九〇一年、ジム王が崩御したとき、曾祖父は法的文書のありかをすべて熟知しており、後にバーニー皇太子となる私の祖父を片腕として、他の王位請求者や従兄弟たちを相手にダウントアウンのオフィスで激戦を行なった。敵は数のうえでは味方をはるかに凌いでいたが、リーダーがおらず、内輪もめが絶えなかったので、連中が顧問弁護士に相談を持ちかけている間にマイク王は射手をさしむけ、ほとんどを殺害してしまった。だが数名は年金を受け取って引退し、またひとりカリフォルニアへ移住していった。

マイク王は一九二〇年に御隠れになり、長男である私の大叔父ウィルが農場の王となった。が、サンダスキーの玉座を受け継いだのは祖父だった。これは厳密には相続条例に沿った措置ではなかったが、それを指摘して祖父に逆らう者は、たいがい寿命を縮めた

か、あるいは事業でしくじるのが常だった。

祖父の統治下でサンダスキーは力を蓄え、繁栄をとげた。大穀物倉庫が、工場が、その他の建物が続々と建設された。祖父は常に戦場であって、ノーウォーク、フリーモント、ティフィン、そしてオーク・オープニングス州立公園を征服。この公園では、鳥類保護区域指定の暗く鬱蒼とした森のなかで、二日間にも及ぶ戦いが繰り広げられた。一九四二年、彼は（その父と同じように）射手を用いてポート・クリントンを攻撃し、槍や剣で武装した子供部隊を国道四号ぞいの橋に集結させた。ポート・クリントンの貴族や皇族たちを総動員した敵の騎士団は、ことごとく矢で射られたり、あるいは橋の欄干に追いつめられて川へ転落し、モーターボートが救助に駆けつける間もなく、重装甲鎧のため溺れ死んでしまった。これは私にとって決して忘れる得ぬ教訓となった。騎兵隊は、機動力と敏捷な襲撃という点では重要だが、軍の真の強さはしっかりと訓練された歩兵にあるのだ。それに、馬というやつは毎日きちんと餌をやり、手入れをして、乗るときにはわざわざ郊外の厩舎まででかけなくてはならない。

バーニー王は、三本マストのガリオン船を持つサンダスキーの海軍を組織した。そしてブットイン・ベイ、ノース・バス島、またトレド港のモーミー川の河口における海戦にも臨んだ。こうして私の祖父はトレド、デトロイト、ミシガン一帯のビジネスマン・プリンスタたちから、エリー湖西側の貨物船輸送の覇権をもぎとった。また、戦闘用フェリーでカナダからきた未開人の襲撃を撃退した。未開人たちは、鎧もつけずに帽子だけを被り、斧を振り回して戦ったが、ひどく臆病で、釣り人のキャンプ場や船着き場を略奪しただけで浜から撤退を強いられた。さらにウィリス・オーバーランド工場の労働組合に加入している農民たちの暴動もあり、祖父はこの暴動を強大な武力によって鎮圧した。また祖父は、強力な軍隊を指揮し、酒類醸造販売禁止を謳ってオハイオ州の分裂の原因となった修正一八条の施行を望む、町の長老教会の助祭と論争を起こした。祖父はついに助祭の財産を押収し、空き地の一部と彼の経営していた小さな事業を抵当流れ処分にして、それらを、レストランやバーを経営し、忠実な王党派として戦ってきた伯爵たちに祝儀として分け与えた。彼自身はビュイックの販売権を手に入れた。そして王族用にエルム街に宮殿を建てたのである。一九五七年、私が生まれた頃には、バーニー王はロレーヌからブシルスに至るオハイオ州中央北部のほぼ全域と、西のペリスバーグまでを治めていた。武力によって制覇しなかった地域は街の自治区域に併合され、周辺の街の公爵や男爵たちは、休暇になる

と子供たちを人質として宮廷へ遣わし、祖父に忠誠を誓った。言うまでもなく、子供たちは宮廷で丁重な扱いを受けた。

バーニー国王は戦争においては勇猛だが、根は優しい人物で、臣民たちから慕われていた。よほど極悪な犯罪を犯さない限り、ビューック販売店の地下牢に誰かを閉じ込めることもあまりなかった。また、彼は死刑の執行を嫌っていた。レノード・オブ・フォストリアが私の二番目の従姉妹コニー女公爵を娶り、彼女に手酷い仕打ちをしたあげく地下牢へ放り込まれ、そこに保管されていた時価三百ドル相当のディストリビューター・キャップとテイルライトを破損した時も、祖父は彼を死刑にはせず、海兵隊に入るよう説得しただけだった。

私の祖父、バーニー国王には五人の子供があった。最年長がボブ皇太子、次が新車販売王子と近衛隊長の称号を戴いた私の父である。それからアニー王女、次が中古車センターを営むラリー王子、そして最後が私の一番下の叔父、フレッド王子である。私の父は、一九二九年の株式大暴落によって失墜した元インディアナ州ミシガン・シティの皇帝の娘、ドリス王女と結婚した。彼女の家族はインディアナ州を離れ、兄のサムはニューヨーク中央鉄道の経営する修道院に匿われていたが、そこで彼は大修道院長兼貨物列車のエンジニアとなった。母の妹ドロシーは、シカゴから流れてきた不動産業者と結婚したが、この男は郊外の公爵という身分ゆえ非常に成功していた。

私は時には国王である祖父の宮殿で、また時には祖父の別荘で、恵まれた子供時代をおくった。武道、タカ狩り、野球、そしてトランペットを仕込まれた。父は人々に非常に慕われていた。ボブ伯父には男子の相続人がなかったため、人々は父こそ次代国王になるべき人物であると信じて疑わなかった。私はわずか十才になるかならないかの頃、すでに自分が将来は王座をつぐべき立場にあることを自覚していた。だがその後まもなく、父は悲劇的な最後を遂げる。車の販売店でトラブルが起こったのだ。向かいにあるホワイト・キャッスルのレストランが反乱を起こし、父と父の最高副官であるラリー伯父は軍隊とガレージのメカニック数名を招集し、アマゾンのウエイトレスたちに包囲攻撃をしかけた。ほこやりの軽い一撃が父のヘルメットに当たり、ラリー王子が私に話してくれたところによると、勝利の炎に包まれた食堂で、父はごく軽い頭痛を訴えただけだったという。だがその晩、父は脳出血を起こし、病院に運ばれたのち息を引き取った。一族の墓があり、父が葬られることになったウッドローン墓地までの道程、百人の槍騎兵と長い車の列が葬列

に加わった。

その後一年と経たないうちに母は再婚した。相手はラルフ伯爵という、街の南のショッピングセンターを経営する弱小貴族だった。こうして、その後十二年間続く陰謀の幕が切って落とされた。

はじめのうち、私は継父に好意も悪意も感じてはいなかった。見方によってはなかなかいい奴だったが、ビールを浴びるほど飲み、持っている鎧兜は安っぽい外国製だった。しかも自分の軍馬も持っていない。芝生を手入れしろといった類いの、領地に関する義務をめぐるいざこざが持ち上がるたびに、馬上槍試合で決着をつけるため馬を借りなければならなかった。だが、本当は私は彼のことなど大して気にしてはいなかった。私は私で、小学校戦争にかかりきりで死ぬほど忙しかったのだ。この戦争は特に代用教員にとって致命的な打撃と苦しみをもたらした。祖父ならこんな戦いを鎮圧することなどたやすかつただろうが、あまりに老いすぎていたうえ、秘蔵っ子である父を失った悲しみから立ち直れずにいた。父の死以来祖父はめっきり弱くなり、最後は王立療養院で息を引き取った。それに皇太子のボブ叔父は、ビジネスとゴルフのことしか頭にない男だった。

街の学区には小学校が三つあり、我々はそれらの学校を相手に次々と戦いを繰り広げていた。またウッド郡の四つの公立高校も互いに争いあっていた。さらに、互いに独自の教皇を擁立したふたつの宗教立高校に関しては言うまでもない。また、この争いがきっかけとなって工場で働くポーランド人とイタリア人が暴動を起こした。学校に対しては、我々は木製の槍と剣をもって戦いに臨んだ。親たちが、十六になるまで真剣を持たせてくれなかったからだ。それでも中には新聞配達でためた金で、自身の剣を買った者もいた。とはいえ、弓だけは本物を持っていた。一度など私は弓で軽い負傷を負い、数針に及ぶ手当をしてもらったものだ。

学校の戦争は実にエキサイティングだった。全学級が一丸となって戦う。私は王家の血筋ゆえに当然リーダー格をつとめていた。だが、当時は六年生だったので、身分はただの副官だった。それでも、数多くの剣撃戦で部下を率いて戦った。とりわけ階段での戦闘。我がマッキンレー小学校の校舎は要塞のように大きく、私たちは廊下をはさんでバリケード越しに暴れ回り、校長先生ですら手がつけられなかった。ある時わが軍はネイサン・ヘイル小学校の生徒達に包囲され、二階に追い詰められて体育館を占拠されてしまった。街頭が灯るったら女子は下校という決まりがなければ、飢え死にしていたかもしれない。そ



の晩、たまたまPTAの会合があり、女の子たちは親について学校の講堂に戻ってくることが出来たのだった。私たちは食糧のはいったバスケットを講堂からベランダまで吊り上げ、お陰で朝まで生き延びることができた。翌日、またしても階段のあちこちで新たなチャンバラが繰り広げられ、私たちはネイサン・ヘイルの連中を退却させた。わが軍は、元は同級生だったが親の引っ越しで転校した敵方の六年生を捕虜にした。彼はスパイだったのだ。私たちは火あぶり裁判でそれを確かめ、彼は病院で死亡した。このため、私たちの小学校は、王旗の下に緑の安全旗を掲げることが出来なくなった。緑の安全旗とは、その年この学校では怪我をした生徒がひとりもないということを示すもので、安全象のアンバーくんが描かれた旗だった。

私は多忙をきわめていたため、継父ラルフ伯爵が私に対する陰謀を企てているのに気がついたのは、祖父が死に、ポブ叔父がサンダスキーの王位を継いでからだった。ポブが王位について、私は皇太子になり、学校の朝礼時の行進や募金活動で常にクラスの先頭にたつようになった。ラルフ伯爵の画策した第一の陰謀は、叔父を毒殺して私を国王の座に押し上げることだった。そうすれば彼は、私が二十一才になるまで摂政を務めることが出来る、という寸法だ。彼はウイナ・ソーセージのローストでこの計画を実行に移したが、ポブ国王は嘔吐しただけで、毒入りホットドッグは効を奏す暇がなかった。

ところが、継父はまた別の、さらにひどい陰謀を企んだのである。きっと彼は、国王の毒殺未遂事件のことを私が感付いていると思ったのに違いない。というのも、私は放課後、ショッピングセンターにある彼の金物店でアルバイトをして、彼の様子を密かにうかがっていたからである。また、私が彼を憎みはじめているのも察していた。彼はイギリス製の競輪用自転車を買ってくれなかったし、また私が飼っているつがいの猟犬の後始末をしないと断えず怒鳴ったりわめいたりしたのである。彼と叔父は親密になっていった。そして、王に対する私の警告も空しく、ラルフ伯爵は私の後見人兼近衛隊長の地位をまんまと手に入れてしまった。従兄弟のバスター王子とケビン王子が通りで待ち伏せされ、轢き逃げにあって殺されるという事態に至って、王と伯爵のふたりが同盟を結んでいることは明白になった。こうなると残る王位継承者は私ひとりであり、その私を亡きものにすれば、ポブ国王の孫、すなわち私の二番目の従兄弟にあたるディッキー王子が皇太子となるのである。のみならず、叔父が王位継承に関する法の改正案を市議会に提出するにあたってラルフ伯爵がその後押しをしていることを私は知っていた。どちらにしても、私

には国王の座は巡ってこないというわけだ。私を公然と殺すことはできない。マスコミに悪い印象を与えかねないからだ。だが何とかして私を始末したい。母は弱い女だった。彼女は息子の身を安じながらも、同時に自分自身の結婚生活に傷がつくことを恐れ、もしも離婚などという事態になった場合の世間の目を気にしていた。私は叔父のラリー王子とフレッド王子のもとへ赴いた。ふたりとも息子を殺されている。私は武装した軍隊を援助してくれと頼んだ。マッキンレー小学校の生徒百人と、少なくともボーイスカウトの一団から私兵団を招集することはできた。が、何といても武器が乏しく、攻城車や騎兵隊がまったくない。だが叔父たちは失業を恐れていた。味方になってくれたのはただひとり、アニー王女だけだった。彼女は、継父のスポーツ・コートに塗りつけておくよう毒薬の包みをくれた。だが私は、家へ帰る途中でそれを落としてしまった。

こうなったらもう逃げるしかない。というわけで、私は母方の叔父にあたるイリノイ州のエヴァンストン公爵に匿ってもらうことにした。

この時期は、あまり幸福な時ではなかった。馴染みの薄い習慣や見慣れない服装をした人々に囲まれて暮らすことになった。おまけに、学校は恐ろしく排他的だった。私はどうしても馴染めなかった。やがて叔父の公爵が重い冠状動脈血栓に冒される。私は軍の蜂起にあたって叔父とその息子である従兄弟のエディに期待していた。また、エヴァンストン統一メソジスト教会のステーブンス師も、おそらく聖戦を宣言し、私はサンダスキーへ戻ってボブ叔父の王権打倒をはかれるだろうと踏んでいた。従兄弟のエドは意地悪でいけ好かないやつだったが、フットボール・チームに有力な友だちを持っていたのだ。にもかかわらず私の希望は打ち砕かれ、私は軍隊を蜂起させるどころか、新公爵となった従兄弟と、その母親とのけんかに巻き込まれてしまう。彼女は町の銀行に預けてある公爵家の財産を相変わらずしっかりと管理し、エディ公爵に自分名義の当座預金口座すら持たせようとしなかったのだ。また、エディの妹のスーは、パン屋のトラックの運転手の平民と身分違いの結婚を夢見ていた。さらに悪いことに、この男はキリスト第七日目再臨を唱える異教徒で、彼の家族は前の年に行なわれたキリスト再臨論者大虐殺の折りに虐殺されている。彼はこの時、たまたま芝刈り機の修理をしようとガレージに出ている間に難をまぬがれたのである。だが常に身の危険を感じながら暮らしていた彼は、ウィスコンシンの開拓地への移住を計画していた。ウィスコンシンなら宗教の自由が認められるだろうと期待していたからである。そして、スー嬢を連れてゆくつもりだった。私に力を貸してくれる暇人は



どこにもおらず、友だちもあまりできなかった。

最高学年になるまえに、私は単身サンダスキーへ戻る決意を固めた。些細な口実で殺されるか、寝室に幽閉されるだろうと覚悟はしていた。何か手だても思い付かない。叔父のサムは、鉄道員になったらどうだと懸命に私を説得した。だが私は波瀾万丈の人生を歩みたかった。もしもサンダスキーで成功をおさめられなかったら、山賊になって森で暮らし、ピクニック客を襲うつもりだった。

ところが家へ帰ると、がぜんツキはじめた。私の高校は町で最も裕福な区域にあるが、スポーツ・チームがあまり強くなく、フットボールの試合でも負けるし、試合後に駐車場で他校の生徒たちと小ぜりあいや喧嘩をしても、死傷者をたくさん出すありさまだった。こちらには射手がおらず、また唯一の槍騎兵隊は壊滅状態で、歩兵は貧しい下層階級の子供たちばかりだった。私は名目上まだ皇太子の座にあったため、すんなりと生徒会委員に選出された。さらに、他になり手がなかったため、戦争・略奪委員会の議長になった。戦闘意欲に欠け、規律の乱れた我が校の軍隊は、どうまちがっても強力な軍隊に叩き上げたりできないのは承知していた。他の高校と互角にわたりあうのも無理だし、まして国王たる私の叔父と継父、そして彼の近衛兵を相手にまわすなどとてもできない。特に、私がスピード違反のチケットを切られ、継父に一月の外出禁止を言いわたされてからはなおさらだった。それでもこんな頼りない軍でも、まだ選択の余地は残されていた。というのもサンダスキーには高校が六校あるのだが、そのなかにスコット高校という、ほとんどが有色人種で占められている学校があるのだ。当時、我々とこの学校とは友好関係にあった。また、彼等は町のなかでも孤立した一画に住んでいたため、高校を中退したイーストサイドの南部人どもと戦闘状態にあるほかは、どことも敵対していなかった。だが、まず私が行なったことは生徒会の会長―あばただらけの小男でひどい臆病者―を脅し、黒んぼの家族が我々の学区内に引っ越してきたとか適当な口実をでっちあげて、スコット高校にケンカを売るよう仕向けることだった。まともにやりあっては勝ち目はない。だが、向こうは離れていたのだから、当面は本格的な衝突は避けられそうだと私は踏んだ。ある夜、私は大勢の腹心を集めて黒んぼらしい服装をし、肌の色が見破られないように長手袋をはめてバイザーを深く被った。それから学校付近の親切な隣人たちの家々にちょっとした奇襲をしかけたのだった。私たちは家々を焼き払い、人々を殺し、死体はかつてないほど悲惨な傷跡をしっかりと残しておいた。この事件はテレビで大々的に報道され、その結果、私の軍隊に

は莫大な軍需資金が集まってきた。実のところ、その資金はすべてダンスパーティのための積立金—年間洗車のアルバイトやパンの販売などによってみんながためたお金—を流用したものだった私は武器と馬、さらに攻城車も二台ほど購入したが、これは全軍の士気をあげるのに大いに役立った。

スコット高校の連中はむろん、自分たちのしわざではないと主張し、我々はむろん連中を嘘つき呼ばわりして戦争をにおわせた。だが、まだその段階ではにおわせるだけで十分だと私は判断していた。私の率いる少数の奇襲部隊は、スコット高校に攻撃をしかけず、黒んぼたちのしわざに見せかけた奇襲を再度行なった。今度の攻撃目標はリビー高校付近の家々だった。私の学校とリビー高校は数年来の敵対関係にあったが、私の計算どおり、この「黒んぼ連中」の非道な振る舞いによって両校は手を結び、一丸となって黒んぼ打倒に乗り出すことになったのである。くだかしきは省くが、同じ方法で私は、最終的にはカトリックも含む五つの白人高校すべてを統合して大軍に仕立て上げたのだ。我々は黒んぼ連中を相手に凄まじい戦いを展開し、数ではるかに劣る敵方は、相次ぐ戦いでことごとく敗退し、自分たちの居住区であるスラムの中心部へと撤退していった。

その年の春、四人の軍司令官と私は最後の奇襲攻撃のための作戦を練っていた。それは敵の前線で展開される複雑、かつ非常に困難な作戦だった。私の戦略は、自分で言うのもなんだが素晴らしいものだった。くだかしきは避けるが、簡単に言うと、騎兵隊を主戦力として使う（当時の高校同志の戦いではそうするのが慣例になっていた）のではなく、頻繁な短い陽動作戦に使用し、黒んぼたちをおびき寄せて、五つの学校の歩兵が両側に待ち受ける中に誘いこむ、という作戦である。歩兵たちは、私が鍛え上げた生え抜きぞろいだ。そして射手が黒んぼどもの中心を釘付けにする間に、我々は四方から敵の部隊を細切れにして倒す。この戦闘によって、我々はサンダスキーに残った有色人種どもを一掃するつもりだった。つまり、囚人と子供も虐殺するつもりだったからだ。

私は皇太子という立場と卓越した戦術能力によって、この作戦会議の主導権を握っていたが、この黒んぼ戦争が終結したら、また互いに敵対関係に戻ることはじゅうぶん承知していた。さらに他校の司令官のなかには、私を快く思っていない者がいることも承知していた。実際のところ、そのうちのふたりは私と同様に統一軍の指揮を取り、その権限を利用して町全体を自らの支配下におさめることを望んでいた。このため、私はひそかに戦友たちの裏をかく手段に出ることにした。黒んぼ軍のリーダーと秘密会談を行なったのだ。

私が彼等に対する虐殺計画を打ち明けると、彼はひどく逆上した。だが、私は彼に取り引きを申し出た。彼が私の仲間である四人の司令官を殺してくれたら、私は虐殺やレイプ、白人軍による略奪などをいっさい行なわずに、黒んぼ軍の無条件降伏を受け入れよう、というのである。彼はこの申し出に同意し、私は戦闘中、おのおのの司令官が配備されている場所を克明に教えた。彼は、できる限りのことをして司令官たちが殺されるよう手配しよう、と誓った。

実にすばらしい戦いだった。サンダスキーの黒んぼ全員がナイフやシャベル、石ころや瓶など、持てる限りの武器を持ち、警官たちは我々が車に邪魔されず心おきなく戦えるよう、町じゅうの交通を遮断してくれた。むろん、我が軍の騎馬隊に比べたら黒んぼ軍など物の数ではなく、我々の射手とクロスボ一部隊は敵を続々と倒していった。だが敵もあっぱれな戦いぶりで、攻撃の手を緩めずに最後まで戦い通した。しかも戦いのさなか、敵方の守備隊長は私との約束をきちんと守り、指示通りの場所へ最高の騎士を派遣してくれた。このため昼間には私のライバルのうち三人が戦死し、残る一人は重傷を負って帰宅を余儀無くされた。こうして全軍の指揮は私ひとりの手に委ねられることになり、黒んぼ軍がようやく幕や庭掃除用の熊手の柄に白いシートをゆわえて掲げると、私は殺戮の中止を命じた。私は貨物置き場と川にはさまれた土地、南はデルコ電池工場に至るまでのダウンタウンのはずれを居住地として黒んぼたちに与え、彼等は今日まで王家に対する忠誠を守っている。

さて、こうして私は三千の兵力を誇る百戦錬磨の大部隊の総指揮官となった。継父の近衛兵たちに対していつでも攻撃をしかけ、勝利をおさめられたのは間違いない。だが、まだ機は熟していなかった。ひとつには、それは法に背くことになり、警察に見つかったら少年院送りになるかもしれないからである。そしてもうひとつには、亡父ほどの人望はないにしても、叔父は何と言っても世論を味方につけていた。そこで考えついた手は、生得権を主張して、ボブ王にこの私を近衛隊長に任命させることだった。だが、後見人であり継父であるラルフ伯爵が生きている限りそれは不可能だった。また、ラルフ亡きあと私の後見人となるかもしれない叔父のフレッド王子とラリー王子も信頼できなかった。そこで私はふたりの王子を殺害させ、同様にラルフ伯爵をも亡きものにしようと画策した。だが継父の周辺は実にガードが固く、その厳重な警備が誰のさしがねによるものかは言うまでもない。そこで私は彼に口論をふっかけ、決闘により人々の面前で堂々と継父を殺害する

ことにした。

それはディナーの席でおこった。ママがロースト肉を持って食卓にやってきた時、サラダを食べていたラルフ伯爵が私の嘲笑に腹を立て、やおら細身の剣を抜くと、怒りにまかせてそれをポテトサラダのボウルに突き立てた。私は椅子に飛び乗り、左手でシャンデリアを引き寄せ、この時のために用意しておいた重たいサーベルで切りかかった。私の一撃は敵をそれ、ダイニングルームのカーテンをまっぴたつに切り裂いた。ラルフは私のバックストロークをかわし、私の腕の下を切りつけた。私は奴の胸ぐらめがけてグレービーソースの器を蹴り上げ、敵がひるんだすきに一撃をあびせた。それは彼の耳を切り落とし、ついでに私の妹ジルを即死させた。このとき奴は短剣を振りかざしていたが、短剣や細剣など、私の重兵器の敵ではない。私は彼を居間へ追い詰め、血まみれの奴の頭めがけて猛然と切りつけた。私も無傷ではなかった。太ももにまたしても傷を負い、彼のナイフで左手の指を一本切り落とされてしまった。だが、私はスポーツシャツとともに、その下の胸を切り裂いた。一筋の肉がベロンと垂れ落ちる。ラルフはパティオに通じる裏口へ逃げ込んだ。背後から串刺しにすることもできたが、私としては正面から堂々と奴を殺してやりたかった。追いかける私に、奴はつい立ての陰から剣を突き出してきて、私は石段を転げ落ちてしまった。奴がもっと素早かったら、きっとやられていただろう。が、奴はビールの飲み過ぎででっぷりと太り、毎晩ごろごろとテレビばかり見て過ごしていたため、軟弱になっていた。私は態勢を立て直した。しばらくやりあった後、奴は後ずさりしながら裏庭へ追い詰められた。そして、芝生に置いてある椅子につまづき、ちょうどその椅子に座りこむような格好で後ろ向きに倒れた。奴の頭がのけぞり、私は渾身の力をこめて刀を降り下ろし、頭を胴体から切り離した。

ボブ王はやむなく私を近衛隊長に任じた。私は隊員のほぼ全員を収賄や脱税容疑、あるいは駐車違反で告訴し、処刑した。そして、子飼いの兵士たちを後任に据えた。さて、こうなるとあとは叔父が死ぬのを待つだけである。アニー王女がきっと彼を毒殺してくれるだろう。そうして私は晴れて王となり、この町を出て自分自身の領地を求め、四駆のジープを買うのだ。

# 訳者あとがき

## 1. 総説

本書は *Republican Party Reptile: The Confessions, Adventures, Essays and (other) Outrages of P. J. O'Rourke* (The Atlantic Monthly Press, 1987) の翻訳である。ただし全訳ではない。何せ原著が出てから邦訳が出るまでの間にはいろいろありすぎた。ソ連がああもあっさり消滅するとは誰が思っただろうあ。株がああも続落し、就職してみたらぼくの給料は下がる一方などという事態を誰が想像し得ただろう。それに何と、ついにアメリカでは民主党が勝ってしまった！

まあ、そういうやむを得ない国際的な政治経済情勢を鑑みて、邦訳では時事性を失ったものや、あまりにネタがローカルすぎて味わいが伝わりにくいもの（ひらたく言えば、つまらないものってことね）を割愛している。従って、原著に二十一編おさめられていたエッセイのうち七編は、哀れ陽の目を見ぬ運命となった。また、削除にあわせて文の配列も変更した\*<sup>1</sup>。

辞書は『リーダーズ英和辞典』（松田徳一郎他編、研究社、一九八四）と、『研究者新英和辞典 第五版』（小稲義男他編、研究社、一九八〇）をおもに使用。訳稿作成環境としては、Rupo 上で作成された下訳を MS-DOS 形式に変換後、J3100GT+Vz Editor ver. 1.57 上で修正 / 改訂を実施した。

---

\*<sup>1</sup> この pdf 版では翻訳したものは全部使用したが、訳の段階ですでははずしたものの一編だけはぬけているのだ。

## 2. 著者のこと

著者のP・J・オロークは、すでに邦訳も三冊あるし、そろそろ知る人ぞ知る嫌味ライターとしての地位を日本でも確率しつつあるのではないか。だから「MAD」と並ぶお笑いアホ雑誌「ナショナル・ランブーン」の編集者だったとか、「プレイボーイ」の海外ナントカ特派員だとかいう略歴めいたネタに触れないでおこう。中年、デブ（というほどデブではないようだが、まあ自分でそう認めているのでそういうことにしておく）、騒乱好みの野次馬渡世、嫌味と皮肉の垂れ流し男、快楽至上の大口たたき。まあこの男については、おおむねこの程度知っておけばよい。

そうそうもう一つ、この男はアイルランド系である。アイルランド人という連中は、フラン・オブライエンやR・A・ラファティの例を見てもわかるように、真面目な顔で大ボラをふくことで有名だ。こうした能力は原始人のほうが高いと言われることから考えると、やはりアイリッシュはかのピルトダウン人の血を脈々と受け継いでいるのだろう。もちろん、いいほうの血ではなく、悪いほうの血だが。最近では『娼婦どもの議会』（未訳）をベストセラーのトップに送り込み、その悪しき血のパワーをまざまざと見せつけてくれている。

## 3. 本書の位置づけ

本書の発表は一九八七年。既訳の『モダン・マナーズ』（JICC 出版局）『おもしろモダンマナーズ』（講談社文庫）と『楽しい地獄旅行』（河出書房新社）のちょうど中間に位置する。内容も、『モダン・マナーズ』系の作法指南から、『地獄旅行』系の世界アブナ地帯紀行（でもこの人のアレって、「行ってみたら結構フツーだったぜ」ってのばっかだからなあ）さらに快楽主義者の自慢話もちりばめ、オロークの文章の多彩なバリエーションが一番楽しめるものとなっている。

また『地獄旅行』に収録された「アキノ政権下のフィリピンもそんなによくはないぜ」という内容の文は、本書に収録された「暴力と銃と金」の後日談になっている。『地獄旅行』ではいっしょうけんめいクールにふるまっているけれど、本書では立ち上がったフィリピン人民に熱い共感を寄せたりしている。意地悪な読み方だけれど、なに、ご当人の文だっ



て充分に意地が悪いわい。われわれが親切にしてやる義理なんかあるもんか。

さらに本書は、P・J・オロークが新保守派として強い立場表明を行い、そのスタンスと悪名を一躍全米に轟かせた出世作でもある。

#### 4. 「共和党爬虫類派とは何か あるいは隠れ左翼の開き直り」

本書の現題を直訳すれば「共和党爬虫類派」とでもなるだろう。圧倒的に保守なんだけれど、でも石頭の生真面目な伝統保守とはちょっとちがうんだぜ、チッチッ、という感じ。もっと詳しく知りたければ、序論を読みなさい。書いてあるから。本書で「おれは保守主義の共和党爬虫類派だ！」と宣言したことで、オロークは新保守派の看板をしょいこむことになった。みんなそれを真に受けて、「オロークは保守だ、うんうん」とうなずく。たとえば『楽しい地獄旅行』の訳者解説で、芝山幹郎は「オロークが保守だったのは解せなかったけれど、保守ってのは絶対的な価値を認めないという点で（左翼的）ユートピア主義の対局にあるんだから、やっぱりオロークは保守でいいんだ」というこじつけで、なんとかオロークの保守性を自分に納得させようとしている。

でも、これってウソでしょ？ 保守って、絶対的な価値観を認めない人たちなんかじゃないもの。ホントの保守ってのはむしろ、まわりを見ないことで、自分たちの現状が一番いいんだ、と何の努力も根拠もなく思い込んでる怠慢な連中のことじゃないの。ソ連東欧が崩壊したとき、「ほらやっぱり資本主義は最高です、市場原理にまかせておけば何でも解決するんです」とか言っておきながら、その市場原理の資本主義が不況になると、政府の指導だの公共投資だの言い出す連中じゃないの。そしてオロークが保守だというのも、実はまったくウソなのだ。

オロークって、自称保守派だけど、これはむしろ反語と考えるべきだ。「共和党爬虫類派」と言ったとき、力点は「爬虫類」のほうにある。日本で言えば、自民党政治が大ッ嫌いで、ホントは社会党を応援したいんだけど、それだけに社会党のあのザマは怒り心頭に達してしまうので、「そんならいっそ自民党に入れてやる！ 小沢一郎万歳！」と開き直るようなもの。証拠？ 本書の献辞を見てごらん。こういうところには、その物書きの一番本音に近い気取りが出るものだ。この人は共和党をやめた人とか、共和党をおちょくっ

たジョークに共感を感じているでしょう。内容を見ても、基本的にオロークは、心情左翼ヒッピーなんだ。それが一番よく出ているのが、あのマルコス失脚を描いた「暴力と金と銃」だろう。見ろ！ 横暴な独裁者マルコス！ 立ち上がる人民！ いいなあ、涙が出るなあ！ 昔のデモを思い出すなあ！ あの頃はよかった！ 要はそういう話（それだけとは言わないけれど）。

つまりこの人のユーモアというのは、現状の革新を愛せない心情革新派が、現状の革新を否定するために無理に保守に身をやつす、というすごく屈折した心理から生まれているものだ。人が雄弁になるのは、たいてい何らかの言い訳をしたがってるときだからね。日本でも全共闘くずれがある日突然「おれはまちがっていた！ バタイコを読んでおれは目覚めた！」と言って、目覚めて何をするかと思ったら、それで延々とこちゃこちゃマルクス/ヘーゲル批判をやった笠井潔みたいな人がいるでしょう。せっかく目覚めたのに、後ろを向いて昔の自分をつつきまわすなんて、つまらないなあ。もっと生産的なことをすればいいのに（とは言っても矢吹駆シリーズはそこそこ生産的でおもしろけれど）。たとえばベトナムとか中国みたいに、「うちの政治は社会主義、経済は資本主義」とか、マルクスが聞いたらびっくりかえるようなわけのわからないことを言い出すとかね（もっとも、これまでの社会主義諸国を見てたら、いい加減びっくりかえり飽きてるだろうけど）。これなんかは、大まじめに考えた結果がえらくふざけたものになった例だけど、オロークは逆に、ふざけてみせたつもりで、根の生真面目な部分が隠しきれないでいる、というわけ。

だからオロークの笑いは、いつもちょっとブラックでシニカルだ。保守を誉めるときも、どうしても斜に構えてしまう。ほめかたがおおげさでウソ臭い。革新の悪口を言うときも、ストレートには罵倒できない。かすかに自嘲気味となる。通常、こういう転向型旧左翼の人間の末路は、日本の全共闘世代の人間たちの身の振り方を見ればわかるように、次の三タイプに分類される。

1. 昔の自分の否定に精を出す
2. 卑近な社会改良に手をそめる（含む宗教関連）
3. 政治的ニヒリズムに走って趣味の世界に逃避する

オロークは、敢えて言うなら1と3のごった煮に近いのだが、しかしそれでは分類しきれないものを持っている。それは「ナショナル・ランプーン」仕込みの悪乗り当てこすり



的ユーモアのセンスと、自分の物欲への忠実さと旺盛な好奇心と常識であり、また彼の飽きっぽさと怠惰さと知性でもある。あまり実直に反省なんかするのも面倒だし（どうせ自分以外は誰も気にしないことだし）、フェラーリでナンパするのは楽しいし、コカインでハイになるのも気持ちいいし、世の中みんな、なんのかんか言いつつ何とか続いているみたいだし、自分のところはさておき、よその政治は間抜けでおもしろそうだし、といった具合。「ナショナル・ランプーン」誌から『モダン・マナーズ』にいたるオロークは、比較的旧左翼のシニズムが強い物書きだった。それが徐々に常識性を増し、本書以来、現在にいたるオロークは、旧左翼性と常識性がちょうどよくブレンドされている次期と言えるだろう。

彼の行く手には、実はもう一つわなが待ち受けていて、このまま常識性をましていった場合、オロークの末路はガチガチの反動主義者となる可能性がある。そこから逃れられるかどうかは、彼の今回の大統領選への態度如何ではないだろうか。

アメリカ大統領選では、ついに共和党が破れ、民主党の時代が（何年続くか知らないが）やってきた。オロークとしては、さぞかし複雑な心境だろう。いまさらクリントン万歳とは言いにくからうしなあ。この期に及んでまだ彼は保守を名乗るだろうか。いずれご尊顔を拝する機会があれば、ぜひとも聞いてみたいものだ。できればそこで、変わり身のはやいところを見せて欲しいと個人的には思う。いい加減さこそ、この人の唯一の武器なのだから。

## 5. 訳について

原著が出てから邦訳が出るまでに五年が経っている。訳者はこのうち十ヶ月分についてのみ責任を負う。まあ引き受けてからこれだけのダン時間で、ここまでの翻訳ができたのは、比較的優秀な下訳があったことを考慮しても、われながら天晴れな仕事ぶりである。既訳の三冊と比べても、訳の出来で勝りこそすれ、劣ることはないはずだ。こういう嫌味でシニカルなギャグは、ぼくの非常に得意とするところだからである。

そもそもこの仕事がぼくの手元にくるまでには、いろいろと語り尽くせないほどの事情があった（らしい）。ぼくとしては、本書の訳を手掛ける直接のきっかけを作ってくれた、ニューヨークの梅沢葉子氏、どこのどなたかは存じあげないが、ぼくが受託する以前に下訳をあげておいてくれたかた、『地獄旅行』で本書の序文を無料で（でもまちがって）訳し

てくれた芝山幹郎氏、ぼくに仕事をあっさり任せてくれた JICC 出版局の富永虔一郎氏、編集の実務を担当してくれた井野良介氏に感謝したい。ありがとう。これでやっと、親戚に読ませられる訳書ができました。

横浜で上司の目を盗みつつ  
平成四年十一月 山形浩生